

茨城県教育財団文化財調査報告第40集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15

屋代B遺跡Ⅱ

昭和62年3月

住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

210.231

R 98

2

(NB)

寄贈	
歴史・人類学系	平成 年月日

茨城県教育財団文化財調査報告第40集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15

屋代 B 遺跡 II

昭和 62 年 3 月

住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

96605140

序

竜ヶ崎市北部の北竜台・龍ヶ岡地域では、竜ヶ崎ニュータウンの建設が、住宅・都市整備公団によって進められております。ニュータウンの建設は、時代の要請に基づくものであります。一方において、開発と、その開発区域内に存在が確認されている数多くの貴重な埋蔵文化財の保護とを、どのように調和させていくかが大切な問題となっております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団の委託を受けて、昭和52年度から竜ヶ崎ニュータウン建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。これらの調査によって、数多くの貴重な資料が検出され、地域の歴史を解明する上で資するものが多いと考えられます。

本書は、屋代B遺跡の昭和60年度分の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望してやみません。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対して、感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会・竜ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導・御協力に対し、衷心より謝意を表します。

昭和62年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 川又友三郎

例　　言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財團法人茨城県教育財團が、昭和60年度に実施した竜ヶ崎市八代町に所在する屋代B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 屋代B遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理　事　長	竹　内　藤　男	昭和58年12月～昭和61年3月
	川　又　友二郎	昭和61年4月～
副　理　事　長	川　又　友二郎	～昭和61年3月
	磯　田　勇	昭和61年4月～
常　務　理　事	萩　原　藤之助	昭和60年4月～昭和61年3月
	滑　川　貞　雄	昭和61年4月～
事　務　局　長	堀　井　昭　生	昭和60年4月～
調　査　課　長	青　木　義　夫	昭和59年4月～
班　長	北　島　健	昭和60年4月～
企　任　調　査　員	加　藤　雅　美	～昭和61年3月
画　＊	山　本　耕　男	昭和61年4月～
管　係　長	田　所　多佳男	昭和60年4月～
理　主　事	大曾根　徹	～昭和61年3月
道　＊	山　崎　初　雄	昭和60年4月～
＊	大　部　章	昭和61年4月～
調　査　班　長	倉　木　富美男	昭和60年度
企　任　調　査　員	佐　藤　正　好	昭和60年度調査
画　調　査　員	鈴　木　美　治	昭和60年度調査、昭和61年度整理・執筆
整　理　班　長	加　藤　雅　美	昭和61年度

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、鈴木美治が執筆・編集を担当した。
- 4 本書の作成にあたり、屋代B遺跡の地形及び地層の堆積状況について、農林水産省農業環境技術研究所の天野洋司氏に御指導をいただいた。また、炭化米の同定については、農林水産省農業生物資源研究所の中川原捷洋・江川宣伸の両氏に依頼し、分析結果の報告をいただいた。
- 5 遺跡の地形測量については中央航業株式会社に、土壘・堀・虎口部の実測については東日本航空株式会社に委託し、航空測量を実施した。
- 6 本書に使用した記号等については、第3章第1節の2の項を参照されたい。
- 7 発掘調査及び出土遺物の整理に際して御指導・御協力を賜った関係各機関、各位に深く感謝の意を表します。

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	3
1 地区設定	3
2 遺跡の基本層序	3
3 遺構確認	4
4 遺構調査	5
第3節 調査経過	6
第2章 位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	11
第3章 遺構と遺物	18
第1節 遺跡の概要と記載方法	18
1 遺跡の概要	18
2 遺構・遺物の記載方法	19
第2節 縄文時代	24
1 遺構外出土遺物	24
第3節 弥生時代	28
1 遺構と遺物	28
2 遺構外出土遺物	70
第4節 古墳時代	74
1 遺構と遺物	74
2 遺構外出土遺物	114
第5節 中世の遺構	118
1 虎口	118
2 土塁	121
3 堀	125

4 住居跡状遺構	137
5 土壌墓	140
第6節 その他の遺構	165
1 土坑	165
2 地下式壙	180
3 井戸	184
4 溝	186
5 土塁	210
第7節 中・近世の遺物	211
1 土器・陶磁器	211
2 石製品	232
3 金属製品	242
4 古銭	243
第4章 まとめ	251
1 中世城郭遺構について	251
2 住居跡について	256
3 土坑について	264
4 遺物について	267
終章 むすび	272
別編 竜ヶ崎屋代B遺跡第34号住居跡より出土した炭化米の同定について	273

挿図目次

第1図 調査区呼称方法概念図	3	第11図 第26号住居跡実測図	35
第2図 基本上層図	4	第12図 第26号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)	37
第3図 遺跡周辺地形図	9~10	第13図 第26号住居跡出土遺物実測図(2)	38
第4図 屋代B遺跡周辺遺跡分布図	16	第14図 第29号住居跡実測図	39
第5図 遺構外出土遺物実測・拓影図	25	第15図 第29号住居跡出土遺物拓影図	40
第6図 遺構外出土遺物実測図	26	第16図 第30号住居跡実測図	41
第7図 第20号住居跡実測図	29	第17図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)	43
第8図 第20号住居跡出土遺物実測・拓影図	31	第18図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)	44
第9図 第24号住居跡実測図	32	第19図 第31号住居跡実測図	46
第10図 第24号住居跡出土遺物実測・拓影図	33		

第 20 図	第31号住居跡出土遺物実測・拓影図(1).....	48	第 53 図	第27号住居跡カマド実測図.....	92
第 21 図	第31号住居跡出土遺物実測・拓影図(2).....	49	第 54 図	第27号住居跡実測図.....	93
第 22 図	第33号住居跡実測図.....	52	第 55 図	第27号住居跡出土遺物実測図.....	94
第 23 図	第33号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	53	第 56 図	第32号住居跡カマド実測図.....	96
第 24 図	第34号住居跡実測図.....	55	第 57 図	第32号住居跡実測図.....	97
第 25 図	第34号住居跡出土遺物実測・拓影図(1).....	57	第 58 図	第32号住居跡遺物出土位置図.....	98
第 26 図	第34号住居跡出土遺物実測・拓影図(2).....	58	第 59 図	第32号住居跡出土遺物実測図(1).....	102
第 27 図	第35号住居跡実測図.....	60	第 60 図	第32号住居跡出土遺物実測図(2).....	103
第 28 図	第35号住居跡出土遺物実測・拓影図(1).....	61	第 61 図	第32号住居跡出土遺物実測図(3).....	104
第 29 図	第35号住居跡出土遺物実測・拓影図(2).....	62	第 62 図	第36号住居跡カマド実測図.....	105
第 30 図	第37号住居跡実測図.....	65	第 63 図	第36号住居跡実測図.....	106
第 31 図	第37号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	66	第 64 図	第36号住居跡出土遺物実測図.....	107
第 32 図	第40号住居跡実測図.....	67	第 65 図	第39号住居跡実測図.....	108
第 33 図	第40号住居跡出土遺物実測・拓影図(1).....	68	第 66 国	第39号住居跡カマド実測図.....	109
第 34 図	第40号住居跡出土遺物実測・拓影図(2).....	69	第 67 国	第39号住居跡出土遺物実測図.....	110
第 35 国	遺構外出土遺物実測・拓影図(1).....	71	第 68 国	第43号住居跡実測図.....	112
第 36 国	遺構外出土遺物実測図(2).....	73	第 69 国	第43号住居跡カマド実測図.....	113
第 37 国	第41号住居跡実測図.....	75	第 70 国	第43号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	114
第 38 国	第41号住居跡出土遺物実測図.....	76	第 71 国	遺構外出土遺物実測図(1).....	115
第 39 国	第42号住居跡実測図.....	77	第 72 国	遺構外出土遺物実測図(2).....	116
第 40 国	第42号住居跡出土遺物実測図.....	78	第 73 国	虎I I 部周辺地形図(調査前).....	119~120
第 41 国	第21号住居跡カマド実測図.....	78	第 74 国	虎口部周辺地形図(調査後).....	119~120
第 42 国	第21号住居跡実測図.....	79	第 75 国	第1号土壙・第7分粧実測図.....	126
第 43 国	第21号住居跡出土遺物出土位置図.....	80	第 76 国	虎口・土壙(第2~4号)・堀 (第8・9・11号)実測図.....	127~128
第 44 国	第21号住居跡出土遺物実測図(1).....	83	第 77 国	第1号堀実測図.....	129~130
第 45 国	第21号住居跡出土遺物実測図(2).....	84	第 78 国	第10号掘実測図.....	131~132
第 46 国	第22号住居跡実測図.....	85	第 79 国	第28号住居跡状遺構実測図.....	138
第 47 国	第22号住居跡カマド実測図.....	86	第 80 国	第38号住居跡状遺構実測図.....	139
第 48 国	第22号住居跡出土遺物実測図(1).....	88	第 81 国	第410・423号土坑実測図.....	142
第 49 国	第22号住居跡出土遺物実測図(2).....	89	第 82 国	第428・429号土坑実測図.....	143
第 50 国	第23号住居跡カマド実測図.....	89	第 83 国	第433・442号土坑実測図.....	144
第 51 国	第23号住居跡実測図.....	90	第 84 国	第466号土坑実測図.....	145
第 52 国	第23号住居跡出土遺物実測図.....	91	第 85 国	第591・603号土坑実測図.....	146
			第 86 国	上坑実測図(墓壙及び墓壙と思 われる土坑-1).....	150
			第 87 国	七坑実測図(墓壙及び墓壙と思 われる土坑-2).....	151
			第 88 国	土坑実測図(墓壙及び墓壙と思 われる土坑-3).....	152
			第 89 国	土坑実測図(墓壙及び墓壙と思 われる土坑-4).....	153

第 90 図	土坑実測図（墓域及び墓塚と思われる土坑－5）	154	第122図	第65号溝実測図	209
第 91 図	土坑実測図（墓域及び墓塚と思われる土坑－6）	155	第123図	第28号住居跡状況構出上：遺物穴測図（土師質土器－1）	216
第 92 図	土坑実測図（墓塚の可能性のある土坑－1）	159	第124図	第38号住居跡状況構出上：遺物穴測図（土師質土器－2）	217
第 93 図	土坑実測図（墓塚の可能性のある土坑－2）	160	第125図	中世遺物実測図（土師質土器－3）	221
第 94 図	土坑実測図（墓塚の可能性のある土坑－3）	161	第126図	中世遺物実測図（土師質土器－4）	222
第 95 図	土坑実測図（墓塚の可能性のある土坑－4）	162	第127図	中世遺物実測図（内耳－1）	228
第 96 図	土坑実測図（墓域及び墓塚と思われる土坑・墓塚の可能性のある土坑）	163～164	第128図	中世遺物実測図（内耳－2・鉢鉢－1）	229
第 97 図	第555号土坑実測図	165	第129図	中世遺物穴測図（擂鉢・2・陶磁器－1）	230
第 98 図	第593号土坑実測図	166	第130図	中世遺物穴測図（陶磁器－2）	231
第 99 図	第682号土坑実測図	167	第131図	石製品穴測図（砥石－1）	234
第100図	土坑実測図（その他－1）	172	第132図	石製品穴測図（砥石－2）	235
第101図	土坑実測図（その他－2）	173	第133図	石製品穴測図（砥石－3）	236
第102図	土坑実測図（その他－3）	174	第134図	石製品穴測図（石臼－1）	239
第103図	土坑実測図（その他－4）	175	第135図	石製品穴測図（石臼－2）	240
第104図	土坑実測図（その他－5）	176	第136図	石製品穴測図（石臼－3・五輪塔）	241
第105図	土坑実測図（その他－6）	177	第137図	金属製品穴測図	246
第106図	土坑実測図（その他－7）	178	第138図	古銭拓影図(1)	247
第107図	土坑実測図（その他－8）	179	第139図	古銭拓影図(2)	248
第108図	第 6 号地下式竪穴実測図	181	第140図	古銭拓影図(3)	249
第109図	第 7 号地下式竪穴実測図	182	第141図	古銭拓影図(4)	250
第110図	第 8 号地下式竪穴実測図	183	第142図	中世城郭遺構（堀・土塁・虎口）	253
第111図	第 1 号井戸実測図	185	第143図	地割と城郭遺構	255
第112図	第38・52・56号溝実測図	195	第144図	住居跡配置図	257
第113図	第44・45号溝実測図	196	第145図	住居跡の規模	258
第114図	第46号溝実測図	197	第146図	住居跡の長軸方向	258
第115図	第55・57号溝実測図	198	第147図	弥生時代（後期）の住居跡分布図	259
第116図	第59・60号溝実測図	199	第148図	住居跡の規模	261
第117図	第61号溝実測図	200	第149図	住居跡の主軸方向	261
第118図	第37・39・40号溝実測図	201～202	第150図	住居跡の規模	262
第119図	第41号溝(1)・第42号溝実測図	203～204	第151図	住居跡の主軸方向	262
第120図	第41号溝実測図(2)	205～206	第152図	古墳時代の住居跡分布図	263
第121図	第48・49・50・53号溝実測図	207～208	第153図	土坑・墓域配置図	266

表 目 次

表 1 屋代 B 遺跡周辺遺跡一覧表	17	表 6 磚石一覧表	232
表 2 蓋墳及び墓墳と思われる土坑・ 一覧表	147	表 7 古銭一覧表	244
表 3 墓墳の可能性のある土坑一覧表	156	表 8 弥生時代の住居跡・一覧表	260
表 4 その他の土坑一覧表	167	表 9 五頭期の住居跡一覧表	261
表 5 その他の井戸跡・一覧表	185	表 10 鬼高窓の住居跡一覧表	263
		表 11 中世の住居跡状遺構一覧表	264

写真図版目次

PL 1 遺跡全景 (W→E); 同 (N→S); 昭和60 年度調査終了時全景	跨・第10号塚 (橋脚痕); 第21号住居跡; 第22号住居跡; 第27号住居跡, 第1号塚; 第23号住居跡・墓墳群(1)
PL 2 第1号土壠・第7号塚; 第1号土壠, 第 7・10号塚 (SE→NW); 同 (NW→SE); 第10号塚粘土堆積部; 第10号塚断面; 第 7号塚断面; 五輪塔出土状況(第7号塚)	PL 9 第36号住居跡; 第39号住居跡; 第43号住居 跡; 第28号住居跡状遺構; 墓墳群(Ⅲ); 墓墳 群(1)
PL 3 虎口部周辺調査前風景(1); 同(2); 同(3); 同 (4); 同(5); 虎口部, 第2・3号土壠全景; 第2号土壠全景; 第2号土壠断面	PL 10 墓墳群(Ⅱ)と溝; 第410号土坑; 第423号 土坑; 第428・440号土坑; 第429号土坑; 第 431号土坑(1); 同(2)一灰・焼土堆積状況
PL 4 虎口部, 第8・9・11号塚 (E→W); 同 (W→E); 第8号塚; 虎口部, 第8号塚	PL 11 第442号土坑; 第443号土壠断面; 第446・ 480号土坑; 第446号土壠断面; 第475号土 坑; 第528号土坑; 第6号地下式塚; 第7号 地下式塚
PL 5 第11号塚断面; 第3・4号土壠断面; 第9 号塚(1); 同(2); 第8号塚断面; 第1号塚; 第 1号塚出土人骨	PL 12 出土遺物(1)・弥生式土器
PL 6 東側台地部 (埋敷跡) 全景(1); 同(2)・埋敷 跡入(1); 第6号土壠・第41号溝(調査前) ; 同(調査後); 東側台地部, 第6号土壠 ; 第6号土壠; 埋敷跡入(1)(1); 同(2)	PL 13 出土遺物(2)・土師器
PL 7 第20号住居跡; 第26号住居跡; 第29号住居 跡; 第32・35号住居跡; 第30号住居跡; 第31 号住居跡; 第33号住居跡; 第34号住居跡。 第10号塚	PL 14 出土遺物(3)・土師器・須恵器
PL 8 第34・37号住居跡; 第38号住居跡状遺構; 第40号住居跡; 第41号住居跡; 第42号住居	PL 15 出土遺物(4)・土製品・石器・石製品
	PL 16 出土遺物(5)・土師質土器
	PL 17 出土遺物(6)・内耳・擂鉢・陶磁器
	PL 18 出土遺物(7)・古磁・石製品
	PL 19 出土遺物(8)・石製品(砾石)
	PL 20 出土遺物(9)・金属製品
	PL 21 出土遺物(10)・古銭

付 図 目 次

- | | | | |
|-----|--------------------------|------|------------------------------------|
| 付図1 | 屋代B遺跡航空写真測量図（城郭遺構全体図-1） | 付図7 | 屋代B遺跡航空写真測量図（虎口・第8・9・11号塁） |
| 付図2 | 屋代B遺跡航空写真測量図（城郭遺構全体図-2） | 付図8 | 屋代B遺跡航空写真測量図（第8号塁） |
| 付図3 | 屋代B遺跡航空写真測量図（第1号土塁） | 付図9 | 屋代B遺跡航空写真測量図（東側台地部屋敷跡・第6号土塁・第41号溝） |
| 付図4 | 屋代B遺跡航空写真測量図（第1号土塁・第7号塁） | 付図10 | 屋代B遺跡（塁・土塁・溝）断面図-（1） |
| 付図5 | 屋代B遺跡航空写真測量図（第1号塁） | 付図11 | 屋代B遺跡（塁・土塁・溝）断面図-（2） |
| 付図6 | 屋代B遺跡航空写真測量図（第2・3号 | 付図12 | 屋代B遺跡（塁・土塁・溝）断面図-（3） |

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団は、自然の保全に留意した潤いのある生活環境のもとに、既成の竜ヶ崎市街地と有機的に結合した調和のある新しい町づくりを目指し、竜ヶ崎市の北部台地上に、総面積⁽¹⁾671.5haに及ぶ竜ヶ崎ニュータウンの建設を着手した。これは、首都圏への人口や産業の集中を緩和すると同時に、膨大な住宅用地の需要に対応し、良好な居住環境を備えた住宅用地の供給と地域内に就業の場を設けることにより、居住者の地元定着をも意図している。

竜ヶ崎ニュータウンの建設計画は、当初日本住宅公団によって計画され、昭和46年1月「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され、その事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業」と称した。その後、昭和51年4月に設立された宅地開発公団茨城開発局が、日本住宅公団に代って事業を引き継いだ。同56年10月1日付をもって、宅地開発公団と日本住宅公団が統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足したが、従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に継承され、今日に至っている。

茨城県教育委員会は、昭和45年に実施した埋蔵文化財の分布調査の結果に基づき、開発地域内に所在する遺跡について、文化財保護の立場から必要な措置を講ずるために、地元竜ヶ崎市教育委員会と協議を重ねた。その後、再度実施した分布調査によって、昭和51年7月に7遺跡、昭和55年5月に2遺跡、昭和56年5月に工業団地内で2遺跡、昭和57年10月に1遺跡を各々追加した。県教育委員会は、これら36遺跡（表1）について関係機関と再度協議を行った結果、現状保存が困難な31遺跡について、記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財團は、昭和52年4月、「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を、当時の宅地開発公団と締結し、竜ヶ崎ニュータウン建設区域内の埋蔵文化財調査を継続して実施してきた。

昭和60年度は、原代B遺跡、南三島遺跡3・4区の発掘調査を実施した。なお、発掘調査は、茨城県教育財團本部調査課調査第二班が担当した。

注

(1) 開発面積は、小柴新田町・柏田町の全域と、若柴町・福井新田町・駒馬町・駒塚町・南中島町・別所町の一部からなる北竜台地区が326.6ha、賀原塚町・羽原町・八代町・長峰町の各一部からなる龍ヶ岡地区が344.9haである。

(2) 竜ヶ崎ニュータウンの収容人口は、75,000人が予定されている。北竜台地区の長山・松葉・

小堀の各地域には、既に、876世帯・3,329人が入居している（昭和60年10月1日－住民基本台帳より）。

- (3) さらに、昭和61年4月1日付をもって、住宅・都市整備公団茨城開発局は研究学園都市開発局と統合し、住宅・都市整備公団つくば開発局竜ヶ崎開発部となる。
- (4) 羽原川調整池の造成工事中に、仲根台B遺跡が発見された。
- (5) 工業団地予定地は100haに及び、分布調査の結果、周知の薄倉遺跡のほか福荷峰古墳が加えられた。
- (6) 山王台遺跡。竜ヶ崎ニュータウン開発事業関連道路整備の一環として、主要地方道上浦・竜ヶ崎線道路改良事業に伴い、昭和58年4月から4か月にわたる発掘調査を実施した。
- (7) 遺跡の略号はR1～R33までであるが、R6がR6A・R6Bに、R28がR28とR28A・R28Bに枝分れし、各々を1遺跡と数えたため36遺跡とした。
- (8) 屋代B遺跡は、総面積59,948m²に及ぶ集落跡・城館跡である。昭和58年度から継続調査中であり、調査の便宜上、昭和58・59年度調査分（18,314m²）を屋代B遺跡Ⅰ、昭和60年度調査分（22,503m²）を屋代B遺跡Ⅱ、昭和61年度調査分（19,131m²）を屋代B遺跡Ⅲとした。
- (9) 南三島遺跡は、総面積109,193m²に及ぶ大集落跡（縄文時代～奈良・平安時代）で、昭和56年度から継続調査中である。

参考文献

- (1) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10「南三島1・2区（上）」 茨城県教育財団 昭和59年
- (2) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11「南三島6・7区（上）」 茨城県教育財団 昭和60年
- (3) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13「屋代B遺跡Ⅰ」 茨城県教育財団 昭和61年

第2節 調査方法

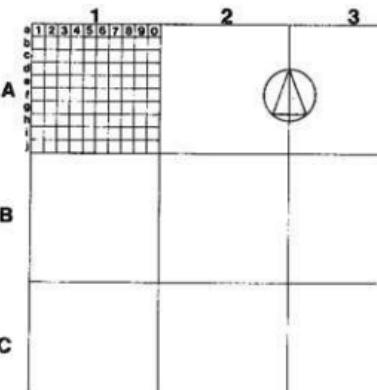
1 地区設定

屋代B遺跡の昭和60年度の調査対象面積は、
22,503m²である。

当遺跡の地区設定は、昭和54・55両年度に
またがって調査された屋代A遺跡の地区設定
時に同時に行われたものであり、同一の地区
割がなされている。

公園基準点No435を任意点とし、日本平面直
角座標系第IX座標、X軸（南北）-8,900m、
Y軸（東西）+34,100mの交点を通る軸線を
基準として、東西・南北各々40mずつ平行移
動して大調査区（大グリッド）を設定した。

さらに、大調査区を東西・南北方向に各々10



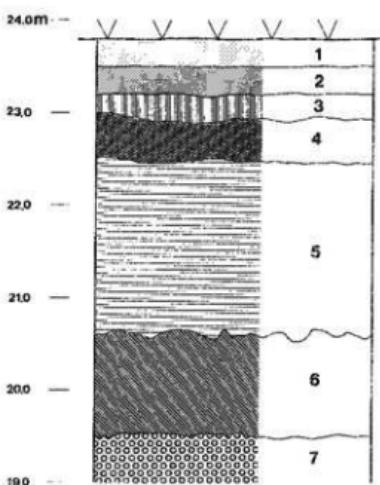
第1図 調査区呼称方法概念図

等分して、4m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。大調査区は、基準点から北へ160m、
西へ200mの点を起点とし、北から南へ「A」・「B」・「C」……、西から東へ「1」・「2」・「3」……
と大文字を付して、「A1」区・「B2」区のように呼称した。さらに、大調査区内を4m四方の
小調査区に100等分し、それぞれ同様に北から南へ「a」・「b」・「c」……、西から東へ「1」・「2」・
「3」……と小文字を付した。各小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせた四文字「A2ba」
区・「E3hs」区のように呼称した（第1図）。

なお、屋代B遺跡は、大調査区で南北「A」～「J」、東西「1」～「10」の範囲に位置して
いる。

2 遺跡の基本層序

当遺跡の基本層序については、第2図のとおりである。1は、表土層で耕作土となっており、
平均30cm前後の厚さである。2は漸移層であり、暗褐色または褐色を呈している。3は、いわゆ
るソフトローム層である。4は、ハードローム上位のブロック化した層である。5はハードロー
ム層で、色調等で3層に分けることが可能である。6は常緑粘土層であり、7は竜ヶ崎砂礫層で
ある。



第2図 基本土層図

注

- (1) 黒色土の堆積状況・堆積した時期並びに中世期の地形については、班内研修において、天野洋司氏に御指導をいただいた。

3 遺構確認

屋代B遺跡の昭和60年度の調査対象面積は、22,503m²である。これまでに実施した分布調査・ボーリング調査・発掘調査等の結果から、本年度調査区域内には、城館跡に伴う堀・土塁・虎口部が存在することや、隣接する屋代A遺跡との関連から、⁽¹⁾集落跡の検出が予想された。調査に先立ち、担当者間で遺構確認の方法について協議を行い、集落の分布が予想される北西側及び南側台地部については、全体の20%に当るグリッドによる試掘を実施することにした。また、竹根・木根等により人力による試掘が困難であり、なおかつ、黒色土・粘土層が広く分布する東側傾斜地や南側の傾斜地については、土壠に直交するようにトレーンチを設定して重機による試掘を行うことにした。

試掘の結果、土壠・虎口部の他に、堀・溝・住居跡・土坑と思われる落ち込みを多数検出した。場所により遺構の密集の度合に差が認められるものの、東側の台地部を除き、ほぼ全域に遺構の分布が認められた。また、遺構確認面までの深さが台地部で30~40cm、傾斜地で100cmと深く、さ

地表面は、北西側ではほぼ平坦となっているが、東側及び南側は傾斜地となっている。遺跡の南東側には、浸食谷から分かれた支谷が入り込んでおり、南側の台地部には、黒色土が2.2mほど厚さに堆積している。東側の傾斜地にも、同様の状況が観察される。この黒色土層は、7,000~1,000年程前に、谷に土が流入し自然堆積したものと考えられる。従って、当遺跡の中世当時の地形は、ほぼ現状と同じであったことが推定できる。

遺構の掘り込みは、深い場合でも5の上位までであるが、地下式廻・堀・井戸等は、6~7にまで及んでいる。

らに傾斜地は主として山林となっており、竹根・木根等により人力による表土除去が困難であること等から、調査区内全域について重機による表土除去を実施し、その後遺構確認を進めた。南側と南東側の傾斜地に確認された黒色土の部分については、表土除去後、さらに重機によるトレーニング調査を実施した。その結果、前者については自然の谷であることが、後者については土坑群であることが判明した。

注

- (1) 屋代A遺跡は、昭和54～55年にかけて調査された弥生時代から中世に至る複合遺跡である。調査の結果、住居跡64軒（弥生時代28軒・古墳時代26軒・歴史時代9軒・不明1軒）、土坑232基（内、地下式塚4基）、土壙1基、掘立柱建物遺構2棟、溝16条、井戸状遺構1基が検出されている。遺構の分布状況から、屋代B遺跡にもその一部が伸びていることが予想された。調査の結果、屋代A遺跡と屋代B遺跡は、共に同一の集落を形成する遺跡であることが判明した。

参考文献

- (1) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6「成沢遺跡 屋代A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年3月

4 遺構調査

当遺跡における遺構の調査は、次のように実施した。

住居跡の調査は、長径（主軸）方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け、四分割して掘り込む「四分割法」で実施し、地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。また、重複している場合は、新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は、長径方向で二分して掘り込む「二分割法」で実施し、大形のものは住居跡の調査法に準じた。土壙・堀・溝の調査は、規模に応じて、適宜数か所に直交する土層観察用ベルトを設けた。

土層観察は、色相・含有物・混人物の種類や量、及び粘性・吸水性・締まり具合を観察し、分類の基準とした。色相の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用して行った。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点を基準として、レベルを用いて水糸を水平にセットした実測基準を設定して行った。また、堀や土壙・虎口等については航空写真測量を実施した。

遺物は原位置を保ち、住居跡・土坑の場合は、各区名・遺物番号・出土位置・レベル等を遺物

台帳や図面に記録して収納した。堀・溝の場合は、区名に代わってグリッド名を用い、他は住居跡や土坑と同様とした。

記録の過程は、上層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真等に記録できない事項はその都度野帳等に記録し、これを調査記録カードや遺構カードに整理した。

第3節 調査経過

昭和60年度に実施した屋代B遺跡の調査経過については、以下のとおりである。

- 4月 発掘調査の諸準備を整え、基本杭打ち・調査区設定を行った。調査方法について担当者間で協議し、畠地部のD6区より $\frac{1}{4}$ のグリッド発掘を開始し、遺構確認を行った。その結果、D6区より住居跡や土坑、F6区より堀と思われる落ち込みを検出した。
- 5月 遺構確認作業と並行し、第1号土塁周辺の山林と東側の竹林を中心に業者に委託して伐開作業を開始した。4日には、第1号土塁上の稻荷様の移転を行った。試掘の進展に伴い、遺構の分布状況や表土の厚さ等について検討を加え、10日より重機による表土除去を開始した。20日には、城館跡に伴う堀・土塁・虎口部等について航空写真測量を実施すべく、県文化課・公園・財團の三者協議を行った。
- 6月 重機による表土除去、遺構確認を進めた。4日には、航空写真測量を実施した。また、調査区西側の第2号・第3号土塁に囲まれた傾斜地（G6区、H6～7区）にトレーナーを設定して重機による遺構確認を進め、並行して第1号・第7号堀の試掘を行った。
- 7月 調査区中央部（E7～9区、F7～9区）の遺構確認と遺構調査、傾斜地の表土除去を重機で行った。E7～8区・F7～8区からは、複雑に重複する多数の土坑や溝が確認された。また、第1号堀No5地点の覆土下層から中世のものと思われる人骨が出土した。
- 8月 前月に引き続き、調査区中央部・傾斜地及び南側台地部（I6～8区、J6～7区）の表土除去と遺構確認を重機で行った。また、12日から重機により第1号・第7号堀の掘削を開始した。調査の結果、第1号堀には拡張の跡が認められ、E8区からは墓壙群と思われる多数の土坑を検出した。
- 9月 調査区中央部の遺構調査と、南側台地部の表土除去・遺構確認を進めた。中旬から下旬にかけて、東側台地部（F8～9区、G8～9区）のトレーナーによる遺構確認と、虎口部（No1）の調査を開始した。
- 10月 前月に引き続き、東側台地の虎口部（No1）周辺及び調査区中央部の遺構調査を進め

た。また、F7区・G7区及び南側台地部（I6区）に広範囲に確認された黒色土部分の性格の究明と、第2号・第3号土壙の構築状況を調査するため、重機によるトレンチ発掘を実施した。調査の結果、F7区・G7区からは土坑群が、第3号土壙下からは新たに土壙・堀が検出された。31日には、班内研修（講師天野洋司氏）を実施した。

- 11 月 F7区の土坑群・溝の調査及び虎口部（No.2），第2号・第3号土壙の調査を継続した。中旬からは、重機による第8号・第9号堀の掘削を開始し、並行して東側傾斜地のトレンチ発掘・遺構確認を実施した。
- 12 月 F7区・G7区の土坑群・溝の調査及び虎口部（No.2），第3号土壙・第8号・第9号堀とその周辺の土坑群、柱穴列の調査を継続した。18日に土壙・堀・虎口部の航空写真測量を実施した。26日には当初の計画に従い、調査を終了した当遺跡の一部について公團に引渡しを行い、年末・年始の休暇に入った。
- 1 月 6日から調査を再開し、第1号堀の西側D6～7区・E6～7に確認された住居跡・土坑の調査を進めた。また、中旬からは南側台地拡張部（H6～7区・I6～7区）の表土除去・遺構確認を並行して行い、31日には拡張部の第3号土壙・第8号・第9号堀について写真実測を行った。
- 2 月 調査区の西側C5区・D4～6区・E6～7区に確認された住居跡、土坑、堀、井戸等の調査を行った。15日には現地説明会を実施し、下旬には第1号土壙の調査を開始した。
- 3 月 前月の調査の継続と、補足調査を実施した。25日迄に全ての遺構調査を終了し、26日の航空写真撮影をもって本年度の調査を全て終了した。

第2章 位置と環境

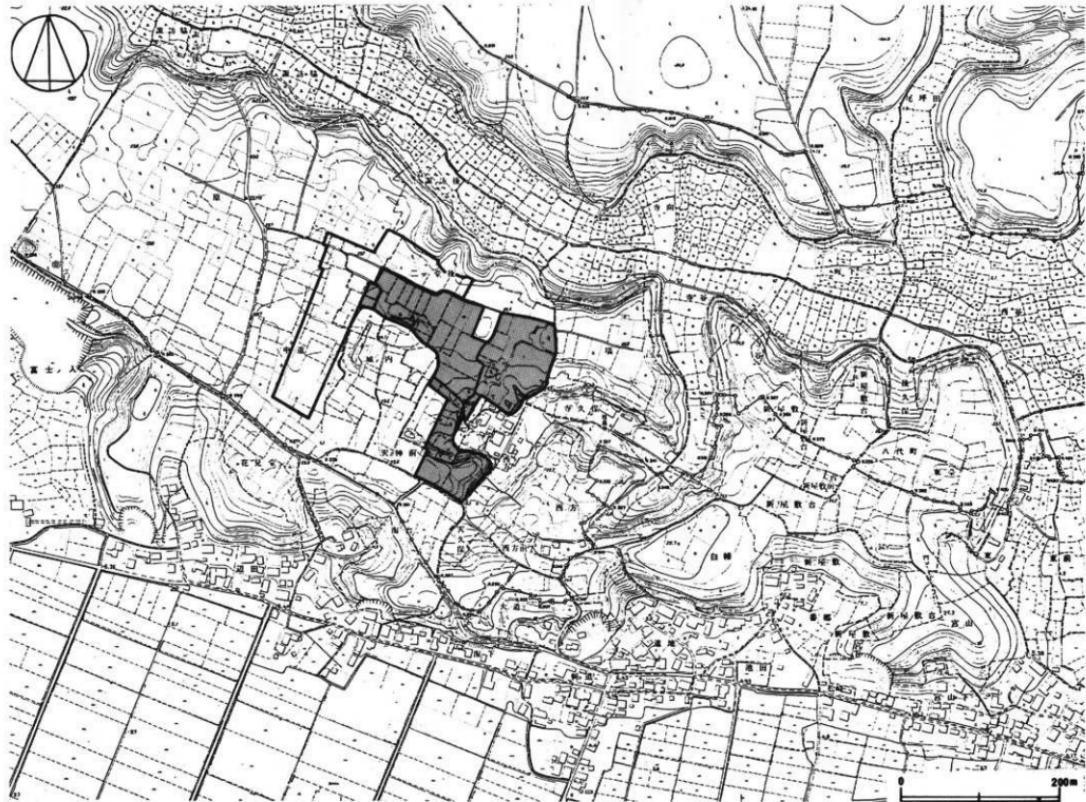
第1節 地理的環境

屋代B遺跡（昭和60年度調査区）は、茨城県竜ヶ崎市八代町字中道2,591番地ほかに所在する。当遺跡の所在する竜ヶ崎市は、茨城県の南部に位置し、国鉄常磐線佐貫駅から東へ延びる関東鉄道竜ヶ崎線の終点竜ヶ崎駅から、東へ約2kmにわたって市街地の中心部を形成している。同市は、東で稻敷郡江戸崎町・同郡新利根村、南で同郡河内村・北相馬郡利根町、西で取手市・北相馬郡藤代町・筑波郡伊奈町、そして北で稻敷郡塙崎町・牛久市と接している。面積は約75km²（東西約12km・南北約9km）である。同市の人口は49,182人（昭和61年4月1日現在）であるが、近年、北部台地上に竜ヶ崎ニュータウンの建設が進められており、人口10数万の首都圏の衛星都市として大きく変貌をとげようとしている。

竜ヶ崎市付近は、稲敷台地の南縁にあたり、至るところに浸食谷が刻まれて複雑な地形を呈している。市域は古鬼怒川と小貝川によって形成された沖積平野（標高3～6m）と、洪積世に形成された稲敷台地（標高20～27m）の一部からなっている。低地と台地の境界は、比高15～20mの急崖となっている。地質は海成の成田層、河成の成田砂礫層を基盤とし、その上に厚さ1mほどの常総粘土層が重なり、更に、その上に厚さ2～3mほどの関東ローム層が堆積している。低地谷津部には、軟弱な粘土および腐植土の堆積が見られる。

屋代B遺跡は、竜ヶ崎市街地の北東約2kmの台地上に位置する。調査区内は、標高23～24mのほぼ平坦な台地と標高20～22mの傾斜地（調査面積の20%）から成っている。遺跡の北東から北にかけて、同市八代町から別所町に達する幅150～200mの細長い浸食谷が入り込んでいる。このため遺跡の所在する台地は、南北を低地に挟まれ、台地と低地の境界は急崖となっている。比高は北で17m内外、南で19m内外である。台地の平坦部は狭く、幅300～350mに過ぎない。また西側は平坦面が続いているものの、東側には浸食谷から分れた支谷が南北に向かって入り込んでおり、この部分の平坦面の幅は20～30mと狭まっている。この支谷の谷底と台地上面との比高は、支谷の中ほどで10～14m、奥で約5mである。

現在の八代町の集落は、台地南縁に沿った微高地に形成されており、遺跡の南側の崖下から東方へ1.6kmにわたって細長く延びている。遺跡の北側へ入り込んだ浸食谷は、八代町の集落とともに東方の長峰町の集落との間に開口している。



第3図 遺跡周辺地形図

第2節 歴史的環境

茨城県南部、とりわけ霞ヶ浦沿岸や利根川下流域を中心とする稻敷台地の縁辺部は、県内においても遺跡が濃密に分布する地域として広く知られている。中でも、日本人の手による最初の学術的な貝塚調査として知られる陸平貝塚⁽¹⁾（美浦村）をはじめ、花輪台貝塚⁽²⁾（利根町）・興津貝塚⁽³⁾（美浦村）・上高津貝塚⁽⁴⁾（土浦市）・椎塚貝塚⁽⁵⁾（江戸崎町）・福田貝塚⁽⁶⁾（東村）・広畠貝塚⁽⁷⁾（桜川村）等は特に著名であり、日本の考古学研究に果した役割は大きい。

県南部に位置する竜ヶ崎市の北部台地上においても同様である。以下竜ヶ崎市内に所在する遺跡について概述する。

先土器時代の石器を出土した遺跡としては、終末期に属する舟底形石器や削器が出土した沖餅遺跡をはじめ、松葉遺跡や赤松遺跡などが上げられる。縄文時代になると、縄文時代早・前期の遺物が出土した廻り地B遺跡、前期の町田遺跡、前・中期の赤松遺跡、小集落を検出した中期の打越A遺跡・打越C遺跡、地点貝塚を伴う中期の南三島遺跡2区と、中期末から後期初頭にかけての大集落廻り地A遺跡等がある。また、弥生時代の遺構・遺物が検出された遺跡としては、外八代遺跡・屋代A遺跡・屋代B遺跡が上げられる。古墳時代になると、前期の遺構を検出した大羽谷津遺跡・成沢遺跡や前述した沖餅遺跡・松葉遺跡、中期の平台遺跡がある。外八代遺跡や屋代A遺跡からも古墳時代や奈良・平安時代の遺構が検出されている。中世になると、地下式壇や土坑群が検出された前清水遺跡や、堀・掘立柱建物跡・柵列や地下式壇等が検出された外八代遺跡がある。外八代遺跡や屋代B遺跡は、中世の城館跡として特に注目される。これらを含め、当教育財団が調査・報告した多数の遺跡から、次第に竜ヶ崎市及びその周辺地域における各時代の様相が明らかになりつつある。

当遺跡の所在する竜ヶ崎市は、古代茨城国に属していた。孝徳天皇の御代の白雉4年（癸丑の年）筑波・茨城の二郡を分け信太郡が置かれ、『和名抄』に見えるごとく、信太郡稻敷郷に属したとされている。稻敷の地名の由来・位置については、『常陸國風土記』信太の条に、「其里西飯名社、此即筑波岳所有飯名神之別属也」とある。また、中山信名は『新編常陸國誌』の信太郡稻敷郷の条で、「倭名鈔ニ云、稻敷、按ズルニ、今ノ河内郡八代〔寺院記ニハ、社トアリ、コレハ飯名社ヨリ出タル名ナルベシ〕、貝原塚龍ヶ崎ノ邊、古ノ稻敷郷ナリ、八代村ニ稻塚ト云フ丘アリ、イネツカト調ス、蓋イナジキノ轉ナリ」と述べ、また、「飯名社ト稱スルモノハ、今ノ女文化原ナル稻荷ノコト、聞ユ、（中略）飯名ト稻荷ト俗言近キヲ以テ、後人強テ稻荷トセシモノナリ、稻敷ヲ以テ飯名トセシモノモ、飯名神ヨリ起レルナリ、（中略）飯名社ノ敷地ト云フ意ヨリ出タルニモアルベシ」と述べ、稻敷の地名の由来を「飯名社の敷地」に、八代の地名の由来を「飯名社」に求めている（傍点筆者）。この「飯名社」については、前述のように女文化原神社（牛久

市女化）に比定する説と、稻塚（竜ヶ崎市八代）の墳頂にまつられている小祠に比定する説があるが、中山信名自身は後者を支持している。

古代末から中世にかけて、この地域は、小野川を境として東条・西条・河内郡に区分された。東条は、かつての葦原の地が開墾されてできたもので、小野川以南の東部、すなわち現在の竜ヶ崎市の東部から河内村・新利根村一帯の水田地帯と考えられる。この地域は古くから平氏の勢力圏であり、平安末期以降、大槻多氣太郎直幹の子五郎忠幹が東条に土着して東条氏を名のり、その子孫が長くこの地を支配した。鎌倉中期に東条庄となった。西条は小野川以北の地で、広い入海であった霞ヶ浦を境とし、行方郡と常陸川（現在の利根川）を南境として下総国と接していた。平安末期には、すでに信太庄として立莊されていた。東条を含むこの地には、源為義の子志田三郎先生義広が土着して勢力を伸ばしていた。寿永2年（1183），義広は頼朝に叛して没落し、後に下河辺政義が南部總地頭としてこの地方を支配し、その子孫が足利氏の世、地名竜ヶ崎を姓として竜ヶ崎氏を名乗った。その後、常陸守護となった八田（小田）知家の子孫が、信太庄や河内郡を含めた広い範囲の地頭職を世襲した。

延元3年（1338）九月、奥州・関東経営の使命を帯び、義良親王を奉じた北畠親房・頤信父子と結城宗広、そして遠江の南朝方勢力統率の使命を帯びた宗良親王ら一行の船団は、伊勢の大湊を出航し東国に向かった。しかし、伊豆崎において暴風雨にあい、船団は四散し、宗良親王は遠江白羽に、北畠親房は常陸國東条浦に漂着した。親房はまず東条莊内の神宮寺城（桜川村）に入り、神宮寺城と阿波崎城（東村）を拠点として東国における南朝勢力の強化をはかろうとした。同年10月の畠田時朝軍忠状（「畠田文書」）によれば、小野崎次郎左衛門尉、二方七郎左衛門尉らの佐竹勢や、鹿島幹寛、畠田時幹ら鹿島一族は、10月5日神宮寺城を、次いで阿波崎城を攻略した。やむなく親房は小田治久の本拠、小出城に移った。同じ頃、竜ヶ崎周辺の諸城も危急を告げ、次々に戦乱に巻き込まれていった。竜ヶ崎地方にあっては、南朝の高井城（貝原塙城）・駒馬城が、北朝の屋代城と攻防戦を展開している。興国2年（1341）9月、高師冬が信太庄に攻め入った際屋代信經は師冬の軍を案内して北朝を各地に破っている。この時の様子が関城縡史に「興国二年九月 高師冬 以信太庄 為己所有 土人有屋代彦七信經者 為部属 以貞熱地理 師冬使之 開導 分兵信太庄 今河内郡八代 古信太東条地 信經蓋其地人」と見える。更に同書の同年九月の記録に「興国二年九月 屋代信經等 攻信太庄高井城 緩火燒民舍」とあり、高井城の宮方を打っていることがわかる。この「屋代信經」は、屋代城主と目され、以後屋代氏は少數の資料に散見される。

南北朝の終り頃、信太郡の一帯を知行していた小田孝朝は、小山若丸の乱に間与し上杉憲方・朝宗らに攻められ、信太郡の所領を失うことになる。この地方における小田氏の勢力後退に伴い、²⁹換って勢力を拡大したのが美濃国に本拠を持つ土岐氏の支流土岐原氏である。土岐原氏は、秀成

の時、常陸国信太郡信太庄江戸崎に館をかまえ、小田氏と対立した。土岐原氏が、小田政治方の屋代城を攻落したことが眞壁文書に見える。「屋代要害土岐原貴落引除候所へ政治融合遂一戰候、…」この資料は天文3年（1523）のものと推定され、屋代城とその周辺においてかなり激しい戦闘が展開されたことが窺われる。16世紀半ば過ぎになると、江戸崎城主上岐治英の次男胤倫が江戸崎より分れ、竜ヶ崎城主となった。天正18年（1590）、佐竹義宣の弟芦名盛重は上岐氏を滅ぼし、初め竜ヶ崎城に拠ったが、後に江戸崎城に移り、竜ヶ崎城をその支城とした。この間竜ヶ崎地方は、³⁹土岐・芦名両氏によって城下町として整備された。慶長7年（1602）、佐竹氏の秋田転封に際して徳川領となった。豊臣の臣富田将監の短い支配の後、大久保石見守の領地となり、後に伊奈氏が代官として支配した。慶長11年（1606）伊達政宗が竜ヶ崎の地を与えられ、城の近くに陣屋を設けて幕末まで支配した。

現在、竜ヶ崎市内における中世の城館跡は13か所が知られている。その中で、竜ヶ崎城・若柴城・駿馬城・屋代城・貝原塚城・泉城については文献・伝承が伝えられているが、長峰城、七隈城・登城山館・要害山館・大日山館・高井城下城については文献・伝承は残されておらず、不明な点が多い。また、外八代遺跡の調査によって発見・調査された外八代城については、形態から中世後半の城館跡と考えられる。

注・参考文献

- (1) LIJIMA, AND C.SASAKI, "OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI," TOKYO DAIGAKU SCIENCE DEPARTMENT, MEMOIR VOL1 PART1) TOKYO DAIGAKU 明治16年
- (2) 吉田 格・甲野 勇「花輪台貝塚」(『繩文式文化編年図集第一回』) 1949
- (3) 西村正衛「茨城県稻敷郡真津貝塚」(『日本考古学年報』10) 昭和38年
- (4) 小宮 孟「土浦市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」(『第四紀研究』VOL1.19) 1980 国指定史跡(昭和51年)。土浦市上高津所在。
- (5) 八木英三郎・下村三四吉「常陸国椎塚介塚発掘報告」(『東京人類学会雑誌』8-87) 明治26年 骨ヤスのつき刺ったタイの頭骨で名高い。
- (6) 佐藤伝蔵「常陸国福田村貝塚探査報告」(『東京人類学会雑誌』9-100) 明治27年 明治以来多くの先学によって発掘され、おびただしい遺物の出土をもって名高い。
- (7) 池上啓介「広畠貝塚」(『史前学雑誌』5-5) 昭和8年
- (8) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3「沖餅遺跡」 茨城県教育財團 昭和55年
- (9) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1「松葉遺跡」 茨城県教育財團 昭和54年
- (10) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4「赤松遺跡」 茨城県教育財團 昭和55年

- (11) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5「前清水遺跡・大羽谷津遺跡・打越A遺跡・打越C遺跡・廻り地B遺跡」 茨城県教育財団 昭和56年
- (12) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9「仲根台B遺跡・町田遺跡」 茨城県教育財団 昭和59年
- (13) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10「南三島遺跡1・2区」 茨城県教育財団 昭和59年
- (14) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7「廻り地A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年
- (15) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2「外八代遺跡」 茨城県教育財団 昭和55年
- (16) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6「成沢遺跡・屋代A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年
- (17) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13「屋代B遺跡I」 茨城県教育財団 昭和61年
- (18) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書8「平台遺跡」 茨城県教育財団 昭和58年
- (19) 竜ヶ崎市八代町3,903所在。塚でなく残丘である。
- (20) 人見暁郎編集「常陸風土記入門」 昭和55年
- (21) 「新編常陸國誌」信太郡稻敷郷の条に、「屋代、龍ヶ崎、長峰、薄倉、貝原塚、羽原、別所、駒馬、中島、若柴等（中略）鎌倉將軍ノ比ヨリ、河内郡ニ入ル、コレヨリ東ハ東條莊トナレリ」とあり、庄の範囲が推定できる。
- (22) 仁平元年（1151）、平頼盛の母藤原宗子によって立莊され信太莊となる。安元二年（1176）までに八条院分の莊園となっている（「八条院領目録」）。
- (23) 常陸國の府中（現在の石岡市）以南を指す。
- (24) 現在の霞ヶ浦。
- (25) 県指定史跡。稲敷郡桜川村神宮寺所在。平城で、現在は堀・土塁が残存する。延元3年（1338）10月5日落城。
- (26) 県指定史跡。稲敷郡東村阿波崎天神台所在。南北朝の争乱に北畠氏が築城。佐竹氏のため落城。落城後名主14名が斬罪になっている。
- (27) 国指定史跡。筑波郡筑波町大字小田所在。小田氏の始祖八田知家が築城。平城。
- (28) 竜ヶ崎市貝原塚町字城山2,309外所在。高井城は古名。代々諸岡氏の據城。戦国時代は小出氏の支城で、貝原塚将監氏胤のとき江戸崎土岐氏に滅ぼされた。
- (29) 県指定史跡。竜ヶ崎市駒馬町山王台所在。春日源國の立籠った城。奥国5年（1344）落城。

- 30 土岐原氏については、伊藤 熱青「土岐原史紀」に詳しい。
- 31 船橋郡江戸崎町大字江戸崎甲 3,212の1外。江戸崎小学校西側裏手の台地部が本丸跡。本丸の南側に二の丸跡（現在の公民館・農業改良普及所の地）がある。
- 32 竜ヶ崎市古城3,087所在。現、茨城県立竜ヶ崎第二高等学校。永禄11年（1568）に土岐胤倫が城主となり、天正18年（1590）に退転するまで約20年間据城とした。
- 33 市村高男「戦国時代の竜ヶ崎城下町」（『紀要』創刊号）竜ヶ崎市郷土史研究会 昭和60年
- 34 竜ヶ崎市根町所在。現、竜ヶ崎市立竜ヶ崎小学校。
- 35 茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」 昭和52年 外八代城の発見・調査は、本書の刊行以後のことであり、本書には外八代遺跡として記載されている。
- 36 茨城県教育委員会「城館跡調査カード」 昭和60年 以下(37)～(45)まで同じ。
竜ヶ崎市若柴町167所在。岡見頼忠の隠居した所で、頼忠の死後、多賀谷氏によって落城したと言われている。
- 37 竜ヶ崎市宗町上泉272所在。中世、東条氏の城館であったと言う。土岐氏の支城で、東条重定のとき、小田氏治と戦って討ち死にし、のち廢城となったと言われている。
- 38 竜ヶ崎市長峰町竜ヶ井72所在。
- 39 竜ヶ崎市大塚町上2,187所在。
- 40 竜ヶ崎市半田町登城1,217所在。
- 41 竜ヶ崎市半田町要害519所在。
- 42 竜ヶ崎市塗戸町登城798所在。
- 43 竜ヶ崎市貝原塚町白藏寺。

第4図 屋代日遺跡周辺道路分布図

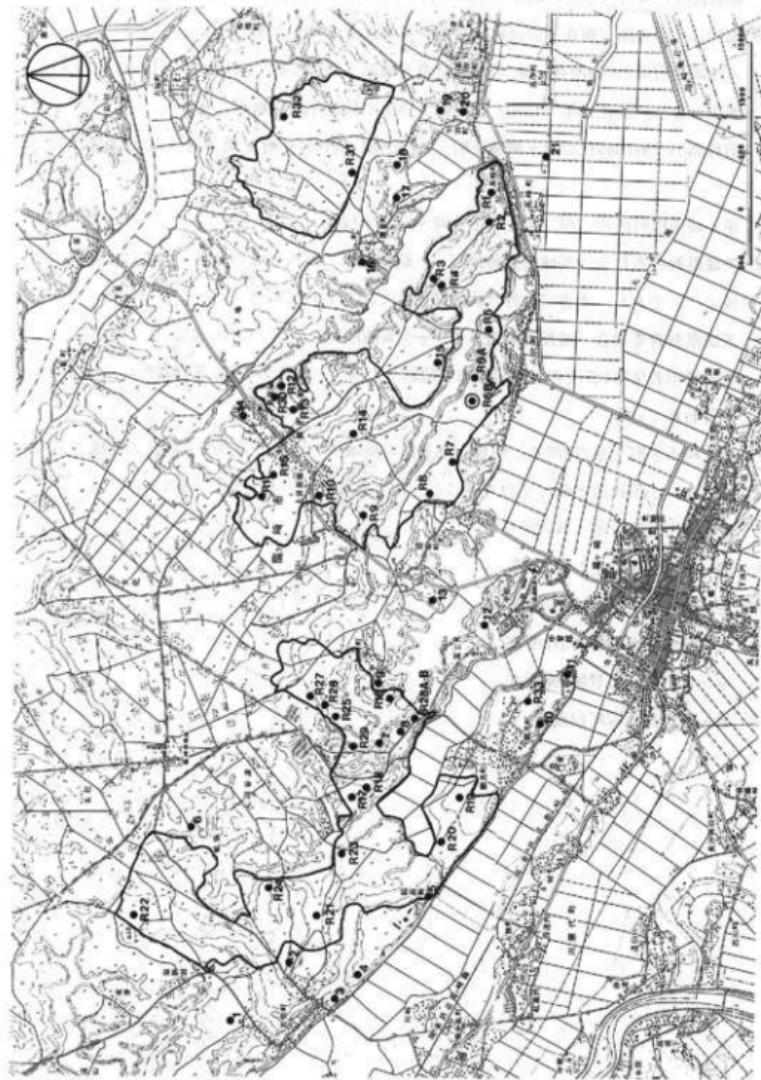


表1 慶代日遺跡開辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代	番号	遺跡名	種類	遺跡の時代		
							先土器	縄文	弥生
R1	長峰城跡	城	古				○	R28-A	仲根台塚群
R2	長峰古墳群	古	群				○	R28-B	仲根台B追跡
R3	ト三塚群	塚	群				●	R29	廻り地B追跡
R4	尾神台遺跡	集落	跡				○	R30	白藏寺遺跡
R5	外八代遺跡	集落跡・城館跡	跡				●	R31	瀬食塚
R6-A	尾代A遺跡	城館跡・集落跡	跡				●	R32	船荷峰山塚
R6-B	尾代B遺跡	城館跡・集落跡	跡				●	R33	山下台遺跡
R7	船荷峰古墳群	古	群				○		跡
R8	南三島遺跡	集落	跡				○	1	金塚遺跡
R9	ダシノアツ原	塚	群				○	2	林遺跡
R10	町H塚群	塚	群				○	3	若柴城跡
R11	かがみ塚	塚	群				○	4	宿烟跡
R12	高井城下城跡	城跡	跡				○	5	福菊古塚
R13	前清水遺跡	集落跡・貝塚等群	跡				○	6	水前山遺跡
R14	塚下遺跡	塚	群				○	7	仲根台遺跡
R15	町出遺跡	集落	跡				○	8	奈戸岡古墳群
R16	行部内遺跡	集落跡・只塚	跡				○	9	常ノ下貝塚
R17	大利谷遺跡	集落	跡				○	10	駒馬城跡
R18	綾り地A遺跡	集落	跡				○	11	愛岩山古墳
R19	平古遺跡	集落	跡				○	12	奈戸岡祭祀
R20	坂沢遺跡	集落	跡				○	13	西花輪日塚群
R21	松葉遺跡	集落跡・塚群	跡				○	14	貝原塚城跡
R22	庚申塚遺跡	集落	跡				○	15	向牛原遺跡群
R23	沖削遺跡	集落	跡				○	16	西平遠跡
R24	赤松遺跡	集落	跡				○	17	駒込原遺跡
R25	打越A遺跡	集落	跡				○	18	要皆山塚跡
R26	打越C遺跡	集落	跡				○	19	半田遠跡
R27	ウツタ遺跡	集落	跡				○	20	豊城山前跡
R28	仲根台塚群	塚群(1・2号)	跡				○	21	向須賀遺跡

●は発掘調査を実施した遺跡等である。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と記載方法

1 遺跡の概要

当遺跡は、屋代城跡として周知の遺跡である。昭和54年、茨城県教育委員会が実施した分布調査によって、当遺跡の東側に隣接する地区（同一台地上）から、弥生時代から近世に及ぶ集落跡が確認された。その結果、新たに確認された遺跡を屋代A遺跡、屋代城跡を屋代B遺跡と呼称することになった。屋代B遺跡は、昭和58年度から継続調査中であり、昭和58・59年度の調査面積は18,314m²、昭和60年度の調査面積は22,503m²で、残りを昭和61年度に調査する予定である。

当遺跡（昭和60年度調査区）からは、調査の結果、竪穴住居跡24軒、土坑274基、溝35条、土堀5基、堀7条、虎口2か所、井戸5基が検出された。その後、出土遺物を整理し、遺構の状況を再検討した結果、遺構でないと判断したものを欠番とし、本項から除外した。その結果、当遺跡における最終的な遺構数は以下の通りである。

住居跡 21軒

弥生時代11軒（後期）

古墳時代10軒（五頭期2軒・鬼高期8軒）

住居跡状造構 2軒（中世）

土坑 278基（枝番を含む）

中世152基（内、地下式壙4基を含む）

不明126基（内、粘土貼り上坑1基、Tピット2基、芋穴6基を含む）

土堀 5基

中世4基（第1～4号、屋代城に伴う上堀）

近世1基（第6号）

堀 6条（第1号・第7～11号）

虎口 2か所

溝 23条

井戸 5基

中世1基（第1号）

近世4基（第2～5号）

遺物は、弥生時代の上器（釜・甕）や土製品（紡錘車）・石器（石斧）等のほかに、古墳時代の

土器（壺・甕・高环），中・近世の青磁・陶磁器・内耳形土器・灯明皿・錢等が出土している。

なお、当遺跡は屋代城跡としての城跡の調査であるが、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡も検出されており、隣接する屋代A遺跡と関連しているものと思われる。

注・参考文献

- (1) 「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 昭和52年

茨城県遺跡地図によれば、屋代A遺跡・屋代B遺跡は屋代城跡として記載されており、昭和54年、県の分布調査によって新たに屋代A遺跡が分離されるまでは屋代城跡として周知されていた。屋代城跡については、船橋郡志に「大字八代の中央桂昌寺の傍に在る小丘にして(中略)建武中興八代信經此にをり」との記載がある。

- (2) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告6「成沢遺跡 屋代A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年

昭和54年11月から昭和55年11月にかけて調査され、住居跡64軒（弥生時代28軒・古墳時代26軒・平安時代9軒・不明1軒）、土坑232基（地下式壙を含む）、土塁1か所、掘立柱建物遺構2棟、溝16条、井戸状遺構1基が検出されている。遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・陶器等が出土しており、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

(1) 使用記号

遺構	名称	住居跡	土坑・地下式壙	掘・溝	土塁	井戸
記号	SI	SK	SD	SA	SE	

(2) 遺構・遺物の実測図中の表示



● 土器 □ 石器・石製品 ☆ 土製品

(3) 遺構番号

遺構番号については、調査の過程で遺構の種別毎に調査順に付したが、整理にあたり遺構でないと判断したものは欠番とした。

(4) 土層の分類

各造構内の堆積土については調査時に観察記録した結果に基づき、色調と含有物を下記のように整理し記号化した。色調と含有物の量については、『新版標準土色帖』(小林正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用し、Hue7.5YRを基準とした。

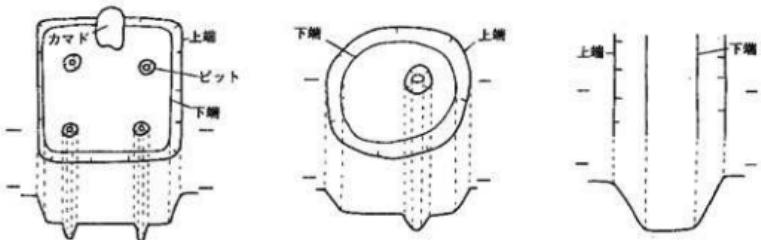
なお、含有物の量については少量（面積の10%未満）検出されたものを基準とし、中量（10%以上30%未満）検出されたものには「・」、多量（30%以上）検出されたものについては「・」をアルファベットの右上に付加して表示した（例…a'・a”）

番号	土 色 名	色相	明度／彩度	含 有 物
1	明 褐 色	Hue 7.5YR	%%	a ローム・ローム粒子
		Hue 10YR	%	b ハードロームブロック
2	にぶい黄褐色	Hue 10YR	%%	c 焼土・焼土粒子・焼土ブロック
3	にぶい褐色	Hue 7.5YR	%%	d 炭化物・炭化粒子
4	褐 色	Hue 7.5YR	%%/%/%	e 粘土・粘土ブロック
		Hue 10YR	%	f 灰
5	暗 褐 色	Hue 7.5YR	%/%/%	g 砂
		Hue 10YR	%	h 磨
		Hue 5YR	%	i 黒色土・黒色土粒子・黒褐色土・暗褐色土
6	極 暗 褐 色	Hue 7.5YR	%	j ローム粒子・ハードロームブロック
7	黒 褐 色	Hue 7.5YR	%/%/%	k ローム粒子・ハードロームブロック
		Hue 10YR	%/%/%	焼土粒子・炭化粒子
		Hue 5YR	%/%/%	
8	灰 褐 色	Hue 7.5YR	%	l ローム粒子・ハードロームブロック
		Hue 10YR	%	m 灰・ローム・ハードロームブロック・砂
		Hue 5YR	%	n ローム粒子・焼土粒子
9	浅 黄 色	Hue 2.5YR	%	o ローム粒子・炭化粒子
10	明 赤 褐 色	Hue 5YR	%/%/%	p ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子
		Hue 2.5YR	%	q ハードロームブロック・焼土粒子
11	にぶい赤褐色	Hue 5YR	%/%/%	r 烧土粒子・炭化粒子(炭化物)
12	赤 褐 色	Hue 5YR	%	s 烧土粒子・粘土
13	暗 赤褐色	Hue 5YR	%/%/%/%	t 炭化物・灰
		Hue 2.5YR	%	u 炭化物・粘土
14	極 暗 赤褐色	Hue 5YR	%/%	v 炭化物・砂
15	橙 色	Hue 7.5YR	%%	w 粘土・砂
16	にぶい橙色	Hue 7.5YR	%	x 砂・黒色土
17	浅 黄 橙 色	Hue 7.5YR	%	y 表土・耕作土
18	にぶい黄橙色	Hue 10YR	%/%/%/%	
19	黑 色	Hue 7.5YR	%	

(5) 造構実測図の作成方法と掲載方法

○各造構の実測図は、縮尺20分の1の原図を净書して版組し、縮尺3分の1で掲載することを基本とした。

○長大な溝・堀については、その規模に応じて縮尺20分の1の原図を2分の1、4分の1、8分の1に縮小したものとそれをさらに3分の1に縮小して掲載した。



- 実測図中のレベルは標高であり、m 単位で表示した。また、同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
- 造構からの出土遺物は、(2)で示した記号を用い、出土位置を造構平面図及び断面図中にドットで表示した。また、接合できた土器片は実線で結んだ。なお、出土遺物に付した数字は遺物実測図及び拓影図の番号と一致する。

(6) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

- 土器の実測は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- 土器拓影図は、右側に断面を図示した。表裏双方の拓影図を掲載する場合には、断面を中心配し、左側を外面、右側を内面とした。
- 遺物は、原則として実測図を淨書したものと3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさにより異なる場合もある。

(7) 表の見方

住居跡一覧表

住居跡番号	位置	方向	平面形	規格	標高	壁溝	ビット数	が・カマド	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)	総数 柱柱					

- 住居跡番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。整理の過程で、住居跡でないと判断したものは欠番とした。
- 位置は、小調査区（グリッド）名で表示した。他の調査区にまたがる場合は、造構の占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。
- 方向は、長径ないし長軸が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを、角度で表示した（N-10°-E, N-10°-W）。なお、（ ）を付したものは推定を表す。
- 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、円形・楕円形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。

- 円形（短径：長径=1:1.1未満のもの）
- 楕円形（短径：長径=1:1.1以上のもの）

○規模の欄の長径・短径は、平面形の上端面の計測値であり、壁高は、残存壁高の計測値である。また、平面形が円形・橢円形の場合は長径・短径とし、隅丸方形・隅丸長方形などの場合は、長軸・短軸として表示した。

○壁溝は、その有無を表示した。

○ピット数の欄の総数は、住居跡に伴うものと考えられるピットの総数を表示し、主柱は主柱穴数、() を付したものは推定を表す。

○炉・カマドの欄はその種類を記し、炉やカマドを持たない場合は空欄とした。

○覆土は、堆積の状態が自然堆積を示す場合はN、人為堆積を示す場合はA、擾乱の場合はKと略号で記した。また、明確でない場合はそれぞれに() を付し、不明の場合は空欄とした。

○出土遺物は、遺物の種類とその出土点数を記した。

○備考は、重複関係や特徴等を記した。

土坑一覧表

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					

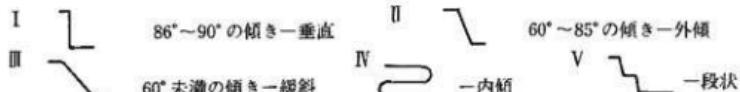
○土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で追構でないと判断したものは欠番とした。

○平面形は、円形・橢円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。

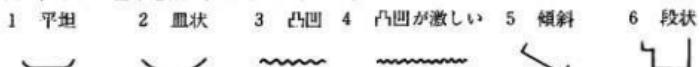
- ・円形（短径：長径 = 1 : 1.2未満のもの）
- ・橢円形（短径：長径 = 1 : 1.2以上のもの）

○規模の欄の深さは、確認面から坑底の最も深い部分までの計測値である。

○壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準を設け、記号で表示した。



○底面は、下記の基準を設け、番号で表示した。



○地下式壙は、土坑一覧表から除外し、文章で記述した。

土器觀察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
------	----	--------	-----------	------	----------	----

○図版番号は、実測図中の番号である。

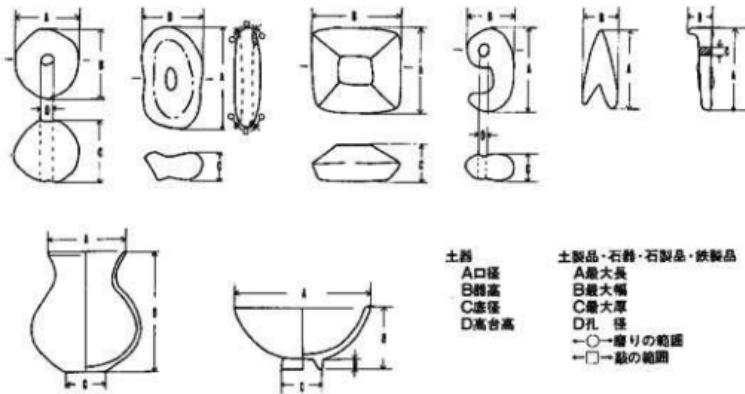
○法量は、A—口徑、B—器高、C—底徑、D—高台高を示し、現存値は〔 〕、復原推定値は()を付して示した。

○備考の欄は、土器の残存率等を表示した。

石器一覧表

図版番号	器種	法量(cm)			重量(g)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				

○遺物の法量は、次のように計測した。



第2節 繩文時代

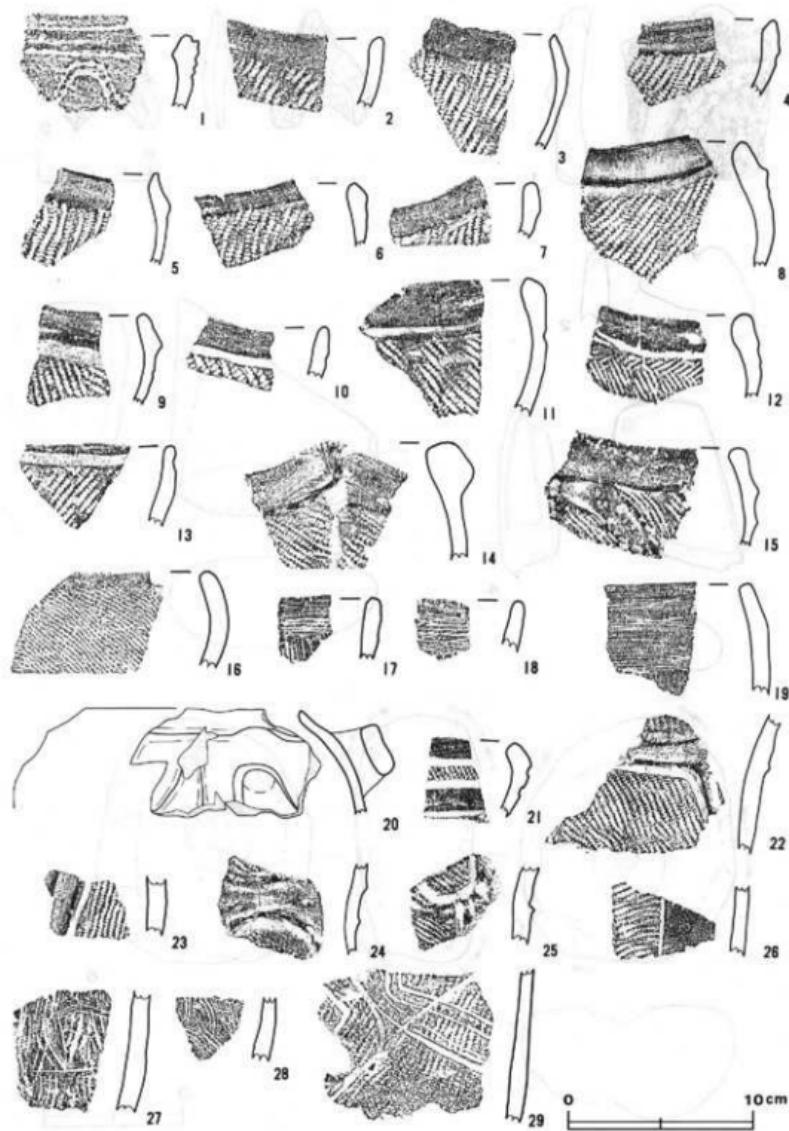
昭和60年度調査区からは、明確に縄文時代のものと判断しうる遺構は検出されていない。しかし、少量ではあるが縄文時代中・後期の土器片や土製品・石器・石製品が出土しており、また、昭和58・59年度調査区からは縄文時代中・後期の土坑15基や土器片が検出されていることから、本年度調査区内においても、縄文時代の遺構が存在していた可能性は否定できない。当遺跡は、縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡であり、縄文時代の遺構は、その後に営まれた弥生時代や古墳時代の集落遺構や、中・近世の遺構によって破壊されてしまった事も考えられる。第6節その他の項に掲載した土坑の中には、縄文時代の土坑も含まれている可能性もあるが、時期判定遺物に欠けるため、本節から除外した。Tピット状遺構についても同様の取扱いをした。

本節では、表採または弥生時代以降の遺構に混入した状態で出土した縄文時代の土器片や土製品・石器等を、遺構外出土遺物として取り上げた。縄文時代の遺物は、中期の阿玉台式期・加曾利E式期、後期の称名寺式期・堀之内式期の土器片の他に、土器片鉢2点(阿玉台式期1・不明1)、石鏡1点、磨製石斧2点、磨石1点が出土している。

1 遺構外出土遺物

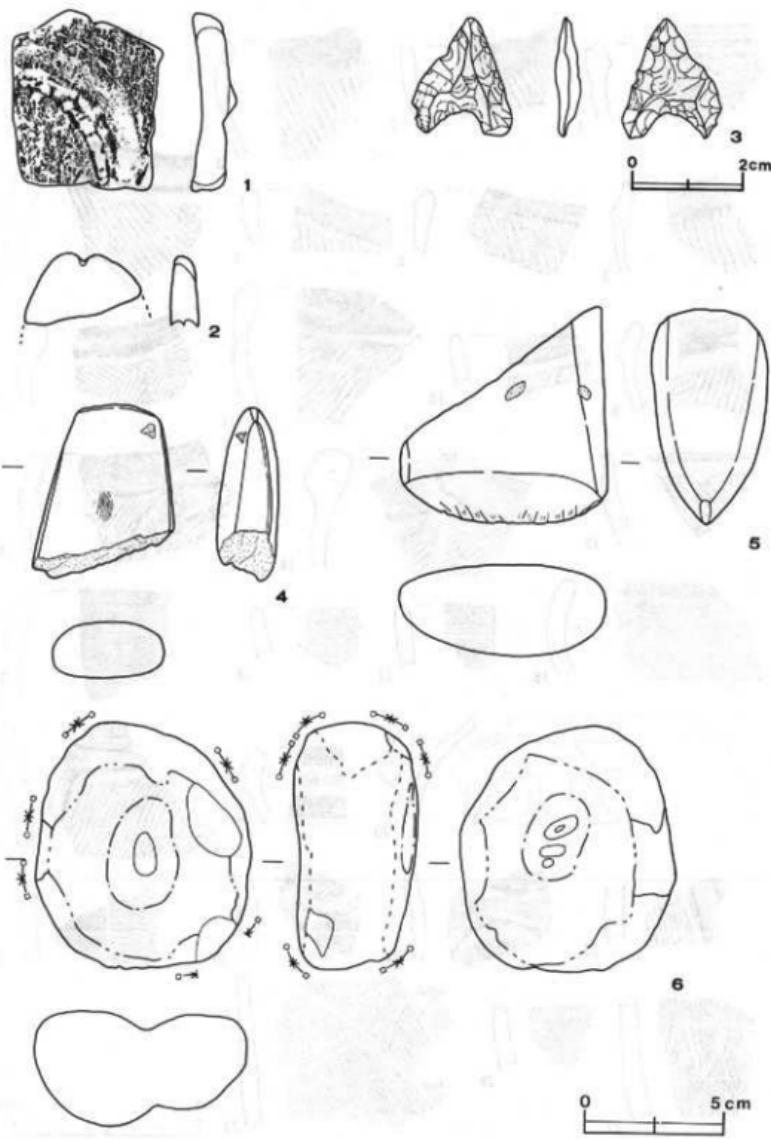
(1) 土器 (第5図1~29)

1~21は口縁部片である。1は中期前葉の阿玉台Ib式期に比定され、口唇部や口縁直下に半截竹管具による1列の結節沈線文が、口縁部には同じ工具により弧状に連続する2列の結節沈線文が施されている。2~20は中期後葉の加曾利E式期に比定され、2~7は口縁部に無文帯をもち、胴部には単節RLの横位・縦位の回転繩文が施されている。8・9は口縁部無文帯と胴部を微隆線によって区画し、微隆線の下方にはナゾリが加えられている。胴部には単節RLの繩文が施されている。10~13は口縁部無文帯下に一条の凹線を巡らし、胴部には単節RLの繩文が施されている。12は縄文が羽状に施されている。14は口縁部無文帯に小突起を有し、15は口縁部に無文帯をもち、胴部を曲線的な微隆線によって区画している。16は口縁部に無文帯をもち、胴部に無節Lの縦位回転繩文が施されている。17は口縁直下に櫛歯状工具による横位の条線文が、胴部には縦位の条線文が施されている。18・19は口縁直下に横位の条線文が施されている。20は把手付壺形土器の口縁部片であり、口縁部に橋状把手が付けられている。21は後期の称名寺式期の口縁部片である。ナゾリ間に単節LRの横位回転繩文が施されている。22~23は加曾利E型、24~28は加曾利E型、29は堀之内式期の胴部片である。22~25は胴部を直線的・曲線的な微隆線によって区画している。26は直線的な磨消帶を有する。27・28は条線文が施されている。29は縄文地文上に曲線的なモチーフを沈線で描いている。



第5図 遺構外出土遺物実測・拓影図

昭和36年春土山川断面調査 実測図



第6図 遺構外出土遺物実測図

加賀院・高麗村出土遺物(第2回)

(2) 土製品 (第6図1~2)

土製品としては、土器片錐が2点出土している。1は第36号住居跡の覆土から出土したもので、阿毛台Ib式期の土器片を加工したものである。方形形状を呈し、最大長6.4cm、最大幅5.4cm、最大厚1.7cm、重さ51.8gである。長軸方向の上下両端に切り込みを入れており、ノッチ間の長さは5.6cmを測る。2は第39号住居跡の覆土から出土した土器片錐の破片である。現存長4.1cm、現存幅2.5cm、最大厚1.0cm、重さ9.1gを測る。1・2はいずれも覆土中に混入したものである。

(3) 石器 (第6図3~6)

石器は、石錐1点、磨製石斧2点、磨石1点が出土している。3は凹基無茎石錐で、最大長2.15cm、最大幅1.8cm、最大厚0.45cm、重量1.1gを測る。石質はチャートである。4・5は磨製石斧である。4は基部中央から刃部を欠損する定角式の石斧で、基端部に敲き痕が見られる。現存長6.93cm、現存幅4.8cm、最大厚2.0cm、重量96.3gを測る。石質は粘板岩である。5は両凸刃(蛤刃)の定角式石斧で、基部の大半を欠損している。現存長7.8cm、現存幅7.4cm、最大厚3.2cm、重量268gを測る。石質は花崗岩である。6は中央部に凹みをもつ磨石である。表裏面に磨り痕、側面両端に敲き痕や磨り痕が見られる。最大長8.8cm、最大幅7.7cm、最大厚4.1cm、重量394.2gを測る。石質は砂岩である。3は第46号溝、5は第39号住居跡の覆土に混入したものである。4はE8ga区出土、6は表採である。

第3節 弥生時代

1 遺構と遺物

第20号住居跡（第7図）

本跡は、調査区の北部E7b₁区を中心に確認された住居跡である。第21号住居跡の南東7mほどに位置し、住居跡の中央部は、北東から南西方向に延びる第37号溝によって掘り込まれている。

平面形は、長軸5.02m、短軸4.28mほどの隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-46°-Wを指している。²¹⁾床面積は、約18m²である。壁は、耕作による畝状の擾乱や第37号溝との重複により不明瞭な部分も認められるが、残存する壁は、全体的にほぼ垂直に立ち上がり縮まっている。壁高は32～36cmを測る。床面は、南東側の一部に覆土の上面から掘り込まれた新しい擾乱が見られるが、全体的にやや凸凹状を呈し、硬く縮まっている。炉は、住居跡の中央部付近に所在していたものと思われるが、中央部が第37号溝によって掘り込まれているため、その有無については不明である。ピットは9か所検出され、P₁～P₃・P₆～P₉は、長径19～28cm、短径15～24cm、深さ10～25cmである。P₄・P₅は、長径50～54cm、短径42～43cm、深さ5～10cmを測る。配列が不規則であり、主柱穴は明確でない。

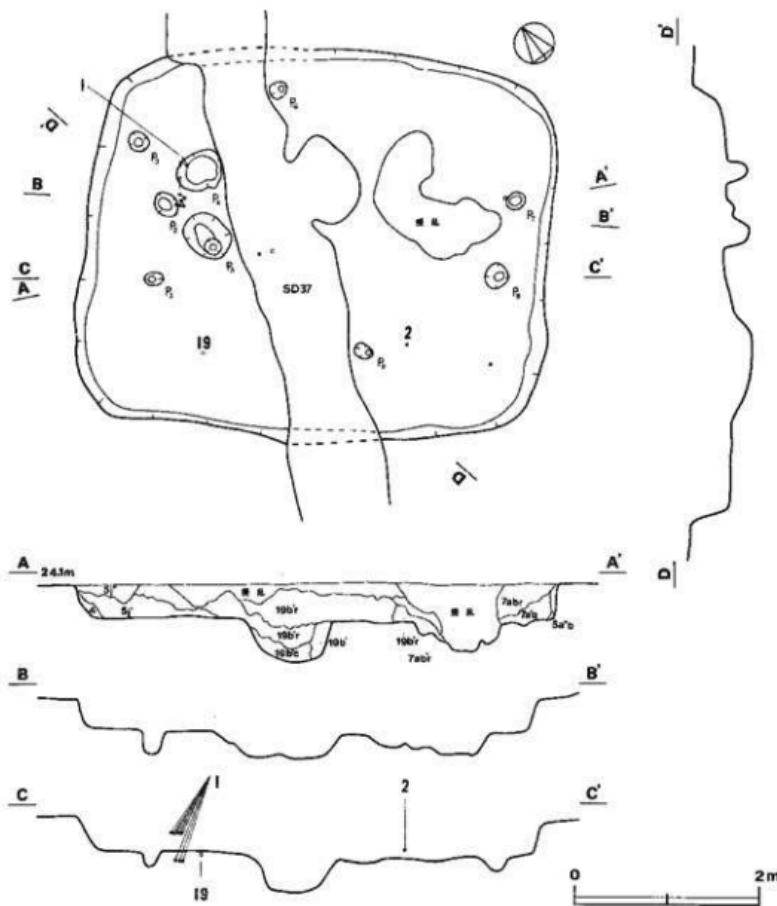
覆土は、上層から下層にかけて一部に擾乱が認められるが、自然堆積の状態を示している。遺構本来の覆土は、大別すると3層から成り、上層から中層にかけてはロームブロックを含む黒色土・黒褐色土が、下層にはローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土が、壁際にはローム粒子を多量に含む暗褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は、覆土中や床面から弥生式土器片145点、土師器片3点、須恵器片1点、陶磁器片34点、土製紡錘車1点、礫類35点が出土している。弥生式土器片の多くは、覆土下層及び床面直上から出土している。1は覆土及び床面出土の破片が接合したもので、投棄された状況を示している。また、2（鉢形土器）は、南側の床面から10cmほど浮いた位置から、19（土製紡錘車）は床面直上から出土している。他の遺物については、耕作や第37号溝との重複により混入したものと思われる。

本跡は、出土遺物や遺構の状況から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

注

- (1) 調査区内における遺構のおおまかな位置については、中心部のF7区からみて「北部、東部…」等と記載し、さらに、正確な位置については、「E7b₁」のように、小調査区名で記載した。以下同様。
- (2) 住居跡の規模は上端（掘り込み面）の計測値であり、床面積は下端の計測値である。



第7図 第20号住居跡実測図

出土遺物

土器観察表

試験番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第8回 1	小形壺 先住式土器	A—— B [11.8] C——	器肉は全体的に薄く、肩部は中位よりも上に最大径を持ち、肩部が張る。頸部は縦縫の帶幅文によって4単位に区画され、各単位内には帯幅波状文が横位に施されている。肩部には、擦系（輪棒に細いRの溝を引いたもの）の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒・苔は普通 灰褐色	完存率60%

開版番号	器種	法環(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
2	鉢 弥生式土器	A 20.1 B 13.7 C 7.8	底部は平底で、木葉模がみられる。肩部は直線的に斜上方に開いて立ち上がり、口唇部にはほぼ直立する。口径が器高よりも大きい。口唇部には刻目が、肩部には單脚LRの回転し縞文が施されている。	内面なで	砂粒 普通 にぶい褐色	光存率60%

第8図3~18は、第20号住居跡から出土した弥生式土器片の描説図である。3は口頸部、4は口縁部片である。いずれも折返し口縁で、3は外面に棒状工具による刺突が施され、頸部には2本1單位の櫛描きによる鋸齒状文が施されている。口唇部には付加条の縄文が押圧されている。4は口唇部及び口縁部外面に付加条の縄文が施されている。5~7は頭部片である。いずれも頸部を縦位の櫛描直線によって区画し、区画内に櫛描波状文を施している。8~10は頭部を無文とし、8は胴部に竪描きによる格子文、9~10は付加条の縄文が施されている。11~13・18は付加条の縄文、15は反擦りの縄文、16・17は擦糸文を施す胴部片である。14は擦糸文、櫛描波状文が施されている。11・12の器面には煤が付着している。

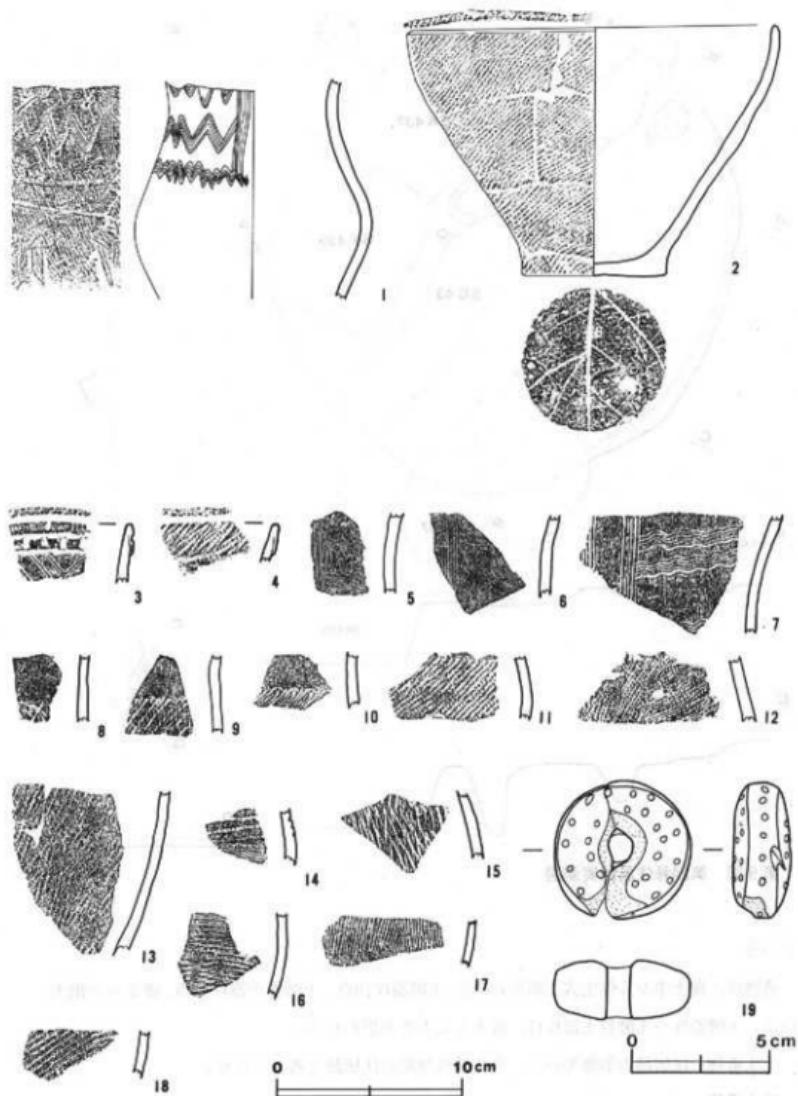
19は、住居跡の西側床面から出土した土製の紡錘車である。中央に、径8~9mmの孔が両方向から穿たれている。表裏には、1~2列の円形刺突文が同心円状に施され、側面には1列の円形刺突文が巡らされている。

第24号住居跡（第9図）

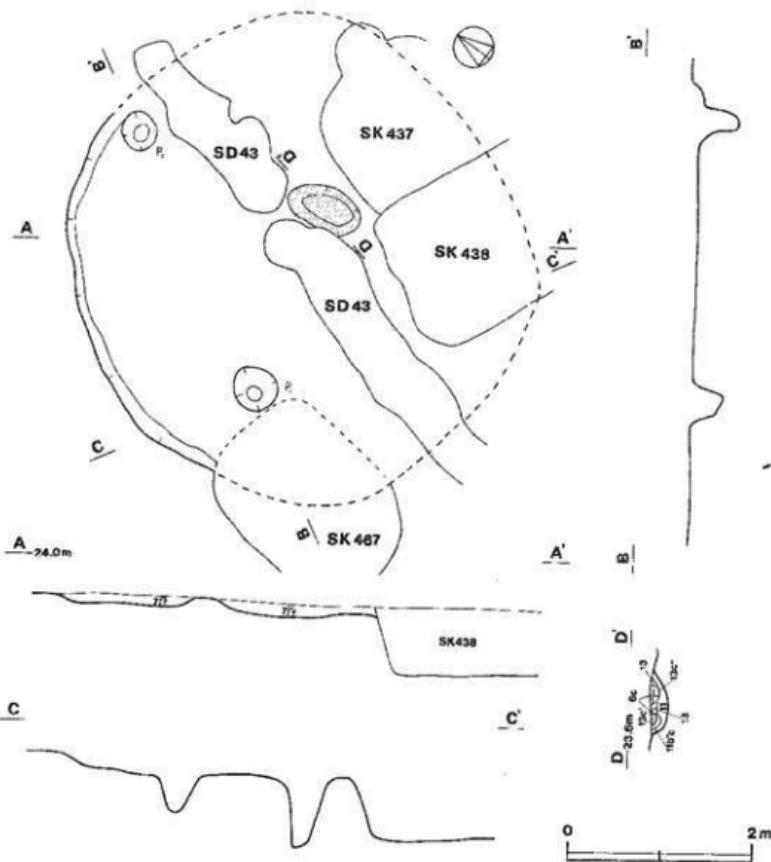
本跡は、調査区の北東部E8g区に確認された住居跡である。E8区及びF8区に確認された墓域群内の北端に位置し、西側3mには第23号住居跡が存在している。第436・437・438・439・467号土坑、第43号溝とそれぞれ重複し、壁・床の大部分が掘り込まれている。

平面形・規模・長径方向等は、遺存状態が悪く不明である。壁は大部分が重複構造によって掘り込まれ不明であるが、北及び南側でわずかに残存している。残存壁は北側で壁高10cm前後、東側で12cm前後を測り、いずれもなだらかに立ち上がっている。壁質は軟弱である。床面は大部分が破壊されている。わずかに残存する北東側の床面は、平坦面を呈しているが軟弱である。が、住居跡推定プランの南側寄りに位置している。平面形は、長径78cm、短径41cmの不整形円形を呈し、皿状に6~13cm掘りくぼめ地床がとしている。炉床は凸凹を呈し、レンガ状に硬く焼けている。炉の覆土中には、多量の焼土が含まれている。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、規模・形状・位置等からいずれも主柱穴と思われる。本米は4本主柱と推定されるが、他の2か所については不明である。P₁は径48cm前後の円形状を呈し、深さ44cmを測る。P₂は長径43cm・短径38cmの椭円形状を呈し、深さ50cmを測る。

覆土は、わずかに10~15cm残存しているにすぎず、ローム粒子やハードローム小ブロックを多量に含み、ハードローム中・大ブロックや炭化粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積し



第8図 第20号住居跡出土遺物実測・拓影図



第9図 第24号住居跡実測図

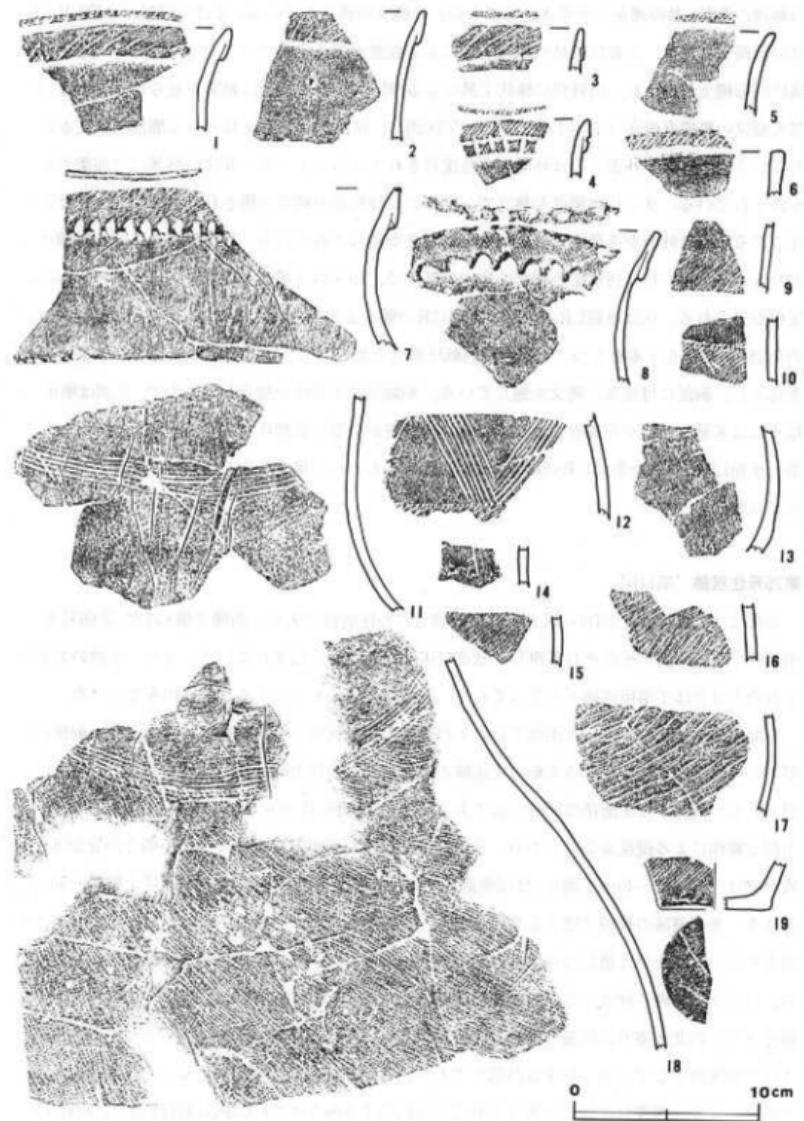
ている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片130点、土師留片10点、土師質土器片1点、礫2点が出土している。土師器片や土師質土器片は、混入したものと思われる。

出土遺物や住居跡の形態等から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物

第10図1~19は、第24号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1~8は口縁部片である。1~4・7・8は折返し口縁で、縁部は無文である。1~3は口縁部に付加条(単筋LR)



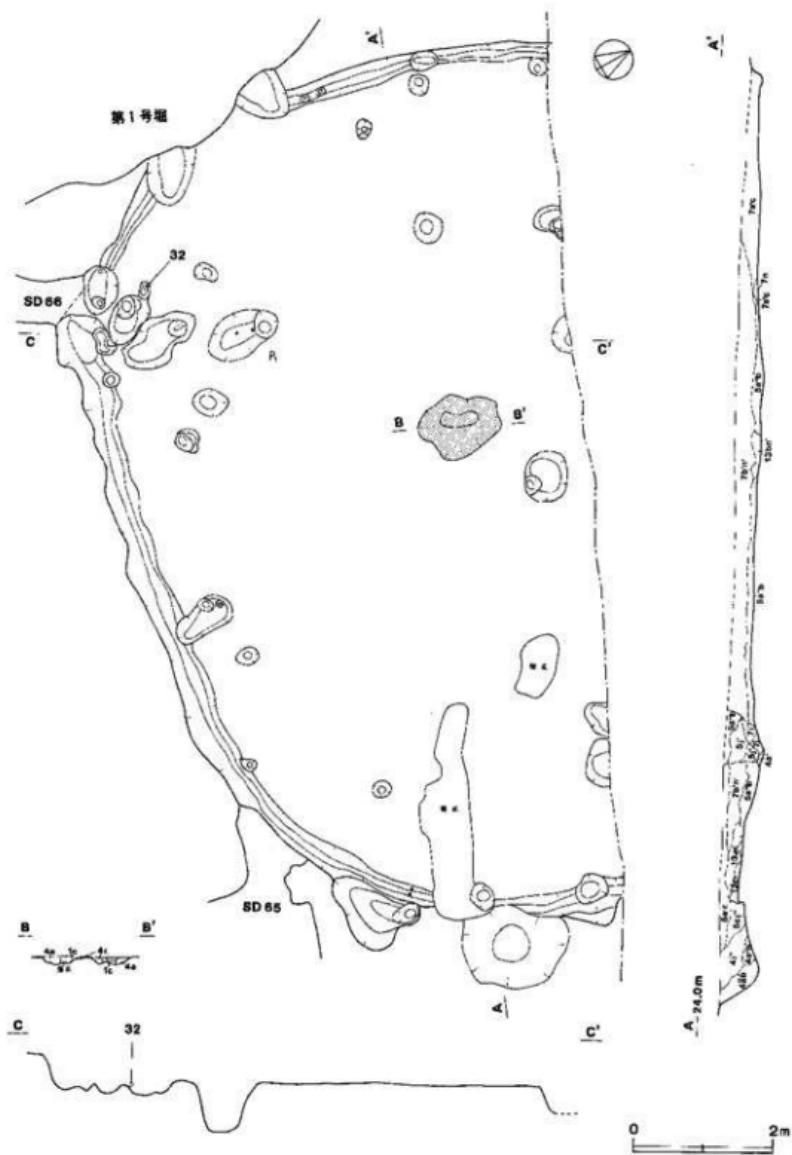
第10図 第24号住居跡出土遺物実測・拓影図

の軸繩の条間にRの繩を1本巻き込んだもの)の縄文が施されている。4は口縁部に半節LRの横位回転縄文を施し、半截竹箸具や棒状工具による刺突が加えられている。8は口縁部に半節RLの横位回転縄文が施され、口唇部に棒状工具による押圧、折返し下端に刺突が見られる。5は口頭部を縱位の櫛描直線文(7本1条)によって区画し、区画内に同じ工具による櫛描波状文が施されている。6は内・外面、8は外面が赤色塗彩されている。1・3~8は口唇部に付加条の縄文が施されている。9・10は頬部が無文で、脣部には付加条の縄文が施されている。11・12は頬部片である。11は外面が赤色塗彩され、櫛描直線文が施されている。12は櫛描きによる鋸歯状文が見られる。13~17は付加条の縄文を施す胴部片で、13・14は頬部と胴部との境に結び目の回転压痕が見られる。16は半節LRの軸繩の条間にRの繩を2本巻き込んだもの、15・17は同様の軸繩の条間にRの繩を1本巻きつけたものの回転压痕文と思われる。18は頬部の無文帯に櫛描直線文を巡らし、胴部に付加条の縄文を施している。30数点の土器片が接合したもので、色調は明褐色、胎土には多量の砂粒や石英が含まれている。19は壺形土器の底部片と思われ、胴下半部には付加条(半節LRの軸繩の条間にRの繩を1本巻き込んだもの)の縄文を施している。底部には木葉模が見られる。

第26号住居跡(第11図)

本跡は、調査区の北部D7c7区を中心に確認された住居跡である。西側で第1分堀・第66号溝と、南東側で第65号溝とそれぞれ重複し、壁及び床の一部が掘り込まれている。また、本跡の北東側2分の1ほどは工事用道路下となっており、遺構の全体像をとらえることは出来なかった。

平面形は、調査を実施した南側2分の1の遺構の検出状況から、長径12m、短径11m前後の円形もしくは梢円形を呈する大形の住居跡と推定され、長径方向はN-40°-W前後を指すものと思われる。残存する床面積は約67.2m²であり、推定床面積は100m²を越えるものと思われる。壁は、上部が耕作による搅乱を受けており、また、南西壁及び南東壁は重複のため不明な部分が多い。残存壁は、壁高17~40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がり良く縮まっている。壁溝は上幅20~45cm、深さ5~8cm前後の規模で壁下を全周していたものと思われる。壁溝内には、数か所ピットが検出されているがその性格については不明である。床面は、所々に耕作による搅乱が見られるものの、ほぼ平坦で硬く縮まっている。炉の周開はややくぼんでおり、特に良く縮まっている。炉は、推定プランの北西寄りに位置しており、長径1.20m、短径0.88mの不整梢円形で、5~15cm掘りくぼめ地床炉としている。炉床は凸凹しており、レンガ状に良く焼けている。ピットは多数検出されているが、明確に主柱穴と考えられるのはP₁の1か所だけである。P₁は長径1.05m、短径0.6mの長梢円形を呈し、円筒状に0.74m掘り込まれている。また、P₁の覆土中層からは、弥生の土器片が出土している。



第11図 第26号住居跡実測図

覆土は、一部耕作による擾乱を受けているが、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土、壁際に褐色土が自然堆積している。覆土中には、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子が含まれている。

遺物は覆土中から弥生式土器片677点、土師器片22点、須恵器片1点、陶磁器片3点、土製紡錘車2点(31・32)、礎2点が出土している。その内、P₁の覆土中層からは弥生式土器片が2点、西側の小ピット内からは土製紡錘車1点(32)が出土している。また、東側の覆土下層からは小形の甕(1)が出土している。

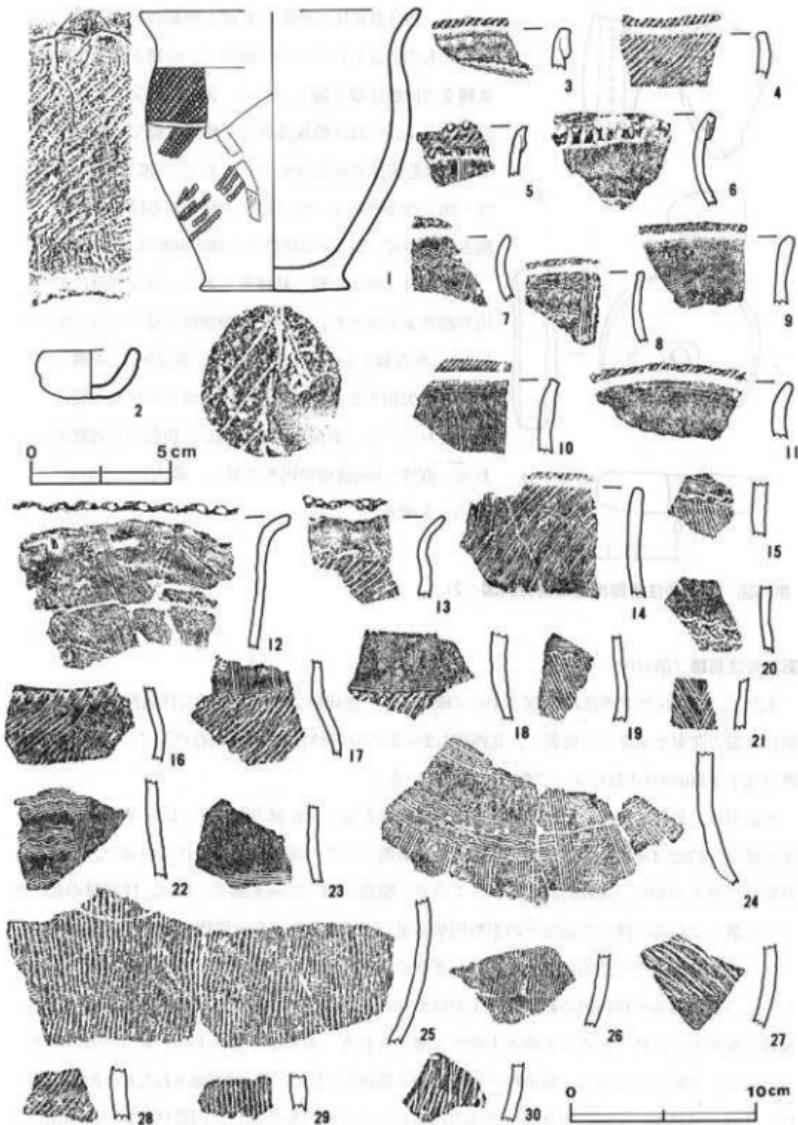
出土遺物や住居跡の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物

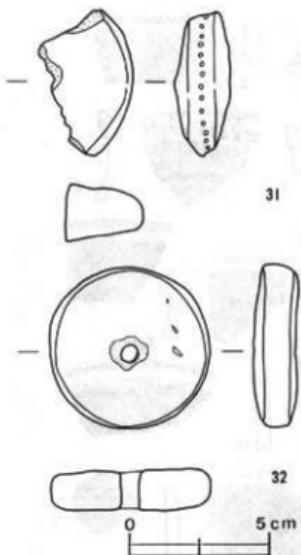
土器観察表

団体番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第12回 1	小形甕 弥生式土器	A 10.0 B 10.0 C 5.4	底部は平底で、木葉痕が見られる。頸部 下端から底部にかけては、「ハ」の字状 に開いている。胴部は内縫しながら開いて 立ち上がり、上半部に最大径をもつ。 口縁部は外縫しながら開いて立ち上がる。 口径と器高が同一値を示す。胴部には、 付加条1枚(単節LRの軸繩の条間に、R の繩を1本巻き込んだもの)の斜縄文が 施されている。	LJ縁部内面構なで その他内面などで	砂粒 普通 によい褐色	完存率50%
2	(鉢) 弥生式土器	A 3.4 B 1.8 C 1.6	粗製の手捏ね上器。	手捏ね	砂粒・石英 不良 褐色	完存率95% 炉腹土

第12回3~30は、第26号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・5~14は口縁部片、4は口縁部片である。3は口縁部に横位のなでが、口唇部には付加条の縄文が施されている。頸部には横位の櫛描波状文が見られる。4は口唇部や口縁部に付加条の縄文が施されている。5・6は折返し口縁で、5はLJ縁部に無節Rの撚糸文が施され、LJ縁部には棒状工具による押正、折返し下端には刺突が加えられている。頸部には、縦位の櫛描直線文が見られる。6は口縁部に刺突が加えられ、頸部は無文となっている。7~9は、口頭部に縦位の櫛描直線文や、横位の櫛描波状文が見られる。7・9はLJ縁部に付加条の縄文が施されている。10はLJ縁部に横位のなで、頸部に縦位のなで、11はLJ縁部に横位のなでが見られ、いずれもLJ縁部に付加条の縄文が施されている。12・13はLJ縁部が大きく外反し、LJ縁部に棒状工具による押正が加えられている。頸部は無文で、横位や斜位のなでが施されている。13は胴部に付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の縄文を施している。14はLJ頭部に付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を1本巻き込んだもの)の縄文を施し、LJ縁部に同じ繩を回転押正している。15・17~20は頸部から胴部にかけての破片、21~24は頭部片、25~30は胴部片である。15は末端を結節した付加条縄文の回転圧痕と思われる。16~18は胴部に付加条の縄文を施し、17・18は頭部に櫛描文が見



第12図 第26号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1)



第13図 第26号住居跡出土遺物実測図(2)

第29号住居跡(第14図)

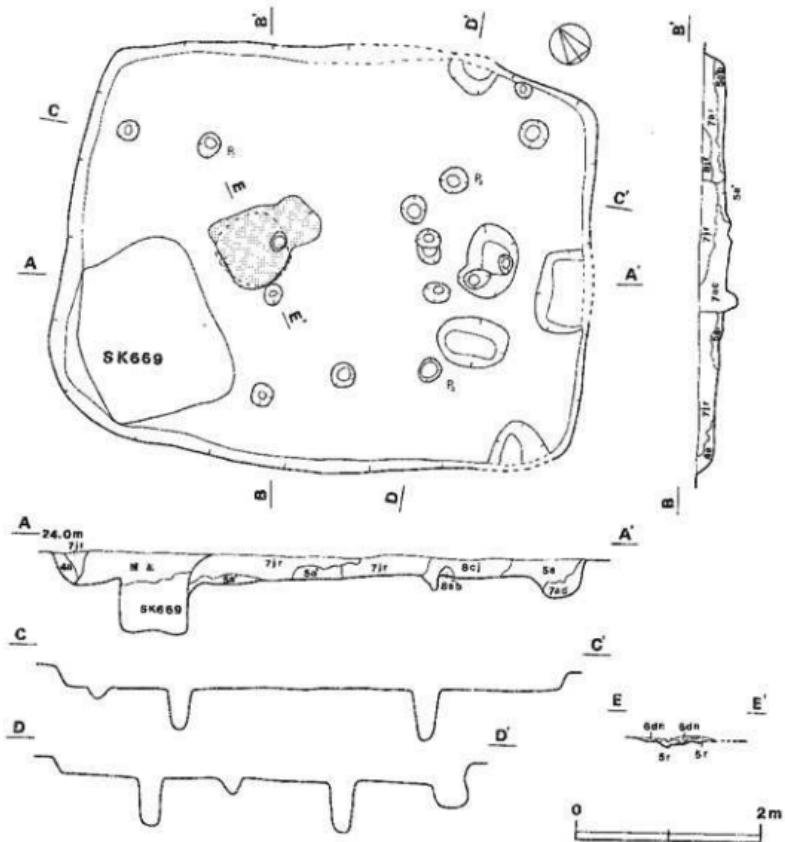
本跡は、調査区の北西部D6j₈区を中心に確認された住居跡である。第28号住居跡の北方6m、第10号塙の北東2mほどに位置し、北西側4.2mほどには第33号住居跡が存在している。また、西侧の壁下を第669号土坑によって掘り込まれている。

平面形は、長軸5.75m、短軸4.65mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-49°-Wを指している。床面積は、約22.4m²である。壁は、北東側及び南側コーナー部が攪乱を受けているが、残存壁は外傾して立ち上がり、比較的良く締まっている。壁高は20~25cmを測る。炉は、住居跡の北西寄りに位置している。径0.75mほどの不整円形を呈し、床面を3~8cm皿状に掘りくぼめ地床炉としている。炉床はやや凸凹状を呈し、レンガ状に良く焼けている。また、炉を中心として長径1.1m、短径0.8mの楕円形の範囲に焼土が検出されている。ピットは15か所検出されているが、規模や配列から、P₁~P₃の3か所が主柱穴と考えられる。本来は4本の主柱であったものと考えられるが、不明の1か所は、他の柱穴の配列から第669号土坑によって破壊されたものと思われる。P₁~P₃は、長径28~30cm、短径25~30cmの円形もしくは楕円形を呈し、円筒状に45~57cm掘り込まれている。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土、壁際に褐色土が自然堆積している。覆土中には、

られる。19は無節Rの撚糸の末端を無節の繩で結び、回転させたものと思われる。20は胸部に、両端を結節した付加条繩文の回転圧痕を施している。頭部は無文である。21は鋸歯状文、22~24は櫛描波状文や櫛描直線文が施されている。24は器表面が赤色塗彩されており、一部剥離している。25~26・29は撚糸文、28は結束の見られる付加条の繩文が施されている。27・30は反撚りの繩の回転圧痕と思われる。

第13図31・32は土製の紡錘車である。31は側面に1列の円形刺突文が施され、表面には指頭痕が見られる。現存長5.2cm、現存幅3.4cm、最大厚2.0cm、重量26.1gを測る。3分の2を欠損する。32は中央に一方向から径6mm前後の孔が穿たれている。表面は一部剥離し、黒色の付着物が見られる。直径5.8cm前後の円形を呈し、最大厚1.55cm、重量67.5gを測る。



第14図 第29号住居跡実測図

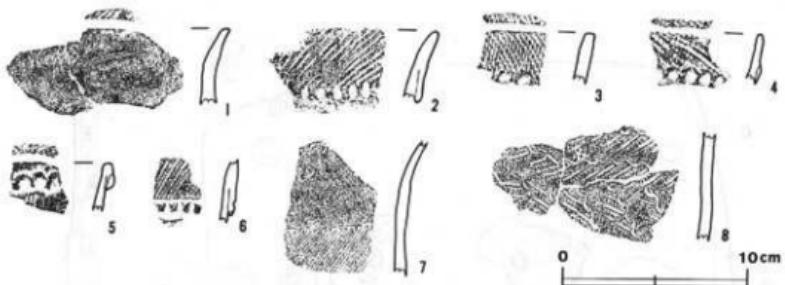
ローム粒子やロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片108点、土師器片7点、陶磁器片1点、礫5点が出土している。

出土遺物や住居跡の形態等から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物

第15図1～8は、第29号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は口縁部が無文で、内・外面に横位のなでが施されている。口唇部には縄文が回転押圧されている。2～6は折返しをもつ口縁部片で、2は付加条の縄文が施され、折返し下端に棒状工具による押圧が加えら



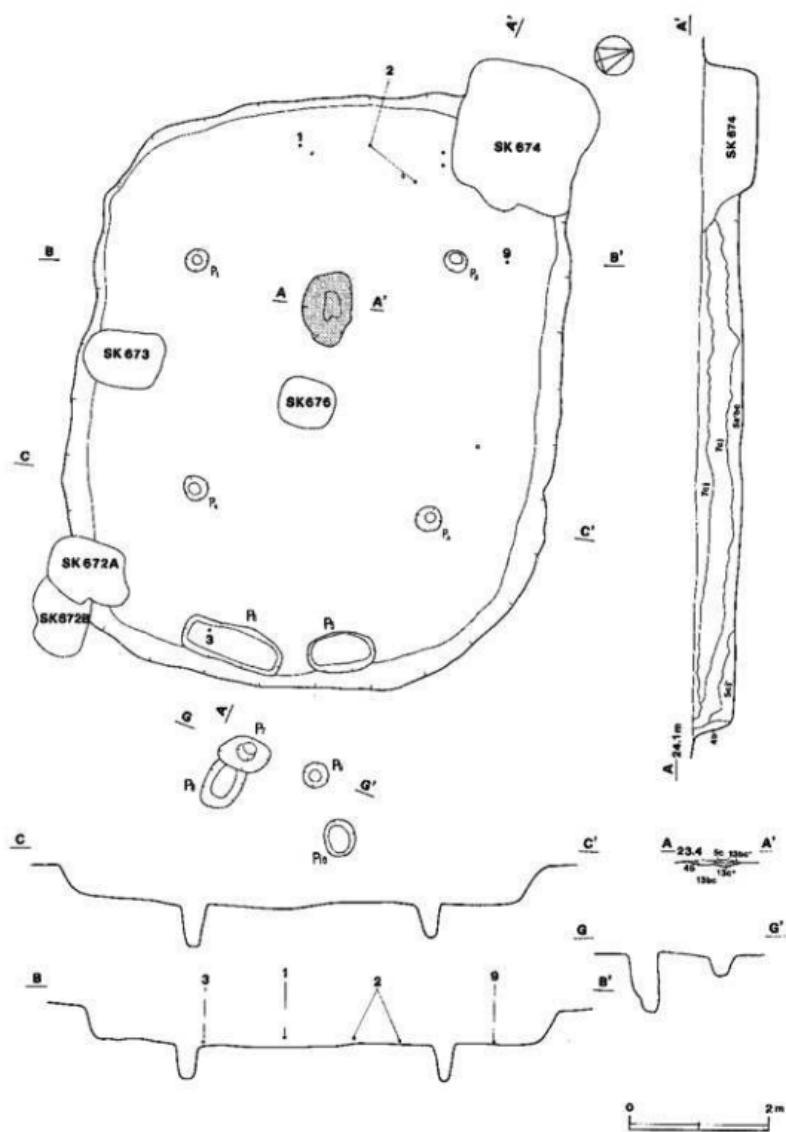
第15図 第29号住居跡出土遺物拓影図

れている。3は無節Lの撚糸文が施され、口縁部下方に1条の沈線を巡らし、折返し下端に棒状工具による刺突が加えている。4は口縁部に付加条の繩文が施され、折返し下端に棒状工具による刺突が加えられている。6は口唇部を欠損し、口縁部には付加条の繩文が施されている。7は頸部を無文とし、胴部に付加条（単節LRの軸繩の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の繩文を施している。8は末端を結節した付加条（単節LRの軸繩の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の繩文を、回転方向を変えて押圧し、羽状に施している。

第30号住居跡（第16図）

本跡は、調査区の北西部D6g₈区を中心に確認された住居跡である。第29号住居跡の北東6.5mほどに位置し、北西側1.5mには第31号住居跡が隣接する。北西コーナー部を第674号土坑、南西壁下を第673号土坑、南東コーナー部を第672号土坑、中央部を第676号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

平面形は、長軸8.5m、短軸7.0mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-60°-Wを指している。床面積は、約46.9m²である。壁は、上部が部分的に攪乱を受けているが、全体的に硬く締まっている。北西及び南西壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東及び南東壁は外傾ぎみに立ち上がっている。壁高は、43~60cmを測る。床面は、炉を中心として径5mほどの範囲がややくぼんでいるが、全体的に平坦で硬く締まっている。特に、入口部と想定される南東側の床面は、良く踏み固められている。炉は、住居跡の北西寄りに位置しており、長径1m、短径0.7mの楕円形状を呈し、皿状に20cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床は赤褐色を呈し、レンガ状に良く焼けている。ピットは、住居跡内に6か所、外側に4か所検出されている。主柱穴はP₁~P₄の4か所が考えられ、長径30~36cm、短径35~38cm、深さ50~62cmで、円筒状に掘り込まれている。南東壁下に検出されたP₅・P₆は、住居跡の外側に検出されたP₇~P₁₀とともに、入口部に伴うものと想定される。P₅・



第16図 第30号住居跡実測図

P₆は長径97~150cm、短径55~58cmの長方形もしくは梢円形を呈し、15~20cm掘り込まれている。

P₇~P₈は長径37~78cm、短径37~53cm、深さ28~80cmを測る。

覆土は6層からなり、上層から中層にかけて黒褐色土が、下層には暗褐色土が、壁際には褐色土が自然堆積している。覆土中には、少量のローム粒子やハードロームブロックの他に、極少量の焼上粒子を含んでいる。

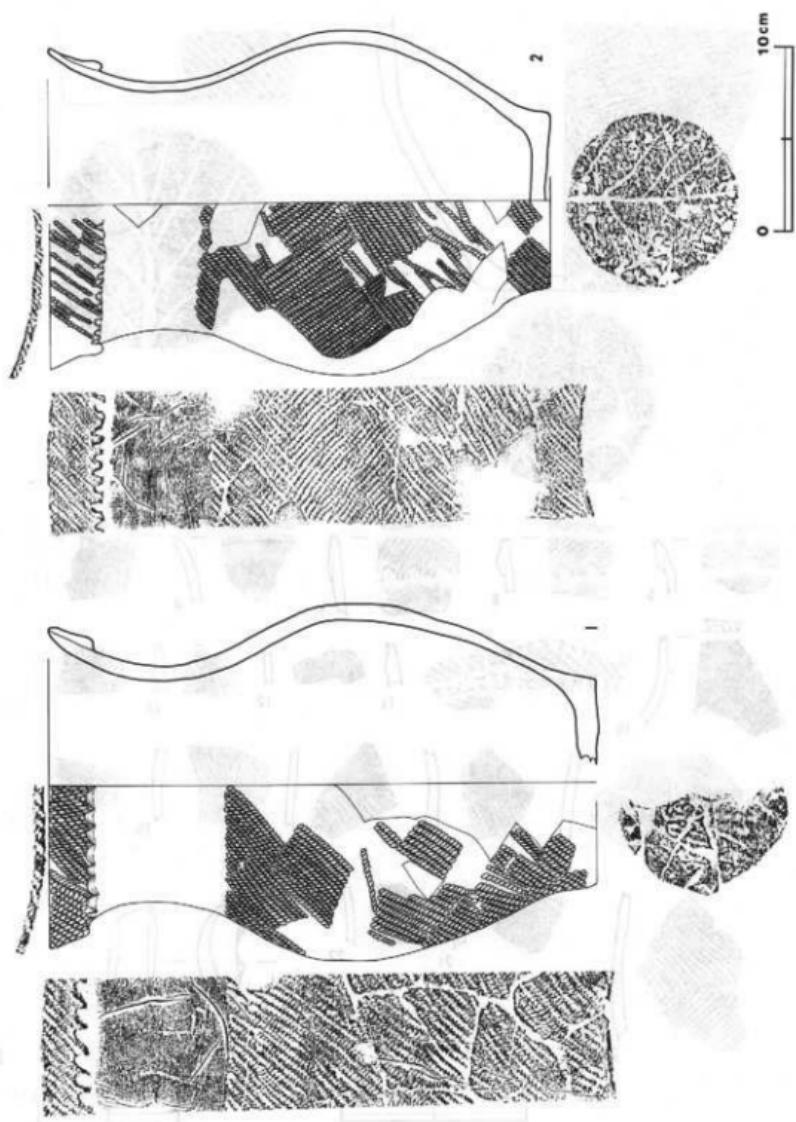
遺物は、大半が覆土中から出土しており、弥生式土器片561点、土師器片58点、須恵器片2点、土製紡錘車1点(23)、礫28点が出土している。弥生式土器の内、1・2は住居跡の北西側の床面直上及び覆土下層からそれぞれ出土した上器片が接合したものである。また、3は南東側の床面直上から、23は北西側の覆土中から出土している。

遺物や住居跡の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

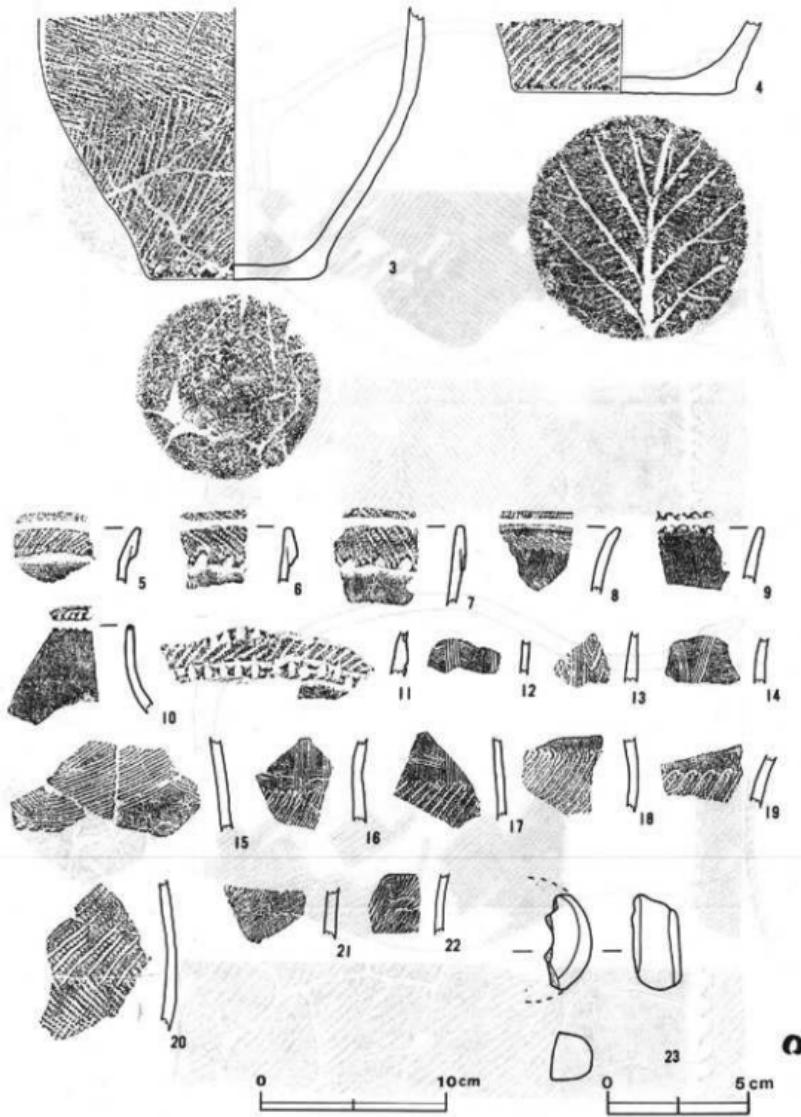
出土遺物

土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第17図 1	壺 弥生式土器	A 17.4 B 29.7 C (11.1)	口径と胴部の最大径がほぼ等しい。広口の壺形土器。底部は平底で、木葉痕が見られる。胴部は中位よりも上に最大径をもち、縁やかに内凹しながら外上方に立ち上がる。口縁部は外反しながら開いて立ち上がる。口縁部は折返しによる二重口縁で、口唇部には単筋LRの繩を押出しし、口縁部・胴部には、単筋LRの斜繩文が施され、口縁部下端には棒状工具による押印が加えられている。頸部は無文である。	口縁部内面横なまで その他の内面斜位の 度なで、頸部外面 なで	砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	完存率60%
2	壺 弥生式土器	A (18.2) B 27.1 C 9.4	口径と胴部の最大径がほぼ等しい。広口の壺形土器。底部は外側中央部が陥み、木葉痕が見られる。胴部のほぼ中位に最大径を有し、口縁部は外反しながら開いて立ち上がる。口縁部は折返しによる二重口縁で、口唇部には繩文を押し出し、口縁部には付加条1種(単筋LRの輪縄の条間にRの繩を2本巻き込んだもの)の斜繩文が施され、口縁部下端は、棒状工具により削突されている。胴部は無文である。胴部は、中位に単筋RLの斜繩文、その上下に、口縁部と同様の繩を横位に回転押出しし、羽状に施している。	内面・頸部外面な で	砂粒 普通 黒褐色	完存率60%
第18図 3	壺 弥生式土器	A —— B (14.7) C 9.8	底部は平底で、擬似木葉痕が見られる。胴部は、内凹しながら開いて立ち上がり、中位に最大径をもつものと思われる。器表面には、擦糞(輪縄にしの繩を垂いたもの)の回転圧痕が施されている。	内面なで	砂粒・砂礫 石英 普通 にぶい橙色	完存率40%
4	壺 弥生式土器	A —— B (3.0) C 12.2	底部は平底で、木葉痕が見られる。胴下半部には、付加条1種(単筋LRの輪縄の条間にRの繩を2本巻き込んだもの)の斜繩文が施されている。	内面粗いなで	砂粒・砂礫 普通 にぶい橙色	完存率5%



第17図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1)



第18図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図 (2) (著者・川瀬探勝・出所:西日本古事記調査)

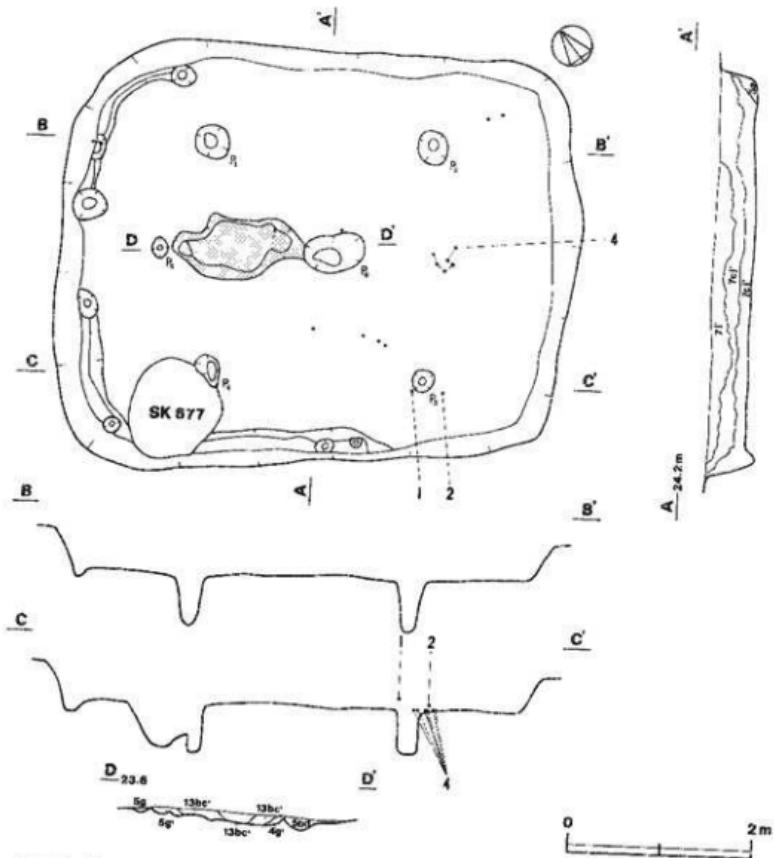
第18図5～22は、第30号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～10は口縁部片である。5～7は折返し口縁で、5は口唇部や口縁部に付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の縄文を施し、折返し下端や頸部に横位のなでを施している。6・7は口唇部や口縁部に付加条（単節RLの軸縄の条間に、Lの縄を2本巻き込んだもの）の縄文を施し、折返し下端に棒状工具による刺突を加えている。頸部は無文である。8は口縁部に横位のなで、頸部に縱位のなで調整を施した後、櫛描波状文（5本1条）を横位に施している。口唇部には縄文が回転押圧されている。9・10は口縁部を無文とし、9は口唇部に両側から棒状工具による押圧を加えている。10は口唇部に半截竹管と思われる工具によって、刺突が加えられている。11は口唇部を欠損する口縁部片で、口縁部には付加条の縄文が施され、その上面に刺突が加えられている。また、口縁部下端には1条の沈線を巡らした後、棒状工具による刺突が加えられている。12～15は頸部片で、12・13は櫛描波状文や櫛描直線文が、14は網目状文が施されている。15は5本1条の櫛描文を三段に重ねたものを1単位とし、それを鋸歯状に施している。16・17は頸部に櫛描きによる直線文や波状文、胴部に付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の縄文を施している。18・19も胴部に同様の付加条縄文を施している。20は胴部に付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の縄文を、回転方向を換え、羽状に施している。21・22は結節した付加条の縄文の回転圧痕である。

23は、4分の3を欠損する上製紡錘車の破片である。現存長3.4cm、現存幅1.7cm、最大厚1.7cm、重量9.0gを測る。

第31号住居跡（第19図）

本跡は、調査区の北西部D6e区を中心に確認された住居跡である。第30号住居跡の北西1.5mほどに位置し、西側コーナー部の壁及び床を第677号土坑によって掘り込まれている。

平面形は、長軸5.6m、短軸4.5mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-50°-Wを指している。床面積は、約20.2m²である。壁は、北西側で外傾して立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は37～57cmを測るが、北東壁コーナー部は15cmと浅い立ち上がりを示している。壁溝は、北側及び西側コーナー部に部分的に検出されており、上幅10～24cm、深さ9～12cmを測る。壁溝内には、7か所ピットが検出されている。床面は全体に平坦で締まっており、特に南東側及び炉の周辺が硬く踏み固められている。炉は住居跡の北西寄りに位置しており、長径1.43m、短径0.65mの不整楕円形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめ地床炉としている。炉床は良く焼けている。ピットは5か所検出され、規模や配列からP₁～P₄の4か所が主柱穴と思われる。P₁・P₂はほぼ同規模で、径38cm内外の円形を呈し、円筒状に56cmほど掘り込まれている。また、P₃は径25cmの円形、P₄は長径38cm、短径22cmの不整楕円形を呈し、それぞれ円筒状に53cm



第19図 第31号住居跡実測図

ほど掘り込まれている。P₄の一部は第677号上坑によって破壊されている。

覆土は、上層から下層にかけてローム粒子やロームブロックを含む褐色色土が、實際には粘性のある褐色土が自然堆積している。焼土粒子は下層に行くほど量が多くなる。

遺物は、弥生式土器片303点、土師器片67点、土製紡錘車1点(21)が出上している。1は住居跡の南側(P₅付近)の覆土下層から、21は覆土中からそれぞれ出土している。

弥生式土器片の多くは、住居跡の南側の覆土中・下層から出土しており、遺物や住居跡の形態から弥生時代後期の住居跡と思われる。

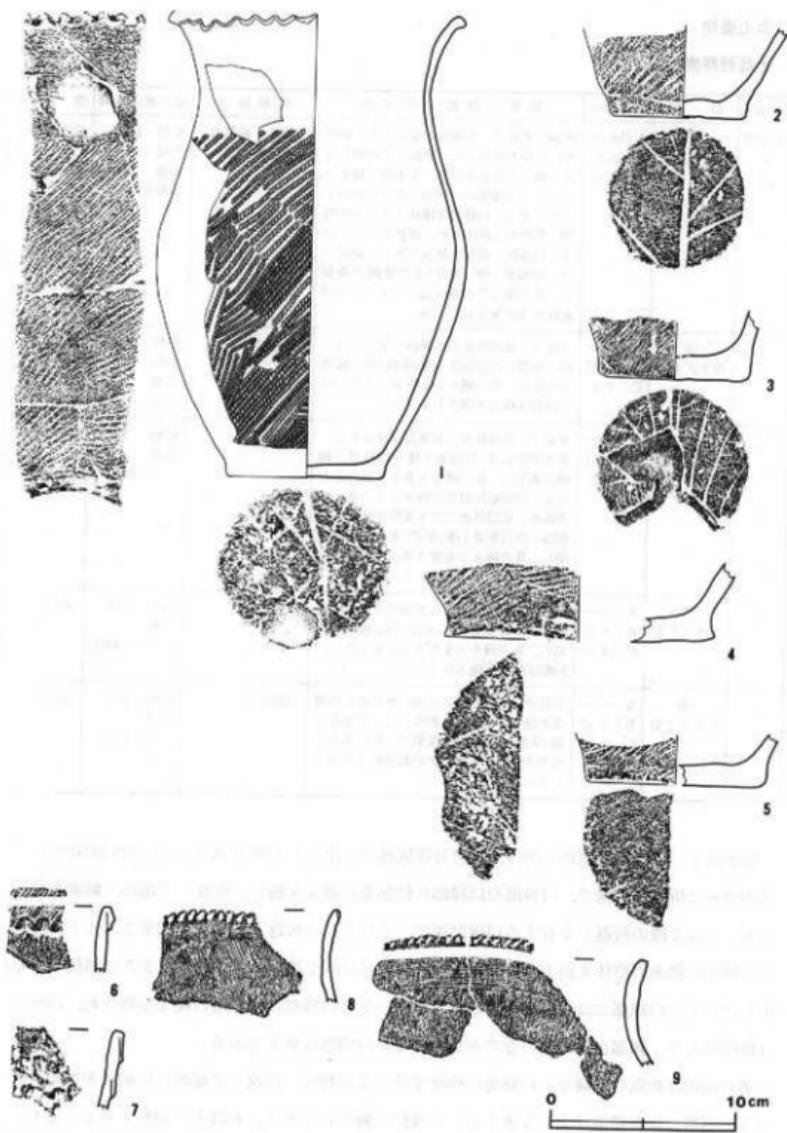
出土遺物

土器観察表

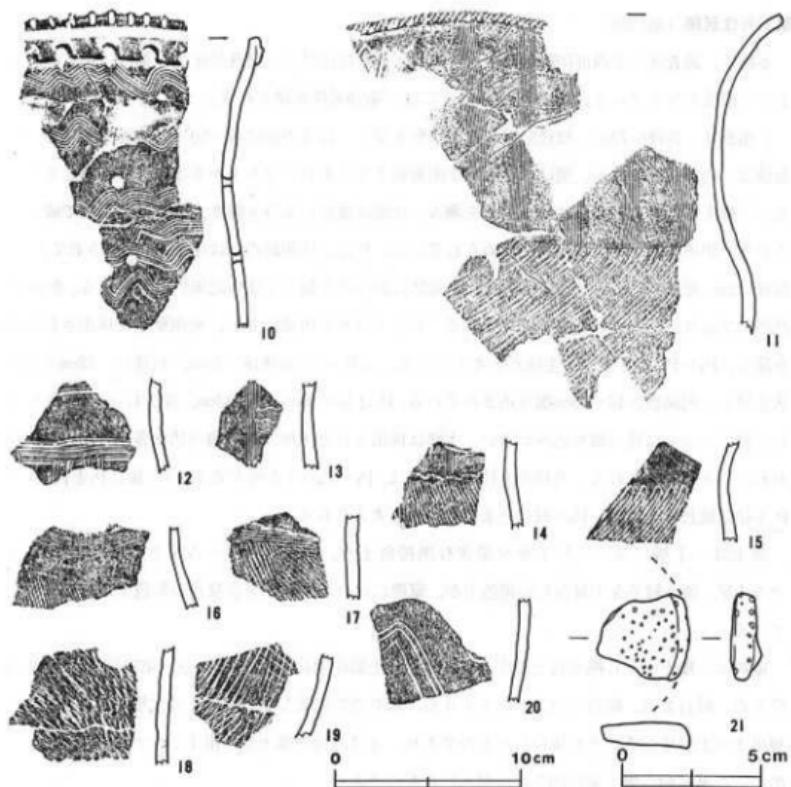
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	製作技法	胎土・焼成・色調	備考
第20図 1	壺 弥生式土器	A(16.0) B 25.0 C(8.6)	底部は平底で、木葉模が見られる。胴部中位に最大径をもち、底部から内側しながら開いて立ち上がり、上半部で縮まっている。口縁部は外反しながら開いて立ち上がる。口唇部は棒状工具により内側と外側から押上げられ、波状となっている。口縁部・頸部は無文である。胴部には付加条1種(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。	口縁部、頸部内・外面積位のなで	砂粒・砂礫 灰母 普通 黒褐色	完存率50%
2	壺 弥生式土器	A—— B(4.7) C 7.3	平底で、底部外側に木葉模が見られる。胴下半部には付加条1種(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒・砂礫 灰母 普通 に赤い褐色	完存率5%
3	壺 弥生式土器	A—— B(3.0) C(8.2)	平底で、底部外側に木葉模が見られる。胴下半部には付加条1種(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。平底で、底部外側には木葉模が見られる。胴部には付加条1種(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒 普通 に赤い褐色	完存率5%
4	壺 弥生式土器	A—— B(3.6) C(14.6)	平底で、底部外側には木葉模が見られる。胴部には付加条1種(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒・砂礫 普通 に赤い褐色	完存率5%
5	壺 弥生式土器	A—— B(2.6) C 9.8	平底で、底部外側には細い單節RLの繩文が施されている。胴部には付加条1種(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒・灰母 普通 に赤い褐色	完存率5%

第20図6～9、第21図10～20は、第31号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。第20図6は折返し口縁で、口唇部や口縁部に付加条の繩文を施し、折返し下端部に刺突を加えている。7は2段の折返しを有する口縁部片で、それぞれの折返し下端部に刺突を加えている。8は口唇部に撚糸の原体を斜方向から押上げ、頸部には同じ撚糸の原体を継ぎまたは斜位に回転押上げしている。口縁部には横位のなでが見られる。9は口唇部に付加条の繩文が施され、口縁部には横位のなで、頸部には継ぎのなでが見られる。10は口縁部は無文である。

第21図10は折返し口縁で、口唇部に棒状工具による押上げ、折返し下端部には刺突が加えられている。頸部には櫛描波状文(5本1条)が横位に施されており、6段まで観察できる。また、頸部の上位・中位・下位の3か所には、土器の外側から内側に向かって穿たれた補修孔と思われる径5mm前後の孔が残る。11は口唇部や胴部に、付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。



第20図 第31号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1)



第21図 第31号住居跡出土遺物実測・拓影図 (2)

備註出

き込んだもの)の縄文が回転押圧され、口頭部には櫛描直線文(8本1条)が縦位に施されている。12・13は頸部片で、12は櫛描直線文、13は櫛描直線文や櫛描波状文が施されている。14~17は頸部から胴部にかけての破片で、14・16・17は撚糸文、15は付加条の縄文である。14は撚糸文を施した後、頸部と胴部との境に、結節縄文の結びめを横位に回転押圧している。17は頸部と胴部との境に、撚糸文を横位に回転押圧している。18は反捻りの縄文、19は撚糸文の回転圧痕である。20は範描きによる鋸歯状文が施されている。

第21図21は土製紡錘車の破片で、表面や側面に円形刺突文が施されており、裏面は削離している。現存長3.3cm、現存幅3.1cm、現存厚0.9cm、重量9.2gを測る。

第33号住居跡（第22図）

本跡は、調査区の北西部D街区を中心に確認された住居跡で、壁及び床の一部は、新しい溝によって擾乱を受けている。南東側4.2mほどには、第29号住居跡が存在している。

平面形は、長径6.73m、短径5.74mの橢円形を呈し、長径方向はN~50°~Wを指している。床面積は、約29.2m²である。壁は、北西及び南東側でほぼ垂直に立ち上がるほかは、外傾して立ち上がり斜まっている。壁高は15~30cmを測る。床面は擾乱の部分を除き、全体的に平坦で締まっている。炉の周囲が特に良く踏み固められている。炉は、住居跡のほぼ中央部に検出されており、長径1.2m、短径0.63mの不整規円形を呈し、皿状に20cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床は凸凹しており、レンガ状に良く焼けている。ピットは9か所検出され、東側壁下に検出されたP₉を除く、P₁~P₈の8か所が柱穴と考えられる。これらは、長径18~39cm、短径19~32cmの円形状を呈し、円筒状に46~59cm掘り込まれている。P₉は長径38cm、短径32cm、深さ17cmの規模を有し、他のピットに比べ掘り込みが浅い。本跡は検出された柱穴の配列の状況等から、拡張が行われたことが想定される。当初の柱穴としては、P₁~P₄の4か所が考えられ、後にP₁とP₄、P₂とP₃を結ぶ延長線上にP₅~P₈が掘り込まれたものと考えられる。

覆土は、上層にローム粒子を少量含む黒褐色土が、下層にはローム粒子やローム微ブロックを中心、焼土粒子を少量含む暗褐色土が、壁際にはローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土中から縄文式土器片1点、弥生式土器片524点、土師器1点（第71図3）、須恵器片2点、敲石2点、砥石1点、フレイク9点、礫9点が出土している。1は北壁下の覆土中・下層出土の土器片がそれぞれ接合したものであり、3は西側の覆土から出土している。覆土中から出土した鬼高期の甕（第71図3）は混入したものである。

出土遺物や住居跡の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物

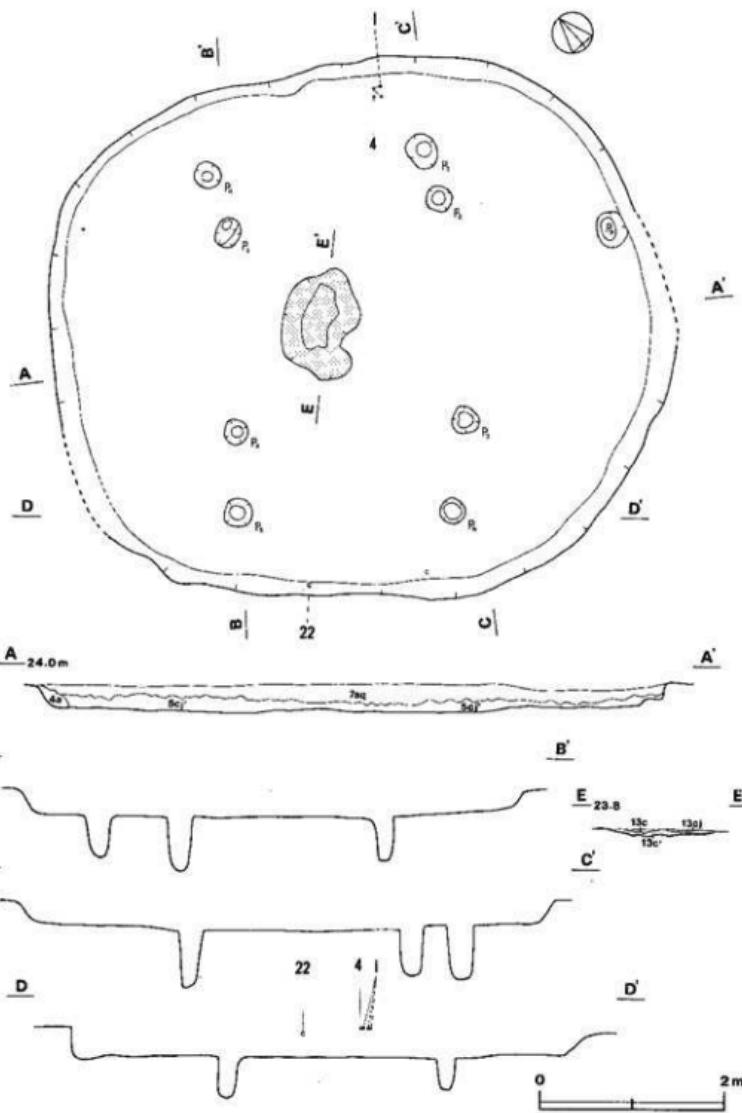
土器観察表

試験番号	器種	法従(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第23回 1	壺 弥生式土器	A(8.6) B(11.1) C---	肩上部は緩やかに内傾しながら、細く円筒形を呈する頸部へ移行する。口縁部は、緩やかに外反しながら開いて立ち上がり、口縈部には草筋L.Rの縄文が押印されている。口縈部から頸部にかけては、縦位の横描直線文（4本1条）によって3基位に区画され、区画内は縦位の範描波状文・横描波状文によって充填されている。腹部には、草筋L.Rの網織文が施されている。	内面横位のなで 口縈部横位のなで 頸部斜位のなで	砂粒 普通 赤黒色	完存率10%
2	壺 弥生式土器	A(17.2) B(12.2)	肩上部は内傾し、頸部から口縈部にかけて外反して立ち上がる。口縈部・口縈	内面横位のなで	砂粒 普通	完存率10%

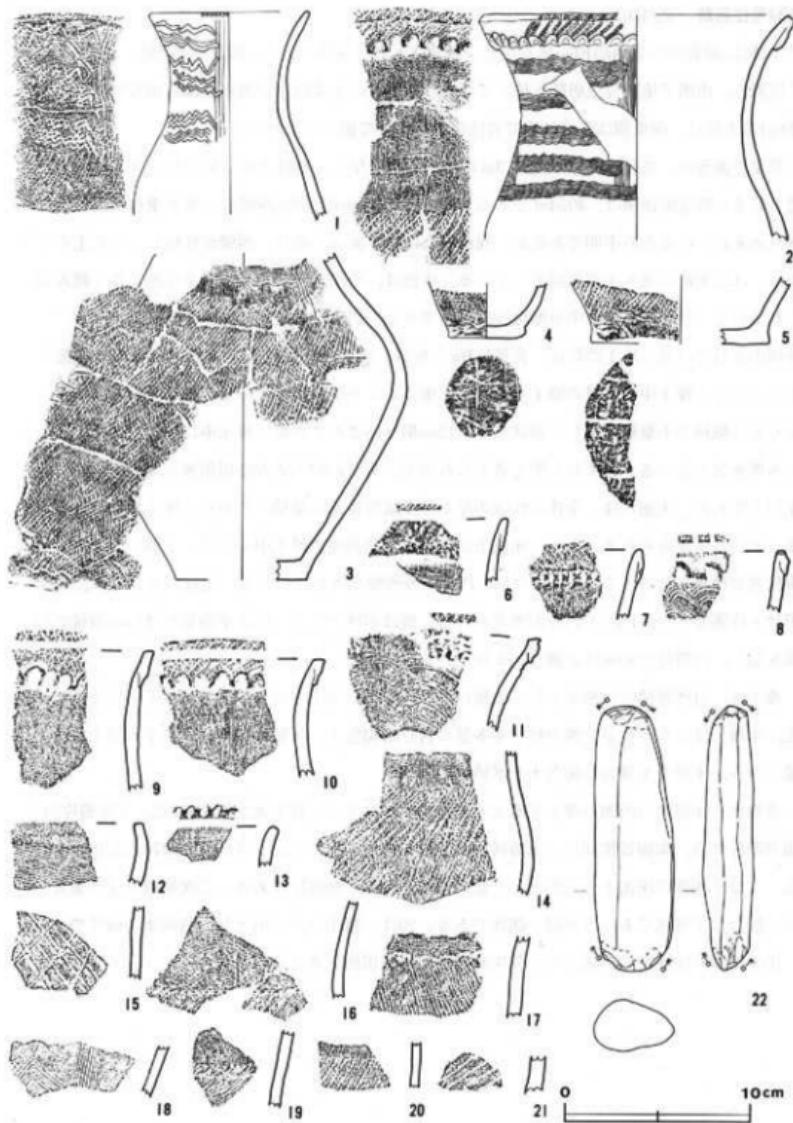
	C	部・頭部には付加条1種(単節L.Rの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文を施し、口縁部下端には丸棒状工具による刺突が施されている。頭部は、複数の櫛描直線文により3~4単位に区画され、区画内には、同じ工具による横位の櫛描波状文が施されている。	場灰色			
3	壺 弥生式土器	A—— B〔17.7〕 C. 7.0	平底で、胴部は外傾しながら立ち上がり、上半部で強く内傾し、頭部に移行する。頭部は、中位よりも上に最大径をもつ。頭部は、一部残存しているにすぎないが、複数の櫛描直線文(7本1条)によって3単位に区画されていたものと思われ、区画内には横位の櫛描波状文が施されている。胴部には、単節L.R(繩の測定部を無節の繩で替ったもの)の回転圧痕文が施されている。	内面横位のなで 尾などで	砂粒 普通 場灰色	完存率30%
4	壺 弥生式土器	A—— B〔3.0〕 C. 4.2	底部は平底で、外面に木葉痕が見られる。胴下端部には、単節L.Rの繩文がまばらに施されている。	胴部下端横位のな で	砂粒 普通 橙色	完存率5%
5	壺 弥生式土器	A—— B〔3.3〕 C. 9.8	底部は平底で、胴下端部から「い」の字状に聞く。胴下半部は外傾して立ち上がる。底面には木葉痕が見られ、胴下部には付加条1種(単節L.Rの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込み、繩の測定部を無節の繩で替ったもの)の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒 普通 にほい赤褐色	完存率5%

第23図6~21は、第33号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6~13は口縁部片で、6~11は折返し口縁である。6・7・9・10は口縁部に付加条の繩文を施し、口唇部には胴部と同じ原体を用いた回転圧痕文が見られる。いずれも、折返し下端に棒状工具による刺突を加えている。6は頭部に横位のなでが施され、10は頭部を構描直線文(8本1条)によって縦位区画し、区画内には、同じ工具による櫛描波状文を横位に施している。8は口唇部に棒状工具による押圧、折返し下端には刺突を加えている。頭部には櫛描波状文が横位に施されている。11は口縁部に、方向の異なる棒状工具による刺突を二段施し、頭部には弧状に連続する櫛描文(2本1条)を横位に数段施している。口唇部には、付加条の繩文の回転圧痕が見られる。12は口縁部を無文とし、頭部に櫛描波状文を横位に施している。13は口唇部に繩文原体を押しし、頭部に燃糸文を施している。14は頭部に櫛描文、胴部に付加条(単節L.Rの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の繩文を施している。15~18は頭部片で、15は鹿描きの格子文、18は鹿描きによる直線文や鋸歯状文が見られる。16は6の頭部から胴部にかけての破片と考えられる。17~21は燃糸文、19~20は付加条の繩文を施す胴部片である。17は頭部と胴部の境に、結び目の横位回転圧痕が見られる。19は付加条(単節L.Rの軸繩の条間に、Rの繩を1本巻き込んだもの)の繩に、無節Rの繩を結んだ原体の回転圧痕と思われる。

22は、両端に敲き痕の見られる敲石である。最大幅4.3cm、最大厚2.8cm、重量253.8gを測る。



第22図 第33号住居跡実測図



第23図 第33号住居跡出土遺物実測・拓影図

第34号住居跡（第24図）

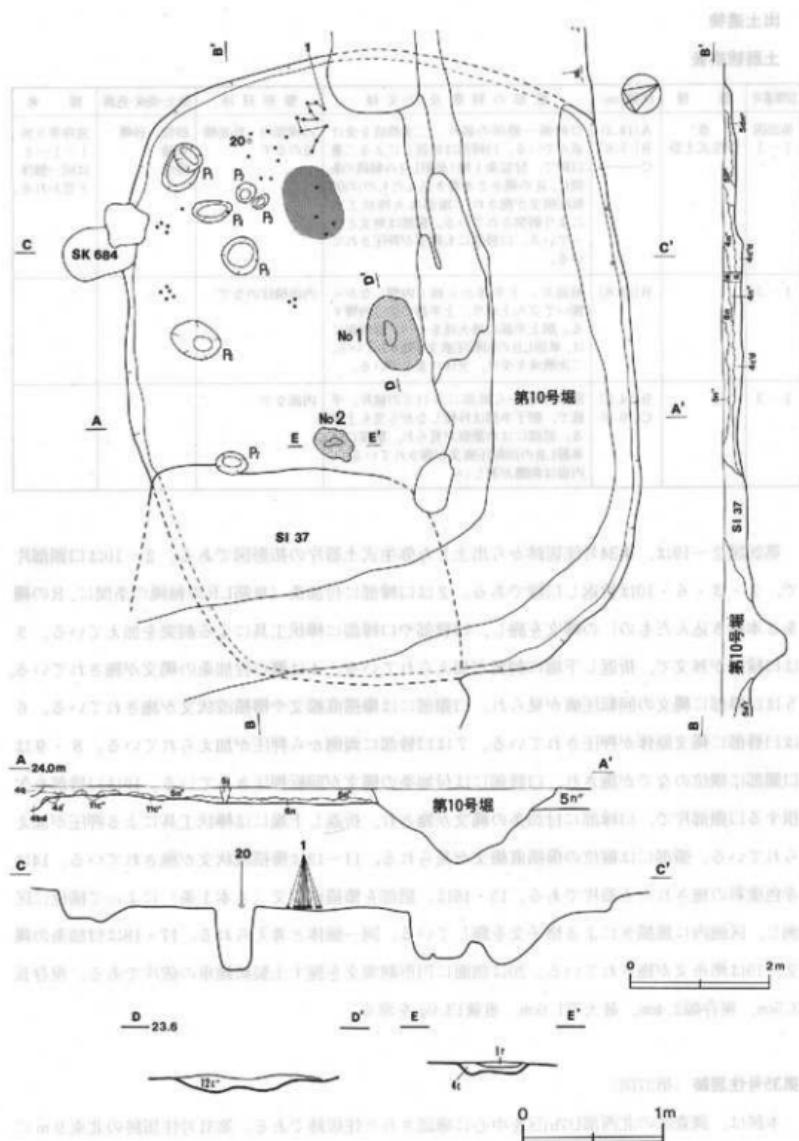
本跡は、調査区の北西部E6ns区を中心に確認された住居跡である。第29号住居跡の南西2mほどに位置し、南側で第38号住居跡と接している。住居跡の北東側及び南東側は第10号塗に、西側は第684号土坑に、南東側はさらに第37号住居跡によって掘り込まれている。

推定平面形は、長径8.8m、短径7.3mの橢円形状を呈し、長径方向はN-59°-Wを指すものと思われる。推定床面積は、約54m²である。壁は、北東側・南東側・西側の一部が重複造構によって掘り込まれているため不明であるが、残存壁高は18~30cmを測り、西壁が外傾して立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がり結まっている。床面は、やや凸凹状を呈し、全体的に良く踏み固められている。特に住居跡の中央部付近は堅緻である。炉は、推定プランの北西寄りの位置に2か所検出されている。No.1の炉は、長径1.1m、短径0.7mの橢円形を呈し、皿状に4~8cm掘り込まれている。覆土中に多量の焼土を含み、炉床はレンガ状に焼けている。No.2の炉は、No.1の炉よりも小規模で不整形を呈し、皿状に6~12cm掘り込まれている。覆土中には、少量の焼土粒子と木炭を含んでいる。いずれもがとを考えられるが、No.1の炉の方が使用頻度が高い。本跡は焼失家跡と思われ、床面には、全体に20cmの厚さで多量の焼土が堆積しており、床は熱を受け硬く締まっている所がみられる。また、床面上に堆積した北西側の焼土中からは、土器とともに多量の炭化米が検出されている。ピットはP1~P5の7か所検出されているが、上柱穴としては、規模や形状・位置などからP3の1か所が考えられる。他は不明である。P3は平面形が径54cm前後の円形状を呈し、円筒状に90cmほど掘り込まれている。

覆土は、自然堆積の状態を示し、上層にローム粒子や焼土ブロック・焼土粒子を含む極暗褐色土、中層にはローム粒子や焼土粒子を多量に含む暗褐色土、下層にはローム粒子や焼土粒子を多量に含み、木炭を少量含む褐色土が堆積している。

遺物は、住居跡の西側の覆土上下層から繩文式土器片2点、弥生式土器片352点、土師器片54点、須恵器片2点、陶磁器片26点、土製紡錘車1点、石核1点、フレーク13点、礫70点が出土している。1は、西側の床面上から出土した壺の頸部・胴部・底部片である。二次焼成を受け歪んでおり、接合は不可能であったが同一個体である。20は、覆土中から出土した紡錘車の破片である。

出土遺物や住居跡の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第24図 第34号住居跡実測図

（註記）柱根の跡は柱の位置を示す。柱の直径は柱の断面積を計算して求めた。柱の高さは、柱の底面と柱の上部の位置を測定して求めた。

出土遺物

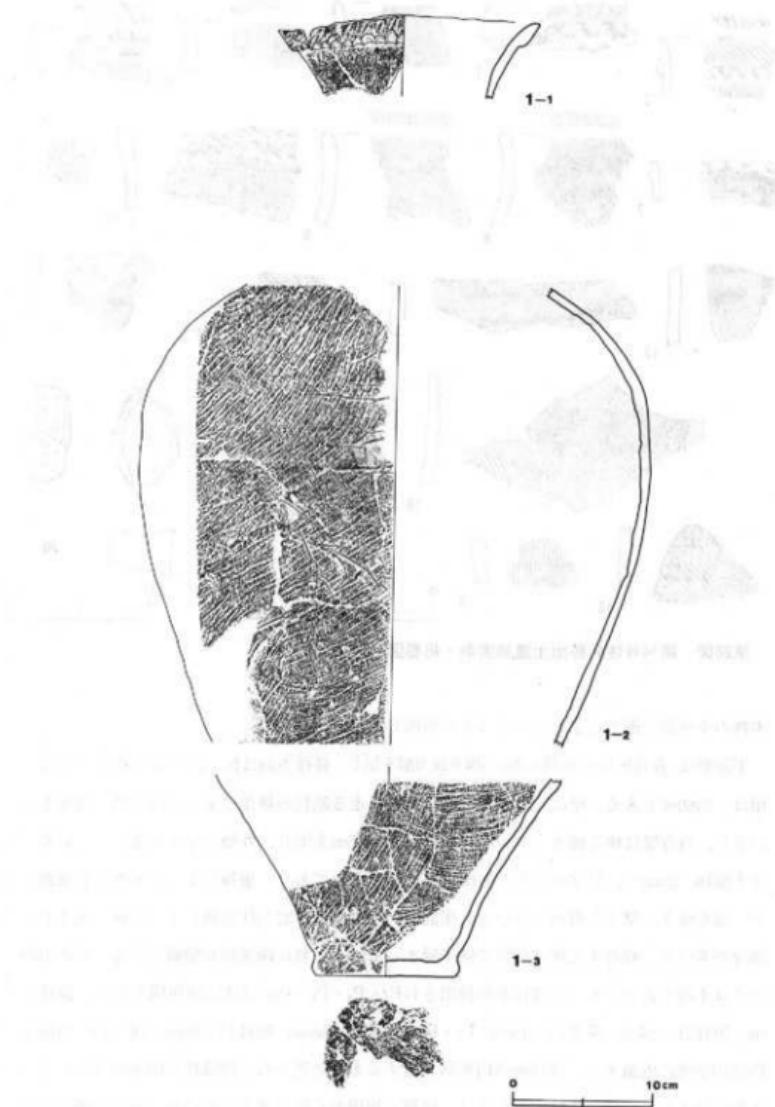
土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	焼形技法	胎土・焼成・色調	備考
第25図 1-1	盃 弥生式土器	A(19.2) B(5.8) C---	口縁部～頸部の破片。二次焼成を受け重んでいる。口縁部は折返しによる二重口縁で、付加条1種(単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施され、下端部は丸棒状工具により刺突されている。頸部は無文となっている。口縫部にも繩文が押圧されている。	口縁部内・外面横位のなで	砂粒・砂塊 普通 橙色	完存率5% 1-1～3 は同一個体 と思われる。
1-2		B(32.8)	頸部片。下半部から緩く内脣しながら開いて立ち上がり、上半部で強く内脣する。頭上半部に最大径をもつ。器表面には、単節LRの回転圧痕文が施されている。二次焼成を受け、全体に重んでいる。	内面横位のなで		
1-3		B(14.3) C(10.0)	頭下半部から底部にかけての破片。平底で、頭下半部は外傾しながら立ち上がる。底部には木葉痕が見られ、側部には単節LRの回転圧痕文が施されている。内面は剥離が著しい。	内面なで		

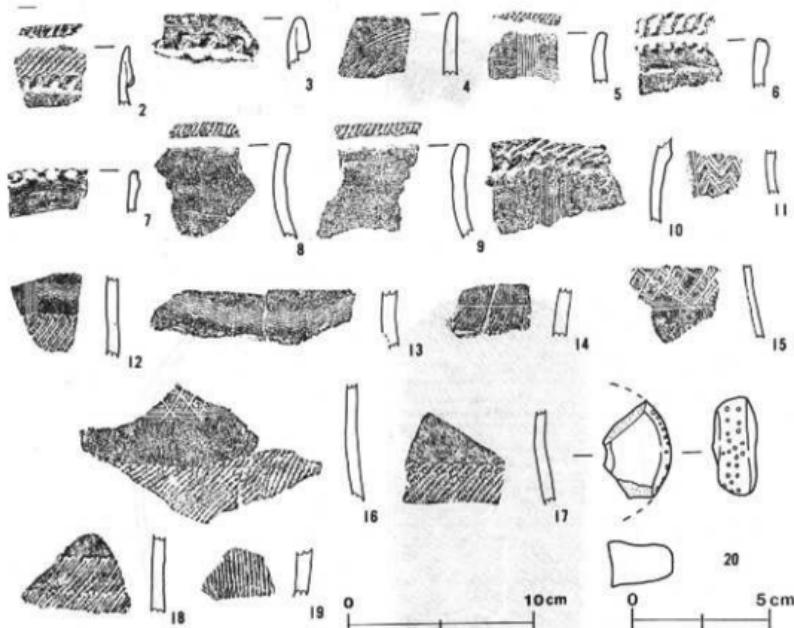
第26図 2～19は、第34号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2～10は口縫部片で、2・3・6・10は折返し口縫である。2は口縫部に付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の繩文を施し、口唇部や口縫部に棒状工具による刺突を加えている。3は口縫部が無文で、折返し下端に刺突が加えられている。4は細い付加条の繩文が施されている。5は口縫部に繩文の回転圧痕が見られ、口頭部には櫛描直線文や櫛描波状文が施されている。6は口唇部に繩文原体が押圧されている。7は口縫部に両側から押圧が加えられている。8・9は口頭部に横位のなでが施され、口唇部には付加条の繩文が回転押圧されている。10は口唇部を欠損する口頭部片で、口縫部に付加条の繩文が施され、折返し下端には棒状工具による押圧が加えられている。頭部には横位の櫛描直線文が見られる。11～13は櫛描波状文が施されている。14は赤色塗彩の施された土器片である。15・16は、頭部を櫛描直線文（4本1条）によって横位に区画し、区画内に竪書きによる格子文を施している。同一個体と考えられる。17・18は付加条の繩文、19は燃糸文が施されている。20は側面に円形刺突文を施す土製紡錘車の破片である。現存長3.5cm、現存幅2.4cm、最大厚1.6cm、重量13.0gを測る。

第35号住居跡（第27図）

本跡は、調査区の北西隅D7b1区を中心に確認された住居跡である。第31号住居跡の北東9mに位置し、北東側1.2mには第1号堀が隣接している。当初は、確認状況や掘り込み状況等から、大規模な二段掘り込みの住居跡を想定し調査を進めたが、調査の過程で、第32号住居跡と重複し



第25図 第34号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1)



第26図 第34号住居跡出土遺物実測・拓影図 (2)

本跡の中央部が掘り込まれていることが判明した。

平面形は、長径9.5m、短径8.2mの隅丸長方形を呈し、長径方向はN-50°-Wを指している。床面積は、約60m²である。壁は、北西から南東方向に走る畝状の耕作によって部分的に擾乱を受けているが、残存壁は硬く締まっている。壁高は30-47cmを測り、外傾して立ち上がっている。壁溝は上幅16-20cmで、U字状に5-8cmほど掘り込まれており、重複によって不明な北東側や東側の一部を除き、壁下を周回している。床面は、中央部が第32号住居跡によって掘り込まれ不明な部分が多いが、残存する床は平坦で硬く締まっている。特に南東側が堅緻である。炉の有無については不明である。ピットは10か所検出されP₁・P₂・P₆-P₁₀はほぼ同規模を有し、長径22-32cm、短径21-24cm、深さ15-48cm、P₃・P₄は長径52-58cm、短径45-50cm、深さ13-31cmを測る。P₅は10か所の内最大で、径75cmの円形状を呈するものと思われ、円筒状に64cmの深さにしっかりと掘り込まれている。主柱穴としては、位置や規模からP₈が考えられるが、他は不明である。

覆土は、各壁際から褐色土・暗褐色土が流入し、自然堆積の状態を示している。覆土中には少量のローム粒子やハードロームブロックを含み、上層には極少量の炭化物や焼土粒子が含まれて

いる。

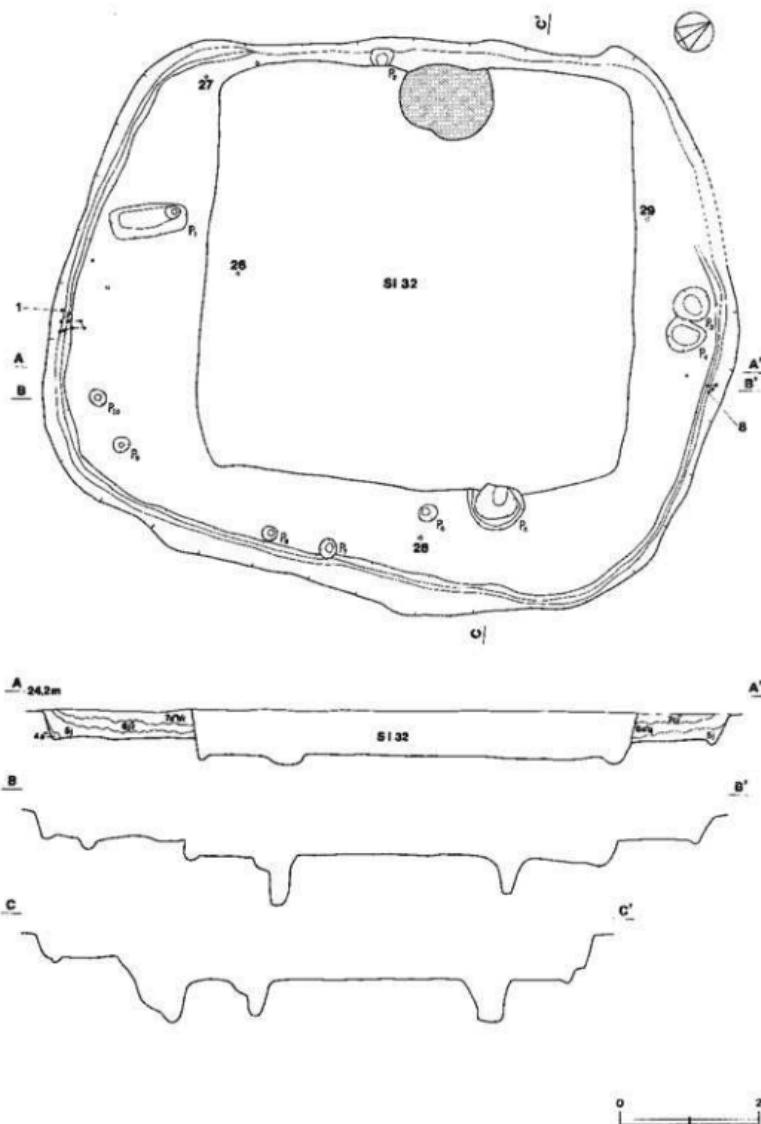
遺物は、弥生式土器片452点、凹石1点、石斧1点、土製錘車2点、磨石1点が出土している。凹石(27)や土製錘車(28・29)は床面直上から、壺形土器(1)は西壁下の床面から出土しており、また、P₃の覆土中からは、石核や弥生式土器片が出土している。なお、弥生式土器片の出土数については、本跡の中央部を掘り込む第32号住居跡内から出土した弥生式土器片も含んでいる。

出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

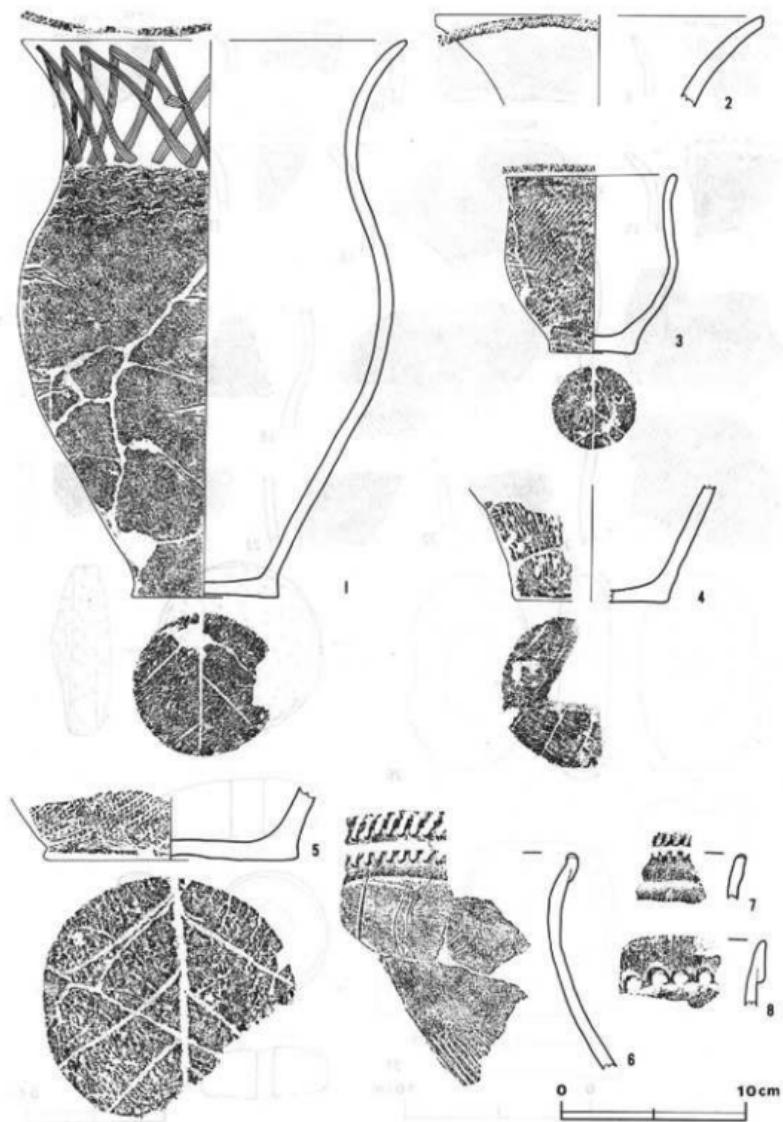
出土遺物

土器観察表

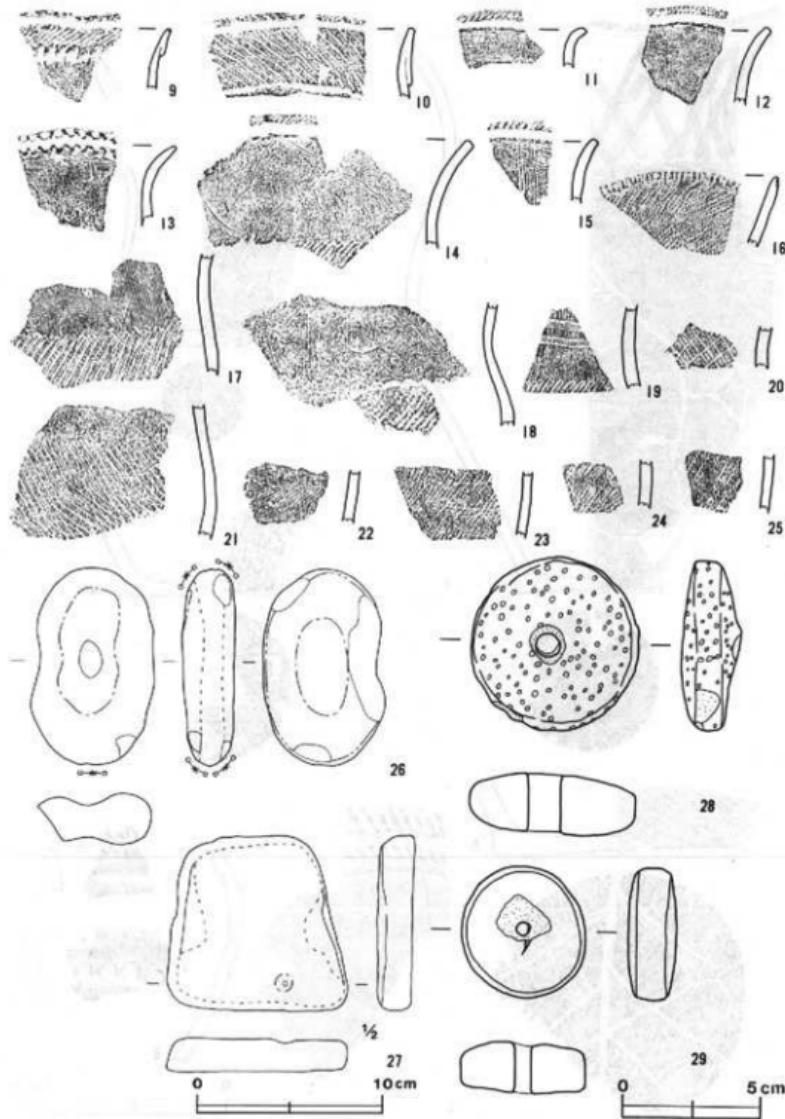
遺物番号	器種	法域(cm)	器形の特徴及び文様	整形成法	胎土・焼成・色調	備考
第28号 1	壺 弥生式土器	A(20.8) B 30.3 C 8.0	底部は、中央部がわずかに盛む平底で、外側に木葉痕が見られる。胴部は中央より最も上に最大径をもち、内脣しながら立ち上がる。頭部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。口径が胴部最大径より大きい。胴部には、燃条(輪轉に細いLの繩を1本巻きつけたもの)の回転圧痕文が施され、頭部には単節LRの繩をゆるめに結び(結束第2種)、その結び目を横位に4段に向転押すしている。口縁部には、櫛刺による斜格子文が施されている。	内面なで	砂粒・砂礫 普通 にぶい橙色	完存率80%
2	壺 弥生式土器	A(17.8) B(4.9) C ——	口縁部は外反して立ち上がり。口唇部はやや内傾する。口唇部には、櫛文原体が向転押すされている。口縁部は無文である。	内面横位のなで 口縫部上端横なで 以下なで	砂粒 普通 褐灰色	完存率5%
3	小形壺 弥生式土器	A 9.2 B 9.8 C 4.5	底部は、中央部がわずかに盛む平底で、外側に木葉痕が見られる。胴部は中央部に最大径をもち、内脣して立ち上がる。口唇部には、わずかに外傾して立ち上がる。口唇部には櫛文原体を押す。口唇部は無文で、胴部には単節LRの回転圧痕文が施されている。	口近部横位のなで 内面なで	砂粒・砂礫 普通 褐灰色	完存率10%
4	壺 弥生式土器	A —— B(6.3) C 8.2	底部は平底で、外側に木葉痕が見られる。胴部は外反して立ち上がり。燃条(輪轉に細い無節LRの繩を巻いたもの)の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	完存率10%
5	甕 弥生式土器	A —— B(3.4) C 13.8	底部は、中央部がわずかに盛む平底で、外側に木葉痕が見られる。底部は、胴下半部から「ハ」の字状に開いている。胴下半部は外傾して立ち上がり。付加条1種(単節LRの輪轉の渠間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施されている。	内面なで	砂粒・砂礫 普通 にぶい橙色	完存率5%



第27図 第35号住居跡実測図



第28图 第35号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1) 漢酒 - 鹿家河岸土山縣河口村北岸 - 鹿家河



第29図 第35号住居跡出土遺物実測・拓影図 (2) (伊丹市立木津川考古学研究会編著『近畿古跡』)

第28・29図は、第35号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。第28図6～8は折返し口縁で、6・7は口唇部に縄文原体を押圧し、口縁部や頸部をなで調整している。6の胴部には無節Rの撚糸文が施されている。8は折返し下端に棒状工具による押圧が加えられている。

第29図9・10は折返し口縁で、口縁部や口唇部に撚糸文が施されている。9は折返し下端に棒状工具による押圧が加えられ、10は頸部に櫛描波状文が見られる。11～14は口頸部が無文で、11・12・14は口唇部に縄文が施されている。13は口唇部に棒状工具による押圧が加えられている。15は口唇部に撚糸文と思われる縄文の回転圧痕が見られ、口頸部には縱位の櫛描直線文や櫛描波状文が施されている。16は口唇部に棒状工具による刺突が見られ、口頸部には付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を1本巻き込んだもの）の縄文をまばらに施している。17～19・21・22は頸部から胴部にかけての破片で、20は頸部片、23～25は胴部片である。17・18は頸部を櫛描直線文によって縱位に区画し、区画内に同じ工具による横位の櫛描波状文を施している。19は頸部に横位の櫛描直線文を施す。17～19は、いずれも胴部に付加条の縄文が見られる。18は二次焼成を受け、表面がガラス化し、変形している。20は鉗描による格子文が施されている。21は胴部に無節Rの撚糸文、22は縄の先端を無節の縄で結束した付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を1本巻き込んだもの）の縄文を施している。23も同様の縄の回転圧痕である。24は付加条の縄文、25は撚糸文を施す胴部片である。

26は磨石である。表裏両面に磨り痕が認められ、中央部に凹みをもつ。側面両端には敲き痕が認められ、磨石と敲石の機能を兼ねて使用されたものと考えられる。最大長10.7cm、最大幅6.7cm、最大厚2.8cm、重量261.9gを測る。石質は砂岩である。27は床面から出土した、平面形が隅丸の台形状を呈する凹石である。表面には無数の敲き痕、1か所に逆円錐形の凹み（径2cm）が認められる。台石として使用されたものと思われる。最大長19.4cm、最大幅19.1cm、最大厚3.7cm、重量2.270gを測る。石質は緑泥片岩である。

28・29は土製紡錘車である。28は表裏面、側面に円形刺突文が施され、中央部に一方向から径4～6mmの孔が穿たれている。直径約6.1cmの円形を呈し、最大厚2.2cm、重量71.2gを測る。29は無文で中央部に一方向から径4～6mmの孔が穿たれている。ややいびつで、側面には棒状工具による削り痕が認められる。径4.5～4.7cmのややいびつな円形を呈し、最大厚1.8cm、重量40.8gを測る。28・29はいずれも床面から出土したものである。

第37号住居跡（第30図）

本跡は、調査区の北西部E6b7区を中心に確認された住居跡である。第28号住居跡の北西0.5mに位置し、中央部は第10号堀によって掘り込まれている。また、北西側で第34号住居跡と重複しており、本跡が第34号住居跡の床を掘り込んでいる。

平面形は、長軸6.0m、短軸5.0m前後の隅丸長方形状を呈する住居跡と推定され、長軸方向はN-55°-Wを指すものと思われる。推定床面積は、約23.5m²である。壁は、北側及び南側の壁の一部が第10号堀によって切られているため不明で、北及び西側は第34号住居跡と重複しているため遺存状態が悪い。東側の壁は良好に遺存している。残存壁高は、南東側で30~42cm、北東側及び南西側で30cmを測り、いずれもほぼ垂直に立ち上がり縮まっている。北西壁は、壁高5~10cmを測り、なだらかな立ち上がりを示しているが、第34号住居跡と重複しており、不明瞭である。床面は全体的に平坦で縮まっているが、炉の有無については、中央部が第10号堀によって掘り込まれているため不明である。ピットは6か所検出されているが、主柱穴として明確にとらえられたのはP₁・P₅の2か所だけであるが、P₄・P₆もその位置や規模から、柱穴の可能性も考えられる。P₁は長径55cm、短径33cmの楕円形状を呈し、深さ50cmを測る。P₅は長径50cm、短径30cmの楕円形状を呈し、深さ36cmを測る。P₄・P₆は径35cm前後の円形状を呈し、深さ25~40cmを測る。

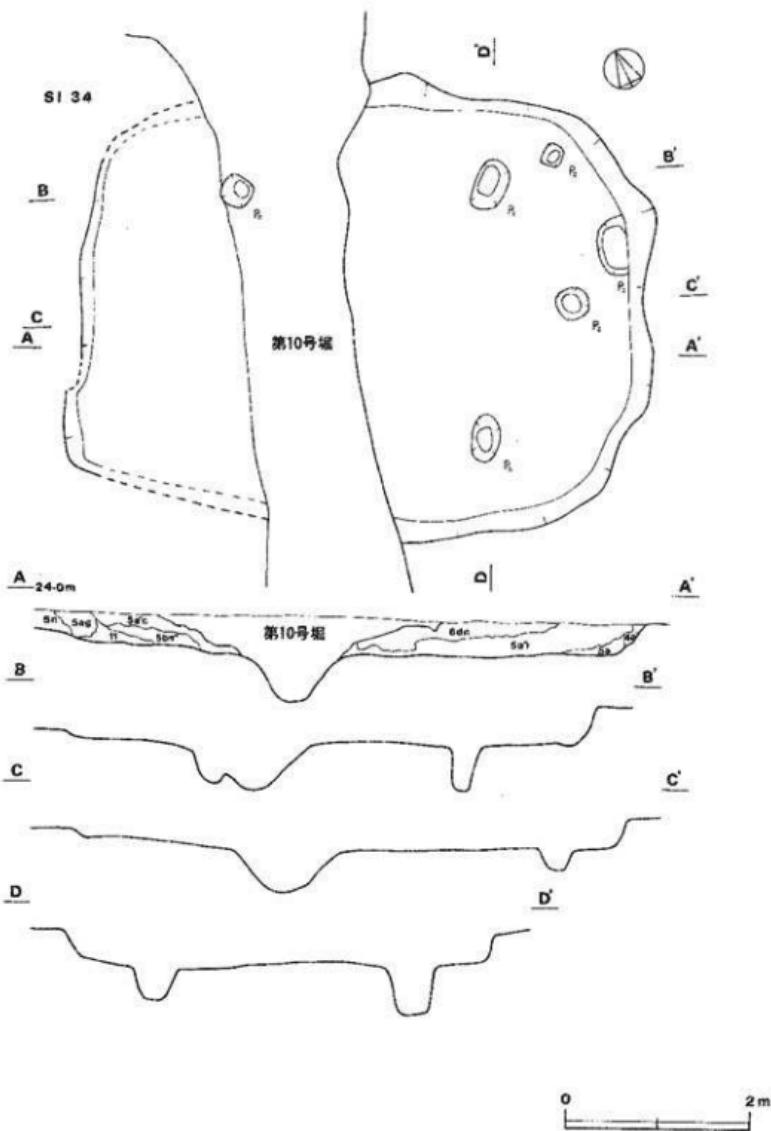
覆土は、上層にローム粒子やロームブロック・焼土粒子・粒土ブロックを含む暗褐色土、下層には多量のローム粒子や木炭・焼土粒子を含む暗褐色土、壁際にはローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。覆土は、全体的に縮まりを帯びている。覆土下層に多量の木炭や焼土粒子が含まれている状況から、焼失家屋と考えられる。

遺物は、覆土中から縄文式土器片5点、弥生式土器片115点、土師器片1点、須恵器片1点、土師質土器片12点、陶磁器片5点が出上している。

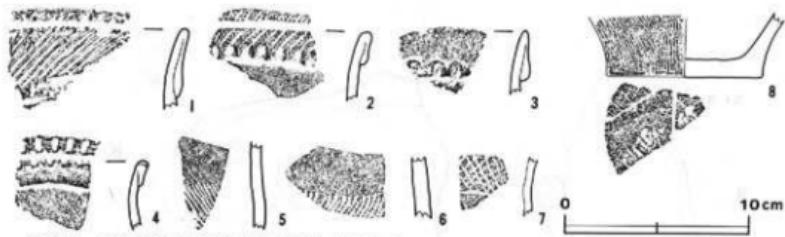
本跡は、重複の状況から、第34号住居跡よりも新しい弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物

第31図1~8は、第37号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1~4は折返し口縁を有する口脛部片で、1・2は口脛部や口縁部に付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の縄文を施し、折返し下端に棒状工具による押圧を加えている。3・4は口縁部が無文で、3は折返し下端に棒状工具による押圧、4は口脛部に縄文原体による押圧が加えられている。5は頭部に無節Rの撚糸文、6は付加条（単節LRの軸縄の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの）の縄文を施す。7は頭部に施すによる格子文が施されている。8は壺形土器の底部片と思われる。底部は平底で、外面に木葉痕が見られる。胴下半部には無節Rの撚糸文が施されている。現存高3.2cm、底径8.4cmを測る。



第30図 第37号住居跡実測図



第31図 第37号住居跡出土遺物実測・拓影図

第40号住居跡（第32図）

本跡は、調査区の北西部E6az区を中心に確認された住居である。第34号住居跡の西側6.5mに位置し、北東側3.2mには第10号塚が北西から南東方向に走っている。

平面形は、北西壁の一部が擾乱を受けており、また、南西壁の遺存状態が悪いため明確ではないが、長軸9m、短軸6m前後の隅丸長方形を呈する住居跡と推定され、長軸方向はN-62°-Wを指すものと思われる。推定床面積は、約48.5m²である。壁は北東側及び南東側が比較的遺存状態が良好で、壁高20~28cmを測り、外傾して立ち上がりを有している。南西側は壁高2cm前後と極めて遺存状態が悪く、立ち上がりは不明瞭である。残存壁は比較的縦まりを帯びている。床面はほぼ平坦で、炉の周囲が部分的に踏み固められているが、全体的に軟弱である。住居跡の北西側の床面は全体的に焼けしており、焼土の堆積が認められる。炉は、住居跡のやや北西寄りに位置している。平面形は不整形を呈し、床面を皿状に10cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床は凸凹を呈し、レンガ状に良く焼けている。炉を中心として、その周囲には、長径1.2m、短径0.9mの橢円形状の範囲内に焼土が分布している。ピットはP₁~P₆の8か所検出されているが、規模や配列からP₁~P₄が主柱穴と思われる。P₁は長径40cm、短径36cm、深さ52cm。P₂は長径58cm、短径56cm、深さ48cm。P₃は径55cm、深さ25cm。P₄は長径47cm、短径43cm、深さ55cmの規模を有している。

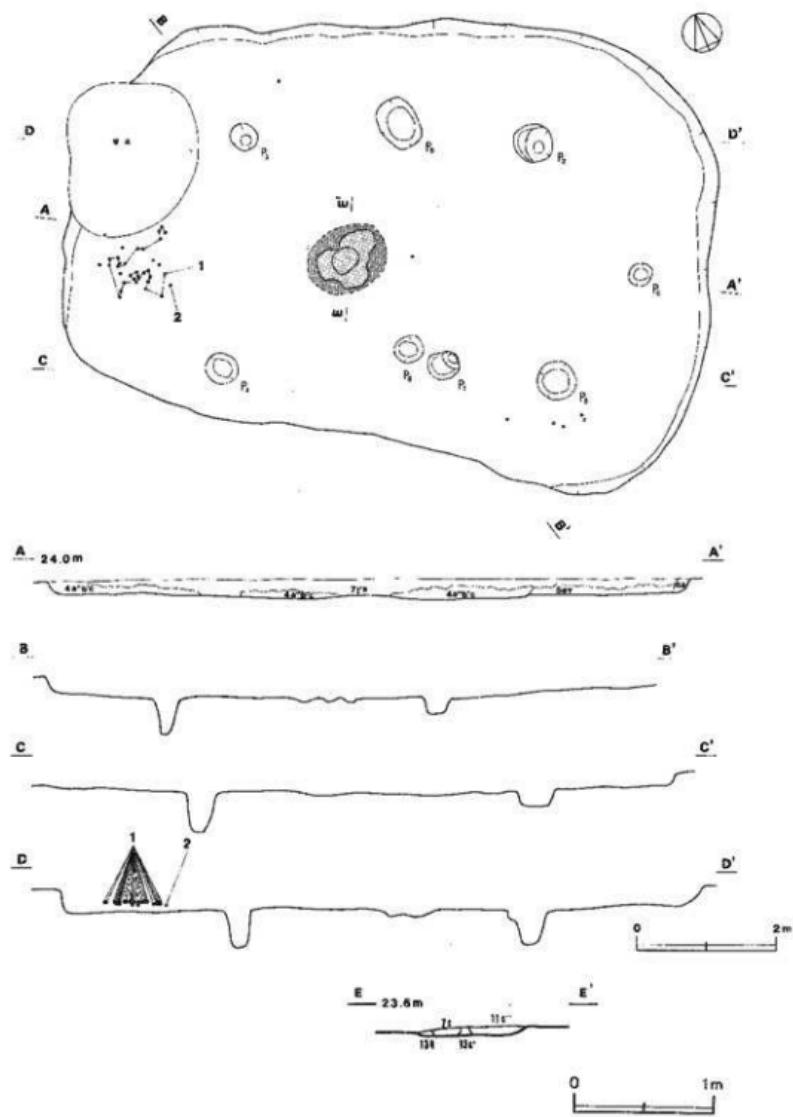
覆土は、上層にローム粒子やハードローム小ブロックを中量含む黒褐色土が、下層にはローム粒子を多量、ハードローム小ブロックを中量含む褐色土が、壁際にはローム粒子を少量含む褐色土や暗褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体的に少量の焼土粒子や炭化物が含まれている。

遺物は、住居跡の西側から集中して検出されており、弥生式土器片325点、土師器片38点、須恵器片1点、陶磁器片2点、土製紡錘車1点(23)が出土している。1~2は西壁下の覆土下層から出土している。

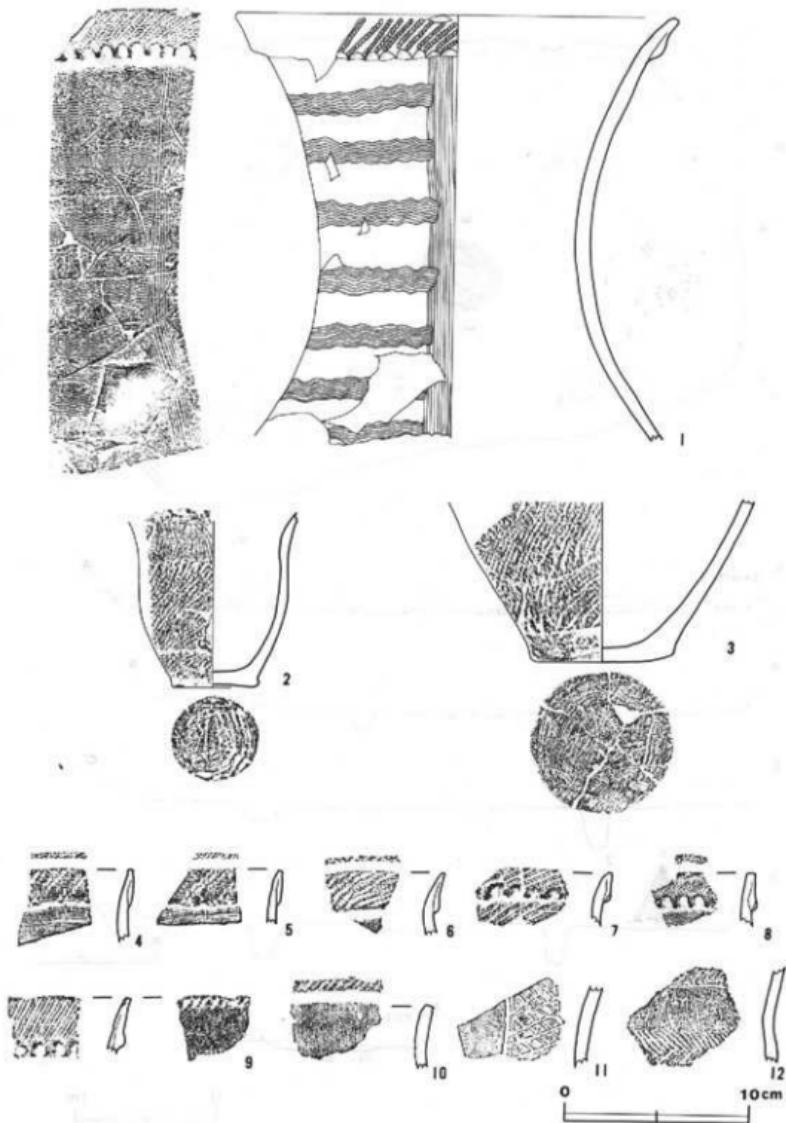
出土遺物や住居跡の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物

奈良実業高等専門学校

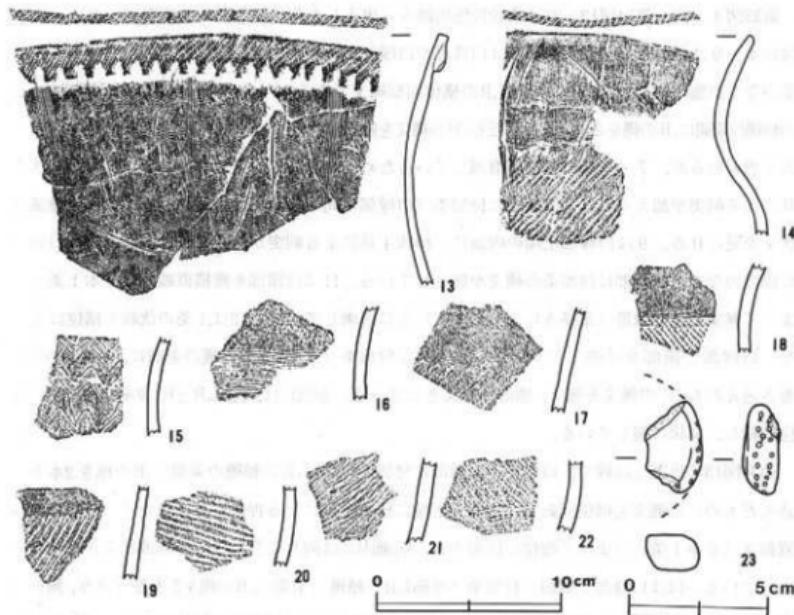


第32図 第40号住居跡実測図



第33図 第40号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1)

近畿家財陶器研究会編 第33回



第34図 第40号住居跡出土遺物実測・拓影図 (2)

土器観察表

開版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第33図 1	壹 弥生式土器	A 24.0 B(22.9) C ——	口縁部は二重口縁で、頭部から大きく外反しながら立ち上がる。口唇部はなで整形されている。口縁部には付加条1種(単節LRの軸縄の条間にRの縄を2本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施され、下端部は棒状工具により削突されている。頭部は輜重位の輪描直線文によって3単位に区画され、区内には同じ工具(8本1束)による輪描波状文(7段まで観察できる)が横位に施されている。	内面横位の丸なで	砂粒 変色 普通 明赤褐色	完存率40%
2	小形壹 弥生式土器	A —— B(19.1) C 4.7	底部は中央部がわずかに盛る平底で、外面上には斂状工具により記号状の文様(馬)が描かれている。頭部は内脣しながら立ち上がり、頭部は外反する。頭部には付加条1種(単節LRの軸縄の条間にRの縄を1本巻き込んだもの)の回転圧痕文が施され、頭部は無文となっている。	頭部輜重のなで 内面なで	砂粒 普通 灰褐色	完存率30%
3	壹 弥生式土器	A —— B(8.7) C 7.7	底部は平底で、網代痕が見られる。胴下部は外傾して立ち上がり。付加条1種の回転圧痕文が施されている。	底部外面及び内面 なで	砂粒 普通 橙色	完存率 5 %

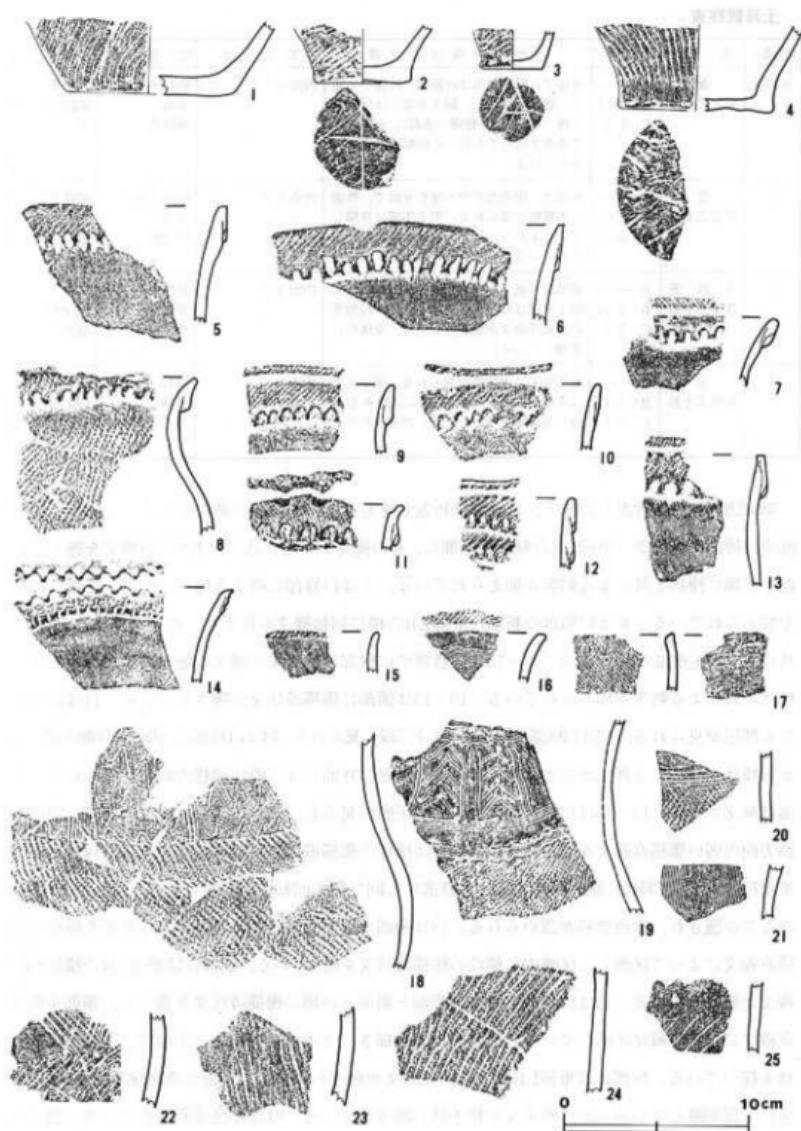
第33図4～12、第34図13～22は第40号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。第33図の4～9は折返し口縁で、4・5は口唇部や口縁部に付加条の繩文を施している。頸部には横位のなでが施されている。6は単節LRの横位回転繩文である。7～9は口縁部に付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の繩文を施し、口唇部にも同様の繩文が施されていたものと思われるが、7・9は口唇部が磨滅しているため不明である。7～9は折返し下端に棒状工具による刺突が加えられ、7は頸部に付加条(口縁部と同様の原体)の繩文、8は横位の櫛描波状文が見られる。9は口縁部上端の内面に、棒状工具による刺突が加えられている。10は口頸部に横位のなで、口唇部に付加条の繩文が施されている。11は口頸部を櫛描直線文(2本1条)によって無文帯と文様帯(籠描きによる格子文)とに区画している。12は1条の沈線を横位に巡らし、口縁部と頸部を区画している。口縁部には付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の繩文を施し、頸部は無文としている。胴部には、単節LRとRLの繩文を交互に横位回転し、羽状に施している。

第34図13は折返し口縁で、口唇部や口縁部に付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の繩文を横位回転し、折返し下端に棒状工具による押圧を加えている。頸部は櫛描直線文(6本1条)によって縦位に区画され、区画内には同じ工具による櫛描波状文が横位に施されている。14は口唇部や胴部に付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込み、無節の繩で結束したものか)の繩文を施している。口頸部は無文で、口縁部には横位のなで、頸部には縦位のなでが施されている。15は櫛描波状文(6本1条)、16は櫛描直線文を施す頸部片である。17は付加条(単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの)の繩文、18は無節の繩を結束した単節RLの繩の横位回転圧痕である。19・20・22は付加条の繩文、21は無節のLの燃糸文を施す胴部片である。19は単節RLの軸繩の条間に、Lの繩を2本巻き込んだ付加条の繩の回転圧痕である。

23は側面に円形刺突文の施された土製紡錘車の破片である。現存長3.2cm、現存幅2.0cm、現存厚1.3cm、重量8.1gを測る。

2 遺構外出土遺物

(1) 土器(第35図)



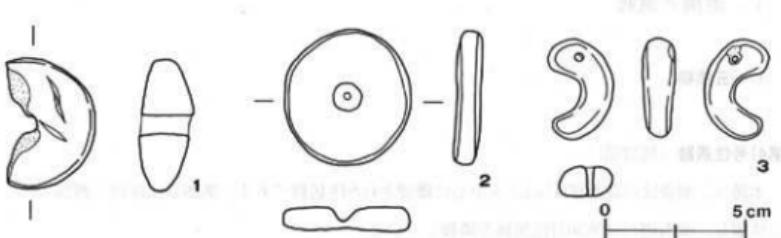
第35図 遺構外出土遺物実測・拓影図 (1)

土器観察表

剖面番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形成法	胎土・焼成・色調	備考
第35図 1	壺 弥生式土器	A—— B〔3.7〕 C 9.2	平底で、胴下半部は直線的に外傾して開く。底部は磨滅し、胴下半部には付加条1種（單節LRの軸繩の条間に、Rの繩を2本巻き込んだもの）の回転圧痕文が施されている。	内面などで	砂粒・霧母 普通 褐灰色	完存率5% 第10分呪土
2	壺 弥生式土器	A—— B〔3.0〕 C 5.7	底部は、中央部がやや陥る平底で、外面に木葉痕が見られる。胴下半部は外傾して立ち上がり、付加条の回転圧痕文が施されている。	内面などで	砂粒・砂礫 普通 灰褐色	完存率5% SI32覆土中 混入
3	小形壺 弥生式土器	A—— B〔2.1〕 C 3.5	底部は平底で、外面に木葉痕が見られる。胴下半部は外傾して立ち上がり、付加条の回転圧痕文が施されている。全体的に磨滅している。	内面などで	砂粒 普通 淡黄褐色	完存率5% SI32覆土中 混入
4	壺 弥生式土器	A—— B〔4.4〕 C〔8.4〕	底部外面に木葉痕が見られる。胴下半部は直線的に開く。胴下半部には燃糸文（軸繩にRの繩を巻いたもの）が施されている。	内面などで	砂粒 普通 にぶい褐色	完存率5% D61:IV

第35図5～14は折返し口縁で、15～17は折返しをもたない口頭部の破片である。5・6は口唇部や口縁部に付加条（単節LRの軸繩の条間に、Rの繩を1本巻き込んだもの）の繩文を施し、折返し下端に棒状工具による刺突が加えられている。7は口唇部に繩文を施し、折返し下端に刺突が加えられている。8は口頭部や胸部に単節LRの横位回転繩文が施され、折返し下端に棒状工具による押正が加えられている。9～13は口唇部や口縁部に付加条の繩文が施され、折返し下端に棒状工具による刺突が加えられている。10・13は頭部に櫛描波状文が施されている。11は口唇部にも押正が見られる。12は口縁部の折返しが上下2段に見られる。14は口唇部に、内側と外側の両方向から棒状工具による押正が加えられ、口縁部の折返し外面には二段に同様の刺突が見られる。頭部は無文である。15・16は口唇部に繩文の回転圧痕が見られ、15は口縁部に横位のなで、頭部に斜方向の弱い櫛描直線文が施されている。16は横位の櫛描波状文が見られる。17は口縁部に細い単節RLの繩文が羽状に施されている。口唇部にも同じ繩の回転圧痕が見られる。内面には横位のなでが施され、赤色塗彩が認められる。18は頭部から胸部にかけての破片で、頭部を縱位の櫛描直線文によって区画し、区画内に横位の櫛描波状文を施している。胸部には単節LRの横位回転繩文が施されている。19は口縁部と頭部、頭部と胸部との境に櫛描波状文を巡らし、頭部を櫛描直線文によって縦位区画している。区画内には櫛描き（2本1条）による山形状、矢羽根状の文様を描いている。胸部には単節LRの横位回転繩文が施されている。外面は赤色塗彩され、内・外面は一部剥離している。20は燃糸文が格子状に施されている。21は赤色塗彩されている。22は頭部に櫛描き（6本1条）による鋸歯状文、胸部に反燃と思われる繩文が施されている。23は燃糸の弱い無節Rの繩を2本軸に巻きつけた燃糸の回転圧痕文である。24は付加条（単節LRの軸繩

の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの)の縄文で、付加した縄の末端の圧痕が見られる。25は付加条の縄文である。付加した縄の回転圧痕の間に、わずかに軸縄の圧痕が認められる。



第36図 遺構外出土遺物実測図 (2)

(2) 土製品 (第36図)

1は、第48号溝の覆土から出土した土製紡錘車の破片である。約3分の1が欠損しており、現存長4.7cm、現存幅3.2cm、現存厚1.8cm、重量25.4gを測る。2は、G9bs区から出土した土製円板で、中央部に直径1cm、深さ0.5cmのU状を呈する凹みが見られる。直径約4.5cmの円形状を呈し、最大厚0.9cm、重量23.2gを測る。

(3) 石製品 (第36図)

3は、第432号土坑の覆土から出土した勾玉である。C字形に彎曲し、頭に径0.2~0.4mmの孔が穿たれている。最大長3.6cm、最大幅2.4cm、厚さ1.1cm、重量10.7gを測る。石質はメノウである。

第4節 古墳時代

1 遺構と遺物

(1) 五領期

第41号住居跡（第37図）

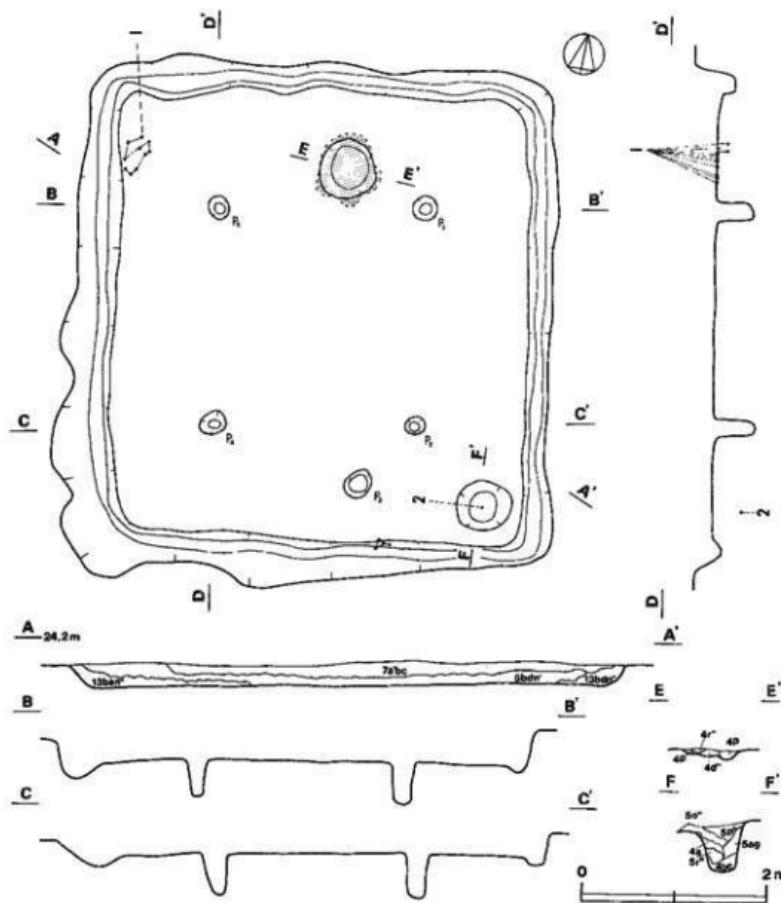
本跡は、調査区の北西部D5a₁区を中心に確認された住居跡である。第39号住居跡の西26mほどに位置し、南西側には第36号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸5.6m、短軸5.15mの方形を呈する住居跡で、長軸方向はN-11°-Wを指している。床面積は、約21.3m²である。壁は西側でなだらかな立ち上がりを示しているが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体的に良く締まっている。壁高は、20~40cmを測る。壁溝は、壁下を全周している。上部20~43cmを測り、U字状に8~10cmの深さに掘り込まれている。床面はやや凸凹状を呈しており、貯蔵穴が検出された南東コーナー部周辺や、南東側の壁下がわずかに高くなっている。全体的に締まっているが、特に、炉の西側の中央部付近が良く踏み固められており、堅板である。炉は北西寄りに位置し、長径60cm、短径55cmの不整円形を呈し、床面を皿状に8cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉の覆土中には、焼土粒子・炭化物を多量に含むに赤褐色土が堆積している。炉床は、レンガ状に良く焼けている。ピットは5か所検出されているが、上柱穴としては、配列や規模からP₁・P₂・P₄・P₅の4か所が考えられる。P₅は位置や床面の状態から、入口部に伴うピットと思われる。P₁~P₅はいずれもほぼ同規模で、平面形が長径23~34cm、短径20~27cmの円形及び梢円形状を呈し、円筒状に40~52cmの深さに掘り込まれている。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土、壁際に暗赤褐色土が自然堆積している。覆土中にはローム粒子や焼土粒子・ハードローム小ブロック・炭化物を含み、床面に近くなるほどその量を増す。壁際や床面上からは、多量の焼土粒子や炭化物が検出されており、焼失家屋と考えられる。

遺物は、北西コーナー部や南側壁下から集中して検出されており、完形の甕（1）を含む土師器片が77点出土している。また、覆土中からは縄文式土器片41点、弥生式土器片14点、礫4点が出土している。

遺物や住居跡の形態から、五領期の住居跡と考えられる。



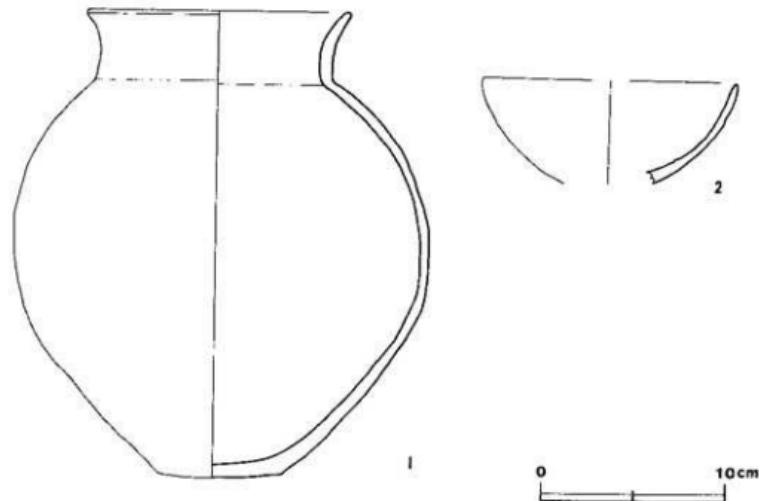
第37図 第41号住居跡実測図

出土遺物

土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第38図 I	甕 土器	A 14.4 B 25.3 C 6.6	底部は平底で、最高に比べ底径が小さい。胴部は中位に最大径をもち、胴下半部は急にすばまっている。胴上半部は丸味を持って内寄する。頭部はほぼ直立し、口縁部は外反する。器表面には焼け付着する。	口縁部内・外面積なで、胴部外面・底部足なで、内面なで	砂粒 普通 にぶい赤褐色	完存率95%

出典番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
2	燒土 師 瓶	A(14.0) B(5.5)	体部下半から、内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。内面は剥離が著しい。	外面泥摩き 内面 なで	砂粒 普通 にぶい褐色	充存率20% 貯藏穴

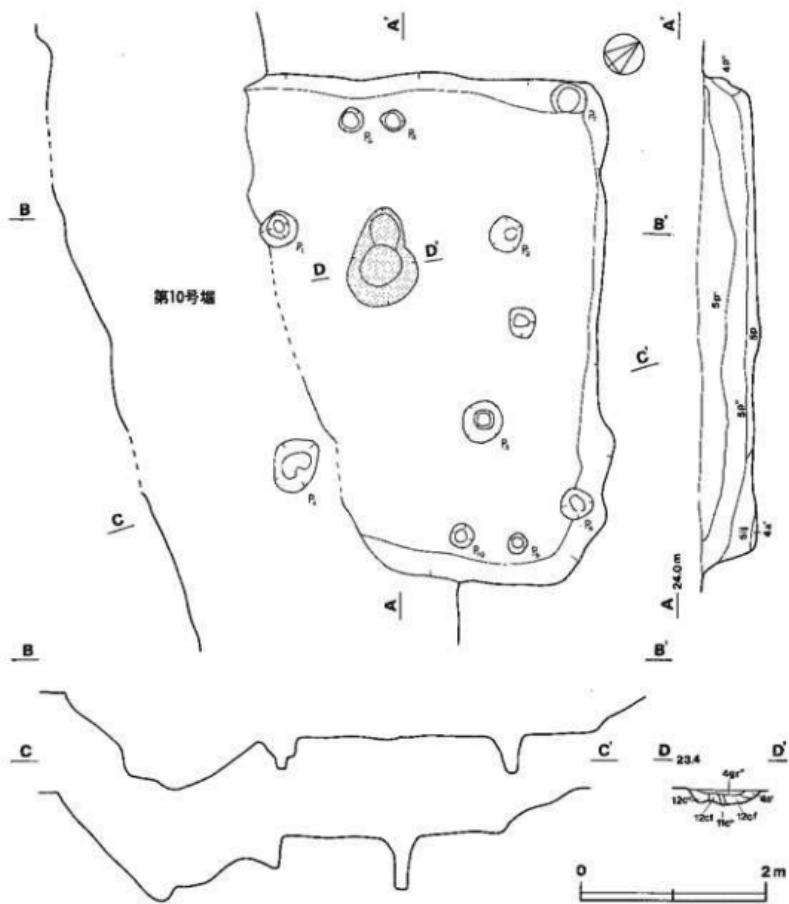


第38図 第41号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡（第39図）

本跡は、調査区の北西部D4c₈区を中心に確認された住居跡である。第43号住居跡の北西2mほどに位置し、南西側は覆土上面から第10号堀によって掘り込まれている。

平面形は、南西側の4分の1ほどが第10号堀によって掘り込まれているため明確でないが、…辺が5.4m前後の方形状を呈する住居跡と推定され、N-53°-Wに主軸を持つものと思われる。残存する床面積は16.1m²であり、推定床面積は32m²前後と思われる。壁は、北東側でその上面が擾乱を受けており、また、南西側は第10号堀によって破壊されている。残存壁は、北西側及び南東側で外傾して立ち上がり、壁高45~55cmを測る。北東側はなだらかに立ち上がっており、壁高37~50cmを測る。いずれの壁も全体的に硬く縮まっている。床面はやや炉の周囲がくぼんでいるが、ほぼ平坦で硬く縮まっている。特に、入口部と想定される南西側の床面は硬く踏み固められている。炉は、北西寄りのP₁とP₂を結ぶ線上に検出されている。平面形は、長径1.1m、短径0.7mの梢円形を呈し、床面を皿状に15cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床は凸凹を呈し、レンガ状に良く焼けている。炉の覆土中には、焼土や焼土ブロック・炭化粒子を含むにぶい赤褐色土



第39図 第42号住居跡実測図

が堆積している。ピットは10か所検出され、主柱穴としては、規模や配列から床面上に検出されたP₁・P₂・P₃と、第10号堀の壁面に掘り込みが検出されたP₄の計4か所が考えられる。P₁は長径41cm・短径36cm・深さ35cm、P₂は長径38cm・短径34cm・深さ36cm、P₃は径43cm前後・深さ54cmを測る。P₄は柱穴の中位の計測値が長径60cm・短径50cm、深さは床面から36cmを測る。P₅～P₁₀は、本跡に伴うものかどうかは不明である。しかし、本跡と重複する第10号堀の壁面及びその外側には、橋脚の柱穴痕と思われるピットが検出されており、P₅～P₁₀はこれらに伴うものとも考えられる。

覆土は、上層から下層にかけて暗褐色土、壁際には褐色土が自然堆積している。暗褐色土は、明度や含有物から3~4層に区分することが出来る。覆土中には、ローム粒子や焼土粒子・炭化物が多量に含まれており、焼失家屋と考えられる。

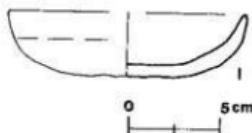
遺物は、覆土中から縄文式土器片5点、弥生式土器片16点、土師器片32点、礫13点が出土している。

遺物や住居跡の形態から、五領期の住居跡と考えられる。

出土遺物

土器観察表

団番番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第40図 I	施土障器	A(13.9) B 3.5	やや浅い丸底を呈し、体部は内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部は直線的に外傾して開き、口唇部は丸くおきめている。	口縁部内・外面横なで 内面まで 体部・底部外面は粗いなどで	砂粒 普通 にふい黄褐色	完存率30%



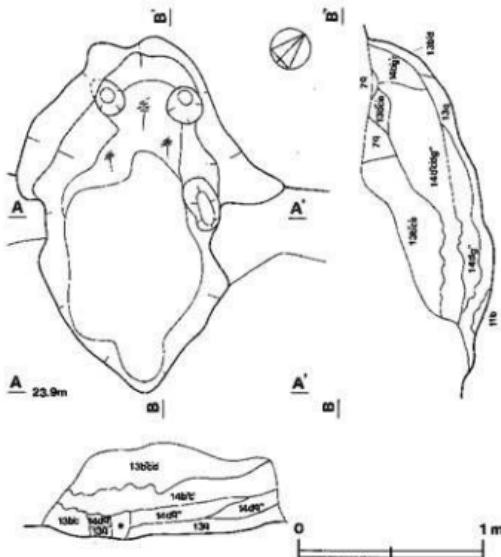
第40図 第42号住居跡出土遺物実測図

(2) 鬼高期

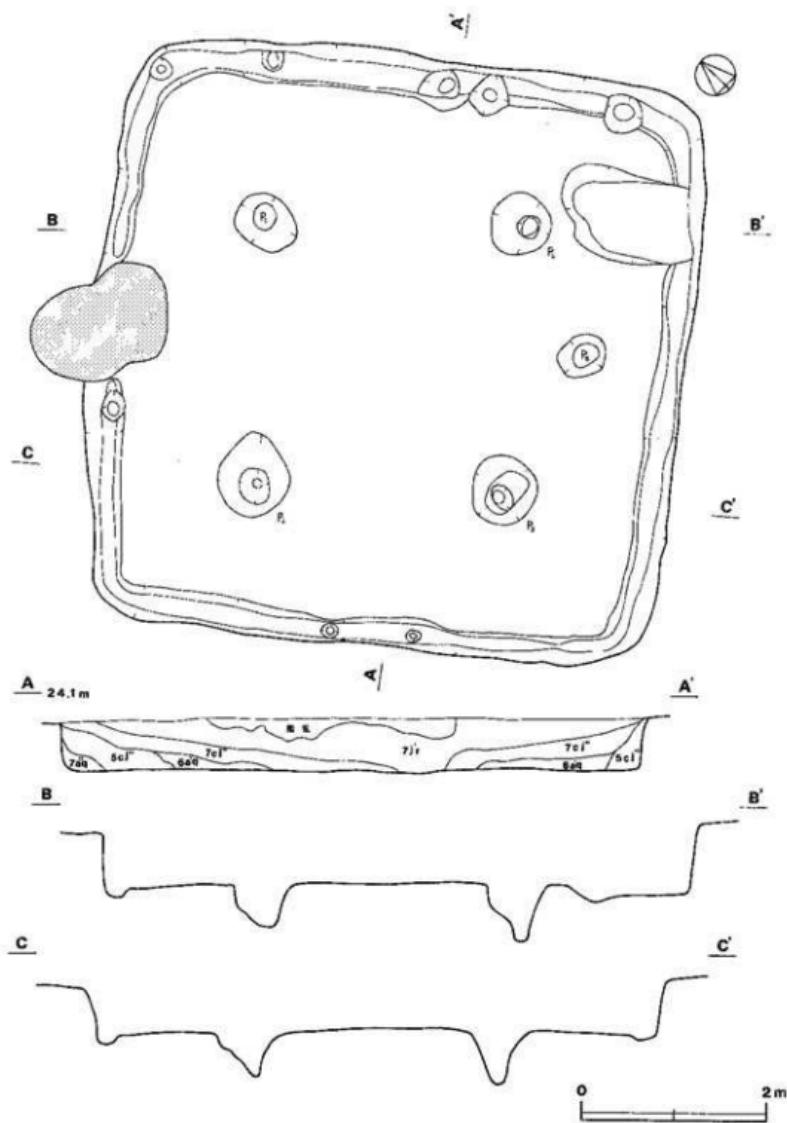
第21号住居跡（第41~43図）

本跡は、調査区の北部E7a4区を中心に確認された住居跡である。第20号住居跡の北西7mほどに位置し、西側0.5mほどには第1号掘が北東から南北方向に走っている。

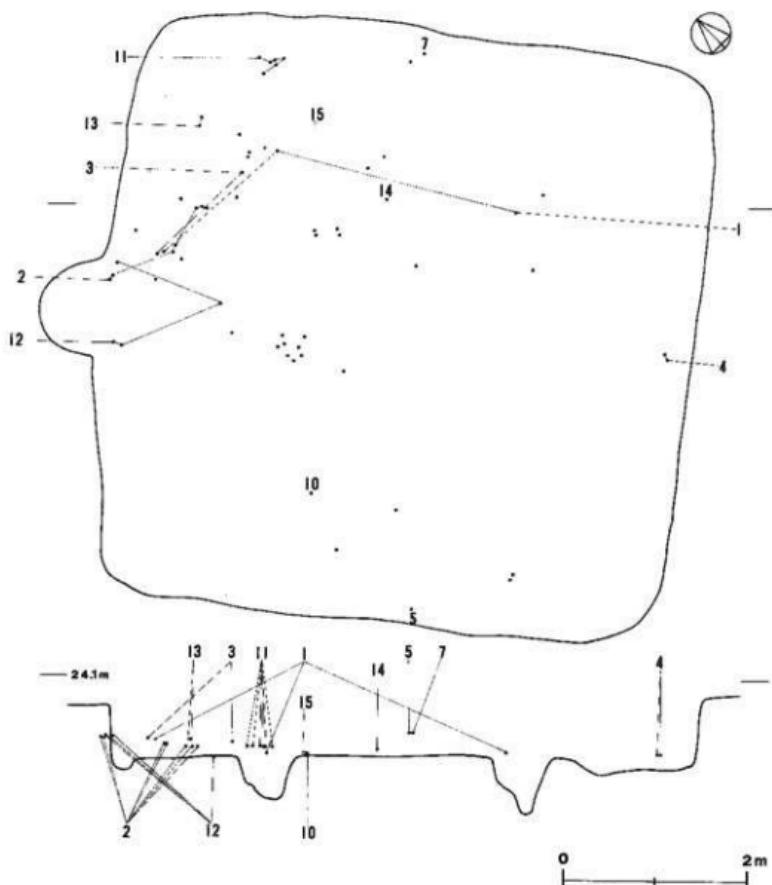
平面形は、一辺が6.4mほどの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-38°-Wを指している。床面積は、約31.8m²である。壁は、確認面下20~30cmの深さまで部分的に擾乱が認められるが、残存壁は全体的に垂直に立ち上がり堅緻である。壁高は50~74cmを測り、北東壁は特に遺存状態が良好である。壁溝は全周し、



第41図 第21号住居跡カマド実測図



第42図 第21号住居跡実測図



第43図 第21号住居跡遺物出土位置図

上幅20~30cmで、U字状に深さ6~18cmほど掘り込まれている。また、壁溝内には8か所に壙柱穴と思われるビットが検出されている。床面は平坦で硬く縮まっており、特に住居跡の中央部やカマド付近、P₃の周辺は堅緻である。カマドの位置や床面の状態から、入口部は南東方向が考えられる。貯蔵穴は、住居跡の南側コーナー部付近に検出され、長径1.4m、短径0.9mの不整椭円形を呈し、0.2mの深さに掘り込まれている。遺物は出土していない。カマドは、住居跡の北西壁中央部に付設されているが、カマドを形成する粘土・砂の大半は周辺に流れしており、遺存状態は

悪い。焚口部・燃焼部は良く焼けており、赤色のレンガ状となっている。ピットは5か所検出されているが、P₁～P₄の4か所が主柱穴と思われる。P₁～P₄は、上面が長径66～92cm、短径46～74cmの楕円形を呈し、浅いすり鉢状に掘り込まれ、さらに中央部が深さ46～62cmの円筒状に掘り込まれている。P₅は、P₁～P₄に比べて小規模で、長径0.52m、短径0.46mの楕円形を呈し、0.34mの深さに掘り込まれている。P₅は、その周開が硬く踏み固められていることやカマドの位置等から、入口の施設に伴うピットと考えられる。

覆土は、一部が耕作による擾乱を受けているものの、上層から中層にかけて黒褐色土、下層には暗褐色土が堆積している。覆土中には、ローム粒子やハードロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物は、住居跡の北側のカマド付近から集中して検出されており、覆土中から縄文式土器片50点、弥生式土器片419点、土師器片556点、須恵器片5点、陶磁器片18点、磁石1点、石製紡錘車1点、支脚1点、礫5点が出土している。土師器片の大半は覆土下層から出土している。2(縁口縁部片)や12(縁底部片)はカマドの覆土中から、15(石製紡錘車)は北側の床面から出土している。

出土遺物や住居跡の形態から、鬼高窯の住居跡と考えられる。

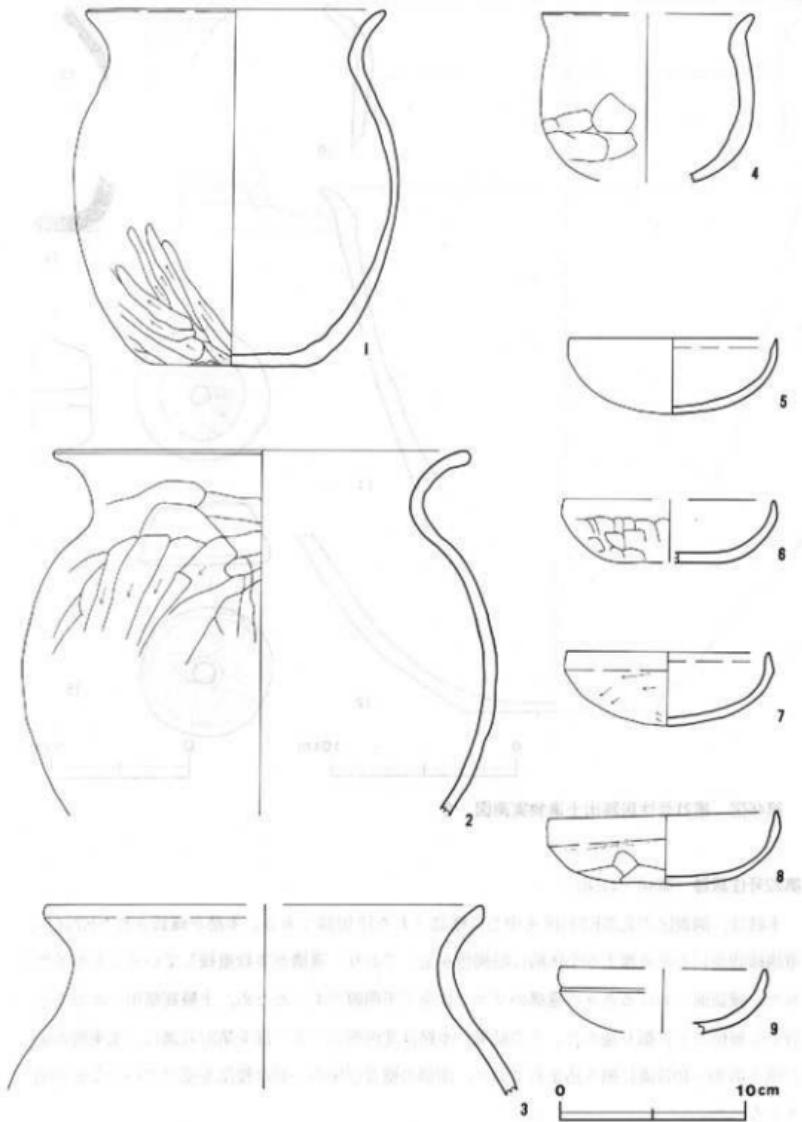
出土遺物

土器観察表

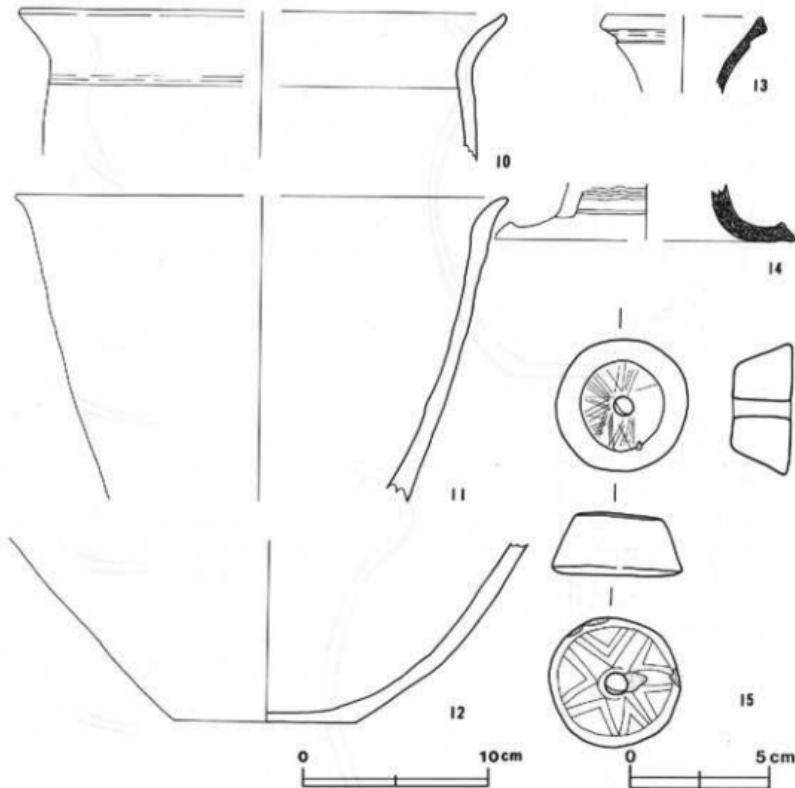
国番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	製作技法	胎土・焼成色調	備考
第44回 1	甕 土師器	A 16.2 B 19.4 C (8.2)	胴部中位に最大径をもち、口縁部は外傾しながら圓く。口唇部はやや起き上がる。肩部に比して底盤が大きい。胴部外面に焼付痕。	口縁部内・外面横なで、胴部はなで 整形の後、下半部 縦纹の延びで、底 部窪なで	玄母・石英 砂粒 普通 にぶい黄褐色	完存率60%
2	甕 土師器	A 22.4 B (19.8) C ——	胴部は、中位よりもやや上に最大径をもつ。頭部から口縁部にかけて強く外反する。口唇部は丸味をもつ。口縁部内面に焼付痕。	口縁部内・外面横 なで、胴上半部斜 位、極位の窪削り	砂粒・スコリア 普通 にぶい橙色	完存率30% カマド覆土
3	甕 土師器	A (25.0) B (13.0) C ——	胴上半部は強く内傾し、頭部から口縁部にかけて外反しながら口唇部に移行する。	内・外面なで	砂礫・玄母 普通 にぶい褐色	完存率10%
4	甕 土師器	A (11.6) B (9.1) C ——	胴部はゆるく内傾し、口縁部はわずかに外傾して窪く。内面の体部と口縁部の境に棱をもつ。器表面に焼付痕。	頭部・口縁部横な で、胴部窪削り 胴部内面斜位の窪 なで	細砂・スコリア 普通 内一橙色 外 黑褐色	完存率20%
5	甕 土師器	A (11.3) B 4.1	丸底で、体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は直立する。口唇部はややつまみ上げられている。口縁部内面に1条の浅い凹線が通っている。	口縁部横なで、他 は横位の窪なで	砂粒 良好 橙色	完存率70%

図版番号	器種	法環(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
6	环土師器	A(11.4) B 3.4	浅い丸底で、体部は内彫しながら立ち上がる。口縁部はわずかに外傾し、口唇部を丸くおさめている。	口縁部削りで、体部削りの後、窪なで、内面なで	細砂・スコリア 普通 灰褐色	完存率40%
7	环土師器	A(11.0) B 4.0	丸底で、体部は内彫しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾し、口唇部はつまみ上げられている。体部と口縁部の境に、不明瞭であるが優が見られる。口縁部内面に浅い凹線が走っている。	口縁部削りで、体部・底部は不定方向の窪なで、内面なで	砂粒 普通 黒褐色	完存率80%
8	环土師器	A(12.5) B 4.0	浅い丸底で、体部は内彫しながら立ち上がる。口縁部はやや内傾し、口唇部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面削りで、内面なで、底部・体部外面削り	砂粒・スコリア 普通 に浅い赤褐色	完存率60%
9	环土師器	A(11.2) B [3.5]	丸底を呈するものと思われる。体部は内彫気味に大きく開いて口縁部に移行する。口縁部はほぼ直立する。口縁部下端には1条の凹線が走り、体部との境に明瞭な棱をもつ。	内面削りで、外面削りの後、施磨き、口縁部下端に軽く窪なで	細砂 良好 黒褐色	完存率30%
第45図 10	环土師器	A(26.4) B ——— C ———	胴上半部はわずかに内彫し、口縁部は緩く外反して開く。口唇部は、ややつまみ上げられている。	内・外面なで	細砂・青母 普通 に浅い橙色	完存率10%
11	环土師器	A(26.6) B(16.6) C ———	胴部はわずかに斜上方に開きながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	口縁部内・外面削りで、胴部・外面軽い施磨の痕跡を	砂粒 良好 赤色	完存率25%
12	环土師器	A ——— B [9.9] C [9.6]	平底を呈し、胴下半部は内彫気味に大きく開いて立ち上がる。	底部・胴下半部外面窪なで、内面なで	砂粒・青母 普通 に浅い赤褐色	完存率15% カマド覆土
13	环土師器	A(9.0) B [4.2] C ———	口縁部は、わずかに外反しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部上端は内彫し、断面三角形を呈する。口縁部には、回転施磨剤による段が見られる。	巻き上げ、水洗き成形、口縁部削り	砂粒・細砂 良好 灰色	完存率5%
14	高領環土師器	A ——— B [3.1] C (16.4)	胴部は大きく開き、外縁に断面三角形の凸出が窺われる。胴部は内彫しながら立ち上がり、長方形の透しが見られる。胴部・脚部には4本1単位の施描液状文が施されている。	内・外面削りで	砂粒 良好 暗灰褐色	完存率5%

第45図15は、石製紡錘車である。断面形は台形状を呈し、表裏両面に花弁状の線刻が施されている。中央部には、径6mmの孔が穿たれている。最大長4.75cm、最大幅4.7cm、最大厚2.2cm、重量58.4gを測る。石質は千枚岩である。



第44圖 第21號住居跡出土遺物實測圖 (1)

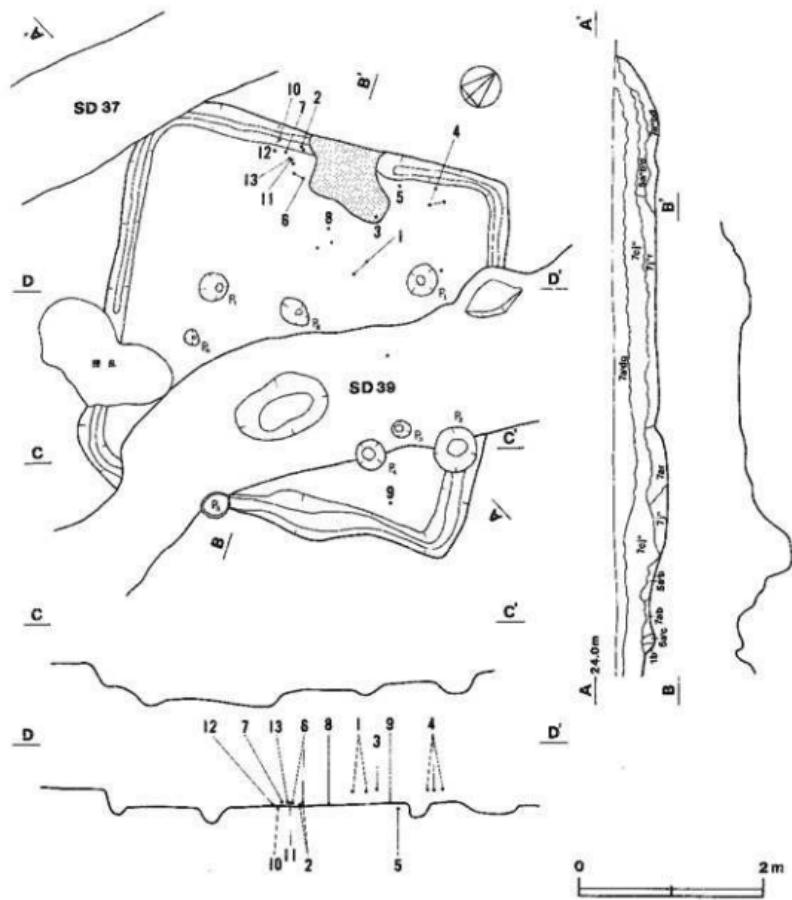


第45図 第21号住居跡出土遺物実測図 (2)

第22号住居跡 (第46・47図)

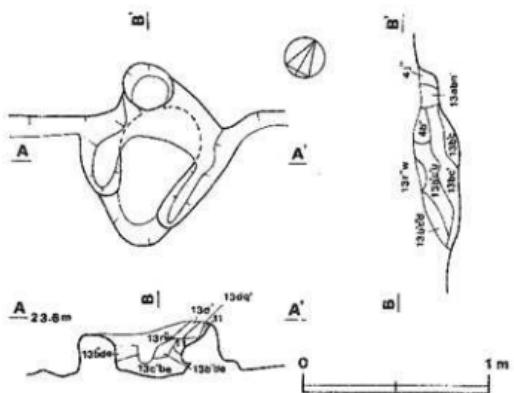
本跡は、調査区の北部E7h区を中心に確認された住居跡である。本跡が確認されたE7区は、遺構確認面における覆土が全体的に暗褐色を呈しており、遺構が多数重複していることが予想された。確認面における各々の遺構のプランは全く不明瞭であったため、土層観察用ベルトを密に設定し層位ごとに掘り進めた。その結果、本跡は北西側コーナー部を第37号溝に、南東側の床及び壁を第39・40号溝に掘り込まれており、南側の壁及び床の一部は擾乱を受けていることが明らかとなった。

平面形は、残存する壁や壁溝の検出状況から、一辺が4.1mほどの方形形状を呈する住居跡と推定され、主軸方向はN-33°-Wを指すものと思われる。床面積は、約13.9m²である。壁は、その上



第46図 第22号住居跡実測図

部の大半が擾乱や重複のため不明瞭であるが、北東コーナー部付近の壁は、比較的良好な状態で検出されている。また、南東側の壁は第40号溝によって掘り込まれて破壊されており、壁溝だけを検出した。残存壁は、壁高18~26cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁質は、上部が軟弱であるが、他は硬く締まっている。監測は、第39号溝との重複や擾乱を受けていること等から、一部不明な部分もあるが、上幅18cm前後でU字状に2~8cmの深さに掘り込まれている。本来は、壁下を全周していたものと思われる。残存する床面は、カマド付近や中央部に平坦でやや硬い部分が認め



第47図 第22号住居跡カマド実測図

ピットは8か所検出されているが、規模や配列からP₁・P₄・P₇の3か所が主柱穴と考えられる。本米は4本主柱と考えられるが、1か所は重複する第39号溝によって掘り込まれてしまったものと思われる。P₁は長径35cm・短径30cm・深さ15cm、P₄は径約30cm・深さ15cm、P₇は径約32cm・深さ20cmを測る。

覆土は、上層から下層にかけて黒褐色土が自然堆積しており、含有物によって3層に区分できる。覆土中には、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が含まれ、特に下層には、焼土粒子や炭化物が多量に含まれている。

遺物は、住居跡の北西側のカマド付近から集中して出土しており、床面直上及び覆土下層から弥生式土器片8点、土師器片140点、須恵器片2点、陶磁器片1点、礫4点が出土している。特にカマドの袖部付近の床面直上からは、ほぼ完形の壺(2・6・7・10~13)や瓶(1)、須恵器の高環脚部片等が出土している。

遺物から、鬼高期の住居跡と考えられる。

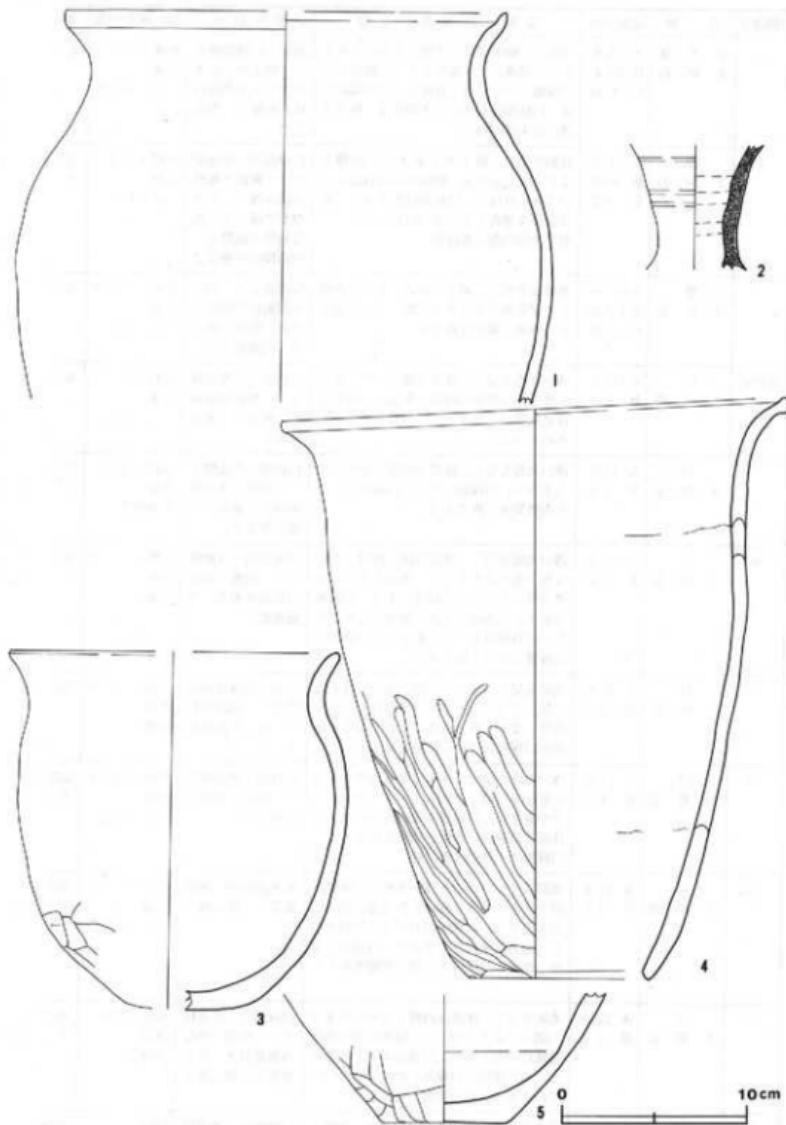
出土遺物

土器観察表

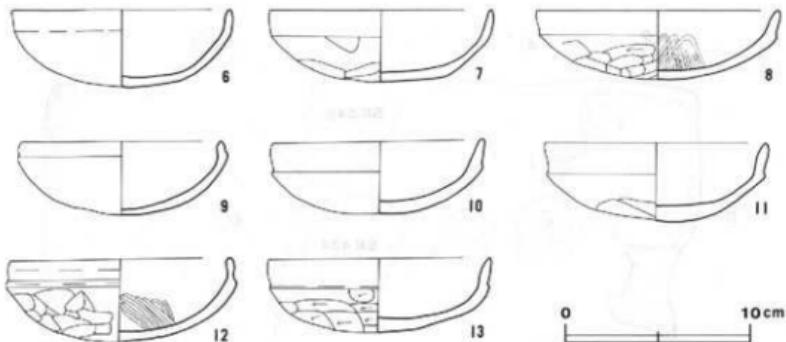
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第48図 1	甕 土師器	A (23.8) B (21.1) C —	胴部は球形を呈し、肩部に張りを持つ。頭部から口縁部にかけては強く外反し、口縁部はつまみ上げられて直立する。胴上半部に最大径を持つ。肩部や口縁部の外面に煤付着。	II縁部内面横なで 肩中央部縫合の丸 なで その他なで	砂粒・雲母 普通 にほい赤褐色	充存率40%
2	長頸甕 須恵器	A — B (6.8)	頸部は細く、緩やかに外反しながら立ち上がる。2条の凹縞が這っている。	巻き上げ成形 脊部外側及び内面上位は横なで	礫・砂粒・細砂 良好 灰色	充存率10%

らされるが、他は軟弱で凸凹している。カマドは、北西壁の中央部に粘土・砂を主体として構築されているが、大部分は崩れ、袖部がわずかに残存しているにすぎない。長さ98cm、幅83cm、焚口部幅35cmを測り、主軸方向はN-30°-Wを指している。火床は良く焼けており、床を10cmほど掘り込み、長径68cm、短径40cmほどの梢円形を呈している。

開拓場所	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技術	胎土・焼成・色調	備考
3	小形甕 土師器	A (17.8) B 19.4 C (6.0)	平底で、底部は縦く内擣しながら立ち上がり、肩部にやや張りをもつ。口縁部から口縁部にかけて縦く外反し、口唇部に至る。口縁部はわずかに内擣する。肩上部に最大径を持つ。	頭部・口縁部横な で、肩上部・中央 部などで、下部斜 面の施削り・内面 まで	砂粒・雲母 普通 に赤褐色	完存率70%
4	環 上師器	A 27.4 B 40.5 C 9.7	長削を呈し、肩上部でわずかに内擣しながら立ち上がる。頭部から口縁部にかけて強く外反し、口唇部は直立する。底は全体を穿孔している(孔径9.1cm)。肩下部内面に焼付着。	口縁部内・外面横 なで、頭部は縦様 み痕と残り、なで 整形の後、下部を 横幅の直削り・ 内面横位の窪まで	砂粒・雲母 良好 に赤褐色	完存率90% カマド
5	甕 土師器	A —— B (7.0) C 6.8	底部は平底で、肩下部はわずかに内擣しながら外上方に大きく開いて立ち上がる。外側に焼が付着する。	底部窪なで、頭部 半部削りの施削りの 後、横幅の窪なで、 内面窪まで	細粒・スコリア 普通 に赤褐色	完存率20%
第49回 6	环 土師器	A (11.7) B 4.2	浅い丸底を呈し、体部は縦く内擣しながら外上方に開き口縁部に至る。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部を丸くおさめている。	口縁部内・外面横 なで、体部外側削 位の窪なで、底部 施削り	砂粒・スコリア 普通 に赤褐色	完存率90%
7	环 上師器	A 12.0 B 4.0	浅い丸底を呈し、体部は内擣しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は、やや内擣気味に直立する。	口縁部・内面横 なで、底部・体部外 側削位の施削りの 後、窪まで	砂粒・雲母 良好 明赤褐色	完存率100% カマド覆土
8	环 土師器	A 13.2 B 3.7	浅い丸底を呈し、体部は縦く内擣しながら外上方に開いて立ち上がり、体部上半から器厚を厚くしながら口縁部に至る。口縁部はわずかに外反して直立気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめている。体部と口縁部との境に施削をもつ。	口縁部内・外面横 なで、底部・体部 の外側削位・内 面窪底	砂粒・スコリア 普通 赤褐色	完存率95% カマド覆土
9	环 土師器	A 10.8 B 4.0	丸底を呈し、体部は内擣しながら外上方に開いて立ち上がる。口縁部はわずかに内擣しながら直立気味に立ち上がる。体部と口縁部との境に明瞭な施削をもつ。	内面・口縁部外側 横なで、底部施削 りの後、外側窪底	細粒・スコリア 良好 灰褐色	完存率95%
10	环 上師器	A 11.5 B 4.0	浅い丸底を呈し、体部は縦く内擣しながら外上方に開いて立ち上がる。口縁部はやや直立し、口唇部を丸くおさめている。体部と口縁部との境に明瞭な施削をもつ。口縁部内・外側に焼付着。	口縁部・内面横 なで、底部・体部外 側窪まで	砂粒・スコリア 良好 赤褐色	完存率100% カマド覆土
11	环 土師器	A 11.9 B 4.3	底部はややびつな浅い丸底で、体部は縦やかなカーブを描いて外上方に開いて立ち上がる。口縁部はわずかに外折するが、直立気味に立ち上がり、口唇部に至る。体部と口縁部との境に明瞭な施削をもつ。	頭部削り・体部 窪なで、他は横な で	砂粒・スコリア 普通 赤褐色	完存率95% カマド覆土
12	环 上師器	A 12.0 B 4.7	丸底を呈し、体部は内擣しながら外上方へ開いて立ち上がる。口縁部はやや内擣気味に立ち上がり、口唇部を丸くおさめている。体部と口縁部との境に施削をもち、その上方には浅い凹線が巡る。	口縁部内・外面横 なで、底部・体部 内面窪底・外側 施削りの後、窪な で	砂粒・雲母 良好 黒褐色	完存率100% カマド覆土
13	环 土師器	A 12.0 B 4.1	浅い丸底を呈し、体部は縦やかに内擣しながら外上方に立ち上がる。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部にせり。体部と口縁部との境に明瞭な施削をもつ。	口縁部内・外面横 なで、体部外側削 位・内面まで	細粒 普通 暗赤褐色	完存率80% カマド覆土



第48図 第22号住居跡出土遺物実測図 (1)

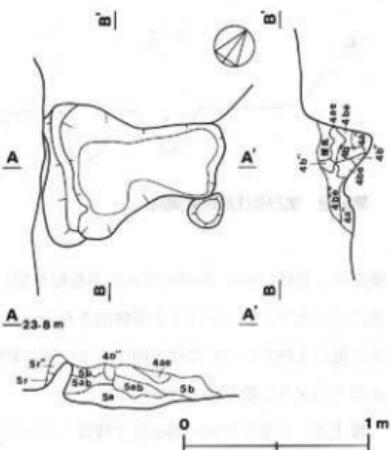


第49図 第22号住居跡出土遺物実測図 (2)

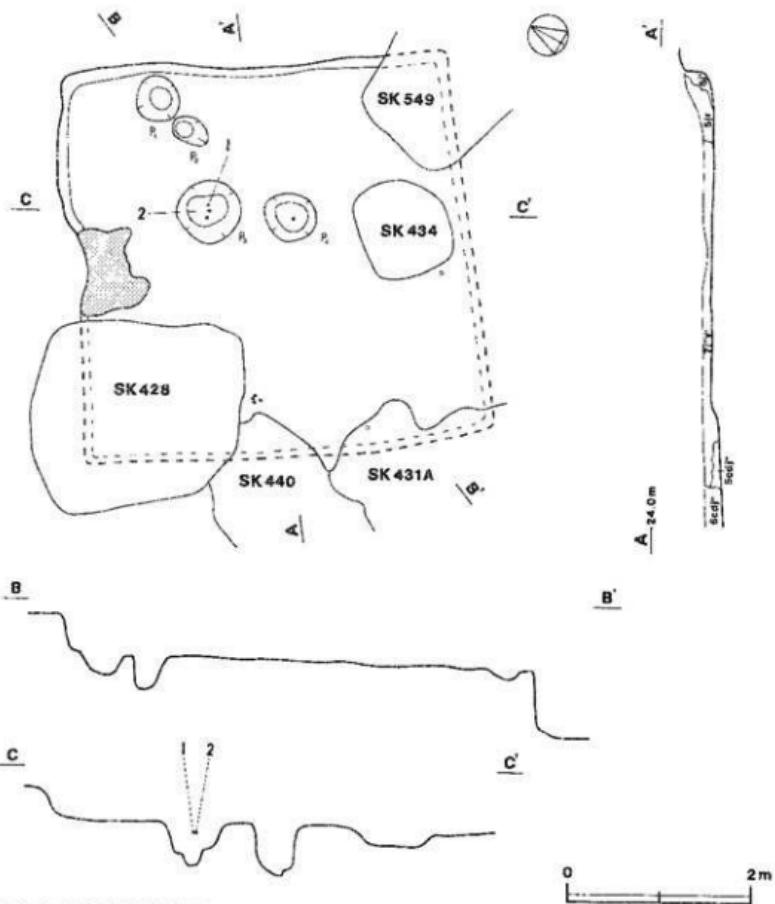
第23号住居跡 (第50・51図)

本跡は、調査区の北東部E8g区を中心確認された住居跡である。E8区及びF8区からは、中世の屋代城に伴うものと考えられる墓壙群が検出されており、本跡はその墓壙群内の北端に位置している。第428・429・434・439・440号土坑とそれぞれ重複し、壁及び床の3分の2ほどが掘り込まれている。

平面形は、上記のように各土坑との重複が激しいため明確でないが、カマドの位置や残存する壁、柱穴の位置等から、一辺が4.3m前後の方形状を呈する住居跡と推定される。主軸方向は、カマドの位置や方向からN-31°-W前後を指していたものと思われる。推定床面積は、約16.8m²である。壁は、北西及び北東側でその一部が残存しているにすぎず、他は不明である。残存壁は北西側で壁高33cmを測り、なだらかに立ち上がり、北東側では壁高40cmを測り、垂直に立ち上がる。一部に擾乱も見られるが、全体的に良く締まっている。床面は、南西方向になだらかに傾斜し、中央部がわずかにくぼんでいる。全体的に軟弱である。カマドは、北西壁の中央部付近に粘土・砂で構築されている。しかし、遺存状態が悪く、北西側の裾の一部は第428号土坑によって切られており、北東側の裾は、その一部がわずかに残存しているにすぎない。天井部は崩落している。燃



第50図 第23号住居跡カマド実測図



第51図 第23号住居跡実測図

焼部は、長径1.6m、短径0.75mの不整形を呈し、床面を10cmほど掘り込んでいる。火床はあまり焼けていない。ピットは4か所検出されているが、主柱穴と考えられるのはP₂の1か所だけである。他の主柱穴については不明である。P₂は長径40cm、短径37cmの橢円形状を呈し、円筒状に33cmほどの深さに掘り込まれている。

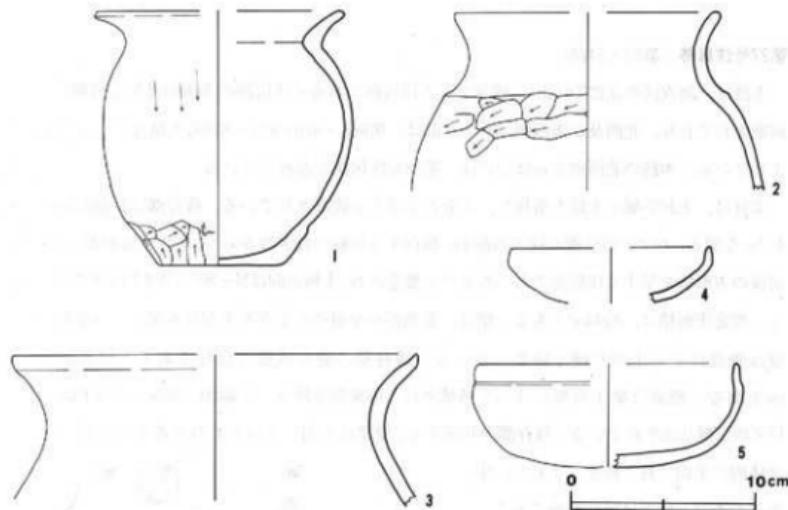
覆土は、わずかに10~20cmほど残存しているだけである。中央部にローム粒子やハードロームブロックを多量に含み、焼土粒子や炭化物を中量含む黒褐色土が、壁際にはローム粒子を多量に

含み、ハードロームブロック・炭化粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土中から弥生式土器片1点、土師器片73点、土師質土器片1点、陶磁器片12点、砥石1点、礫5点が出土している。土師器の口縁部片1・2は、P₃の覆土中から出土している。また、P₄の覆土中から出土した土師質土器片（第125図4）や陶磁器片・砥石は、重複する中世の墓壙群に伴うものと考えられる。

遺物の出土状況や住居跡の形態等から、鬼高期の住居跡と考えられる。

出土遺物



第52図 第23号住居跡出土遺物実測図

土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第52図 1	小形甕 土師器	A(13.4) B 13.8 C 6.5	底部は平底で、胴部は球形を呈し。胴部上半に最大径を持つ。頸部から口縁部にかけて「く」の状に強く外反し、頸部内面に縦を持つ。器表面に煤が付着する。表面が部分的に剥離している。	口縁部内・外面、頸部横なで、胴下半部・底部窪削りの後、横位の荒なで、その他胴部縱位の荒なで、内面なで	砂粒 普通 灰褐色	完存率70%
2	小形甕 土師器	A(14.4) B [9.6] C ——	胴上半部から緩く内寄して立ち上がり、頸部から口縁部にかけて丸味を持って僅く外反する。口唇部は丸くおきめている。	口縁部外面及び内面横なで、胴上半部横位の窪削り	砂粒・スコリア 普通 褐灰色	完存率15%
3	甕 土師器	A(22.0) B [8.3] C ——	頸部から口縁部にかけて、丸味を持ちながら強く外反し、口唇部に至る。口唇部はつまり上げられ、直立気味に立ち上がる。	口縁部・頸部内外面横なで、その他なで	砂粒・雲母 普通 にぼい橙色	完存率10% 床面

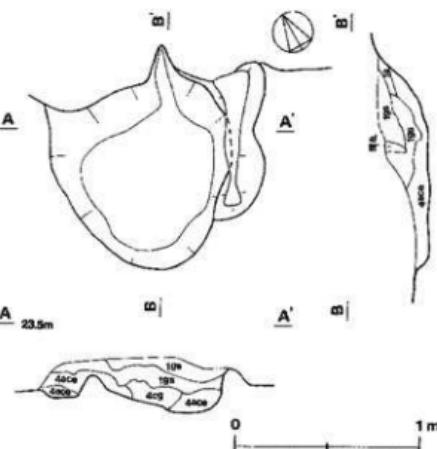
出典番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
4	环土師器	A(10.8) B(3.0)	丸底を呈し、体部は緩やかに内傾しながら開き、口縁部に重る。口縁部はやや内側氣味に立ち、口唇部は丸くおさめている。	口縁部内・外面積みで、内面をで 体部上下端まで 底部削り	砂粒 普通 にほい特色	完存率15%
5	环土師器	A(14.0) B(5.7)	丸底を呈し、体部はやや大きく開いた後、強く内傾しながら口縁部に至る。口縁部はわざかに内傾しながら直立氣味に立ち上る。口唇部は丸くおさめている。体部と口縁部との境に縁をもつ。	口縁部内・外面積 みで、体部起伏の 差で、底部削り 内面をで	砂粒 普通 灰赤色	完存率15%

第27号住居跡（第53・54図）

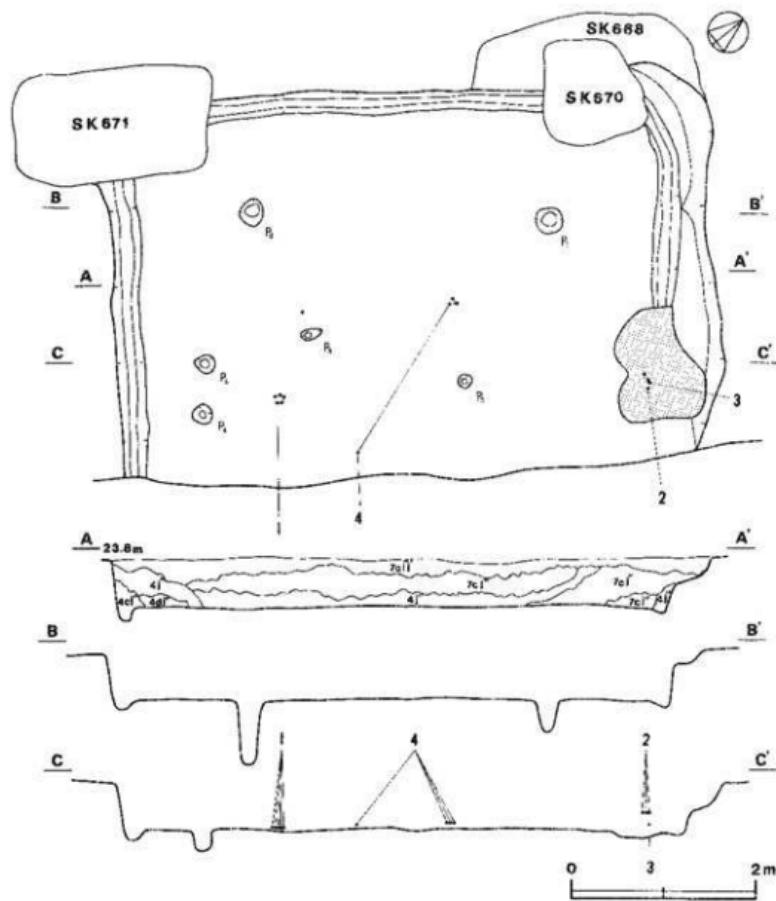
本跡は、調査区の北部E6e区に確認された住居跡である。住居跡の南東側は第1号窓によって破壊されており、北西及び南西側コーナー部は、第668・670・671・675号土坑等によって掘り込まれている。本跡の北西側2mほどには、第28号住居跡が存在している。

本跡は、上記の堀や土坑と重複し、2分の1ほどが破壊されている。残存部は長軸6.5m、短軸4.2mを測る。カマドの位置や柱穴の配列、残存する長軸の長さ等から、本来は平面形が一辺6.5m前後の方形状を呈する住居跡であったものと推定され、主軸方向はN=30°-Wを指すものと思われる。推定床面積は、約44m²である。壁は、北側がやや緩やかな立ち上がりを呈しているが、他の壁は垂直に立ち上がり硬く締まっている。残存壁の遺存状態は良好である。壁高は40~60cmを測る。壁溝は第1号窓によって破壊された南東側を除き、上幅20~30cm、深さ10cm前後でU字状に掘り込まれている。残存部の状況から、壁溝は全周していたものと考えられる。床面は、全体的に平坦で良く締まっており、中央部やカマド付近は特に堅緻である。

カマドは、北東壁中央部に付設されており、天井部は崩落している。煙道から焚口までの長さは120cm、袖部幅20cm、焚口部は22cmほどで、袖部は砂質粘土を用いて構築されているが、西側は遺存状態が悪い。掘り方は幅70cmで壁を55cmほど掘り込んでおり、標際を煙道としている。火床は床面を9cmほど掘り込んでおり、良く焼けている。カマドの覆土中からは土師器の甕の破片（2・3）が出土しており、これらは、



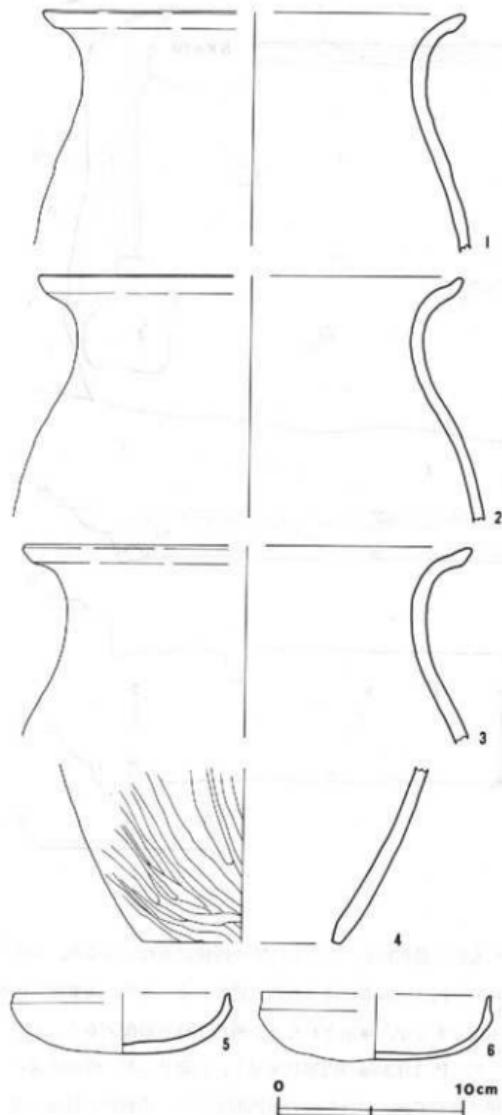
第53図 第27号住居跡カマド実測図



第54図 第27号住居跡実測図

カマドの補強として使用されていたものと思われる。ピットは6か所検出されているが、規模や配列からP₁・P₂が主柱穴と考えられる。P₃は入口部に伴うものと思われる。ただ、南東側が破壊されているためピットの全体数は不明であるが、検出された2か所の主柱穴の配列から、本来は4本の主柱であったと考えられる。P₁・P₂は径30cmの円形状を呈し、円筒状に37~67cmの深さに掘り込まれている。P₃はやや小規模で長径25cm、短径20cmの楕円形を呈し、円筒状に41cmの深さに掘り込まれている。

出土遺物



第55図 第27号住居跡出土遺物実測図

覆土は、3～4層からなり自然堆積である。上層から中層にかけては黒褐色土、下層及び壁際には褐色土が堆積している。壁の周辺及び下層には焼土や木炭が混入している。

遺物は、縄文式土器片2点、弥生式土器片178点、土師器片167点、陶磁器片2点、軽石1点、礫6点が出土している。カマドの覆土中から2・3(縁口縁部片)が、南東側の床面直上から1(縁口縁部片)が出土している。

住居跡の形態や出土遺物から、鬼高期の住居跡と考えられる。また、弥生式土器片が多量に出土していることから、弥生時代の造構との重複も考えられるが、第1号堀によつて住居跡の2分の1ほどが破壊されており、調査中にあってもそのプランや痕跡は認められなかった。

土器觀察表

調査番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第55回 1	甕 土師器	A (23.0) B (12.7) C ——	肩部の張りは弱く、腹部で直立した後、口縁部は大きく外反しながら口縫部上端に至る。口縫部はやや直線的に斜上方につまみ出されている。口縫部上端は、内面がわずかに凹み、外面には縦が見られる。器表面は削離が著しい。胴上半部に焼付着。	頭部及び口縫部の内・外面横なで その他なで	砂粒・砂隕 雲母 普通 にぼい褐色	完存率15%
2	甕 土師器	A (23.0) B (13.1) C ——	肩部の張りは弱く、やや内側気味に内側上方へ立ち上がった後、頭部から口縫部にかけて大きく外反し、口縫部に至る。口縫部上端はやや直線的に外上方へ開き、口縫部をまるくおさめている。口縫部上端は、内面が浅く凹み、外面には縦が見られる。胴上半部に焼付着。	頭部及び口縫部の内・外面横なで 胴上半部外側 内面横位の窪なで	砂粒・雲母 普通 にぼい赤褐色	完存率10% カマド覆土
3	甕 土師器	A (24.4) B (10.1) C ——	頭部は丸味を持って緩やかに外反し、口縫部は大きく外反する。口縫部は、やや外上方につまみ上げられ曲げられている。口縫部上端は、内面が浅く凹み、外面には縦が見られる。口縫部内面・胴上半部外側に焼付着。	頭部及び口縫部の内・外曲横なで 胴上半部内・外曲なで	砂粒・雲母 普通 にぼい褐色	完存率10% カマド覆土
4	甕 土師器	A —— B (9.6) C (10.6)	底部からわずかに内傾し、外上方に聞いて立ち上がる。底部は全体を穿孔し、踏抜けとなっている(孔径9.8cm)。	胴下半部外曲斜位 の距離き 内面窪なで	砂粒・雲母 良好 褐色	完存率10%
5	甕 土師器	A (11.6) B 3.3	やや平たい丸底を呈し、体部は大きく開きながら内側して口縫部に至る。口縫部はわずかに内傾するが、直立気味につまみ上げられている。体部と口縫部との境に縦をもつて内面及び底部外面に焼付着。	口縫部内・外曲横 なで その他内面 頭心円状の窪 体部・底部外曲 なで	砂粒・スコリア 良好 灰褐色	完存率80%
6	甕 土師器	A (12.4) B 4.7	やや平坦な丸底で、体部は緩く内側しながら外上方に開いて立ち上がる。口縫部は直立し、上端はわずかに外反する。体部と口縫部との境に縦が見られる。器表面は削離が著しい。	口縫部内・外曲横 なで その他なで	砂粒・雲母 普通 にぼい褐色	完存率60% カマド覆土

第32号住居跡(第56~58回)

本跡は、調査区の北西部D7b1区を中心に確認された住居跡である。第31号住居跡の北東9mに位置し、北東側1.2mには第1号塙が隣接している。当初は、大規模な二段掘り込みの住居跡と考え調査を進めたが、調査の過程で、本跡が第35号住居跡の中央部を深く掘り込んで構築されていることが判明した。

平面形は、一辺が6m前後の方形を呈し、主軸方向はN-34°-Eを指している。床面積は、約30.2m²である。壁は、北西側で近世の溝により上面が擾乱されているが、他は遺存状態が良好で垂直に立ち上がっている。壁高は、第35号住居跡の床面から12~30cmを測るが、確認面から計測すると55~69cmとなる。構築時には、さらに上面の旧地表面から掘り込まれていたものと思われる。壁質は全体的に硬く締まっている。壁溝は壁下を全周し、15~32cmの幅でU字状に、10cmほ

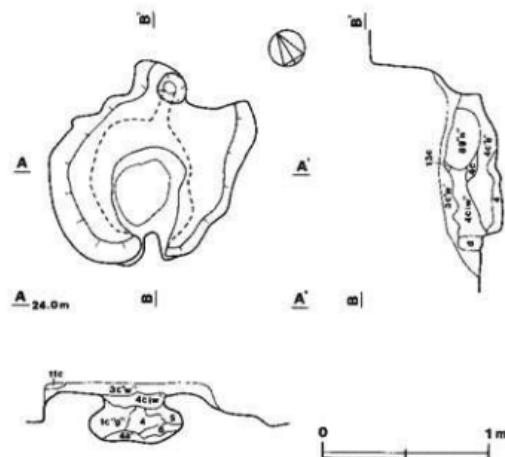
どの深さに掘り込まれている。床面は、南側コーナー部付近がやや凹んでいるほかは、全体的に平坦で良く踏み固められており、特に、カマド付近とその南西側が堅硬である。カマドは、北東壁の中央部に付設されており、砂・粘土によって構築されている。袖部・天井部とも遺存状態は良好である。カマドの規模は長径1.2m、短径1.1mを測り、北東壁を15cmほど掘り込んでいる。袖部幅27~31cm、袖部の厚み32cm、焚口幅21cmを測る。煙道部及び燃焼部はかなり焼けており、長期間使用されたものと思われる。ピットはP₁~P₇の7か所検出されているが、規模や形状・位置等から、P₁・P₂・P₄・P₇の4か所が主柱穴と考えられる。また、床質やカマドの位置等から、入口部は南西方向と考えられる。P₁・P₂・P₄・P₇は平面形が長径70~85cm、短径55~70cmの円形または楕円形を呈し、上位は鍋底状に、そして下位は円筒状に57~73cmの深さに掘り込まれている。P₄は他の柱穴と比較して小規模で、長径47cm、短径43cmの楕円形状に35cmほど掘り込まれている。P₄は、前述したカマドの位置、床面の状態、主柱穴の配列等から、入口部に伴うピットと想定される。

覆土は、一部に擾乱の痕が見られるが、上層から中層にかけては黒褐色土、下層には暗褐色土が自然堆積している。覆土中にはローム粒子やハードローム小ブロックが含まれており、下層に行くほどその量を増す。また、中層から下層にかけては少量の炭化粒子や焼土粒子を含んでいる。

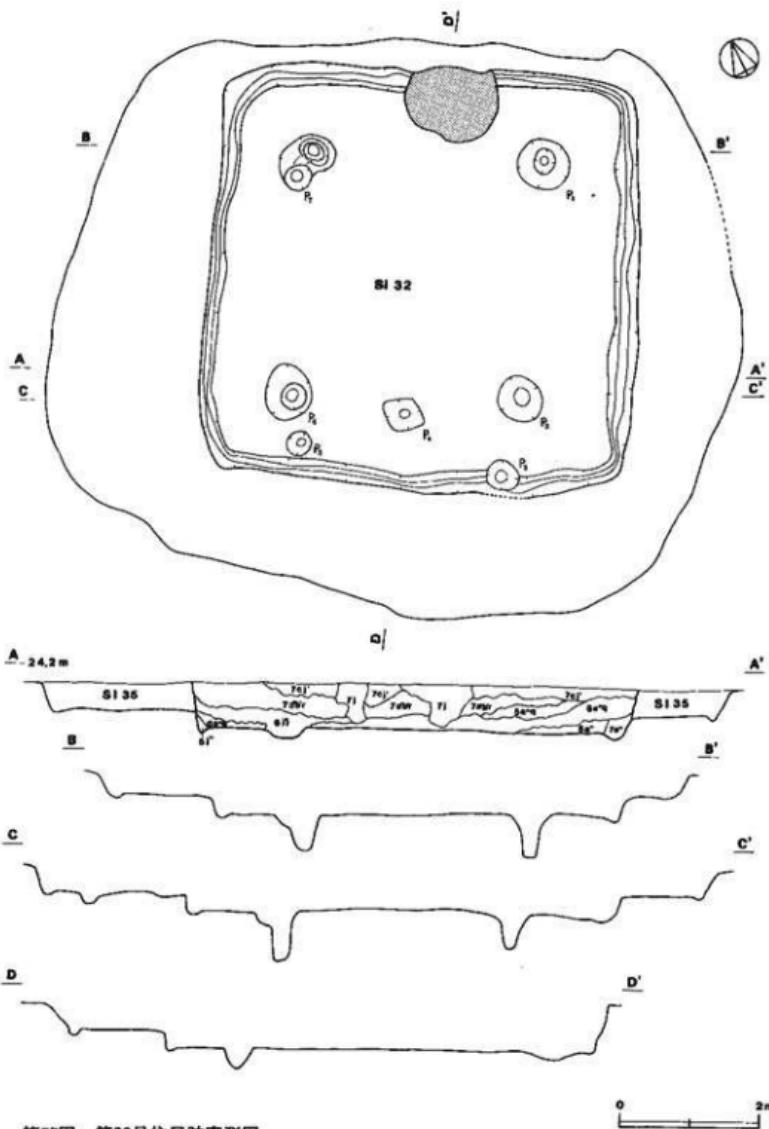
遺物は、その大半が住居跡の北側及び東側の覆土中へ下層から出土しており、縄文式土器片230点、土師器片1,018点、須恵器片2点、砥石4点、土玉1点。

他に陶磁器片や礫等が出土している。覆土中から出土した弥生式土器片は、重複する第35号住居跡に帰属するものとして除いた。また、砥石や陶磁器片については、耕作等により、後世に混入したものと考えられる。住居跡の北東及び南西側の覆土下層からは、壺(1・9)や瓶(12)・壺(23)等が出土している。

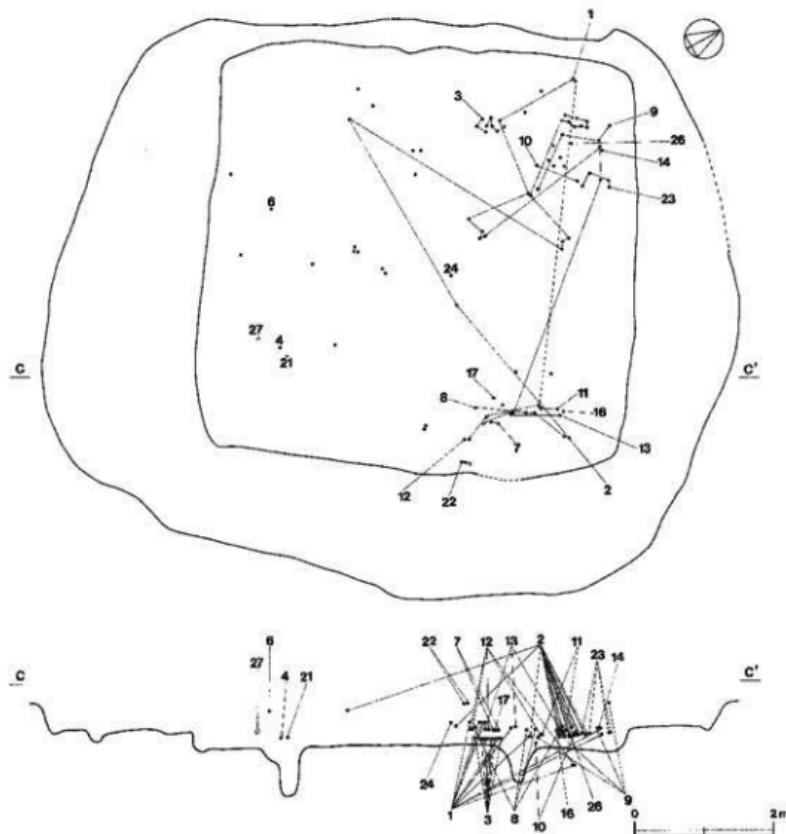
出土遺物や住居跡の形態等から、鬼高期の住居跡と考えられる。



第56図 第32号住居跡カマド実測図



第57図 第32号住居跡実測図



第58図 第32号住居跡遺物出土位置図

出土遺物

土器観察表

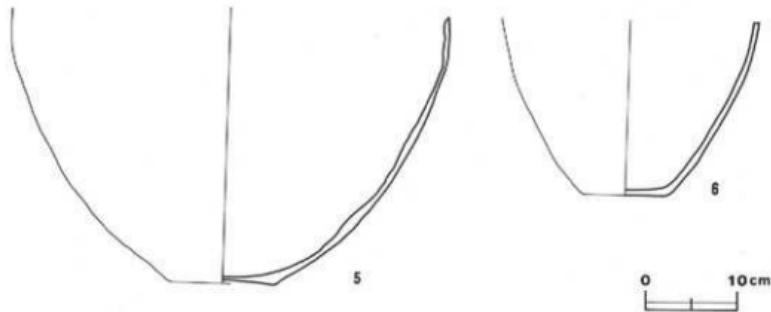
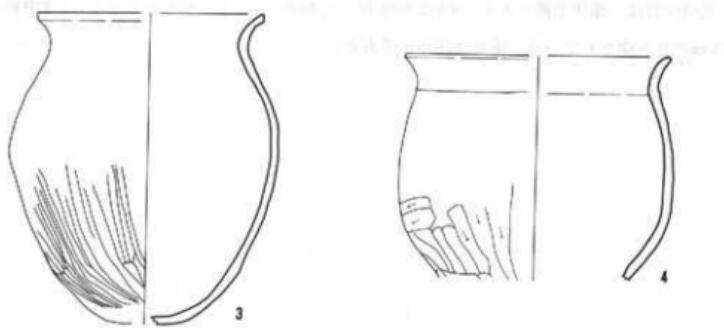
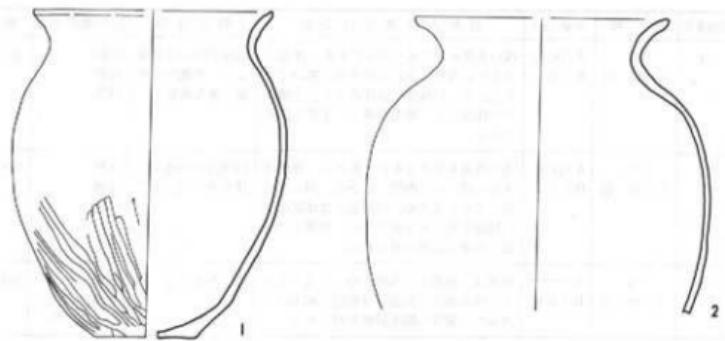
図版番号	器種	法縦(cm)	器形の特徴及び文様	整形状法	胎土・焼成・色調	備考
第59図 1	甕 土器	A(26.0) B 35.6 C(10.8)	底部は平底。胴部はやや長胴を呈し、上半部に最大径をもち、底部に向かって縦やかにすぼまっている。腹部から口縁部にかけては外反し、口縁部はつまみ上げられ、ほぼ直立する。胴中央から底部にかけての内・外面に焼付。内面剥離が著しい。	口縁部外面横なび 胴中央から下平部 輪郭、斜位の裏窓 き、底部窪磨き その他なび	砂粒・砂壁 青母 普通 褐色	充存率60%

問版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
2	甕 土師器	A(27.4) B(31.7) C——	胴部は、下部から緩く内壁しながら開いて立ち上がり、肩部で強く内押す。頭部から口縁部にかけて強く外反し、口縁部上端で斜上方に起き上がる。二次焼成を受け、内・外面とも割離が著しい。	口縁部内・外面横なで 脇部外面窪なで 内面なで 粗粒な整形	砂粒・砂礫 普通 明赤褐色	完存率30%
3	甕 土師器	A(24.5) B 33.7 C(8.1)	胴部はやや長胴を呈し、上半部に最大径をもち、底部に向かってぼぼまっている。底部は平底で、器高に比べて小さい。頭部から口縁にかけて丸味をもって外反し、口縁部はなで整形が施されれば立直する。口縁部上端に後をなす。	口縁部内・外面横なで 脇中央から底部にかけて丁寧な遮離き その他のなで	砂粒・砂礫 雲母 普通 にほい赤褐色	完存率80%
4	甕 土師器	A(28.9) B(24.2) C——	胴部は球形を呈し、中位よりもやや下が張っている。頭部上半から緩やかに内押し、口縁部外反している。口縁部下端には、横なで整形によって生じた波が見られる。胴部下部の器表面に煤が付着。	口縁部内・外面横なで 内面横方向のなで 脇部上半 窪位の窪なで 脇部下半窪位、横位の窪削り	砂粒 普通 橙色	完存率80%
5	甕 土師器	A—— B(29.4) C 11.2	底部は外側が強み、やや上げ状態を呈する。頭部は内押しながら開いて立ち上がり、中位に最大径を持つものと思われる。二次焼成を受け、内・外面とも割離が著しい。	外側遮離き 内面なで	砂粒・砂礫 普通 にほい橙色	完存率40%
6	甕 土師器	A—— B(19.0) C 9.0	平底で、胴部はわずかに内壁しながら、斜上方に開いている。内・外面とも割離が著しい。胴部下部の外側に煤が付着。	頭部外側斜位の窪なで 内面なで 底部窪なで	砂粒・砂礫 普通 にほい橙色	完存率30%
第60問 7	小形甕 土師器	A(15.4) B(16.7) C——	胴部は球形で、中位に最大径をもつ。頭部から口縁部にかけて、丸味をもって強く外反する。口縁部は斜上方につまみ上げられている。器表面に煤が付着。	口縁部内・外面横なで 頭部中央以下 窪位の窪なで その他のなで	砂粒・砂礫 普通 黒褐色	完存率30%
8	小形甕 土師器	A(13.1) B 19.7 C 7.3	底部は平底で、胴部は球形を呈し中央部に最大径を持つ。頭部から口縁部にかけて、丸味をもしながら「く」の字状に外反する。口縁部を丸くおさめている。器表面に煤が付着。	口縁部内・外面横なで 脇部下半の一部窪なで その他のなで	砂粒・砂礫 普通 にほい橙色	完存率60%
9	小形甕 土師器	A(15.0) B 20.0 C(7.2)	底部は平底で、胴部上半に最大径をもち、底部に向かってぼぼまっている。頭部から口縁部にかけて、「く」の字状に外反する。やや反頭を呈する。胴中央部以下の器表面には煤が付着。	口縁部内・外面横なで 頭部から胴中央窪位の窪なで (刷毛目状の擦痕) その他のなで	砂粒・雲母 普通 にほい橙色	完存率70%
10	小形甕 土師器	A(18.5) B 15.9 C——	頭部は長胴で、肩部が張り、底部に向かってぼぼまっている。口縁部は緩やかに外反している。口縁部下端には、横なで整形によって生じたわざかな波が見られる。器表面には、煤が付着。	口縁部内・外面横なで 脇部外側窪位の窪なで 内面 斜方方向のなで	砂粒・スコリア 普通 にほい赤褐色	完存率80%
11	甕 土師器	A(27.0) B 15.9 C——	頭部は緩やかに内壁しながら、わずかに外上方に開き、口縁部は外反する。器表面に煤が付着。	口縁部内・外面横なで 内面なで 脇部外側窪位の窪なで	砂粒・スコリア 普通 灰褐色	完存率10% 12の底底部 片は、同一 個体と思われる。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土焼成・色調	備考
12	瓶 土師器	A—— B 15.8 C (8.2)	底部から緩やかに内側しながら、外上方に開いている。底部は全体を穿孔し、筒抜けとなっている(孔径7.6cm)。器表面には煤が付着。	胴部外面斜位の範 なで 内面などで 六端は、内・外側とも施削り	砂粒・スコリア 普通 灰褐色	完存率20%
13	瓶 土師器	A (28.7) B (15.8) B (5.6) C 10.3	胴部はわずかに内側し、斜上方に開いて立ち上がる。頸部はやや外傾し、口縁部は強く外反して開いている。胴部との境には、横なで整形による棱が見られる。 ①の底部に、底部全体を穿孔している(孔径約9.8cm)。	口部内・外側横 なで 脇部外側な で 内面などの後、 粗い瓶底の丸磨き 穴端は内・外側と も施削り	砂粒・玄母・ スコリア 普通 灰褐色	完存率40% 13-(1) 13-(2)
14	甕 土師器	A (29.8) B (6.0) C ——	頸部から口縁部にかけて大きく「く」の字状に外反し、口縁上端はさらに大きく外側に開く。口縁部に、刷毛目次の擦痕が明顯に残る。	口縁部内・外側横 なで 肩部底位の なで	砂粒 普通 にぶい橙色	完存率10%
15	広口甕 土師器	A (22.0) B (6.1) C ——	口縁部は、ほぼ直線的に外上方に開いて立ち上がる。口縁部中位に段を有し、口縁部上面には、浅い凹縫が巡っている。	口縁部内・外側横 なで	砂粒 普通 にぶい褐色	完存率5%
16	甕 土師器	A—— B (4.1) C 7.9	平底を呈する甕の底盤部で、胴下半部はやや内側突起に外上方に立ち上がる。底盤部と胴部の境は、器内が厚い。	底部外面横位の範 なで 脇下部底位 の範なで 内面 直なで	砂粒 普通 にぶい橙色	完存率10%
第61図	甕 土師器	A (16.7) B (6.8) C ——	胴部は緩やかに内側し、頸部から口縁部にかけて丸味を持つ外反する。口縁部はわざかにつまみ上げられている。口縁部上面の外側には、なで整形による棱が、内面には浅い凹縫が見られる。	頸部及び口縁部の 内・外側横なで 肩 部底位のなで(刷 毛目状の擦痕)	砂粒・砂礫 普通 褐色	完存率5%
18	小形甕 土師器	A (15.8) B (5.6) C ——	頸部から口縁部にかけて、大きく外反する。口縁部と胴部との境には、内・外側に横なで整形による棱が見られる。	口縁部内・外側横 なで	砂粒・砂礫 普通 にぶい橙色	完存率5%
19	甕 土師器	A (17.2) B (5.4) C ——	口縁部は外反し、口縁部と胴部との境には、内・外側に棱が見られる。	口縁部内・外側横 なで	砂粒 普通 にぶい橙色	完存率5%
20	甕 土師器	A (22.8) B (5.8) C ——	頸部から口縁部にかけて、丸味を持って大きく外反し、口縁部は斜上方につまみ上げられている。胴部の内面には、横なでによる1条の浅い凹縫が見られる。	口縁部内・外側横 なで	砂粒・砂礫 普通 にぶい橙色	完存率5%
21	瓶 土師器	A (21.6) B (6.8) C ——	胴上半分からわずかに斜上方に開いて立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部外側横なで その他なで	砂粒 普通 にぶい橙色	完存率5%
22	瓶 土師器	A (23.4) B (6.2) C ——	胴上半部はやや外傾し、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。	口縁部内・外側横 なで その他なで	砂粒 普通 にぶい黃褐色	完存率5%
23	鉢 土師器	A (19.0) B 9.8 C ——	やや深い丸底を呈し、体部は内側しながら開いて立ち上がる。口縁部は強く外反しながら外上方に開き、口縁部を丸くおきめている。口縁部に最大径を持つ。内・外側に煤が付着。	口縁部内・外側横 なで 脇部外側横 位の範なで 底部 外側不整方向の範 なで その他なで	砂粒・玄母・ スコリア 普通 にぶい赤褐色	完存率50%

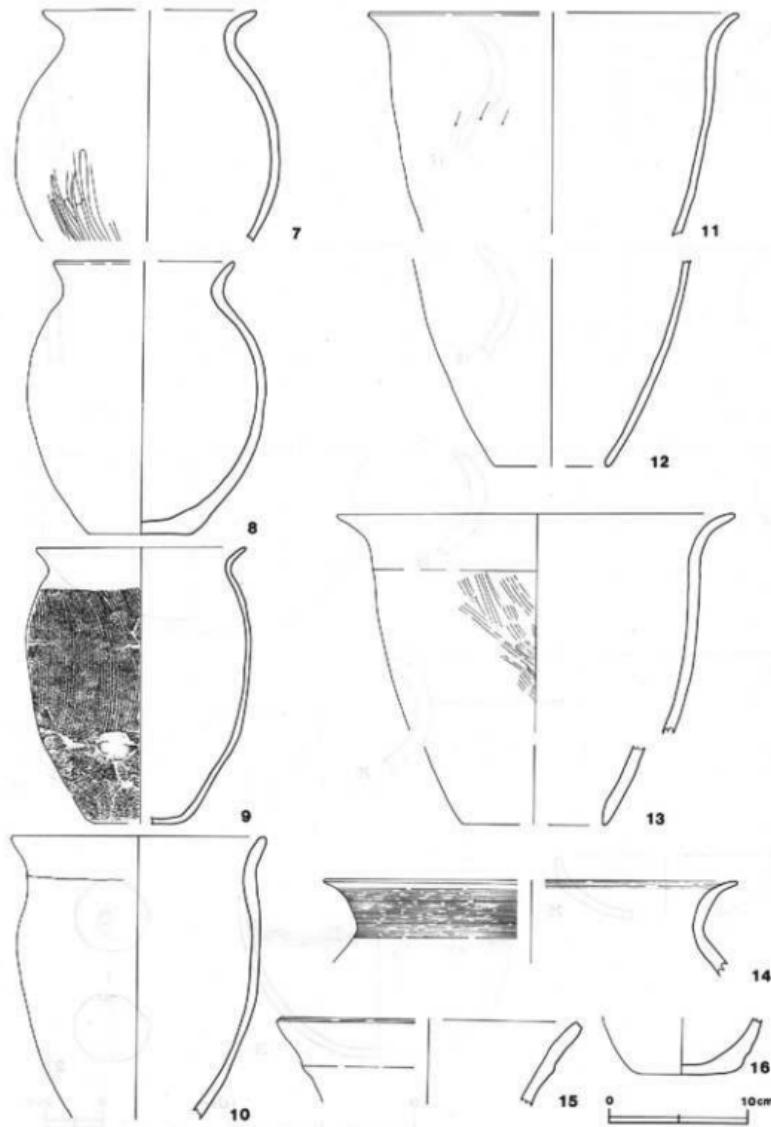
図版番号	器種	法状(cm)	器形の特徴及び文様	模形技法	粘土・焼成・色調	備考
24	环土師器	A(16.6) B(4.5)	浅い丸底を呈するものと思われ。体部は下半から内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部はほぼ直立し、上端がやや外反する。器肉が薄く、丁字な造りである。	口縁部内・外曲線などで、体部内・外面丁寧な施磨き	滑砂 良好 橙色	完存率20%
25	环土師器	A(11.8) B(3.4)	浅い丸底を呈するものと思われ。体部下半から緩やかに内側しながら、斜上方に開いて立ち上がる。口縁部はほぼ直立し、口縁部を丸くおさめている。体部と口縁部との境には縫が見られる。	口縁部外曲線などで、体部及び内面などで	砂粒 普通 橙色	完存率30%
26	球状土錘	A—— B(8.9)	体部は、底部から丸味を持って立ち上がる。体部中位の外面には横位の刷毛目、内面には横位の刷毛目が見られる。	内・外曲線などで	砂粒 普通 にほい橙色	完存率30%

第61図27は、球状土錘である。径約2.6cm、厚さ2.4cmのやや重な球形状を呈し、ほぼ中央部に径3mmの孔が穿たれている。重量は15.5gである。



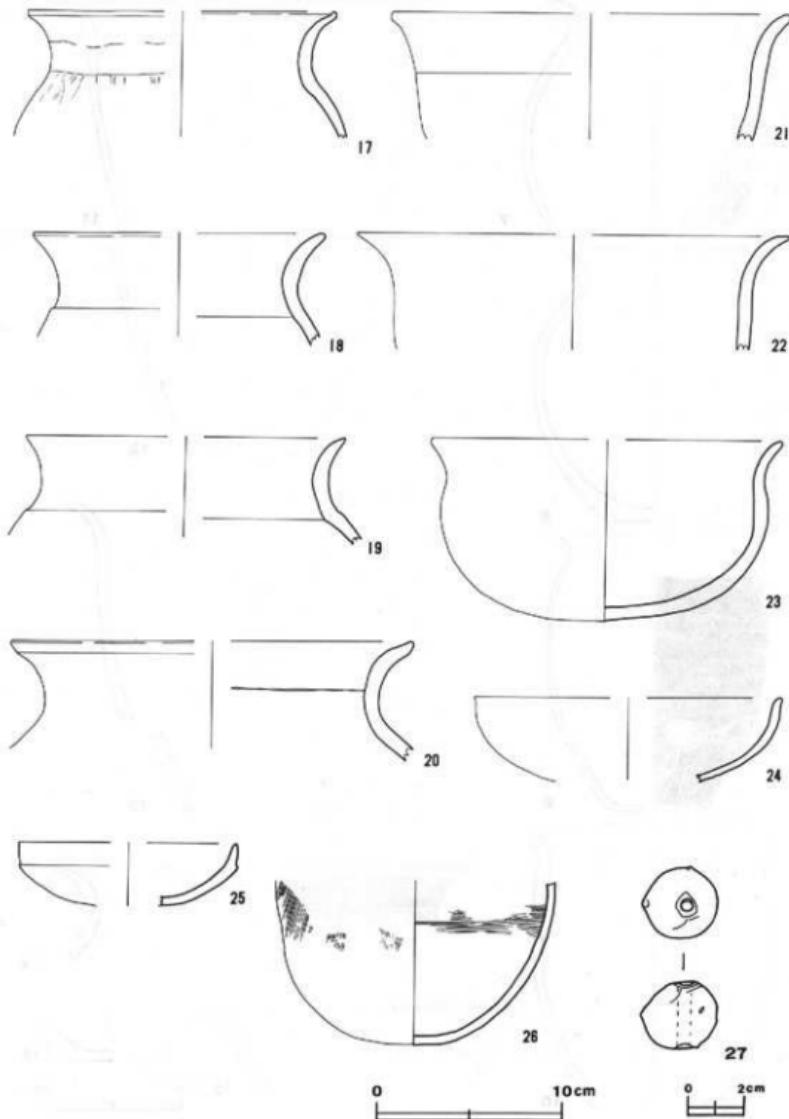
0 10 cm

第59図 第32号住居跡出土遺物実測図 (1)



第60図 第32号住居跡出土遺物実測図 (2)

1. 青銅鏡
2. 青銅鏡
3. 青銅鏡
4. 青銅鏡
5. 青銅鏡
6. 青銅鏡
7. 青銅鏡
8. 青銅鏡
9. 青銅鏡
10. 青銅鏡
11. 青銅鏡
12. 青銅鏡
13. 青銅鏡
14. 青銅鏡
15. 青銅鏡
16. 青銅鏡



第61図 第32号住居跡出土遺物実測図 (3)

沈陽宋金墓出土器物之研究 202頁

第36号住居跡（第62・63図）

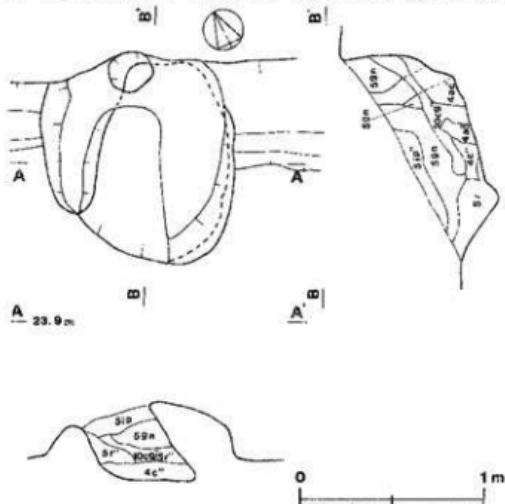
本跡は、調査区の北西部D5b₄区を中心に確認された住居跡である。北東側に第41号住居跡が隣接している。

平面形は、一辺が6.7m前後の隅丸方形を呈し、主軸方向はN-30°-Eを指している。床面積は、約31.6m²である。壁は、良好な状態で検出され、南西側の壁が斜めに立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は、南東側で62-68cm、北西側で62-66cm、北東側で62-68cm、南西側で60-66cmを測る。壁溝は壁下を全周し、上幅22-56cmで、U字状に8-12cmの深さに掘り込まれている。床面は平坦で、全体的に硬く締まっている。特に、入口部と思われるP₃の北東側や、住居跡の中央部、カマドの周辺が堅緻である。カマドは北東壁の中央部に付設されており、砂・粘土によって構築されている。袖部や煙道部は、比較的良好な状態で遺存している。カマドの規模は長径2.2m、短径2.05mを測り、北東壁を20cmほど掘り込んでいる。袖部幅55-80cm、厚み35-45cm、焚口幅90cmを測る。煙道部及び火床は焼土化し、赤色のレンガ状となっている。ピットは5か所検出され、規模や配列から、主柱穴としてはP₁-P₄の4か所が考えられる。P₅はP₁-P₄に比べ小規模で浅く、入口部に伴うものと思われる。P₁-P₄は、長径58-96cm、短径54-80cmの円形もしくは梢円形を呈し、円筒状に30-70cmの深さに掘り込まれている。P₅は長径48cm、短径40cmの梢円形を呈し、同様に22cmの深さに掘り込まれている。

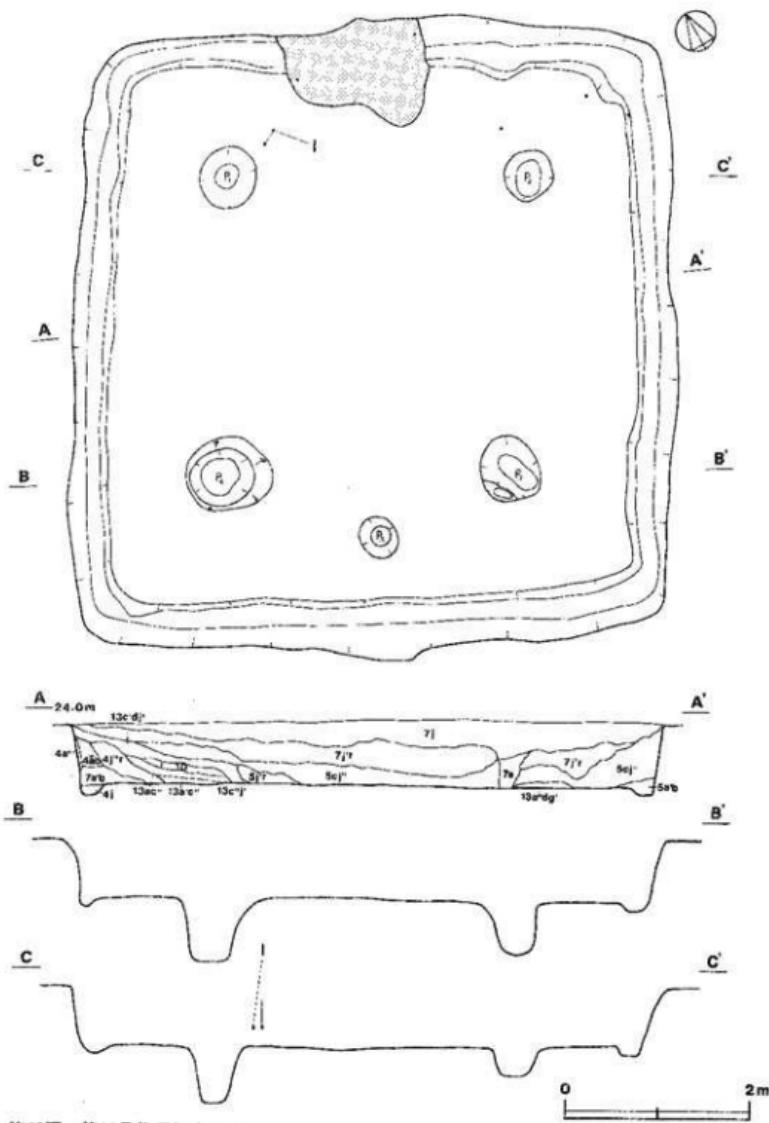
覆土は、上層から中層にかけて黒褐色土、下層には暗褐色土が自然堆積している。覆土中にはローム粒子やロームブロックを含み、下層に行くほどその量を増す。また、壁際から多量の焼土粒子や少量の炭化物を含む暗褐色土が流れ込み、床面に達している。焼失家屋と思われる。

遺物は、縄文式土器片71点、弥生式土器片4点、土師器片212点、須恵器片2点、上器片鍼（第6図1-褪文）1点、礫4点が出土している。カマドの位置する北東壁際の覆土下層からは、埴（3）や甕の口縁部片（1）等が出土している。

遺物や住居跡の形態等から、鬼高期の住居跡と考えられる。



第62図 第36号住居跡カマド実測図

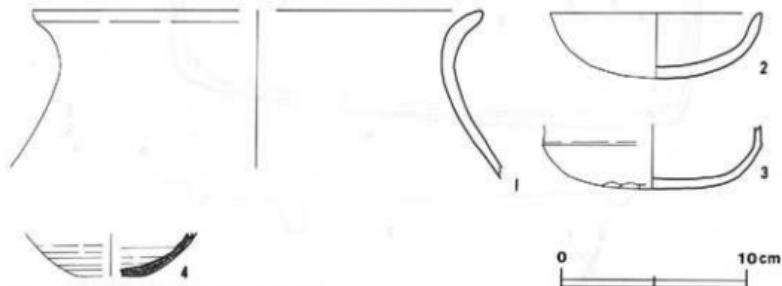


第63図 第36号住居跡実測図

出土遺物

土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第64図 1	甕 土師器	A(24.2) B(8.5)	口縁部は丸味を持って大きく外反し、口唇部はつまみあげられて起き上がる。口縁部上端に縫が見られる。内面に縫が付着。	口縁部内・外面横 なで	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	完存率5%
2	壺 土師器	A(11.4) B 3.5	浅い丸底を呈し、体部は内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横 なで その他なで	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	完存率80%
3	壺 土師器	A—— B(3.4)	底部は扁平な丸底で、体部は斜上方に開いて立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。口縁部と体部との境には、横なぎによる縫が見られる。	口縁部内・外面横 なで 内面なで 体部横位の窓なで 底部窓削り	砂粒 普通 灰褐色	完存率40%
4	壺 頭恵器	A—— B(2.3) C(3.4)	平底で、体部は内側しながら斜上方に大きく開いて立ち上がる。	底部窓切り 体部 内・外面に粘土組 巻き上げ痕	砂粒 良好 灰色	完存率10%

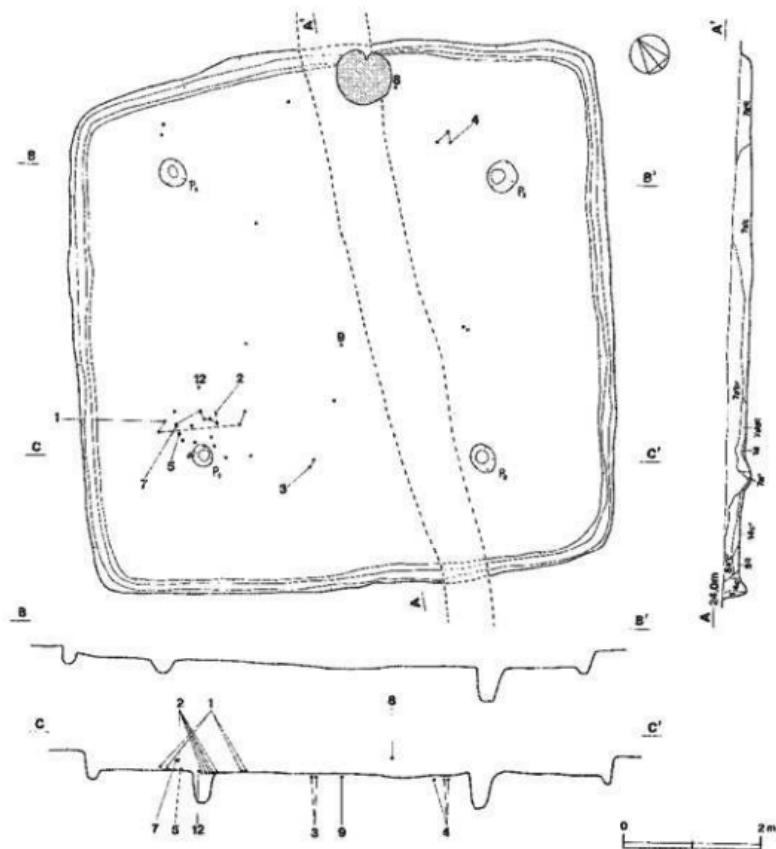


第64図 第36号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡（第65・66図）

本跡は、調査区の北西部D6a₄区を中心に確認された住居跡である。第31号住居跡の北西10.7 mに位置し、北西侧2 mほどには第1号堀が隣接する。住居跡中央部は、北東から南西方向に掘り込まれた溝によって擾乱されている。

平面形は、一辺が7.8 m前後でコーナー部にやや丸味をもつ方形状を呈し、主軸方向はN-35°-Eを指している。床面積は、約51.2 m²である。壁は、部分的に耕作による擾乱が認められる。壁高は19~36cmを測り、全体的に垂直に立ち上がり良く縮まっている。壁溝は壁下を全周し、上幅14~24cmを測り、U字状に8~14cmの深さに掘り込まれている。床面は中央部が溝によって擾乱されているが、他は平坦で硬い。カマドは、北東壁中央部を10cmほど掘り込み、砂と粘土によって構築されている。カマドの西側は溝によって破壊されており、南側の裾部と燃焼部がわずかに遺存しているにすぎない。火床は凸凹しておらず、良くなじみいている。カマドの規模は、長さ78cm、



第65図 第39号住居跡実測図

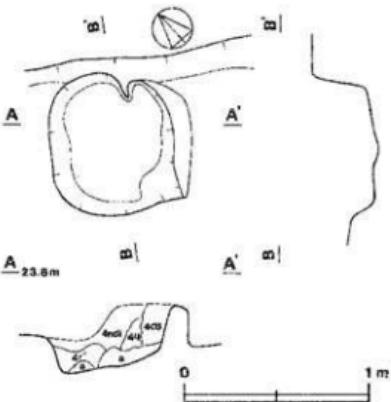
構部幅15cm、焚口幅40cmを測る。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、いずれも主柱穴と考えられる。P₁は径45cm・深さ51cm、P₂は長径45cm・短径34cm・深さ54cm、P₃は径30cm・深さ45cm、P₄は長径40cm・短径35cm・深さ26cmを測る。P₁～P₃はほぼ同規模・同深度を有し、円筒状に掘り込まれているが、P₄は他の柱穴に比べて浅く、鍋底状を呈している。

覆土は、部分的に溝や耕作による攪乱を受けているが、上層には中量のローム粒子や少量のハードローム小ブロックを含む黒褐色土、中層には多量のローム粒子と少量のハードローム小ブロック・炭化物を含む極暗褐色土、下層には多量のローム粒子と少量のハードローム中ブロック・

炭化物を含む暗褐色土、壁際には結まりのある明褐色土が自然堆積している。

遺物は、住居跡西側のP₃の周囲から多く検出されており、覆土の中・下層から繩文式土器片14点、弥生式土器片95点、土師器片455点、陶磁器片3点、支脚1点、磨製石斧1点、土器片鍾1点、礫8点、チャート片4点が出土している。西側の床面直上からは甕(1・2)や凹筒形の長形甕(5)が、カマドの覆土中からは完形の环(8)が出土している。

出土遺物や住居跡の形態等から、鬼高期の住居跡と考えられる。

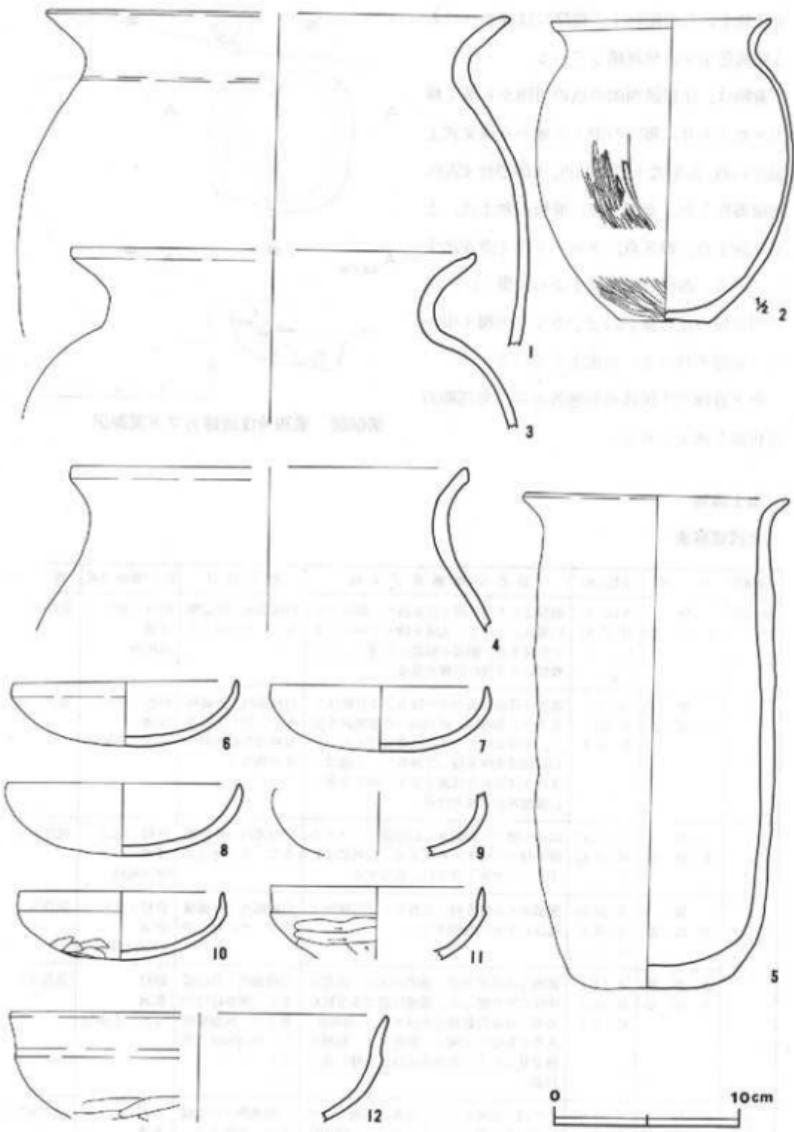


第66図 第39号住居跡カマド実測図

出土遺物

土器観察表

貯蔵番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第67回 1	甕 土師器	A(25.0) B(17.8) C-----	胴部は上半部に最大径を持ち、頸部から口縁部にかけて丸味を持ちながら大きく外反する。頸部と胴部との境に、なで整形による浅い凹線が巡る。	口縁部内・外面横 なで その他なで	砂粒・雲母 普通 灰褐色	完存率15%
2	甕 土師器	A 24.1 B 33.1 C 9.9	底部は外面中央がやや隆起し、上げ底状を呈する。胴部は、肩の張った球形状を呈し、中位よりもやや上に最大径をもつ。口縁部は丸味を持って外反し、上端はつまみ上げられれば直立する。胴上半部・口縁部外面に煤が付着。	口縁部内・外面横 なで 脚下半部及 び底部外面落着き その他なで	砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	完存率80%
3	甕 土師器	A(21.8) B(9.4) C-----	肩部が張り、頸部から口縁部にかけて丸味を持って大きく外反する。口縁部はわずかにつまみ上げられ、直立する。	口縁部内・外面横 なで その他なで	砂粒・雲母 普通 明赤褐色	完存率5%
4	甕 土師器	A(20.5) B(8.4) C-----	頸部から丸味を持って外反し、口縁部上端はわざかに内屈する。	口縁部内・外面横 なで その他なで	砂粒・雲母 普通 にぶい褐色	完存率15%
5	長形甕 土師器	A 14.4 B 26.7 C 8.7	底部はほぼ平坦で、器肉が厚い。胴部は中位がやや膨らみ、頸部付近で多少狭れるが、ほぼ円筒形状を呈する。口縁部は、大きく外反して開く。胴部には、輪積み構が見られる。器表面には、全体に煤が付着。	口縁部内・外面横 なで 頸部縮位の 迹なで 底部應割 り 内面斜位の 迹なで	砂粒 普通 にぶい赤褐色	完存率90%
6	坏 土師器	A(12.0) B 3.6	やや浅い丸底を呈し、体部は内縮しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部はわずかに内屈する。口縁部と体部との境には、わずかに被が見られる。	口縁部内・外面横 なで 内面なで 外面窪なで	砂粒 普通 にぶい褐色	完存率70%



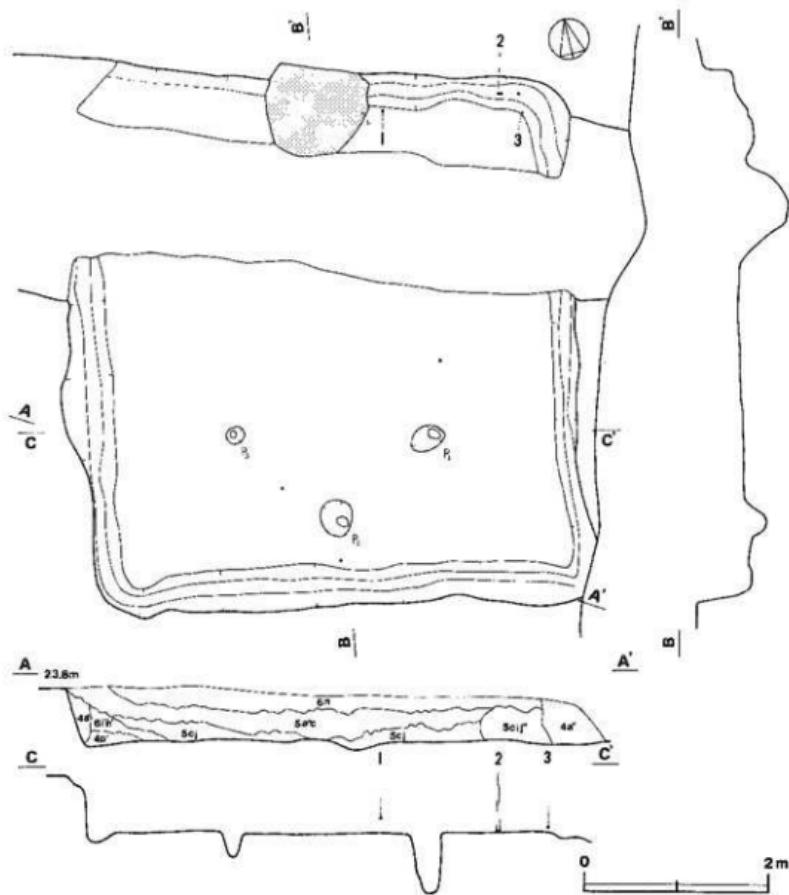
第67図 第39号住居跡出土遺物実測図

回収番号	器種	法環(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
7	环土師器	A 11.7 B 3.6	浅い丸底を呈し、体部は内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部はやや内傾し、口唇部はつまみ上げられており、器肉薄い。	口縁部内・外面横なで 底部削り その他なで	砂粒 普通 褐色	完存率95%
8	环土師器	A 12.5 B 3.9	やや深い丸底を呈するものと思われる。体部は内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部上端でやや内傾し、口唇部はつまみ上げられている。	底部外面削り その他なで	砂粒・スコリア 普通 灰黃褐色	完存率90% カマド焼土
9	环土師器	A(11.3) B(3.5)	やや深い丸底を呈するものと思われる。体部はやや内側しながら、斜上方に開いて立ち上がる。口縁部は、わずかに内側する。器表面の剥離が激しい。	口縁部内・外面横なで 内面なで 他は不明	砂粒 普通 にほい褐色	完存率60%
10	环土師器	A(11.0) B 3.8	丸底を呈し、体部は内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部はわずかに内側する。 口縁部と体部との境には縫が見られ、なで整形による浅い凹線が巡る。	口縁部内・外面横なで 内面なで 外面削り	砂粒 普通 にほい褐色	完存率70%
11	环土師器	A(11.4) B(3.9)	やや深い丸底を呈するものと思われる。体部はやや内側しながら、斜上方に開いて立ち上がる。口縁部は直立し、口唇部はつまみ上げられ、器肉が薄い。体部と口縁部との境には縫が見られ、深い凹線が巡る。	口縁部内・外面横なで 体部外面削り 内面なで	細砂・黄母 普通 黒褐色	完存率60%
12	环土師器	A(20.3) B(5.8)	丸底を呈すると思われる大形の环で、体部上半は緩く内側しながら斜上方に開いて立ち上がる。口縁部はやや外反気味に開いている。口縁部と体部との境には縫が見られ、横なで整形による浅い凹線が巡る。口縁部上端はやや丸味を持ち、縫を成す。	口縁部内・外面横なで 体部内面削り 外表面なで 体部下部削り	細砂 普通 にほい褐色	完存率10%

第43号住居跡（第68・69図）

本跡は、調査区の北西部D4e₉区を中心に確認された住居跡である。第42号住居跡の南東2mほどに位置し、北側で第10号堀、東側で第7号堀にそれぞれ掘り込まれている。

平面形は、残存する壁や壁溝の状況から、長軸5.73m、短軸5.55mの方形状を呈する住居跡と推定され、主軸方向はN-13.5°-Wを指していたものと思われる。推定床面積は、約24.4m²である。壁は、北西側でその一部が第10号堀に、東側でその大部分が第7号堀によって破壊されているため、全体的に遺存状態が悪い。残存する壁は、垂直に立ちあがり硬く縮まっている。壁高は、北側の残存部で45cm前後、西側で41~58cmを測る。壁溝は重複のため不明な部分も見られるが、残存する壁溝は、上幅26~28cmを測り、U字状に5~12cmの深さに掘り込まれている。北西コーナー部や東側の壁の大部分は、堀によって破壊されていたが、壁溝が検出されたため、ほぼ正確なプランをとらえることができた。床面は、平坦で全体的に硬く踏み固められている。特に、南側の床面は堅緻である。カマドは、北壁の中央部を50cmほど掘り込み、粘土や砂によって構築さ



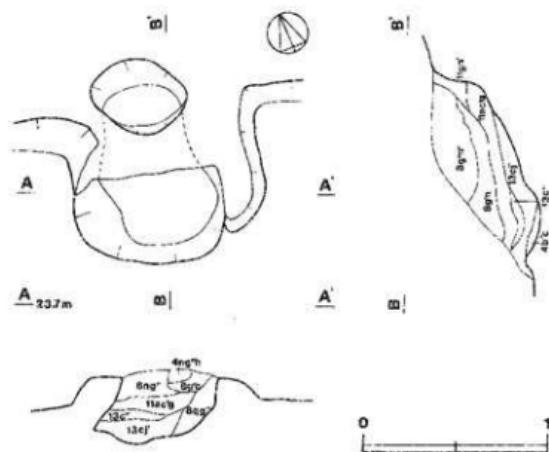
第68図 第43号住居跡実測図

れている。造存状態は比較的良好で、天井部、両袖部、煙道部が遺存している。煙道部から焚口部までの長さは1.1m、袖部幅0.25mを測る。燃焼部は、床面を楕円形状に20cmほど掘り込んでおり、カマド内には、天井の一部が崩落した際に堆積したと思われる砂質粘土が多量に含まれており、中～下層には灰や焼土が堆積している。火床は熱を受け良く焼けており、東側の袖部の外側からは、支脚が出土している。ピットは3か所検出され、規模や配列からP₁・P₂が上柱穴と考えられる。P₁は長径37cm、短径25cmの楕円形を呈し、U字状に65cmほど掘り込まれている。P₂は径

18cmほどの円形を呈し、同様に30cmほど掘り込まれている。配列から主柱穴は4本と考えられるが、他の主柱穴は、第10号壙によって被壊されてしまったものと考えられ不明である。 P_2 は入11部に伴うピットと考えられ、長径40cm、短径37cmの梢円形を呈し、皿状に25cmほど掘り込まれ

ている。

覆土は、上層に極暗褐色土、中・下層に暗褐色土、壁際に褐色土が自然堆積している。覆土中には、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物が含まれている。特に、壁際には多量の焼土粒子や炭化物が含まれていることから、焼失家屋とされる。また、第10号壙と重複する北東側の覆土は、上面から第10



第69図 第43号住居跡カマド実測図

号壙によって掘り込まれており、多量のロームやハードロームブロック・粘土によって埋め戻されている。

遺物は、住居跡の南側の覆土中から、縄文式土器片3点、弥生式土器片15点、土師器片48点、須恵器片1点、礫1点が出土している。

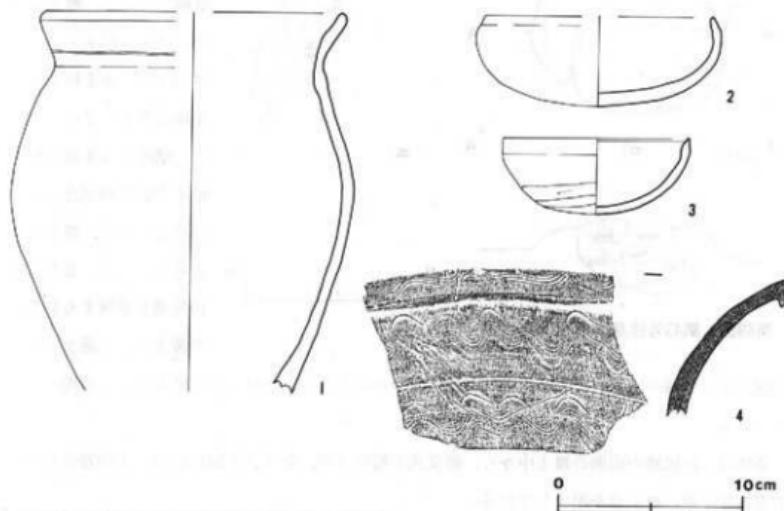
遺物や住居跡の形態から、鬼高湖の住居跡と考えられる。

出土遺物

土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形手法	胎土・焼成・色調	備考
第70図 I	甕 上 部 器	A 16.0 B(11.5) C ---	肩部中位よりもやや上に最大径をもち、胴部下半は底部に向かってすぼまっている。口縁部は、直線的に外傾して立ち上がり、口唇部は内傾する。口縁部には、横なで整形による1条の朱引線がある。	口縁部内・外面横なで 内面なで 刷毛外表面で整形の後、下半部底位の裏なで	砂粒 多邊 に赤い赤褐色	完存率63%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
2	环土器	A(12.4) B 4.9	丸底を呈し、底部から緩やかに内厚しながら斜上方に向いて立ち上がり、体部上半から口縁部にかけて強く内厚する。口縁部と体部との境に、わずかな縦が見られる。	口縁部内・外面横なで 内面なで 外面亂磨き	細砂 良好 灰黄褐色	完存率15%
3	环土器	A(10.1) B 4.1	やや深い丸底を呈し、体部は内厚しながら斜上方に向いて立ち上がる。口縁部は直立する。口縁部上端の内面には、浅い凹窪が這る。	口縁部内・外面横なで 内面なで 外面亂磨き	砂粒・雲母 普通 にぼい赤褐色	完存率80%

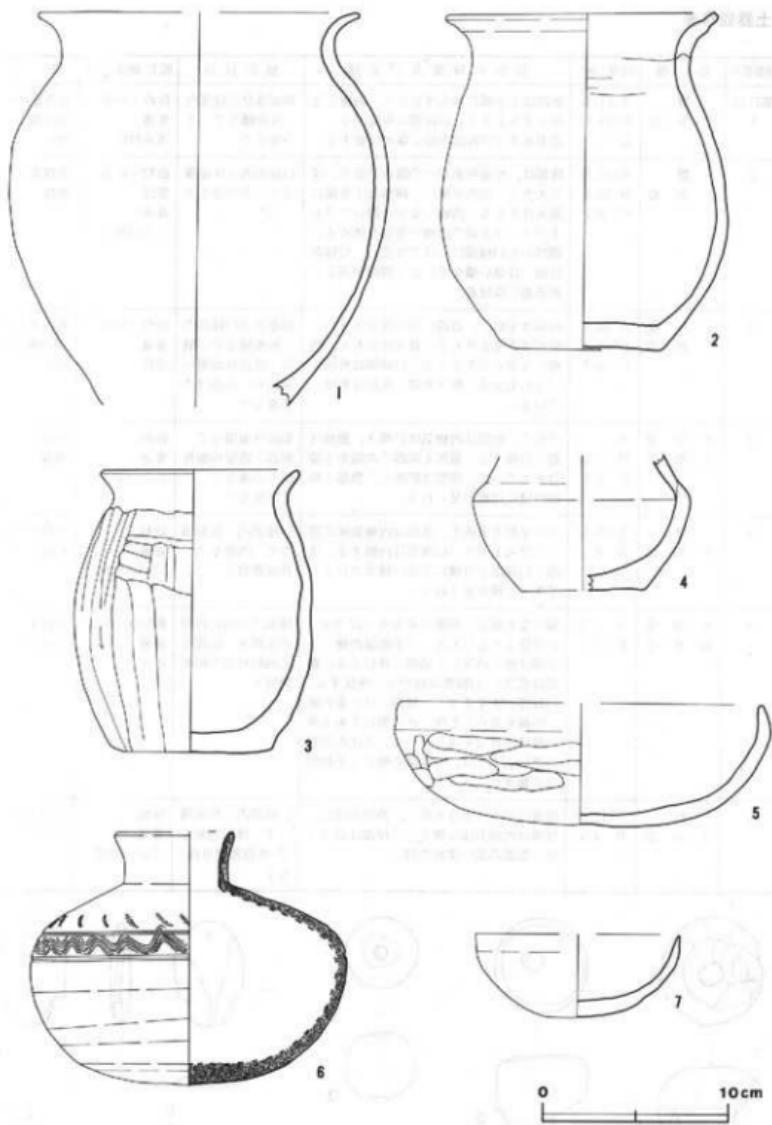


第70図 第43号住居跡出土遺物実測・拓影図

第70図4は、第43号住居跡から出土した須恵器の拓影図である。菱形土器の口縁部片で、口縁部は外側に折返され、大きく下方に突き出している。口縁部や頸部には横位の櫛描波状文(10本1条)が施され、内・外面には横なでが加えられている。胎土には砂粒や砂礫を含み、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。

2 遺構外出土遺物

(1) 土器 (第71図)

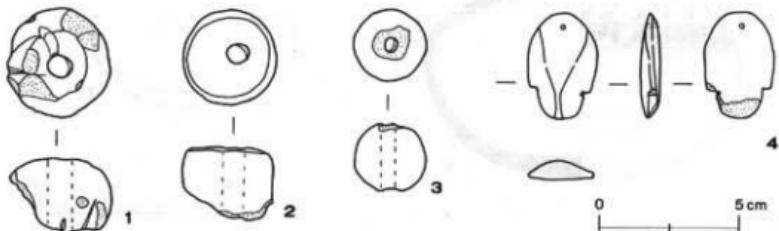


第71図 遺構外出土遺物実測図 (1)

3. 遺構外出土遺物実測図 (1)

土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第71図 1	甕 土師器	A(17.4) B(21.3) C——	胴部は上半部に最大径をもち、内縫しながら立ち上がる。口縁部は外反する。 器表面及び口縁部内面に煤が付着する。	頸部及び口縁部内 ・外面横なでその他のなで	砂粒・砂礫 普通 浅黄橙色	完存率60% SI31覆土中 混入
2	甕 土師器	A(14.3) B 18.4 C 8.7	底部は、外圓中央がやや盛る平底で、径 が大きく、器肉が厚い。胴部は下半部に 最大径をもち、内縫しながら開いて立ち 上がり、上半部で内縫の度合を強める。 頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部 外面には強い横なでによる凹線が巡る。 器表面に煤付着。	口縁部内・外面横 なでその他のなで	砂粒・砂礫 普通 にぶい橙色	完存率95% 表採
3	小形甕 土師器	A 10.7 B 15.4 C 8.7	底部は平底で、器高に比べ径が大きい。 胴部は中位よりも下に最大径をもち、内 縫しながら立ち上がる。口縁部は外反し て立ち上がる。胴下半部、底部は肥厚し ている。	頸部及び口縁部内 ・外面横なで胴 部・底部外面粗 い鹿削り・内面横位 の窪なで	砂粒・砂礫 普通 橙色	完存率95% SI33覆土中 混入
4	小形壺 土師器	A—— B(7.3) C 5.6	平底で、胴部は内縫気味に開き、頸部は 強く内傾する。頸部を胴部の内側から接 合させている。底部は肥厚し、頸部と胴 部の境には縫が見られる。	頸部外面横なで 胴部・底部外面鹿 削りの後なで その他のなで	砂粒 普通 にぶい黄橙色	完存率30% 表採
5	鉢 土師器	A(19.5) B 6.7	やや平坦な丸底で、体部は内縫気味に開 いて立ち上がり。口縁部は内傾する。体 部と口縁部との境には強い横なでによっ て生じた縫が見られる。	口縁部内・外面横 なで 内面なで 外面鹿削き	砂粒 普通 にぶい赤褐色	完存率90% F7g区
6	短頸壺 須恵器	A(6.2) B 13.5	扁平な丸底で、胴部は最大径(17.2cm) を中心より上にもち、下半部は内縫し上 半部は強く内反して頸部に移行する。頸 部は直立し、口縁部は縛やかに外反する。 口縁部の大半を欠く。肩部には2条の細 い凹線を巡らした後、その間に7本1条の 櫛描波状文を施している。上位の凹線 の間に上方には、7本1条の櫛による刺突 文が施されている。	体部は右回転利用 の水挽き 底部は 右回転利用の回転 鹿削り	細砂粒・砂粒 普通 灰オリーブ色	完存率95% D6b4区
7	壺 土師器	A(11.0) B 4.5	底部はやや平坦な丸底で、器肉が厚い。 体部は内縫気味に開き、口縁部は直立す る。器高の高い深めの壺。	口縁部内・外面横 なで 体部内面な で 外面鹿削り後 なで	砂粒 普通 にぶい橙色	完存率60% F7g4区



第72図 遺構出土遺物実測図 (2)

(2) 土製品（第72図）

1・2は、管状土錐の破片である。1はE8js区から出土したもので、中央部に径約1mmの孔が穿たれている。現存長3.9cm、現存幅3.7cm、現存厚2.8cm、重量30gを測る。2はG8as区から出土したもので、径約3.3cmの円筒状を呈し、中央部に径5mmの孔が穿たれている。現存厚2.6cm、重量29.8gを測る。3は球状土錐である。径2.6cm、厚さ2.4cmの球形状を呈し、中央部に径4mmの孔が穿たれている。重量は14gを測る。

(3) 石製品（第72図）

4は、第468号土坑の覆土から出土した石製模造品である。両側に¹⁵区を入れた刀子、または斧の模造品と思われる。先端部には、径1mmの孔が穿たれている。現存長3.8cm、現存幅2.5cm、最大厚0.7cm、重量8.8gを測る。石質は滑石である。

第5節 中世の遺構

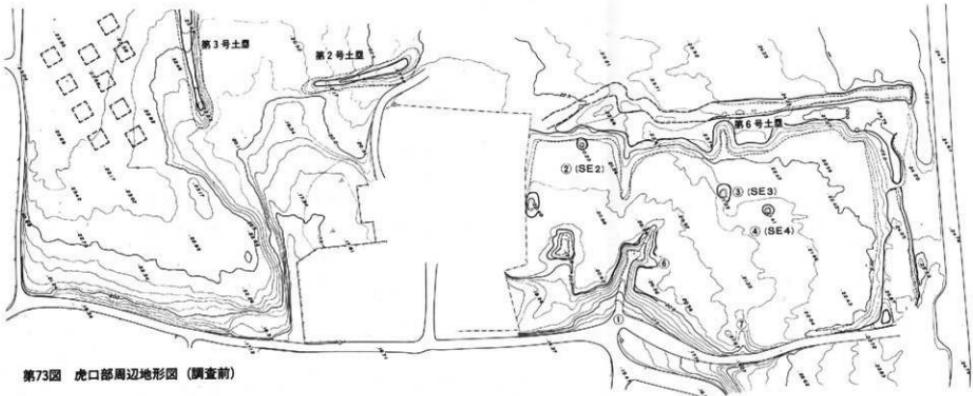
当遺跡は、第3章第1節の1で述べた様に、縄文時代から古墳時代、中・近世に亘る複合遺跡である。本節では、中世の屋代城に伴う虎口・土塁・堀と、中世に属すると考えられる住居跡状遺構・土坑等について記載することにする。土坑については、特徴的なものは文章表記し、他は図版に掲載した。

1 虎口

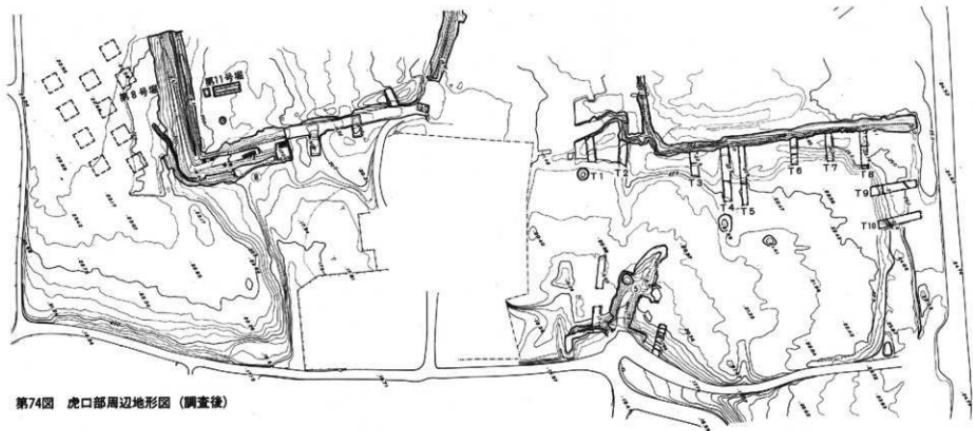
(1) 虎口の想定（第73図）

屋代城に伴う虎口は、調査前の地形や残存する土塁の位置等から、桂昌寺に面した東側台地部に見られる開削部（F9・G9区）と、南東側傾斜地（H7区）に残存する第2号土塁と第3号土塁との開口部の2か所を想定し、調査を進めた。

東側台地に検出された開削部（第73図-①）は、東側から流入する自然の谷津頭を巧みに利用し、南東から北西方向に開削・整形されている。（開削部は）上幅が6m、下幅が1～2mで、U字状に掘り込まれている。両壁面の斜度は約57°である。開削部は10°前後の緩い登り坂となっており、入口部と先端部では4mほどの高低差がある。入口部から先端部までの長さは23mほどで、中央部で「ノ」状に屈曲し平坦面に至る。前方には、台地の平坦面をL字状に囲む第6号土塁が位置する。当初は、開削部が「ノ」状に屈曲し防禦上の効果を高めていることや、正面に土塁が位置すること等から、虎口と想定して調査を進めた。しかし、東側台地部は、⑦後世に（江戸時代か）人為的に削平され、大きく三地区に区画されていること、⑧それぞれの区画内に各々一基ずつの井戸跡が検出されていること（第73図-②③④）、⑨第6号土塁や井戸の覆土、台地の平坦面（削平部）からは近世の陶磁器片や銭（寛永通寶）が主として出土していること、⑩開削部中央の「ノ」状の屈曲は、その南壁に井戸（第74図-⑤）が掘られたために屈曲したもので、本来は直線的なものであり、防禦上の効果を高める性質のものではないこと、⑪小規模ではあるが、開削部中央（第73図-⑥）や北東側（第73図-⑦）に屋敷の入口と思われる開削部が存在すること等が明らかとなり、この開削部は虎口ではなく、近世に存在したと思われる屋敷の入口である可能性が強い。以上の理由から、東側台地部から検出された第6号土塁・平坦地・開削部・井戸等は、屋代城に伴うものではなく、近世の屋敷跡に伴うものと考えられる。屋代城に伴う虎口は、先に述べた南東側傾斜地に位置する第2号土塁と第3号土塁との開口部（第74図-⑧）と断定し、以後、この地点を虎口と称し、以下に記載する。



第73図 虎口部周辺地形図（調査前）



第74図 虎口部周辺地形図（調査後）

(2) 虎口（第74・76図）

虎口は、南東側傾斜地（H7区）に位置する第2号土壘・第3号土壘の開口部（第74図-⑧）と考えられる。この地区は自然の傾斜地となっており、1～2mの厚さに黒色土が堆積している。虎口の北東側に位置する桂昌寺方向からは、南西方向に幅17～30mの谷津が湾入し、その一部が西南西の方向に分岐し、虎口や第2・3号土壘が構築されているH6・7区や南側台地のI6区に達している。標高は、谷津面で15m、虎口部付近で20m、南側台地の谷津頭付近で23.5m前後である。土壘はこの傾斜地に位置し、第2号土壘は北東から南西方向に、第3号土壘は北西から南東方向に構築されている。第2号土壘と第3号土壘は互いに直角方向に位置し、その先端部は21mほど の幅で開口している。土壘の外側（城外）には、上幅6m、下幅1m、深さ3m前後のV字状に掘られた薬研堀（第8号堀）が巡らされている。虎口は、この第2号土壘と第3号土壘の開口部と考えられる。虎口と考えられる箇所の第8号堀壁面下位からは、直径50～60cm、深さ50cm前後の円筒形に掘り込まれたビットが4か所検出されている。このビットは、橋脚の柱穴跡と思われる。また、堀の内側の開口部には、黒色土の上のハードローム面を階段状に整形した痕跡が認められる。虎口の正面（城内）には、第3号土壘と直交する上幅2.5m、下幅0.5m、深さ1.5m前後の薬研堀（第11号堀）が南西から北東方向に掘り込まれている。これは、虎口から侵入した敵の直進を妨げる、防禦上の効果をねらったものと考えられる。第11号堀の覆土の堆積状況から、その内側には土壘が築かれていたことが考えられるが、残存していない。虎口に至る通路としては、虎口を正面とし、その左手の台地（南側台地）堀部を南東から北西方向に緩やかに上る、幅1～2m前後の現農道が考えられる。虎口に向う敵は、台地上から側面攻撃を受けることになり、虎口に達した敵は、正面・側面・背面の三方から攻撃を受けることになる。

また、虎口と思われる部分はD4区やD6区からも検出されているが、これらについては本節3の第10号堀の項で扱うこととする。

注

- (1) 黒色土の堆積状況や時期については、天野洋司先生の御指導を賜った。黒色土は、7,000～1,000年前に堆積したものであり、屋代城が構築された中世当時の地形は、現在とほとんど変わらないことが確認された。

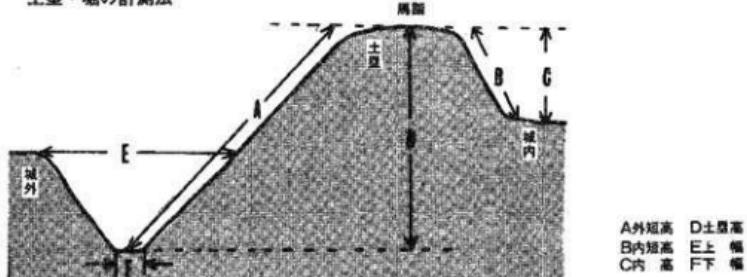
2 土壘

本年度調査区内からは、屋代城に伴う土壘が4か所（第1～4号土壘）検出されている。第1号土壘は、主郭を形成する土壘の一つであり、第2号土壘・第3号土壘は虎口部を形成する土壘である。第4号土壘は、第3号土壘の盛土中から検出されている。その他に、東側台地からは、

近世の屋敷跡に伴うと考えられる第6号土塁が検出されている。

ここでは、屋代城に伴う第1号から第4号土塁について述べることにし、第6号土塁については、第3章第6節の5で扱うこととする。

土塁・堀の計測法



第1号土塁（第75図）

位 置

本跡は屋代城の北側の土塁で、主郭の北東側（調査区の北西側D5区）に位置している。土塁の外側には、上幅6m、下幅2m、深さ3m前後の第7号堀（薬研堀）が巡らされている。南西側20mほどには、屋代城の西側の土塁である第5号土塁が、北東から南西方向に構築されている。第1号土塁と第5号土塁は、ほぼ直角に構築されており、北西側が開口している。この開口部には、主郭部からクランク状に屈曲しながら延びる古道と思われる農道が通っている。また、第7号堀と重複する第10号堀からは、橋脚の柱穴痕と思われる規則的に配列されたピットや、堀の一部を埋戻し通路として使用したと思われる、版築された部分が検出されている。

方 向

主軸方向はN-70°-Wで、南東から北西方向に構築されている。

規 模

土塁の基底面の最大長は36.5m、最大幅は基底面で11.5m、頂上部で5mを測る。また、土塁高5.8~6m、外短高7.15~7.8m、内短高5.4~6.2m、内高2.15~2.6mで、斜度は内側（城内）で23.5°~25°、外側（城外）で51.5°~53°を測る。土塁の頂部と現地表面との比高は2~2.5mである。土塁の規模は、盛土が周囲に流れしており、構築時の状況とはやや異なっている。

構築状況

基底部を、周囲の現地表面より40cmほど上に残存する旧地表（黒褐色土）の上面に置き、ローム・黒褐色土・暗褐色土・ハードローム・粘土の順に盛り上げ、外表にはロームを置いている。基底部から土塁の中段付近までは版築されており、両側が高く、中央部がくぼんでいる。土塁の

両側をまず固めて皿状にし、その上に盛土していることが窺える。土塁の土は、外側に掘り込まれた第7号堀の掘り上げ土を用いており、盛土の層序が、堀の自然層序と逆転していることが観察できる。また、第7号堀の壁面に横列する多数のピットは、盛土の崩れを防ぐ土止め用の杭の痕跡と考えられる。

注

(1) 現地表面は、耕作等により削平されているものと思われる。

その他

土塁の馬踏の南東端は、他の部分に比べ広い平坦面となっており、ここには、江戸時代（宝永5年）の石造の稻荷様が祀られていた。祠付近の土塁表土からは、6枚の寛永通寶が出土している。

第2号土塁（第76図）

位置

第2号土塁は、第3号土塁や第8号堀と共に屋代城の虎口部を形成する土塁で、主郭の南東側（調査区の南側G7・H7区）の傾斜地に位置している。第2号土塁の外側には、第1号堀（主郭を囲む外堀）と接続する第8号堀が、「匁」状に掘り巡らされている。南西側には、本土塁に対して直角方向に第3号土塁が構築されている。

方向

主軸方向はN-17°-Eで、北東から南西方向に構築されている。

規模

土塁の基底面の最大長は30.5m、最大幅は基底面で6.4m、頂上部で2.3mを測る。また、土塁高3.5m、外短高3.9m、内短高0.8m、内高1.1mで、斜度は内側で29.5°、外側で63°を測る。土塁の頂部と現地表面との比高は、内側で1m、外側で3m前後である。土塁の頂部は、北東側が最も高く標高23.98m、南西側が最も低く22.17mであり、比高は約1.8mである。この地区は自然の傾斜地（谷津）となっており、北東側で標高23m、南西側の虎口部付近で20m前後を測る。土塁は一部削平され、また盛土も周間に流れているため、本来の形状や規模とはやや異なっている。

構築状況

基底部を黒褐色土（立川ローム第2暗褐色土〈BBII〉）の上に堆積するハードロームの上面に置き、黒褐色土と暗褐色土を交互に盛り上げている。盛土の上層には、第8号堀の掘削面に見られる浅黄色の粘土が多量に含まれており、第8号堀の掘り上げ土を盛土していることが観察される。

第3号土塁（第76図）

位 置

第2号土塁とともに、屋代城の虎口部を形成する土塁で、主郭の南東側（調査区の南側H6区）の傾斜地に位置している。土塁の外側には第8号堀が掘り込まれており、第3号土塁の下からは第4号土塁、第9号堀が検出されている。

方 向

主軸方向はN-72°-Wで、北西から南東方向に構築されている。第2号土塁に対して直角方向に位置する。

規 模

土塁の北西側2分の1ほどは、昭和61年度調査区に延びている。本年度調査区内における基底面の最大長は30.5m、最大幅は基底面で5.4m、頂上部で2.8mを測る。土塁の全長は69m前後であり、基底面や頂上部の軸は土塁の北西端のH5区（昭和61年度調査区）で最大となっている。調査区内における土塁高は3.8m、外短高4.8m、内短高3.8m、内高2.7m前後で、斜度は内側で39~45°、外側で50~53°である。現地表面との比高は、1.7~2.7mである。第3号土塁は第2号土塁に対して直角方向に構築されており、その先端部（南東側）は、第2号土塁の延長線よりも3.5mほど外側に突き出している。盛土は周間に流れしており、構築時の状況とはやや異なっている。

構築状況

調査の結果、第3号土塁の下から新たに第4号土塁、第9号堀が検出された。第3号土塁は、先に構築された第9号堀の外側に新たに規模の大きな第8号堀を掘り、第9号堀や第4号土塁の上に第8号堀の掘り上げ土である黒褐色土や粘土を盛土している。黒褐色土は、色調や含有物により12層に細分することが可能である。黒褐色土中には、ローム粒子やハードロームブロック、粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子等が少量含まれている。粘土は土塁の上層に盛土されており、盛土の層序が堀の自然層序と逆転していることが観察できる。土塁の上面は、暗褐色土によって覆われている。

そ の 他

第3号土塁・第8号堀の調査によって、第3号土塁下から検出された第4号土塁・第9号堀との新旧関係が明らかとなった。第4号土塁・第9号堀の構築後、防禦をより堅固にするために第3号土塁や第8号堀が構築されたものと思われ、新旧関係は第1号堀でも確認されており、屋代城が数度に亘って規模拡大されていることが窺える。

第4号土壙（第76図）

位 置

主郭の南東側（調査区の南側H6区）に位置し、第3号土壙の下から検出されている。土壙の外側には、第9号堀が掘り込まれている。

方 向

第3号土壙と同様、N--72°-Wに主軸を持ち、北西から南東方向に構築されている。

規 模

トレンチ調査により、3か所で断面観察を行った。断面観察地点における基底面の最大幅は、2.5~2.7m、頂上部で0.65~0.85mを測る。また、土壙高2.5~2.6m、外規高2.65~3.05m、内規高2.6~2.7m、内高1.7~2.1mで、斜度は内側で39~51°、外側で59~64°である。

構築状況

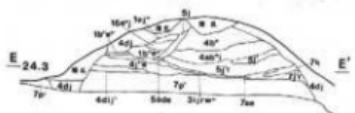
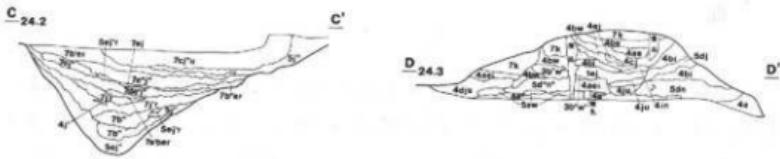
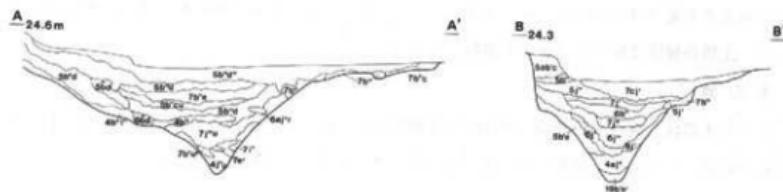
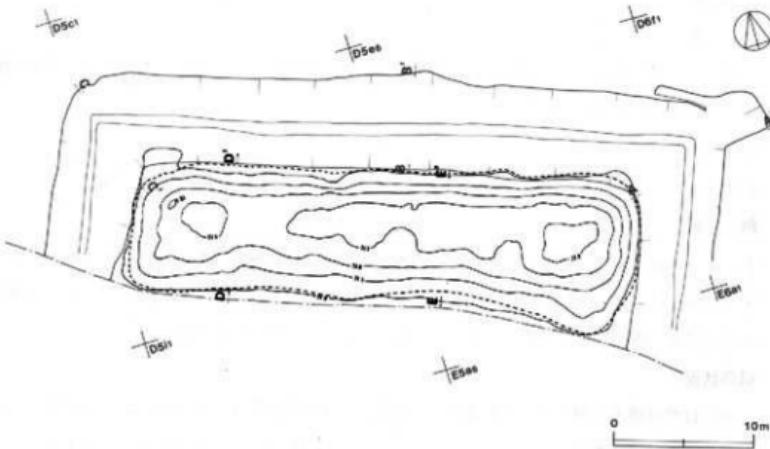
谷津に自然堆積する黒色土を基底面とし、褐色土や黒褐色土を1~1.5mの高さに盛土している。褐色土中には、多量のハードロームブロックや少量の粘土ブロックが、黒褐色土中には、多量の粘土や少量のローム粒子・砂が含まれている。盛土には、第9号堀の掘り上げ土を使用しており、土壙の層序は堀の自然層序と逆転している。

その 他

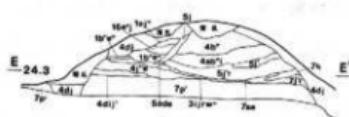
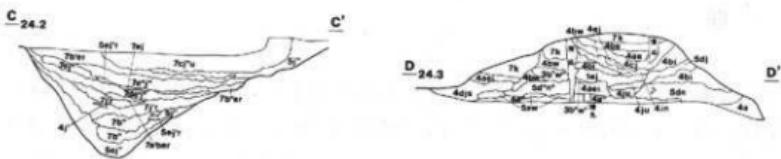
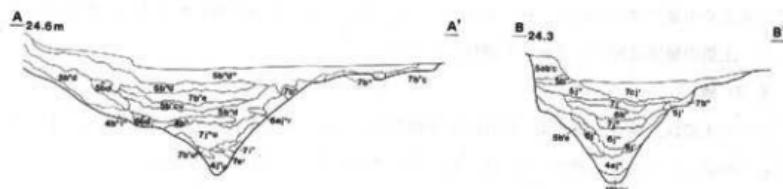
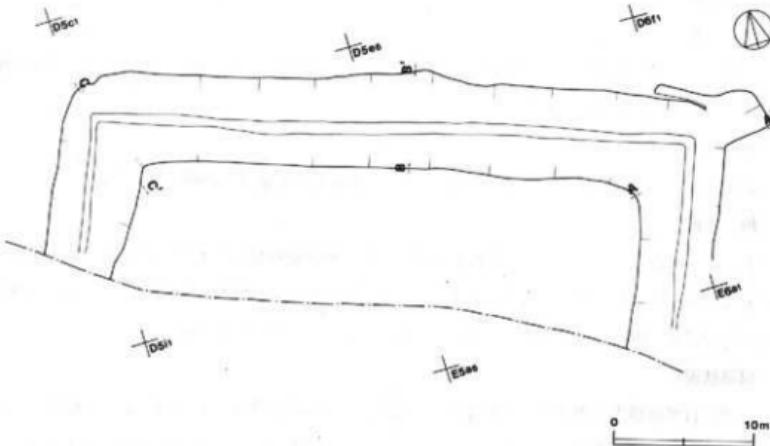
第4号土壙は、調査区北西端（昭和61年度調査区との境界）の第3号土壙断面においてもその存在が確認されており、調査区外の第3号土壙下に延びていることが予想される。

3 堀

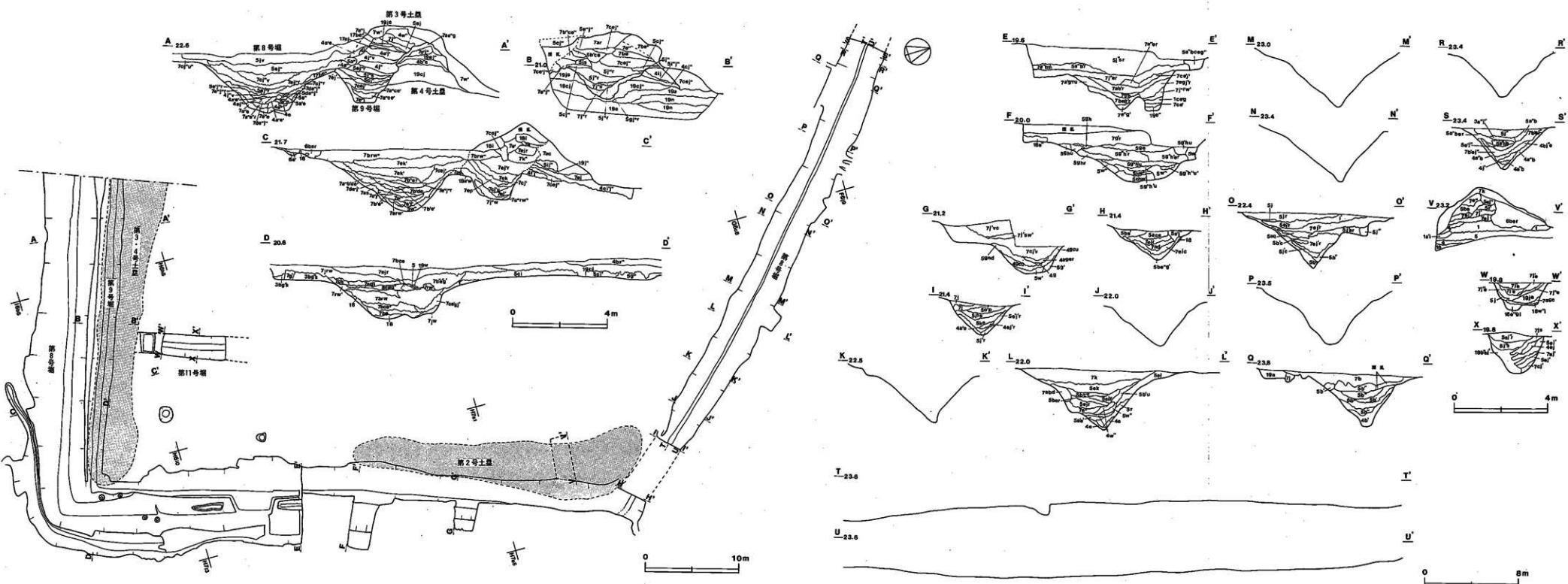
本年度調査区内から検出された堀は、第1号(SD4)・第7号(SD34)・第8号(SD35・36B)・第9号(SD36A)・第10号(SD64・68)・第11号堀の6条である。これらは全て、屋代城に伴うものである。第1号堀は、長さが東西約180m、南北約210mの規模を有し、主郭をほぼ方形状に囲む外堀であり、今年度は、昭和59年度の延長部分の調査を行った。第7号堀と第10号堀は、第1号土壙の外側に掘られた堀であり、新旧関係が認められ、第7号堀の方が新しいことが明らかとなった。第8号堀は、第2号土壙や第3号土壙と共に虎口部を形成する堀であり、第9号堀は第3号土壙の下から検出されている。第11号堀は虎口の防禦効果を高めるために構築されている。第11号堀を除くこれらの堀は、さらに昭和61年度調査区へと延びており、その全容については、今後の調査結果を待たなければならない。調査に際しては、溝と同一記号(SD)を用いたが、以下記載する堀の名称については、屋代B遺跡Iの報告書との統一を図った。



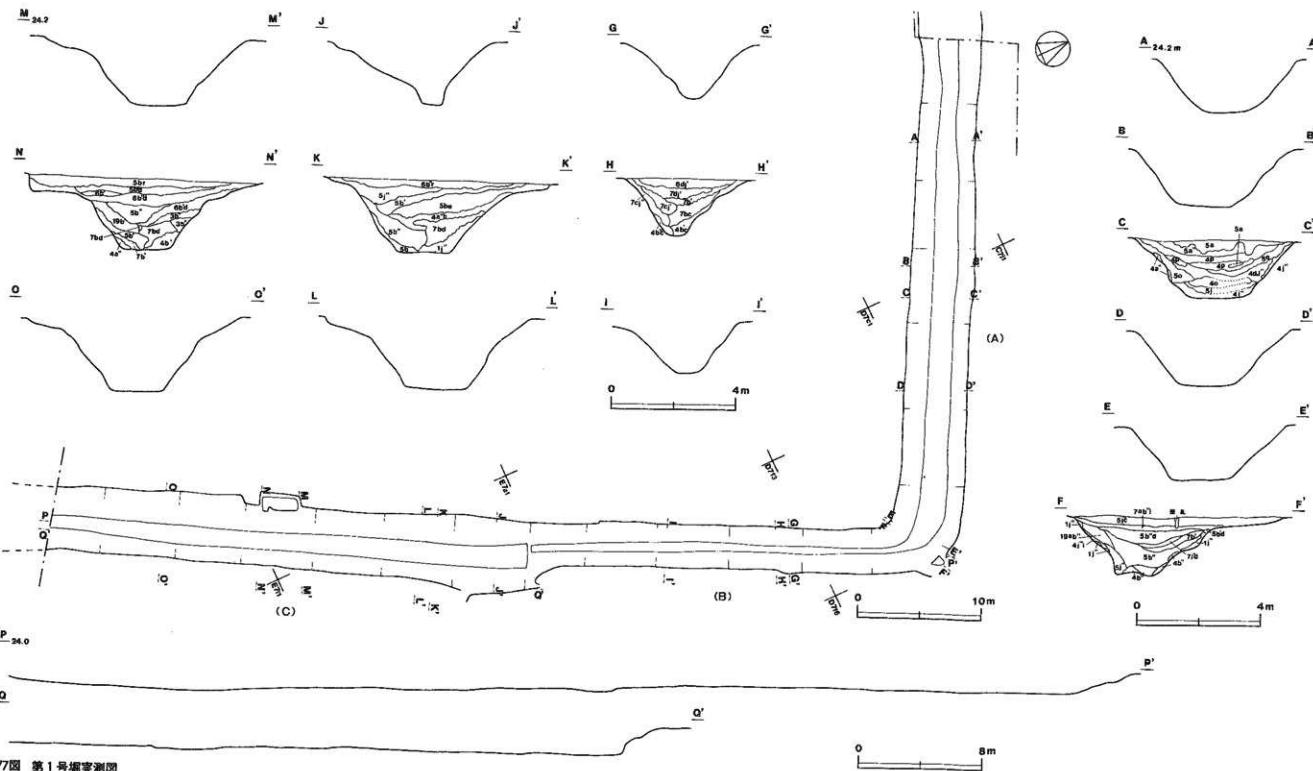
第75図 第1号土壘・第7号堀実測図



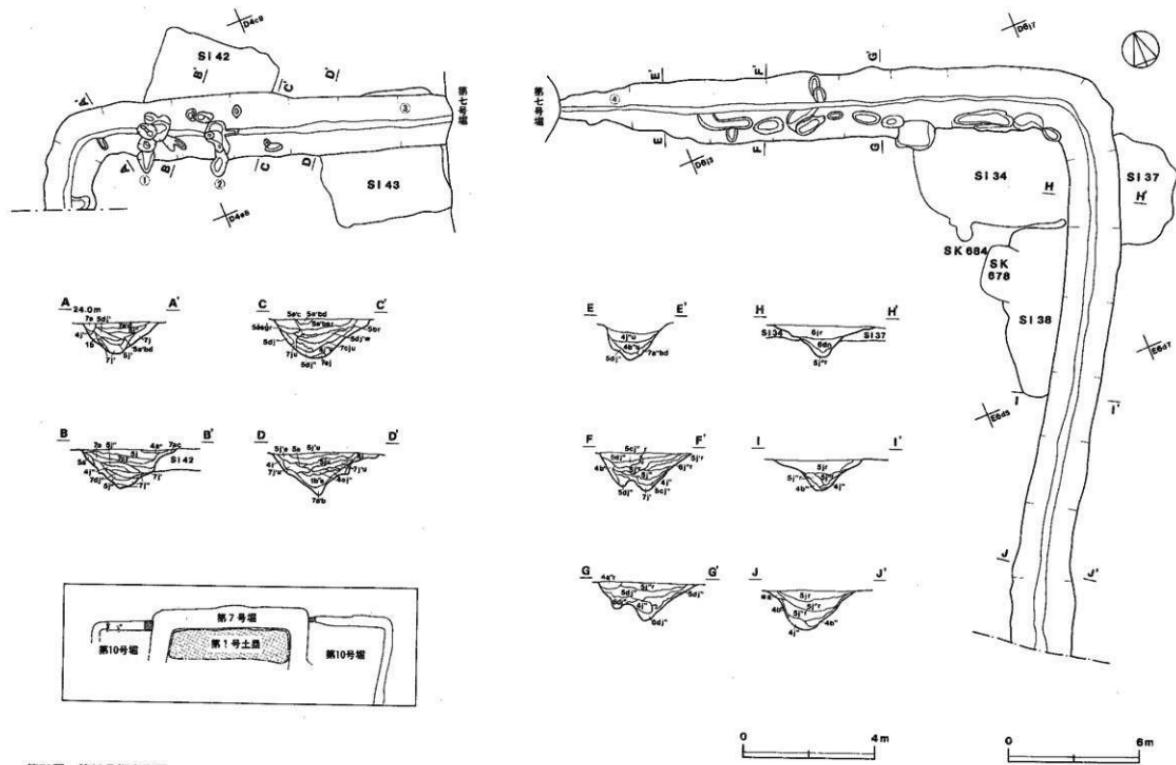
第75図 第1号土壘・第7号堀実測図



第76図 虎口・土塁(第2~4号)・堀(第8・9・11号)実測図



第77図 第1号坑実測図



第78图 第10号堤实测图

第1号堀 (SD4 第77図)

本跡は、昭和59年度調査区で検出された堀の延長部分で、C6・D7・E6・E7の各区にまたがって検出されている。E6区の南西側は調査区外となっているが、ボーリング調査により、堀はさらに南西側に延びていることが確認されている。本跡はD7ds区で第26号住居跡(弥生時代)、E6e区で第27号住居跡(古墳時代)を掘り込んでいる。

堀は、C6・D6・D7区で主軸方向をN-63°-Wにとり、上幅4.5~5.5m、下幅1.3~2.1m、深さ1.8~1.9mを測る。壁は43~51°の傾斜で立ち上がり、底面は平坦で逆台形状(箱築研堀状)に掘られている〔図中(A)〕。昭和59年度調査区との境界(C6is区付近)から南東へ39mほどの所でほぼ直角に屈曲し、そこからさらに74mほど南西方向(N-28°-E)に延びた所で、昭和61年度調査区に達する。第1号堀の東西(北西-南東)間の長さは、昭和59年度調査分と合わせると全長184mとなる。D7区における堀〔図中(B)〕の規模は、C6・D6・D7区で検出された堀〔図中(A)〕の規模に比べて小規模となり、上幅3.5~3.7m、下幅0.5~0.8m、深さ1.7~1.8mで、壁は43~53°の傾斜で立ち上がる。D7ds区のコーナー部から南西方向へ34mの地点(E7az区)で、堀〔図中(C)〕の規模は再び大きくなり、上幅5~5.4m、下幅1.5~1.8m、深さ2.3~2.5mで、壁は49~56°の傾斜で立ち上がる。第1号堀は、E7az区で上幅が1.7m、下幅が1m前後東側に広がっており、底面にも段差が認められる。

覆土は、壁際や堀の底面に、壁が崩れて堆積したと思われるローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。下位には少量のハードロームブロックを含む褐色土、中位には中量のハードロームブロックや極少量の炭化物を含む暗褐色土、上位には中量のローム粒子や少量のロームブロックを含む暗褐色土・極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、縄文式土器片22点、弥生式土器片42点、土師器片103点、須恵器片2点、土師質土器片6点、内耳形土器片63点、陶磁器片32点、砥石1点、礫54点が出土している。中世の遺物は、主に中位の土層から出土している。他の遺物は、重複構造等から混入したものと思われる。また、D7az区の堀の覆土中層(堀の底面から50cmほどの高さ)からは、人骨が検出されている。土層に乱れない事から、第1号堀が存続していた時期(中世)の人骨と考えられる。⁽¹⁾

第1号堀は全体に箱築研堀状を呈しており、拡張の跡が認められる。(B)の部分は第1号堀の当初の構築状況を留めており、(A)・(C)の部分は、(B)を基本としながら後に、外側(城外)に向かって拡張されたものと思われる。

注

(1) 京都大学人類学教室の今村薫氏によれば、20代後半の男性の頭蓋骨とのことであった。

第7号堀 (SD34 第75図)

本跡は、調査区の北西側D5区を中心に確認された堀で、主郭の北東側に構築された第1号土壘の外側を巡っている。北西側及び南東側で第10号堀を掘り込んでいる。

堀は、D4g₀区の調査区外から北東 (N-23°-E) へ11mの所ではほぼ直角に屈曲し、南東 (N-71°-W) に43mほど伸びている。さらにD6h₁区でほぼ直角に屈曲し南西 (N-22°-E) へ17mの所 (E5b₁区) で、昭和61年度調査区に達している。第1号土壘を囲むように「L」状に掘り巡らされている。上幅5.5~6.5m、下幅0.6~1m、深さ3m前後で、壁は50°前後の急角度で立ち上がりしている。断面形がV字状を呈する薬研堀であり、掘り込みは粘土層や砂層に達している。第1号堀とは形態が異なり、底面の幅が極端に狭く、壁の立ち上がりも急である。第1号土壘の頂部と堀の底面との比高は約6mである。

覆土は、下位に中量のローム粒子・ハードロームブロック・粘土を含む黒褐色土、中位に多量のローム粒子や中量のハードロームブロックを含む黒褐色土・極暗褐色土、上位に中量のローム粒子・ハードロームブロック、極少量の焼土粒子を含む暗褐色土・黒褐色土が自然堆積している。

遺物は、縄文式土器片10点、弥生式土器片30点、土師器片106点、須恵器片5点、土師質土器片7点、内耳形土器片2点、陶磁器片28点、礫39点、五輪塔1点、鉄製品1点が出土している。堀に伴う中世の遺物や五輪塔は、覆土中～下層から出土している。他の遺物は混入したものである。

第7号堀は、重複関係にある第10号堀の検出状況から、本跡よりも先に構築された第10号堀の主軸方向を基本として、後に改修されたものと考えられる。

第8号堀 (SD35・36B 第76図)

本跡は、調査区の南側F6・G6・G7・H6・H7・I6・I7区に確認された堀で、主郭の南東側に位置している。第2号土壘・第3号土壘と共に虎口部を形成し、土壘の外側に「L」状に構築されており、北西側の61年度調査区内で第1号堀と接続するものと思われる。I7a₁区付近で、第9号堀と重複している。本跡は、第9号堀よりも後に構築されている。

堀は、61年度調査区との境界F6h₄区付近から南東方向 (N-48°-W) に56mほど伸び、G7h₄区で63°の角度で屈曲し、南西方向 (N-15°-E) に60mほど伸びている。さらに、I7c₁区ではほぼ直角に屈曲し、北西方向 (N-72°-W) に35mほど伸び、61年度調査区に達している。堀の全長は約150mで、「L」状に構築されている。規模は、上幅4~5.5m、下幅0.2~1m、深さ2~2.5mで、壁は40~50°前後の角度で立ち上がりしている。断面形がV字状を呈する薬研堀であり、掘り込みは粘土層や砂層に達している。堀は、虎口部付近が最も深く、北西側に行くほど浅くなっている。第2号土壘と第3号土壘の開口部付近の堀の駁面 (I7a₁・a₂, I7b₁区) 下位からは、

橋脚の柱穴跡と思われる直徑50~60cm、深さ50cm前後の円筒形に掘り込まれたピットが4か所に検出されている。I7c1区付近の堀の外側には、排水溝と思われる上幅0.8m、下幅0.1~0.3m、深さ0.2m前後の細い溝が掘り込まれている。

覆土は、下位に砂や粘土を多量に含む黒褐色土、中位にローム粒子・ハードロームブロック・粘土ブロックを中量含む黒褐色土、上位に粘土ブロック・砂を少量含む黒褐色土・極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、土師器片4点、土師質土器片29点、内耳形土器片210点、陶磁器片19点、砥石2点、五輪塔2点、礫22点が出土している。堀に伴う中世の遺物は、覆土中～下層から出土している。

第9号堀 (SD36A 第76回)

本跡は、調査区の南側H6・I6区に位置する第3号土塁の下から検出された堀で、I7a1区付近で第8号堀と重複している。本跡の上に構築された第3号土塁は第8号堀の掘り上げ上で構築されており、本跡の方が古いことが明らかである。しかし、重複部の堀の土層から、I7a1区付近における第8号堀と第9号堀は、ある時期には同時存在していたものと思われる。

堀は、保存地区との境界(H6h4区)から南東方向(N-72°-W)に31.5mの所でほぼ直角に屈曲し、北東方向(N-17°-E)に22mほど伸びている。規模は、上幅1.5~2.3m、下幅0.7~1.1m、深さ0.7~1.3mで、壁は外側が56~67°、内側が33~36°の角度で立ち上がっている。断面形が、「U」状を呈する箱型研磨であり、掘り込みは粘土層に達している。

覆土は、下層にローム粒子や砂を多量に含む黒褐色土が自然堆積している。しかしその上位に堆積する黒色土や黒褐色土中には、ロームやハードロームブロック、粘土がブロック状に混入しており、第8号堀の掘り上げ土で、人為的に埋め戻した様子が窺える。

遺物は、覆土下層から土師質土器片1点、内耳形土器片88点、陶磁器片10点、礫8点が出土している。

第10号堀 (SD64・68 第78回)

本跡は、調査区の北西側D4・D5・D6・E6区に位置し、第34・37・38・42・43号の各住居跡を掘り込んでいる。D5区では、中央部を第7号堀によって掘り込まれている。当初は、SD64、SD68と呼称し、別個の異なる遺構として調査を進めた。中央部が第7号堀によって掘り込まれているため、全容をとらえることは不可能であったが、規模・形状・形態が酷似していることや、北西から南東方向に掘り込まれている堀の上軸方向(N-69°-W)が一致し直線的になること等から、SD64・68は、本来は同じ堀であり、「U」状に掘り巡らされていたものと判断される(第10号堀と呼称)。

残存する塙の全長は45.5mであり、61年度調査区との境界(D4b₄区)から北東方向(N-30°-E)に3.5mほどの所(D4c₄区)でほぼ直角に屈曲し、南東方向(N-69°-W)に17m直線的に伸びた所で第7号塙によって切られている。中央部は第7号塙によって切られているため不明であるが、塙は第7号塙との重複部(D6h₄区)からさらに南東方向に25mほど伸び、E6a₄区で再び直角に屈曲し、南西方向(N-30°-E)に25mほど伸びた所で61年度調査区に達している。上幅2.3~2.8m、下幅0.2~0.3m、深さ1.5mで、壁は60~70°の角度で立ち上がっている。断面形がV字状を呈する薬研型である。塙の両端は、さらに61年度調査区に伸びていることが予想される。第42号住居跡と重複するD4c₁・c₂区、D4d₁・d₂区からは、橋脚の柱穴痕と思われる規則的に配列されたピット群^g、2か所(①・②)に検出されている。これらは塙と直交するように、北東から南西方向に直線的に掘り込まれている。①と②の間隔(中心線)は約3mである。ピットは、長径50~100cm、短径50cm前後の橢円形状を呈し、確認面からの深さは30~150cmを測る。この部分は、第7号塙が構築されるまでは、塙に木橋をかけ、虎口として使用されていたものと思われる。

覆土は、下層に暗褐色土、中層に暗褐色土・黒褐色土、上層に黒褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体にローム粒子やハードロームブロックを含み、特に上層には少量の炭化粒子・焼土粒子が含まれている。第7号塙との接点部③(D4d₁・d₂区)・④(D6h₁・h₂区)は、ハードロームや粘土によって人為的に埋め戻され版築されている。これは、第7号塙が新たに構築された時点で、第10号塙はその機能を失なったものと考えられるが、全体を埋め戻すことはせず、その接点部を部分的に埋め戻し、第7号塙への土砂や水の流入を防いだものと思われる。ただ、現時点では、通路としての可能性も否定できない。

遺物は、覆土中から塙に伴う内耳形土器片8点、陶磁器片10点、砥石1点、鉄片2点の他に、重複構造から混入したものと思われる縄文土器片6点、弥生式土器片175点、土師器片79点、土師質土器片4点、礫32点が出土している。

第11号塙(第76図)

本跡は、調査区の南側H6区に位置し、南側には第3号土塙が北西から南東方向に構築されている。

塙は、第3号土塙の直角方向に南北(N-18°-E)に掘り込まれており、長さ9m、上幅2.5m、下幅0.5m、深さ1.5m前後の規模を有し、壁は60°前後の角度で立ち上がっている。断面形はV字状を呈し、薬研型状に掘られている。

覆土は、下層に黒褐色土、中~上層に暗褐色土が堆積している。土塙は北西方向から人為的に埋め戻された状況を呈し、覆土中に多量のローム粒子やハードロームブロック、少量の粘土が含まれる。

れども、堀の内側に土塁が構築されていた可能性が強い。

遺物は出土していない。

4 住居跡状遺構

第28号住居跡状遺構（第79・123・137図）

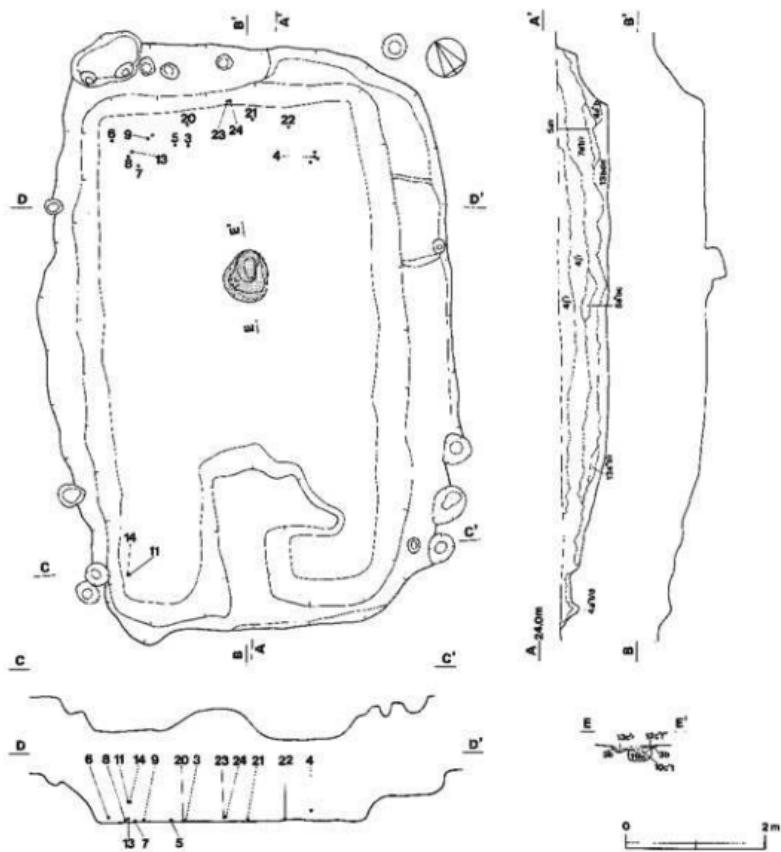
本跡は、調査区の北西部E6c区を中心確認された遺構である。第27号住居跡の北西2mほどに位置し、北西侧0.5mには第37号住居跡が存在している。

平面形は、長軸8.34m、短軸5.82mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-30.5°-Eを指している。床面積は、約23.1m²である。壁は、下位から中位にかけてほぼ垂直に、中位で緩やかに外傾して立ち上がりテラス状を呈し、上位で再び垂直に立ち上がる。一段掘り込みの遺構に類似している。壁質は下位から中位にかけては硬く締まっているが、上位は操作による攪乱を受けているため軟弱である。遺構の南西側には、硬く踏み固められたロームが壁の中央部から遺構の中央部方向にかけて、幅1.4~2.1m、長さ2.6mの長方形状に堆積している。このロームは、約13°の角度で中央部方向になだらかに傾斜し、床面に達しており、入口部に伴う施設と考えられる。壁高は、床面から中位のテラス部までが42~48cm、テラス部から上位までが10~28cmで、全体としては52~76cmを測る。床面は、平坦で全体的に硬く踏み固められている。特に、入口部と思われる南西側や炉の周囲は堅緻である。炉は、遺構の北東寄りの長軸線上に位置し、長径80cm・短径60cmの橢円形状を呈し、床面を31cmほど皿状にくぼめ地床炉としている。炉床は良く焼けている。ピットは床面からは検出されず、テラス部や壁際から検出されている。ピットの中には、対称的位置に検出されているものも見られるが、全体的に配列が不規則であり、攪乱を受けているため、主柱穴は明確でない。ピットは15か所検出されており、長径20~60cm、短径17~45cm、深さ15~20cmを測る。

覆土は、上層から下層にかけて褐色土・黒褐色土・暗褐色土が自然堆積している。覆土中には、ローム粒子やハードロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が含まれている。特に、壁際や床面直上からは多量のローム粒子・焼土粒子と少量の炭化物が検出されている状況から、焼失家屋と考えられる。

遺物は少量であるが、土師質土器36点（完形9・半完形18・破片9）、煙管1点（第137図4）、小札1点（第137図16）、釘1点（第137図6）が出土している。土師質土器のうち第123図3~9・11・13・14・20~24は、北東壁下の床面もしくは床面直上から出土したものである。

出土した遺物や形態等から、中世の遺構と考えられる。

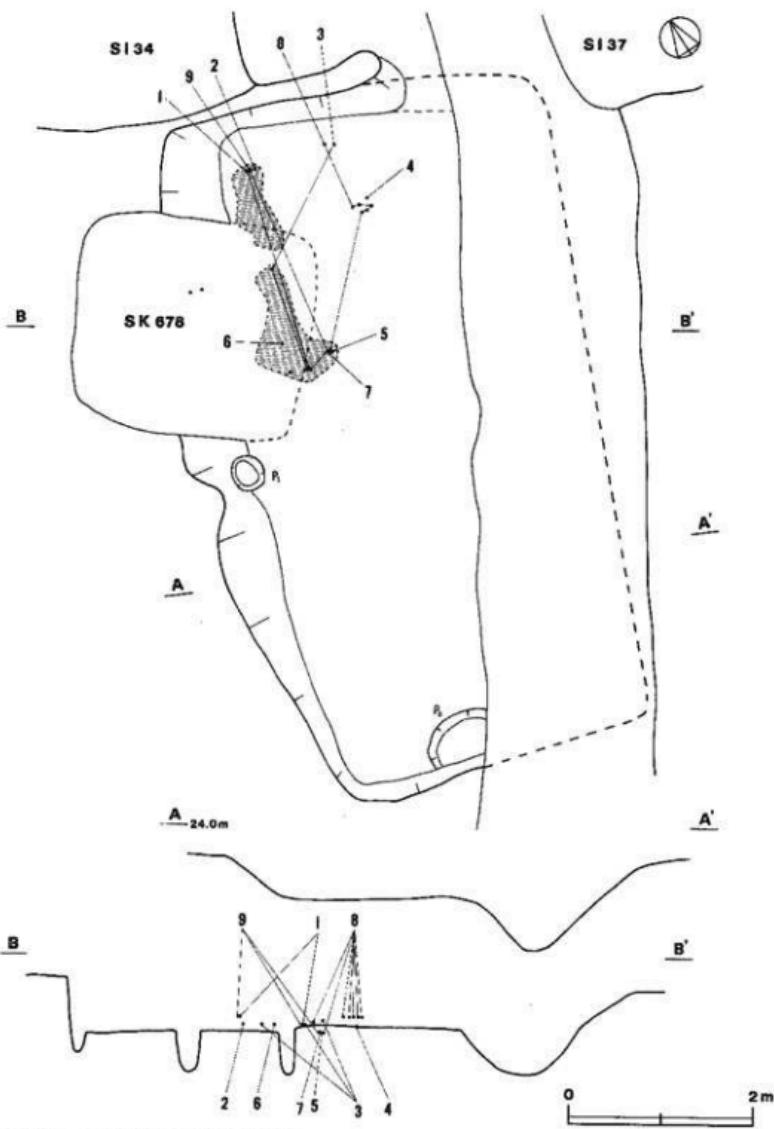


第79図 第28号住居跡状遺構実測図

第38号住居跡状遺構（第80・124図）

本跡は、調査区の北西部E6be区を中心に確認された遺構である。北側で第34号住居跡と接し、北東側で第37号住居跡、北西側で第678号土坑と重複し、各々を掘り込んでいる。また、南東側では第10号堀に掘り込まれている。

平面形は、南東側の2分の1ほどが第10号堀によって掘り込まれているため推定の域を出ないが、長軸7.5m、短軸4.5m前後の長方形形状を呈する遺構と考えられる。推定床面積は、約24m²である。残存する壁は、北東側でほぼ垂直に立ち上がるほかは、全体的になだらかに立ち上がり良く締まっている。壁高は、北西



第80図 第38号住宅跡状造構実測図

側で45~53cm、北東側で44cm、南西側で15cm前後を測る。床面は、平坦で良く継まっている。ピットは北西壁下にP₁、南西壁下にP₂の2か所が検出されているが、床面上からは柱穴と思われるピットは検出されていない。出土遺物や残存する遺構の状況等から、本跡は、第28号住居跡状遺構と同形態を呈するほぼ同時期の遺構と考えられる。

覆土は、暗褐色土が自然堆積しており、床面からは少量の焼土粒子や炭化物が検出されている。遺物は、弥生式土器片9点、土師質土器片32点が出土している。弥生式土器片は、覆土中に混入したものであり、土師質土器（第124図1~6・8・9）は、床面及び床面直上から出土している。出土遺物や形態から、第28号住居跡状遺構と同様の性格を持つ中世の遺構と考えられる。

5 土壙墓

昭和60年度に調査した土坑の数は、計278基（枝番を含む）である。これらの土坑の大半は、屋代城の外郭をなす第1号堀の外側（城外）に位置し、特に、調査区の北東側（E8・F8区）・中央部（F7区）・南東側（G7区）の3か所に集中している。上坑は、屋代B遺跡Ⅰの報告の中で「墓壙及び墓壙と思われる上坑」として分類された土坑の要素と共に通するものや、枯土貼りの土坑、地下式壙等が検出されている。

屋代B遺跡の昭和59年度調査区からは、第3~6号堀に囲まれたE2・F2区を中心とする地区から、65基の上坑（内、地下式壙2基を含む）が集中して検出されている。この内、第383・387号の2基の土坑のリン分析を実施した結果、土坑の坑底直上に堆積する土壤中から、異常に高濃度のリン（P₂O₅）の含有が明らかとなった。断定はできないが、墓壙の可能性が強いと言える。また、この地区から検出された土坑は、以下の(ア)~(イ)の様な特異な形態を示すものが多く、その要素のうちの全部または一部を有するものを墓壙として取り扱っている。

- (ア) 平面形は方形または長方形を基本とする。
- (イ) 出入口と考えられる張り出しを有する。
- (ウ) 向かい合った壁下に各々ピットを有する。
- (エ) 坑底または覆土中に多量の炭化物・灰が見られる。

また、第278号土坑の覆土からは、供獻物と考えられる仏花器等が出土し、第4号地下式壙やこれらの上坑群を囲む第4号・第5号・第6号堀の覆土からは、投げ込まれたと思われる瓦輪塔・宝篋印塔等が出土している。従って、この地区から検出されたほかの土坑も、墓壙としての性格づけが可能であろう。

本年度調査区からも、上記の3か所から土坑が集中して検出されており、それらの多くは、前述した(ア)~(エ)の形態の全部または一部を有し、他に、覆土が人為的堆積状況を示し、主として覆

土中から土師質土器（炉明皿等）・陶磁器・内耳上器・砥石・銭等の遺物が出土するという特徴が見られる。この項では、明確に墓壙と断定する資料には欠けるが、昭和59年度の調査結果をふまえ、(7)～(10)の形態の全部または一部を有し、なおかつ、出土遺物等から、中世以降の「墓壙及び墓壙と思われる土坑」「墓壙の可能性のある土坑」と判断したものについて取り上げた。なお、墓壙としての判断が困難なものや、他の土坑については、第6節の(1)で扱った。

記載に当っては、特徴的なものを抽出して文章で解説し、他は一覧表にまとめた。出土遺物については、種類ごとに掲載した。また、平面図の掲載に当っては、土坑の分類が異なるものであっても、重複等により切り離すことが不可能なものや、単独で掲載不可能なものは一括掲載した。

注

(1) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13「星代B遺跡I」 茨城県教育財團 昭和61年

(1) 墓壙及び墓壙と思われる土坑（第81～91・96図）

第410号土坑（第81図）

本跡は、調査区の北側E7g₃区を中心に確認され、南東コーナー部を第414号土坑に掘り込まれている。

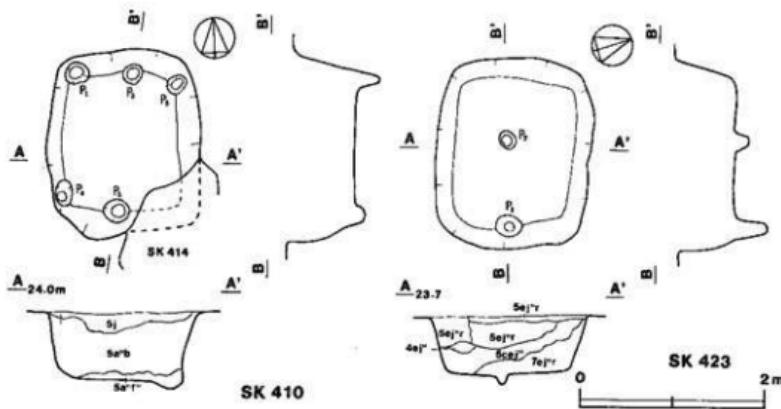
平面形は、長軸2.00m、短軸1.70mの隅丸長方形を呈し、主軸方向は北を指している。壁は、上位が耕作による擾乱を受けているが、下位から中位にかけてはほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は65～70cmを測る。底面は、平坦で硬く締まっている。ピットは、検出された5か所のピットの配列から南北対称の位置に6か所掘り込まれていたものと思われる。しかし、南東側コーナー部が第414号土坑に掘り込まれているため、北側壁下の中央部・両コーナー部、南側壁下の中央部・南西コーナー部の5か所（P₁～P₅）が残存しているだけである。ピットは壁の上面から掘り込まれている。直径30cm前後の円形状を呈し、円筒状に10～25cm底面を掘り込んでいる。

覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈しており、ローム粒子やロームブロックを含む繒まりのある暗褐色土が堆積している。特に、最下層には灰や焼土が多量に堆積している。

遺物は、覆土中層から中世の陶磁器片（瀬戸）が1点出土している。また、覆土上層からは、耕作によって混入したと思われる縄文・弥生・土師式の各土器片が出土している。

第423号土坑（第81図）

本跡は、調査区の東側E8区を中心に確認された、墓壙群を形成する土坑の一つで、E7j₆区を中心



第81図 第410・423号土坑実測図

心に位置する。

平面形は、長軸2.07m、短軸1.66mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-67°-Wを指している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は55cm前後を測る。底面は、平坦で締まっている。ピットは、長軸線上に2か所検出され、P₁は直径25cm前後の円形状を呈し、南東壁中央部の壁下底面を円筒状に38cm掘り込んでいる。P₂は直径20cm前後の円形状を呈し、長軸線上の北西寄りの底面を鍋底状に18cm掘り込んでいる。

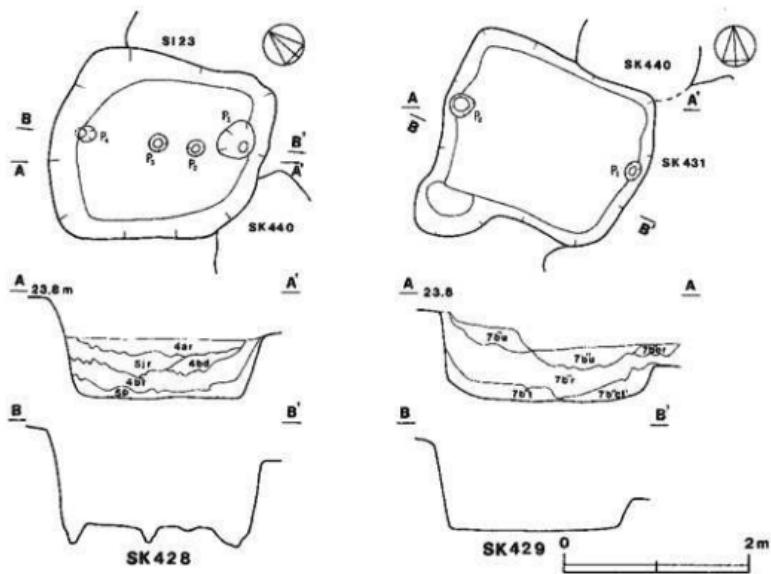
覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈しており、下層に黒褐色土、中～上層に暗褐色土、南東側の上層に褐色土が堆積している。覆土中には、多量のローム粒子・ハードロームブロック、少量の粘土・焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物は、覆土中から土師質土器片6点、混入したと思われる弥生式土器片4点、礫3点が出土している。

第428号土坑（第82図）

本跡は、調査区の東側E8区を中心に確認された、墓塚群を形成する土坑の一つで、E8g区を中心位置する。北東側で第23号住居跡（古墳時代）、南側で第440号土坑を掘り込んでいる。

平面形は、長軸2.32m、短軸1.98mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-35.5°-Wを指している。壁は、垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は75～100cmを測る。底面は、平坦で締まっている。ピットは、長軸線上に4か所検出されており、ほぼ直線的に並んでいる。P₁は直径40cm前後の不整円形を呈し、南東壁中央部の壁下底面を鍋底状に20cmほど掘り込んでいる。P₂・P₃は直径20cm前後の円形状を呈し、中央部よりやや南東及び北西寄りの底面を円筒状に20cm前後掘り



第82図 第428・429号土坑実測図

込んでいる。P₄は直径15cm前後の円形状を呈し、北西壁中央部の壁下底面を円筒状に22cmほど掘り込んでいる。

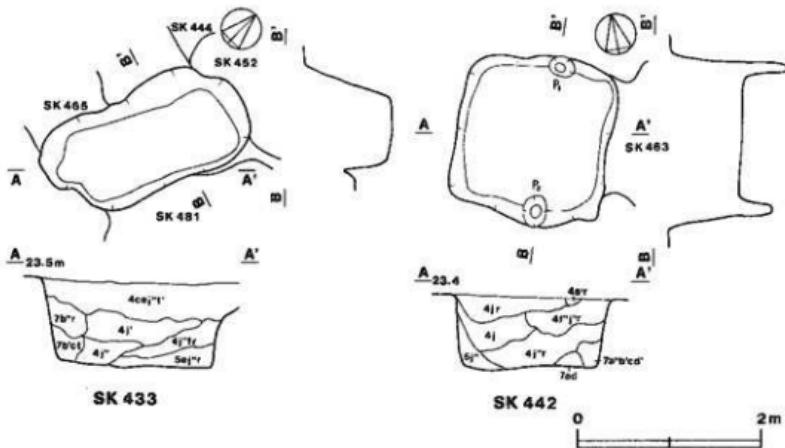
覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈しており、締まりのある褐色土と暗褐色土が交互に堆積している。覆土中には、全体にローム粒子・ロームブロック・木炭・炭化粒子・焼土粒子が含まれている。

遺物は出土していない。

第429号土坑（第82図）

本跡は、調査区の東側E8区を中心に確認された、墓壙群を形成する土坑の一つで、E8hs区を中心位置する。南東側で、第440号土坑を掘り込んでいる。

平面形は、長軸2.30m、短軸1.84mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-63°-Wを指している。壁は、北西側が最も遺存状態が良好で、垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は95cmを測る。南東側は、重複しているため遺存状態が悪く、残存壁高は30cm前後である。他の壁も含め、本来は95cm前後の深さに掘り込まれていたものと思われる。底面は、平坦で締まっている。ピットは長軸線上の壁下に2か所検出されている。P₁は長径20cm、短径15cmの横円形を呈し、南東壁中央部の壁下底面を円筒状に14cm掘り込んでいる。P₂は直径25cm前後の円形状を呈し、北西壁中央部



第83図 第433・442号土坑実測図

の壁下底面を円筒状に39cm掘り込んでいる。また、南西側コーナー部には張出しが見られる。覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈しており、多量のハードロームブロックや少量の灰・炭化物・焼土粒子を含む黒褐色土が堆積している。特に、底面には多量の炭化物や灰の堆積が認められる。

遺物は、覆土中から土師質土器片10点、陶磁器片12点、銅製品(不明)1点、錢(熙寧元寶)1点、礫1点が出土している。

第433号土坑（第83図）

本跡は、調査区の東側E8i区を中心に確認された、墓壙群を形成する土坑の一つで、E8i₂区を中心位置する。北側で第452号土坑、東側で第481号土坑、西側で第465号土坑等と重複し、各々を掘り込んでいる。

平面形は、長軸2.02m、短軸1.08mの不整長方形を呈し、長軸方向はN-22°-Eを指している。壁は、重複が激しく上位は不明であるが、残存壁は垂直に立ち上がり締まっている。残存壁高は50cm前後を測る。底面は平坦で締まっている。ピットは、検出されていない。

覆土は、人為的に埋め戻されており、多量のローム粒子やハードロームブロック、少量の灰・炭化物・焼土粒子・粘土を含む褐色土、暗褐色土、黒褐色土が交互に堆積している。特に、覆土上層には、ブロック状となった灰のかたまりや炭化物が多く含まれている。

遺物は、覆土中から土師質土器片10点、陶磁器片3点（中世の常滑1点、青磁（元-明）1点を含む）、砾石2点のほかに、混入したと考えられる弥生式土器片1点、礫2点が出土している。

第442号土坑（第83図）

本跡は、調査区の東側E8区を中心に確認された、墓壙群を形成する土坑の一つで、F8a4区を中心位置する。東側で第463号土坑を掘り込んでいる。

平面形は、長軸1.86m、短軸1.69mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-22°-Eを指している。壁は、垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は80cm前後を測る。底面は、平坦で良く締まっている。ピットは、長軸線上に2か所検出されている。 P_1 は長径28cm、短径20cmの楕円形を呈し、北東壁中央部の壁下底面を円筒状に30cmほど掘り込んでいる。 P_2 は長径35cm、短径25cmの楕円形を呈し、南西壁中央部の壁下底面を円筒状に26cmほど掘り込んでいる。

覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈しており、下層にローム粒子やハードロームブロックを多量に含む暗褐色土・黒褐色土、中～上層にローム粒子やハードロームブロックを多量に含み、炭化粒子や焼土粒子を少量含む褐色土が堆積している。特に、北東側の最下層には炭化物が、上層には灰が多く含まれている。

遺物は、覆土中から陶磁器片1点（近世の瀬戸）が出土している。

第466号土坑（第84図）

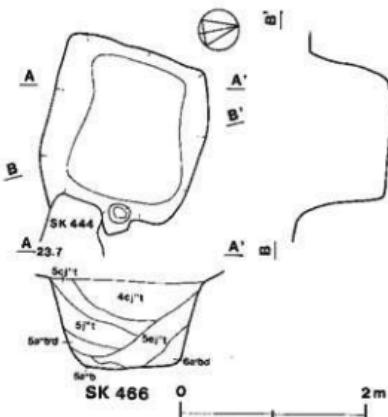
本跡は、調査区の東側E8区を中心に確認された、墓壙群を形成する土坑の一つで、E8a4区を中心位置する。南東壁の一部を第444号土坑に掘り込まれている。

平面形は、長軸1.78m、短軸1.68mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-67°-Wを指している。

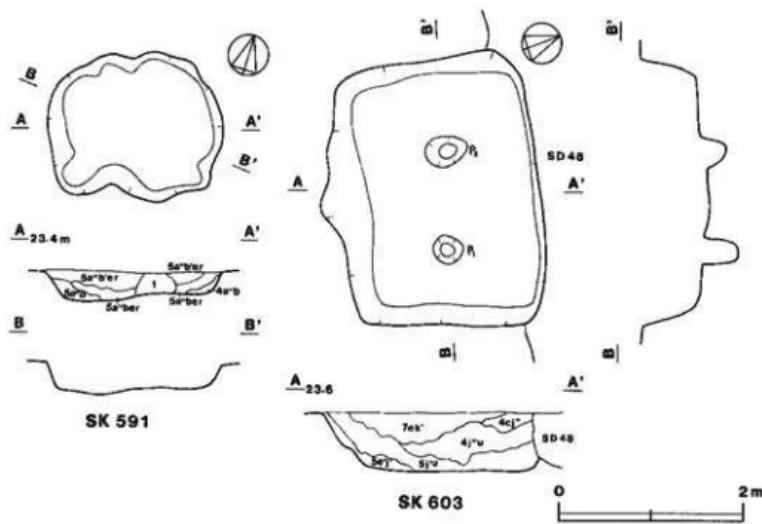
壁は、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は85～90cmを測る。ピットは、南東壁中央部に1か所検出されており、壁の上面を6cmほど円筒状に掘り込んでいる。底面は、平坦で締まっている。

覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈し、中～下層に暗褐色土、上層に褐色土が堆積している。覆土中には、全体に多量のローム粒子やハードロームブロック、少量の炭化物・炭化粒子・灰・焼土粒子が含まれている。

遺物は、覆土中から陶磁器片2点（中世の瀬戸1点、青磁〈元～明〉1点）、混入したと思われる土師器片1点が出土している。



第84図 第466号土坑実測図



第85図 第591・603号土坑実測図

第591号土坑（第85図）

本跡は、調査区の中央部F7区を中心に確認された、墓壙群を形成する土坑の一つで、F7h区を中心位置する。

平面形は、長軸1.89m、短軸1.55mの不整長方形を呈し、長軸方向はN-63°-Wを指している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。壁高は20~30cmを測る。底面は、やや凸凹状を呈しているが締まっている。ピットは検出されていない。

覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈しており、中央部や東側壁下に褐色土、下層～上層に暗褐色土が堆積している。覆土中には、ローム粒子が多量に含まれ、ハードロームブロック・炭化物・焼土粒子・粘土ブロックが少量含まれている。

遺物は、覆土中から陶磁器片1点、銭3点（景德元寶・熙寧元寶・元豐通寶）が出土している。

第603号土坑（第85図）

本跡は、調査区の中央部F7区を中心に確認された、墓壙群を形成する土坑の一つで、F7e区を中心位置する。北東壁を第48号溝によって掘り込まれている。

平面形は、長軸2.87m、短軸2.35mの長方形を呈し、長軸方向はN-73.5°-Wを指している。壁は、下位から中位にかけて垂直に立ち上がるが、上位はやや外傾ぎみに立ち上がっている。壁高は55cm前後を測る。底面は、平坦で締まっている。ピットは、長軸線上に2か所検出されてい

る。P₁は中央部よりもやや南東寄りの底面に検出され、直径30cm前後の円形状を呈し、円筒状に38cm掘り込まれている。P₂は中央部よりもやや北西寄りの底面に検出され、長径45cm、短径35cmの楕円形を呈し、円筒状に21cm掘り込まれている。

覆土は、人為的に埋め戻された様相を呈しており、下層に暗褐色土、中層に褐色土、上層に黒褐色土が堆積している。覆土中には、多量のローム粒子やハードロームブロック、少量の粘土ブロック・炭化物・焼土粒子が含まれている。

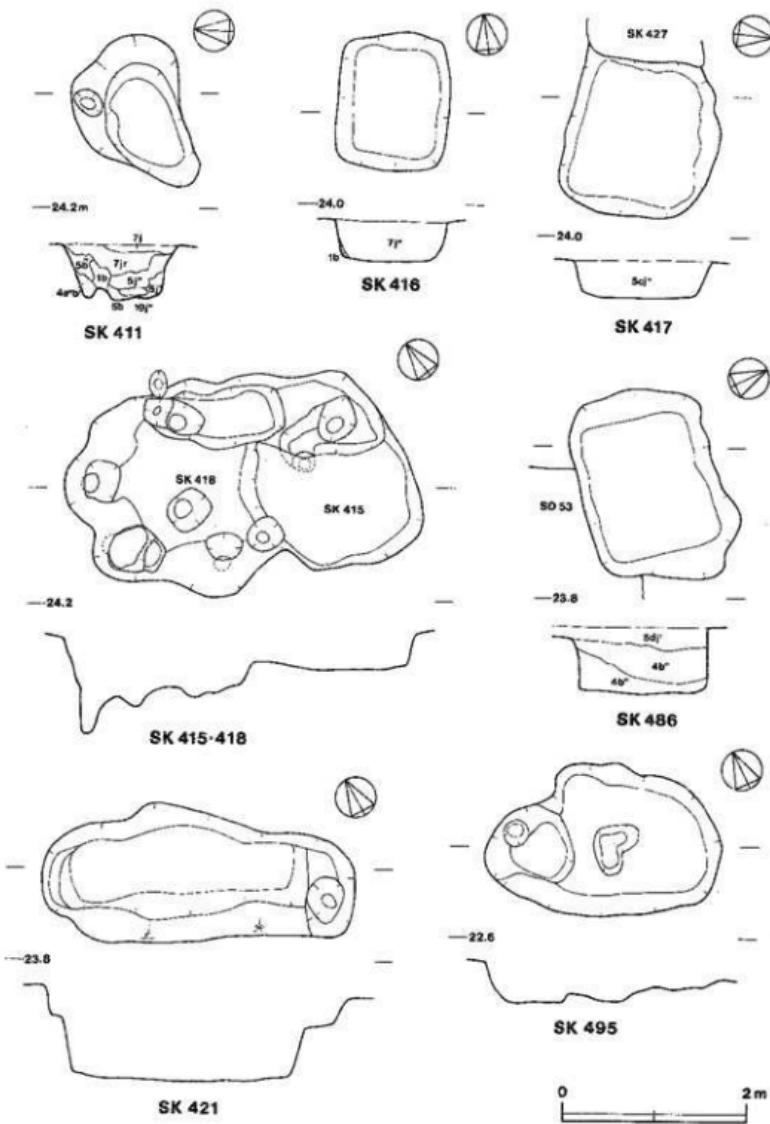
遺物は、覆土中から土師質土器片4点、混入したと思われる弥生式土器片7点、土師器片3点、礫1点が出土している。

表2 墓壙及び墓壙と思われる土坑一覧表

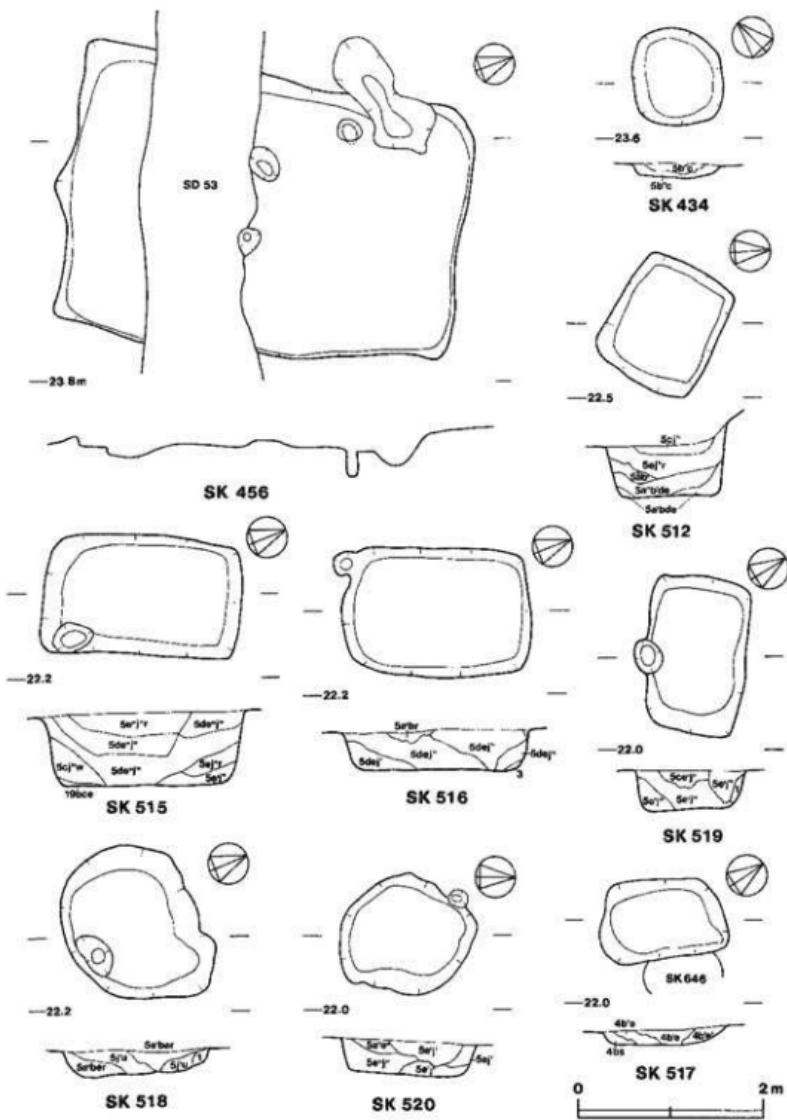
上 坑 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
411	E7gs	N - 48° - W	不整椭円形	1.70 × 1.15	67	V-V	3	A	弥生1片、土師1片、鐵 製品1点、土師質1片、鐵 製品1点、土師質1片	
416	E7gs	N - 15° - E	隅丸長方形	1.50 × 1.22	47	I	1	A	弥生1片、土師1片、土 師質1片	
417	E7hs	——	(隅丸方形)	(1.75) × 1.68	42	II	1	A		SK427が切る。
418	E7gs	N - 53° - W	(不整椭円形)	(2.70) × 2.10	70	III	3	A	弥生6片、土師1片、陶 磁2片、礫4点	SK415が切る。
421	E7se	N - 59° - W	不整長方形	3.36 × 1.35	104	II	1	A	弥生3片、土師1片、陶 磁2片、鐵製品1点、鐵 製品1点、土師1点、鐵 製品1点	南東壁上にピット。
430	E8hs	N - 14° - E	(不整長方形)	—— × (1.60)	(57)	II	1	A	土師64片、土師質12片、 陶磁3片、鐵石3点、石 製品不明1点、礫3点	SK446-447が切る。 底壁が敵しい。
431	E8hs	N - 31° - E	不整長方形	2.55 × 1.98	(72)	II	1	A	土師13片、土師質10片、 陶磁2片、礫4点	底面に掘り出し。 (A・B)
432	E8hs	——	——	—— × ——	(27)	III	(3)	(A)	弥生2片、土師60片、土 師1片、陶磁6片、鐵(?) 1点、鈎1点、鐵石1点	重複激しく形状不 明。
434	E8hs	——	不整円形	1.08 × 0.98	27	III	1	A	土師質3片	SK123を切る。
435	E8is	——	——	—— × ——	(23)	III	(6)	(A)	弥生2片、土師1片、 陶磁3片	重複激しく形状不 明。
436	E8hs	(N-72.5°-W)	(隅丸長方形)	(2.50) × 0.50	19	II	1	A	土師1片、陶磁1片、 土1点	SK437-438が切る。
437	E8hs	N - 76° - W	(隅丸長方形)	(2.10) × 1.60	38	II	1	A	鐵文2片、弥生16片、土 師2片、陶磁1片、礫1点	SK124・SK438が切る。 東壁上にピット。
438	E8hs	N - 22° - E	隅丸長方形	2.05 × 1.71	(65)	II	1	A	弥生6片、土師9片、陶 磁2片、礫1点	SK124・SK436・ 437を切る。
439	E8hs	N - 79° - W	(隅丸長方形)	1.84 × 0.37	(88)	III	1	A	弥生13片、土師8片、陶 磁5片、礫1点	SK549-623を切る。
440	E8hs	(N-23°-E)	(長 方 形)	—— × 1.30	(64)	II	1	A	陶磁6片	SK428-429-431 が切る。
441	E8is	N - 20° - E	不整長方形	3.15 × 1.66	(63)	II	1	A	陶磁13片、礫1点	SK450-451が切る。
447	E8hs	——	——	—— × ——	(23)	II	1	(A)	鉄(空宋通寶)1点、陶 磁1片、礫1点	重複激しく形状不 明。
448	E8is	N - 37° - E	(不整長方形)	1.98 × (1.40)	(105)	II	1	A	弥生1片、土師6片、土 師質6片、陶磁2片	
450	E8js	N - 63.5° - W	(隅丸長方形)	2.59 × (1.38)	49	III	1	A		SK457-478を切る。 SK441が切る。
451	E8is	(N-72°-W)	(不整長方形)	1.80 × ——	15	III	1	A		SK441が切る。
452	E8is	(N-82°-W)	(不整長方形)	2.12 × ——	(45)	II	1	A	土師1片、刀子1点、 礫石2点	SK433が切る。 南側上にピット2点、 東側に掘り出し點。

土 坑 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模			壁面	底面	盖上	出 土 通 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)	面積					
453	E8j ₄	——	隅丸方形	1.79×1.75	70	II	I	A	弥生3片、土師2片、須恵1片、土師質1片、礫1点	SK464を切る。	
455	E8j ₂	——	不明	——×	58	I	3	(A)	土師質1片、礫1点	須恵激しく形状不明。	
456	F7cs	N - 26° - E	長 方 形	4.30×3.00	60	II	3	A		SD53が切る。	
460	E8j ₃	——	(方 形)	(1.65)×1.55	74	II	I	A	陶磁1片	SK479と重複。	
461	E8hs	N - 77° - W	隅丸長方形	2.07×1.28	(86)	II	I	(A)			
463	F8as	——	(不 定 形)	——×	(53)	II	I	A	土師3片、土師質1片、陶磁2片	SK442が切る。	
464	E8j ₄	N - 19° - E	(隅丸長方形)	(1.45)×0.97	(45)	II	I	A	土師1片、内耳1片		
467	E8gs	(N 81° - W)	(隅丸長方形)	(2.22)×(1.56)	41	II	I	A	縹文1片、弥生3片、土師2片、陶磁3片、礫3点	SI24を切る。	
470	E8hs	——	隅丸方形	1.46×1.44	55	I	I	A			
471	F8as	N - 4° - E	不整隅丸方形	2.30×1.55	72	II	I	A	弥生2片、土師1片、土師質2片、陶製品1片	SK472を切る。隙間にピット。	
473	E8j ₂	N - 20° - E	隅丸長方形	1.82×1.50	83	I	I	A	土師質1片、純(不明)2点		
474	E8j ₄	N - 13° - E	隅丸長方形	1.20×0.88	(48)	II	I	A			
475	E8j ₂	N - 68° - W	不整隅丸方形	2.70×1.64	44	II	-III	I	弥生4片、土師3片、土師質1片、内耳1片、陶磁	短軸線上にピット。	
476	E8j ₂	N - 23.5° - E	不整隅丸方形	2.15×1.55	58	II	I	A	須恵片、土師質4片、礫石1点、礫1点	長軸線上にピット。	
479	E8j ₂	(N 65° - W)	(長 方 形)	(1.91)×(1.47)	(55)	I	I	A		SK476が切る。 SK460と重複。	
486	F7cs	N - 81° - W	不整長方形	2.10×1.49	68	I	I	A	弥生4片、土師質3片、内耳8片、紙石1点、礫6点		
495	J7as	N - 61.5° - W	不整楕円形	2.56×1.65	26	III	3	A	土師2片、土師質3片、陶磁1片、礫1点	中央部・北西壁際に浅い擦り込み。	
512	F7hs	N - 58° - W	隅丸長方形	1.40×1.18	62	II	I	A	土師質2片、内耳3片、陶磁2片、礫1点		
515	F7i ₂	N - 24° - E	長 方 形	2.14×1.29	83	II	I	A		南壁コーナー部にピット。	
516	F7i ₂	N - 26.5° - E	隅丸長方形	2.04×1.40	47	II	I	A		南西壁コーナー部にピット。	
517	F7j ₂	N - 27.5° - E	不整長方形	1.33×0.86	15	II	I	A		SK646を切る。	
518	F7j ₂	N - 60° - E	不整楕円形	1.92×1.40	26	II	3	A		南東壁下にピット。	
519	F7i ₂	N - 58° - W	長 方 形	1.65×1.08	48	II-N	5	A	土師質1片、内耳2片	南西壁にピット。	
520	G7as	——	不整円形	1.35×1.25	41	II	I	A	内耳6片、石1点	北西壁にピット。	
521	G7as	N - 26° - E	長 方 形	2.27×1.45	33	II	I	A	内耳2片、陶磁2片、礫1点		
523	G7ar	N - 61° - W	(不整長方形)	(2.20)×1.05	33	II	I	A	土師質1片、礫1点		
524	F7i ₂	N - 44° - E	隅丸長方形	1.70×1.13	24	II	I	A	弥生1片、土師1片、内耳1片	東側に方錐状の浅い擦り込み。 SK521と重複。	
526	G7as	N - 24° - E	長 方 形	1.80×1.08	20	II	I	A			
527	G7br	N - 34° - E	隅丸長方形	2.10×1.67	32	III	3	A	土師質1片、礫1点	南東側に張り出し。	
528	G7cs	N - 64° - W	隅丸長方形	2.18×1.19	50	II	I	A	石器1点、礫1点		
534	G7cr	N - 58° - W	不整楕円形	1.36×0.97	27	III	2	A	土師質1片、内耳6片、陶磁4片、石製品1点	北西側にピット。	

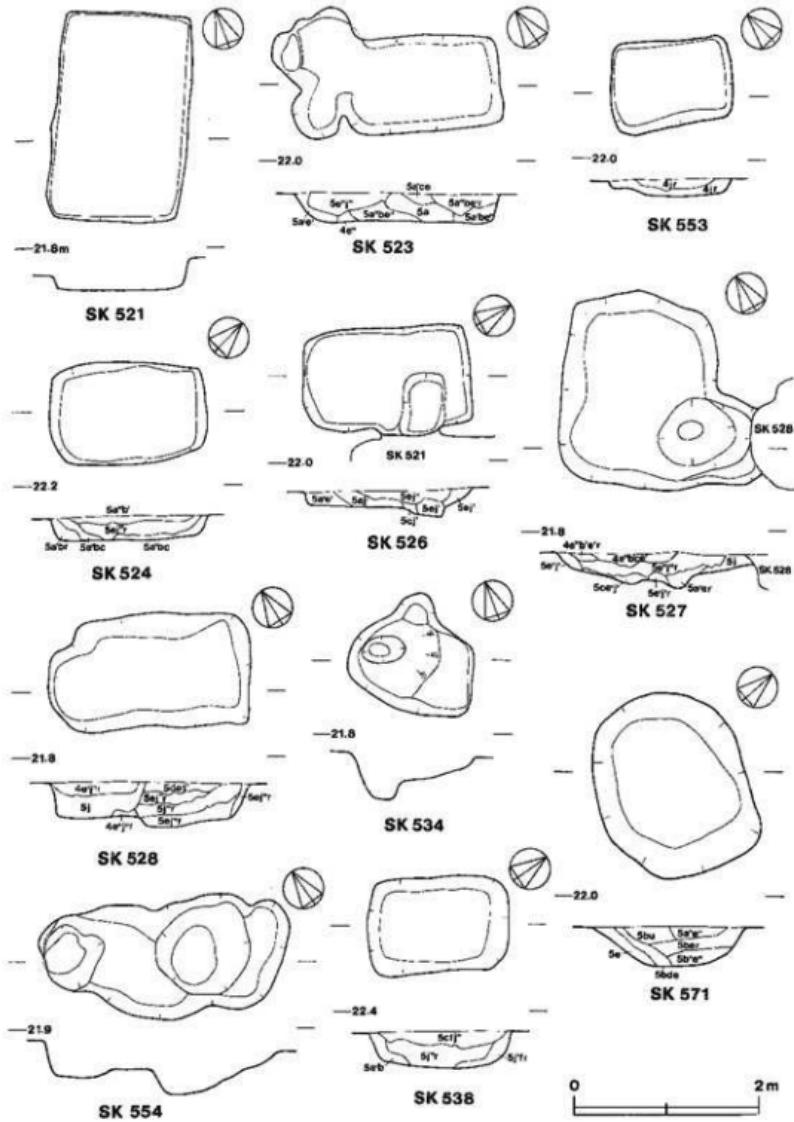
上 坑 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	板上	出 土 通 物	備 考
				長 度 × 幅 広 (m)	深 度 (m)					
538	F7hr	N - 34° - E	隅丸長方形	1.54 × 1.02	41	II	I	A		
553	G7cs	N - 52° - W	長 方 形	1.34 × 0.94	18	II	2	A		
554	G7dr	N - 55° - W	不整格円形	2.67 × 1.27	28	I	1	A		北西、南東に不整形の掘り込み。
571	G7as	N - 68° - W	楕 円 形	2.02 × 1.63	42	II	2	A		
574	G7ds	N - 58° - W	(不整長方形)	(2.46) × 1.68	38	I	3	A		實際にビット。底面に不整形の掘り込み。
576	G7as	N - 59° - W	長 方 形	1.38 × 1.05	15	III	1	A		
584	F7is	N - 58° - W	小整長方形	2.42 × 1.68	76	I-II	1	A		
587	F7hs	N - 42° - W	椭 圆 形	1.68 × 0.97	(56)	II	2	A	土師1片、上師質3片、内耳1片	
592	F7hs	N - 59° - W	隅丸長方形	4.23 × 3.14	100	II	1	A	劣生2片、土師質6片、陶磁4片、礫5点	
596	F7ds	N - 30° - E	(隅丸長方形)	(3.81) × 1.48	65	II	1	A	土師質1片、内質3片、陶磁6片、礫11点	
597	F7es	N - 78.5° - W	不整圓長方形	2.28 × 1.72	(23)	III	2	A	土師質5片、陶磁4片、鐵塊1片、礫5点	SD48が切る。
598	F7es	(N - 13.5° - E)	(長 方 形)	— × 2.42	38	(III)	1	A		SD46・49が切る。短軸線上にビット2。
599	F7fs	N - 38.5° - E	隅丸長方形	3.00 × 2.25	68	I	1	A		長軸線上にビット2。
600	F7gs	N - 24° - E	(長 方 形)	3.24 × (1.93)	75	II	1	A		SK601・602が切る。
601	F7gs	(N - 24° - E)	(長 方 形)	2.12 × (0.66)	(70)	II	1	A	上師質4片、内耳5片、陶磁3片、礫2点	SK600が切る。
602	F7gs	N - 57° - W	(不整長方形)	(2.36) × 2.00	(37)	III	1	A	上師1片、上師質3片、陶磁3片	SK600が切る。中央部に浅い掘り込み。
605	F7fz	(N - 15° - E)	(長 方 形)	— × (1.85)	46	II	2	A	土師6片、上師質3片、陶磁3片、礫3点	
612	F7fs	N - 64° - W	長 方 形	3.00 × 2.00	(77)	I	1	A		SD48が切る。
616	F7iz	N - 59.5° - W	隅丸長方形	1.92 × 1.11	(79)	II	1	A		東側に張り出し部を持つ。
617	F7jz	—	不 整 円 形	1.17 × 1.02	69	I	1	A	七師4片、土師質2片、陶磁3片、鐵石1点、礫2点	
622-A	F7jz	(N - 61° - W)	不整長方形	— × —	20	II	1	A	土師7片、土師質3片、陶磁1片	
622-B	G7as	N - 61° - W	(不整長方形)	(2.95) × 1.50	40	II	1	A		
624	F7fs	N - 63° - W	不整長方形	1.78 × 1.16	47	III	2	A		
625	F7gs	N - 67.5° - W	長 方 形	3.24 × 1.95	49	II	1	A		
627	F6gs	(N - 70° - W)	(長 方 形)	— × —	23	III	1	A		SK628が切る。
628	F6gs	N - 85° - W	(隅丸長方形)	(2.32) × 1.65	(56)	II	1	(A)	上師4片、須恵1片、陶磁1片	SK629が切る。
654	F7gs	N - 25.5° - W	隅丸長方形	2.35 × 1.25	(79)	I	1	A	礫3点	SK665を切る。SK666が切る。



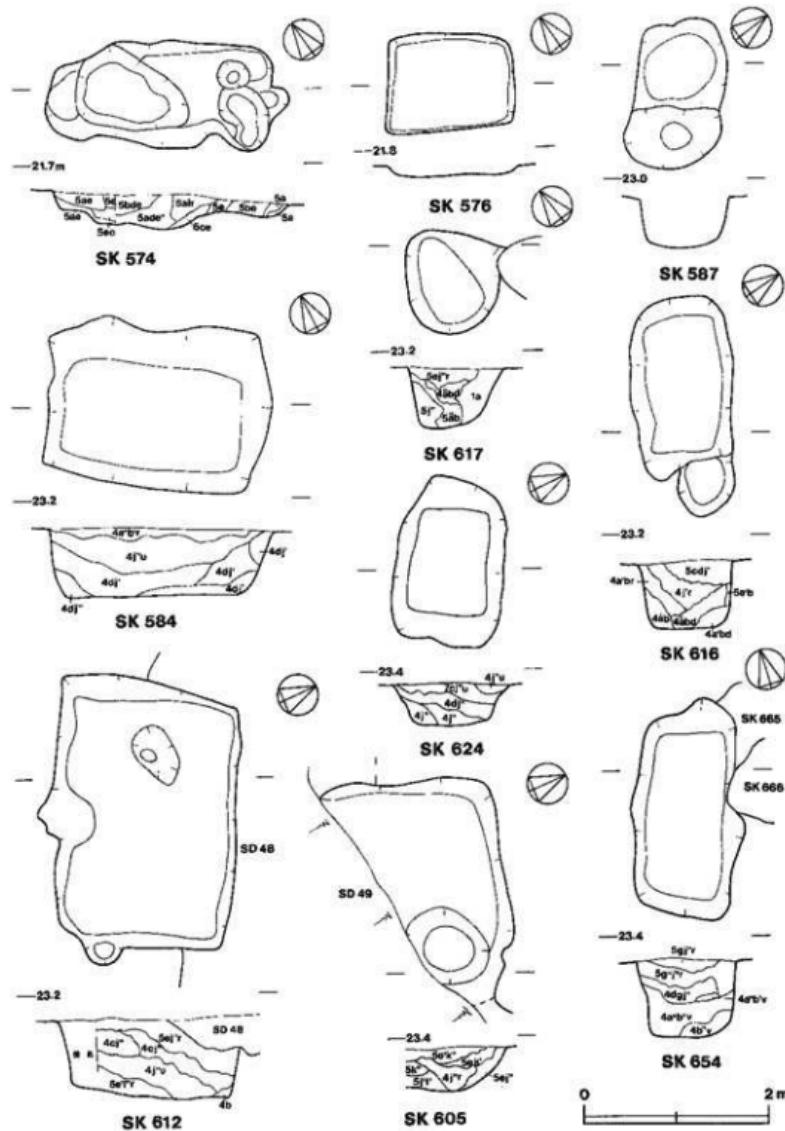
第86図 土坑実測図（墓壙及び墓壙と思われる土坑—1）



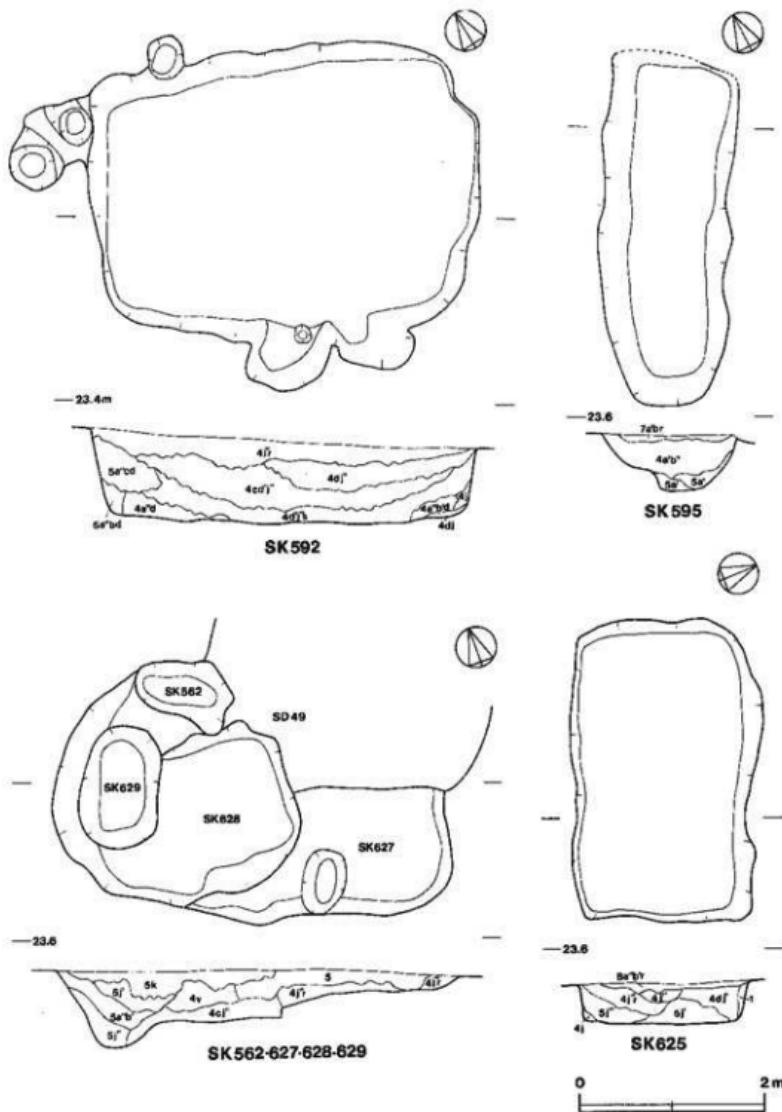
第87図 土坑実測図（墓壙及び墓壙と思われる土坑—2）



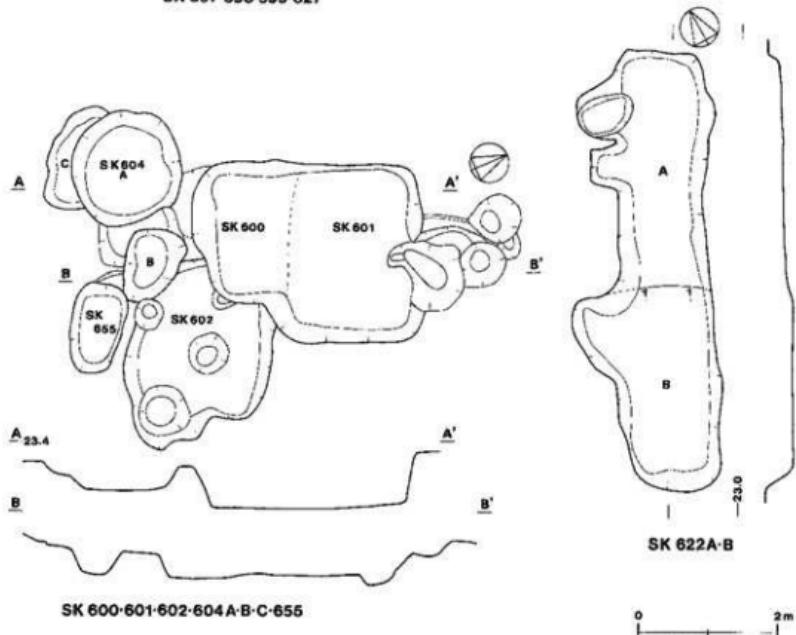
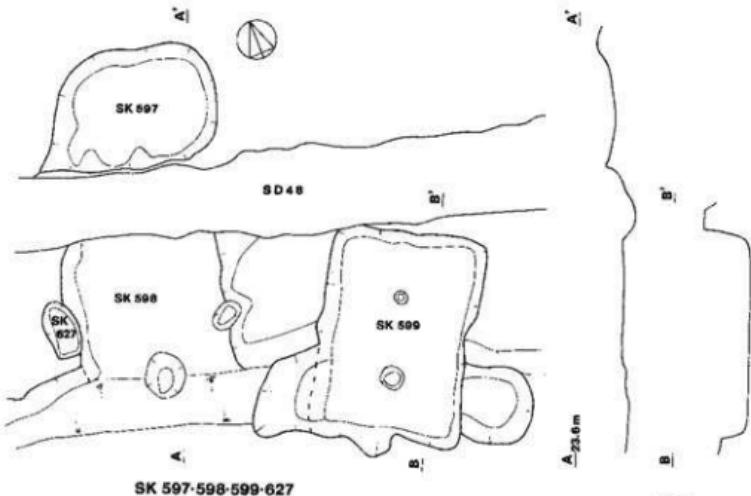
第88図 土坑実測図（墓壙及び墓塚と思われる土坑—3）



第89図 土坑実測図（墓塚及び墓壙と思われる土坑—4）



第90図 土坑実測図（墓壙及び墓壙と思われる土坑—5）



第91図 土坑実測図（墓壙及び墓壙と思われる土坑－6）

(2) 墓壙の可能性のある土坑 (第92~96回)

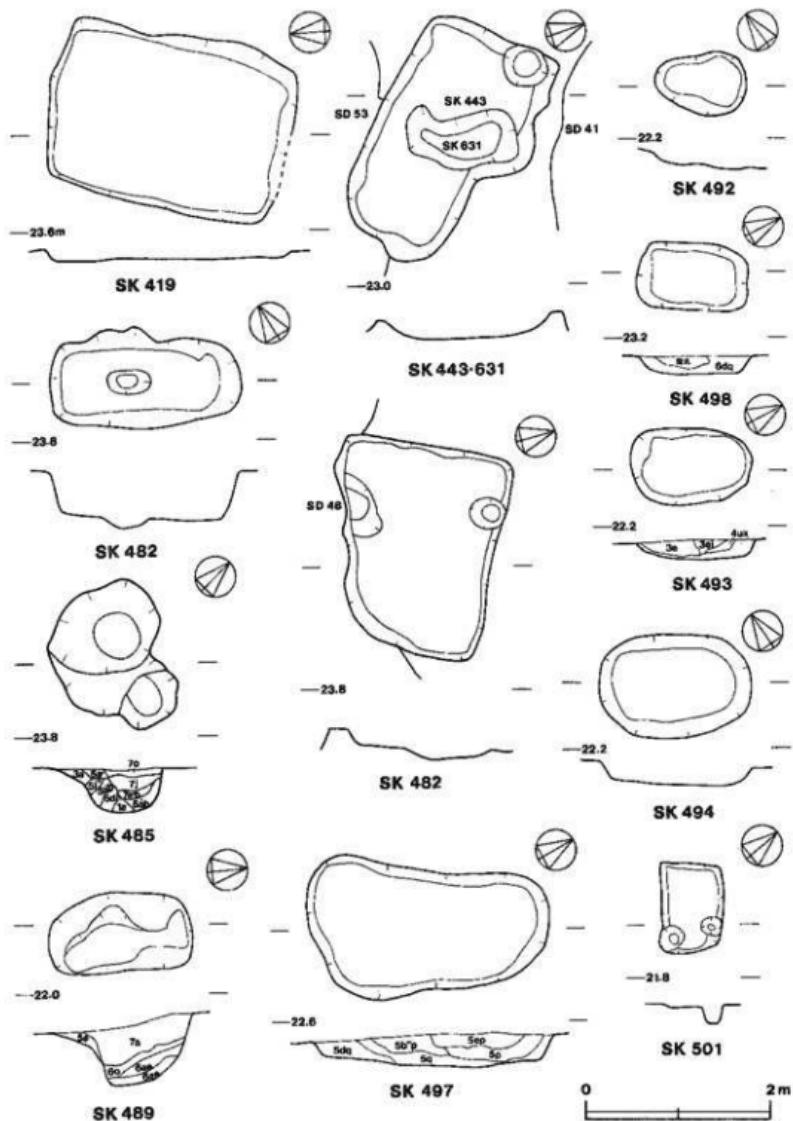
前項で述べたように、墓壙及び墓壙と思われる土坑は、3か所に集中して検出されている。これらの場所には、前述した土坑のほかに、平面形が方形または長方形を呈し、覆土が明らかに人為的に埋め戻された様相を呈する土坑が数多く存在する。その多くは、形状や覆土の状況、出土遺物等から墓壙の可能性が高いと考えられる。ここでは、墓壙及び墓壙と思われる土坑が数多く検出された地区内に位置し、形状がそれらと類似する土坑を、「墓壙の可能性のある土坑」として取り上げた。

表3 墓壙の可能性のある土坑一覧表

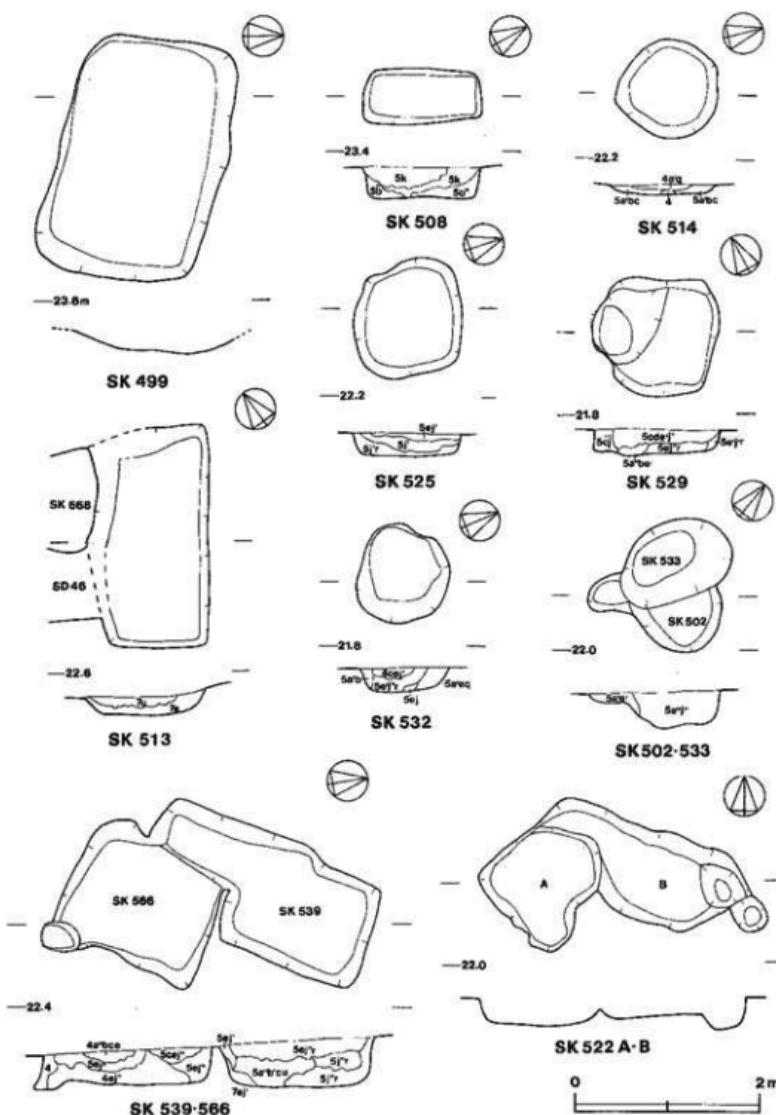
土坑番号	位置	方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径m	深さm					
415	E7gs	N - 9° - E	(梢円形)	(2.25) × 1.76	35	I	I	A		SK418を切る。
419	E7is	N - 15° - E	長 方 形	2.65 × 1.87	18	Ⅲ	I	A		SD40に上辺が埋め戻されている。 南西壁破壊。
420	E7bs	N - 57° - W	隅丸長方形	2.07 × 1.10	56	Ⅱ	I	A		中央部に梢円形のビット。
443	F7bs	N - 43° - W	長 方 形	2.55 × 1.30	25	Ⅲ	I	A		SK631が切る。
444	E8is	(N - 67° - W)	(長 方 形)	— × 0.74	26	Ⅲ	I	A		SK466を切る。 SK452が切る。
449	E8is	(N - 78° - W)	(長 方 形)	2.90 × —	35	Ⅲ	I	A		重複が激しい。 北側壁上にビット2。
454	E8is	—	—	— × —	(21)	Ⅲ	3	A		重複激しく形状不明。
458	E8is	(N - 62° - W)	(長 方 形)	— × 0.80	(40)	Ⅲ	(2)	A	土師4片、磁石1点、 礫5点	SK441が切る。
465	E8is	(N - 71.5° - W)	(隅丸長方形)	— × 1.60	60	Ⅲ	I	A		SK433が切る。 底面にビット2。
472	F8as	(N - 25° - E)	(隅丸長方形)	(1.17) × 0.77	40	Ⅲ	3	A		重複激しい。
477	E8is	(N - 60° - W)	(不整長方形)	— × (1.20)	(56)	Ⅲ	I	A		重複激しく形状不明。
482	F7ds	(N - 25° - E)	(長 方 形)	— × 22.5	—	—	—	A		SD48が切る。
485	F7bs	N - 30° - E	不整梢円形	1.58 × 0.98	48	Ⅱ-Ⅲ	2	A	土師質2片、内耳1片、 陶器1片	
489	J7bs	N - 0°	梢円形	1.55 × 0.85	78	I-Ⅲ	2	A		
492	J7cs	N - 48° - W	梢円形	1.01 × 0.68	19	Ⅲ	3	A		
493	J7bs	N - 27° - E	梢円形	1.34 × 0.82	23	Ⅲ	1	A		
494	J7as	N - 53° - W	梢円形	1.66 × 1.11	21	Ⅲ	1	A		
497	J7bs	N - 31° - E	不整梢円形	2.61 × 1.28	30	Ⅲ	1	A		
498	J6as	N - 31° - E	隅丸長方形	1.22 × 0.72	20	Ⅲ	1	A		
499	E7is	N - 76° - W	梢丸長方形	2.64 × 1.80	(35)	(Ⅲ)	2	A		
501	G7ds	N - 52° - W	長 方 形	0.96 × 0.67	5	Ⅲ	1	A		南東壁際にビット。

土 坑 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径[m]	深さ[m]					
502	G7dr	(N - 54° - W)	(椭円形)	— × 0.92	35	II	I	A		SK533が切る。
508	I6j	N - 33° - E	長 方 形	1.30 × 0.58	39	II	I	A		
513	G7ds	N - 35° - E	(長 方 形)	2.35 × (1.10)	—	II	I	A		SD46が切る。
514	F7hs	—	円 形	1.12 × 1.07	12	II	I	A		
522-A	G7ar	—	不 定 形	— × —	31	II	I	A		
522-B	G7as	N - 64° - W	(不整椭円形)	2.21 × 1.02	34	I	I	A		
525	F7i	N - 77° - W	不整椭円形	1.24 × 1.02	25	II	I	A		
529	G7cr	—	不 整 方 形	1.35 × 1.25	28	II-N	6	A		
531	G7er	N - 21° - E	不整椭円形	1.57 × 0.75	10	III	I	A		
532	G7er	—	不 整 円 形	1.00 × 0.97	26	II	I	A	内耳1片、陶磁1片。 櫛1点	
533	G7dr	N - 41° - E	椭円形	1.28 × 0.84	66	I	2	A		SK502を切る
535	G7br	N - 57.5° - W	不整椭円形	1.53 × 0.58	17	III	5	A	陶磁2片	北西・北東にビット。
536	G7bs	N - 31° - E	不整椭円形	1.37 × 0.81	15	III	5	A	櫛4点	
537	G7cs	N - 30° - E	不 整 方 形	1.23 × 1.12	51	I	2	A		
539	F7hr	N - 31° - E	(長 方 形)	(2.63) × 1.30	60	II	I	A		SK566が切る。
544	G7bs	N - 58° - E	(不整長方形)	(2.35) × 0.77	44	II	I	A		SK545が切る。
545	G7bs	N - 63° - W	椭円形	0.91 × 0.72	36	II	I	A	陶磁2片、櫛3点	SK544を切る。
546	G7bs	N - 28.5° - E	不整長方形	2.31 × 1.02	51	I	1	A		北東側に取り出し部。
549	E8hs	N - 13° - E	(異丸長方形)	(2.37) × 1.63	(77)	II	I	A		SK439が切る。
552	G7es	—	不 定 形	— × —	35	V	I	A		
556	I6j	N - 29° - E	長 方 形	2.75 × 0.56	38	I	I	A	石製品1点	SK557が切る。
557	I6jr	(N - 62.5° - W)	(長 方 形)	— × 0.68	40	I	I	A		SK558が切る。 SK556を切る。
558	I6j	N - 25° - E	(長 方 形)	1.75 × 0.65	50	II	I	A		SK556-559が切る。
559	I6j	N - 43° - E	隅丸長方形	1.76 × 0.70	79	II	I	A	壳生1片、土師4片、 土師質2片、内耳7片、 陶磁9片、櫛1点	SK558を切る。
565	G7ar	N - 87.5° - W	不整椭円形	1.26 × 0.97	35	III	3	A		北壁際にビット2。
566	F7hr	N - 35° - E	長 方 形	1.66 × 1.40	30	I	I	A		SK539を切る。
567	G7cs	—	不 整 円 形	0.86 × 0.79	35	II	2	A	土師質1片	SK537を切る。
589	F7i	N - 12° - W	(不整長方形)	(2.46) × 1.68	35	III	3	A		SK590を切る。
590	F7i	N - 62° - E	(不整長方形)	2.05 × (0.95)	27	II	2	A		SK589を切る。東壁 コーナー部にビット。
596	F7cs	N - 67.5° - W	不整長方形	1.45 × 1.19	36	II-V	1	A		南東壁下にビット。
615	F7gs	N - 58° - W	長 方 形	1.81 × 1.20	37	II	1	A		

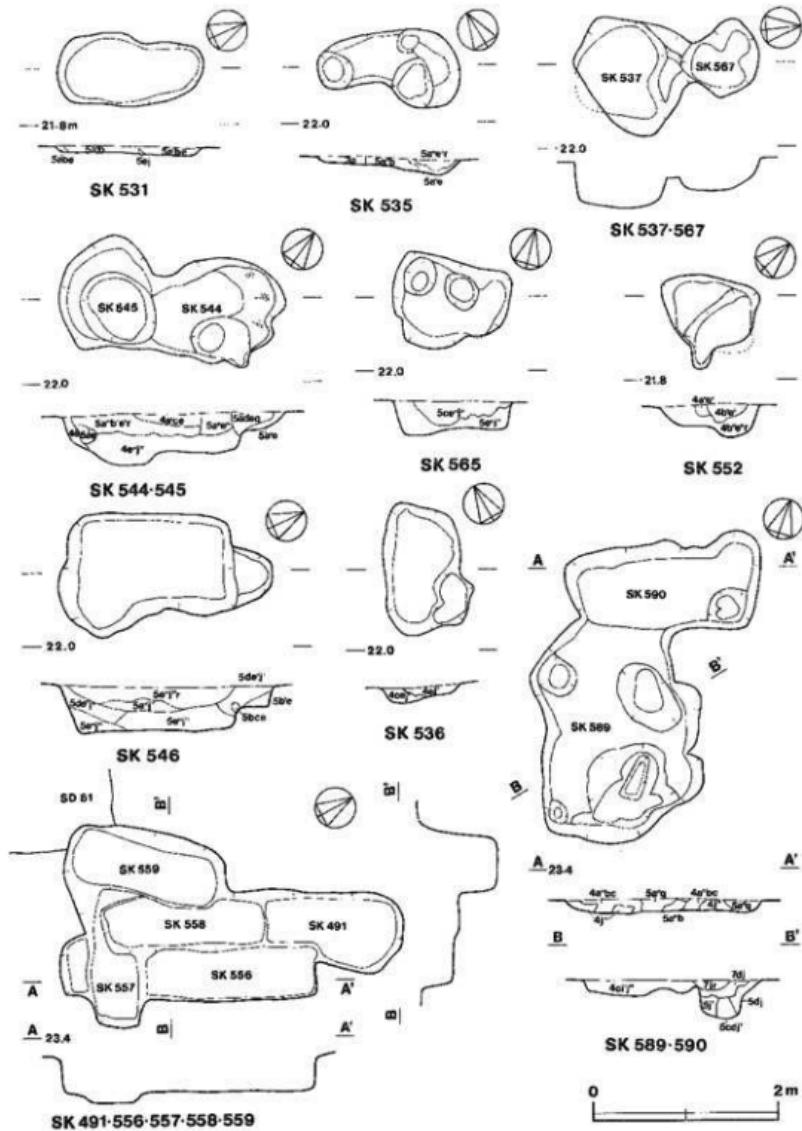
土坑 番号	位置	方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径m	深さm					
629	F6gs	N - 31° - E	椭 圆 形	1.32 × 0.85	(7.0)	Ⅲ	2	A	須恵1片、内耳4片、 環2点	SK628を切る。
648	F6is	N - 26.5° - E	(長 方 形)	(3.71) × 2.24	32	Ⅱ	1	A	土師4片、陶磁1片	SK649・650・ 662が切る。
653	F7hs	N - 54° - W	不 整 方 形	1.40 × 1.30	(39)	Ⅱ	1	A		
657	F7hs	N - 62.5° - W	不整長方形	1.23 × 1.11	17	Ⅱ	1	A	土師質1片、陶磁2片、 環2点	
658	F7hs	——	不 定 形	—— × ——	23	Ⅱ	2	A		
667	G7cs	N - 61° - W	(不整橢円形)	2.27 × (1.68)	55	Ⅱ	1	A		SD46が切る。北西 リーナー部にピット。
675	E6is	(N - 37.5° - E)	(隅丸長方形)	—— × 1.20	40	Ⅱ	1	A	弥生1片、上師1片、 陶磁8片、鐵片1点、 羅石1点	SK671が切る。
678	E6bs	——	(方 形)	(2.58) × 2.35	59	I	1	A	弥生38片、上師質10片、 陶磁1片、環4点	SK38を切る。 中抜か



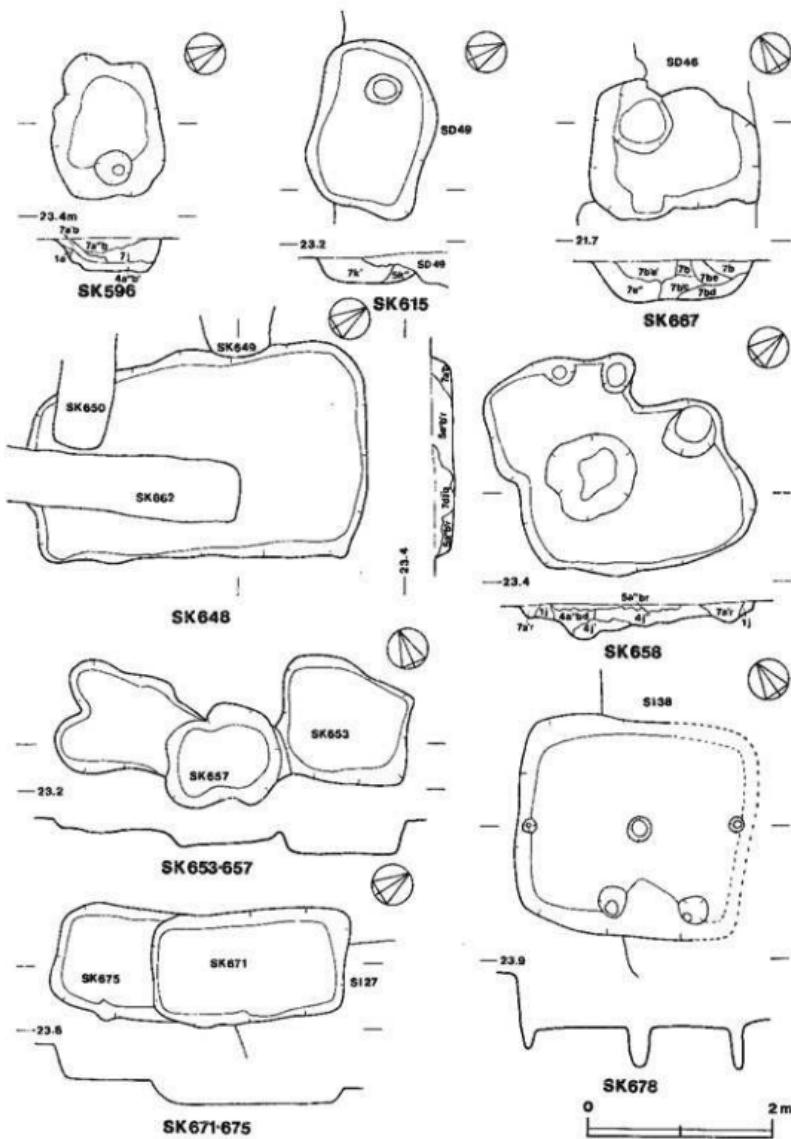
第92図 土坑実測図（墓塚の可能性のある土坑—1）



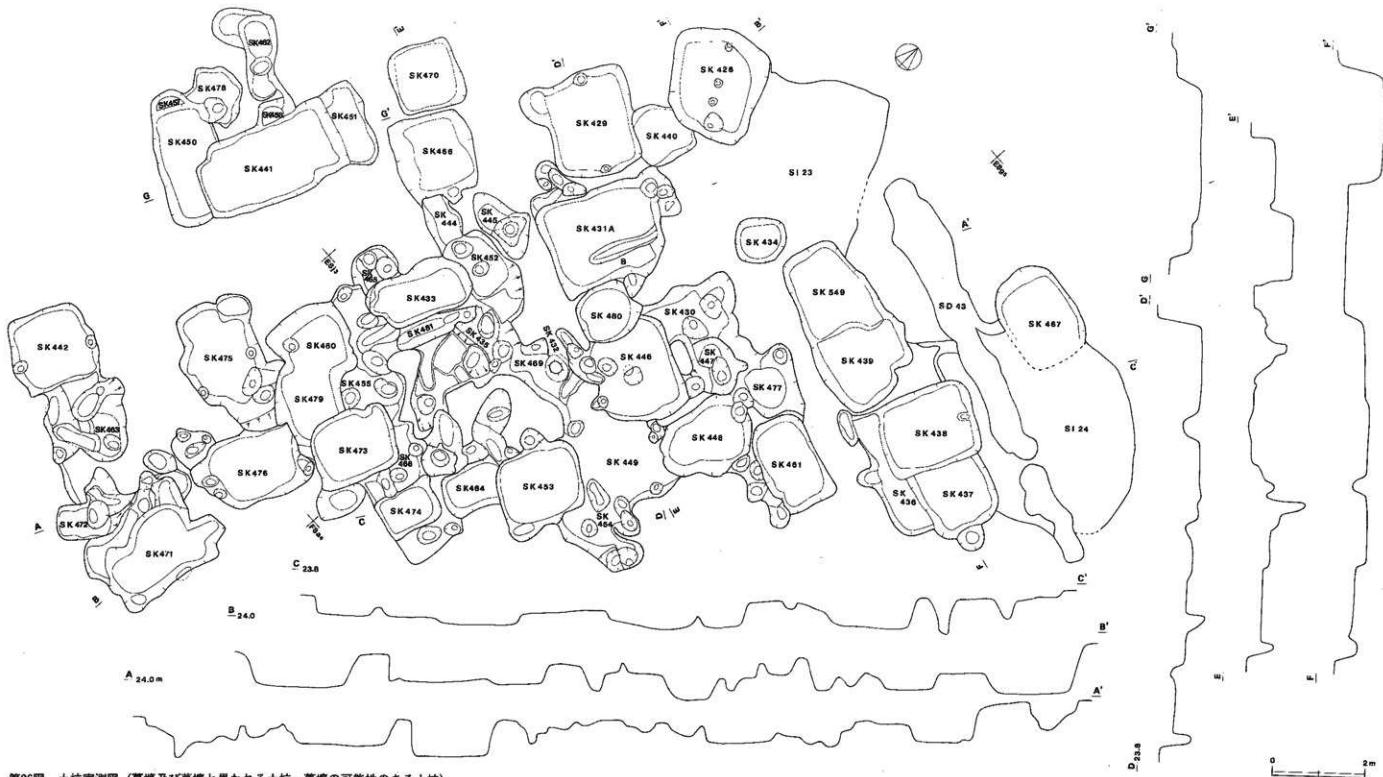
第93図 土坑実測図（墓塚の可能性のある土坑—2）



第94図 土坑実測図（墓壙の可能性のある土坑—3）



第95図 土坑実測図（墓場の可能性のある土坑－4）



第96図 土坑実測図（墓壙及び墓壙と思われる土坑・墓壙の可能性のある土坑）

第6節 その他の遺構

本節では、第5節の5で記載しなかった土坑・地下式壙と、井戸・溝・土塁（近世の屋敷跡に伴う）等を、遺構の種別ごとに記載した。

1 土坑

本節で扱う土坑の内、粘土貼り土坑・Tピット状遺構について文章で記述し、他は土坑一覧表にまとめた。

(1) 粘土貼り土坑（第555号土坑 97図）

本年度調査区内からは、土坑の内側に粘土を貼った、いわゆる粘土貼り土坑が1基（第555号土坑）検出されている。粘土貼り土坑は、昭和59年度調査区内から19基確認されており、これらはすべて、墓壙及び墓域と思われる土坑の近辺に所在している。しかし、本年度調査区内から検出された第555号土坑は、調査区の南端I5f₀区に位置しており、墓壙群とは谷津を隔て、300~400m離れた位置から単独で検出されている。土坑の西側2分の1が調査区外となっているため、全体を明確にすることはできなかった。

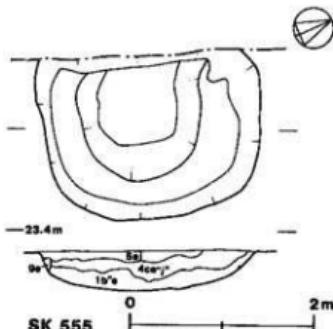
従って推定となるが、平面形は、長径3m、短径2.5m前後の橢円形状を呈し、長径方向はN-20°Eを指すものと思われる。壁高は53cm前後を測り、皿状に掘り込まれている。底面は、凸凹しており粘土が10cm前後の厚さに貼られている。粘土は、常総粘土層とよばれる粘土層から探掘したものである。

遺物は出土していない。

粘土貼り土坑は1基検出されているだけであり、規模・形状も明確でなく、遺物も出土していないため、性格については不明である。

(2) Tピット状遺構（第98・99図）

本年度調査区内からは、いわゆる「Tピット」と言われる土坑に類似する遺構が、2基検出されている。「Tピット」は、「棒状遺構」・「溝状遺構」・「V字形土坑」等とも呼ばれ、その性格については、「落し穴」とする解釈が主流をなし、構築年代については(1)縄文早期前半、(2)縄文早期末~



第97図 第555号土坑実測図

前期初頭、(3)縄文前期～中期末、(4)縄文後期初頭、(5)弥生～中世という五説が上げられている。しかし、性格や築造年代については今後に課題を残している。ここでは、形状が「Tピット」に類似していることから、Tピット状遺構として取り上げた。

注

- (1) 石岡憲雄『所謂「Tピット」について』 土曜考古 第2号 1980.6

第593号土坑（第98図）

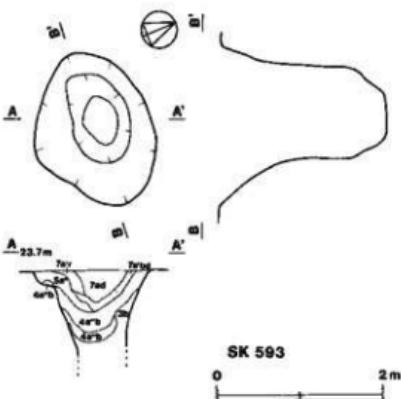
本跡は、調査区の中央部（F6・7区）に確認された墓域群の西側、F6c区を中心に位置する。北西側2.5mには第56号溝が、北東側6mには第53号溝が存在する。

平面形は、長径1.95m、短径1.46mの楕円形を呈し、長径方向はN-87.5°-Wを指している。遺構確認面から坑底までの深さは、1.98mを測る。縦断面は、壁下位でオーバーハングし、中位で垂直に、上位で外傾しながら立ち上がっている。おおむね「U」状を呈する。横断面は、下位から中位にかけてほぼ垂直に、上位で外傾しながら立ち上がり、「V」状を呈する。

坑底は、長径1.17m、短径0.7mの楕円形を呈し、中央部が皿状にくぼんでいる。

覆土は、下位まで調査することができなかったが、ほぼレンズ状の堆積を示し、中位に褐色土、上位に暗褐色土・黒褐色土が堆積している。覆土中には、全体にローム粒子・ハードロームロックを含み、上位には焼土粒子や炭火粒子が含まれている。

遺物は、出土していない。

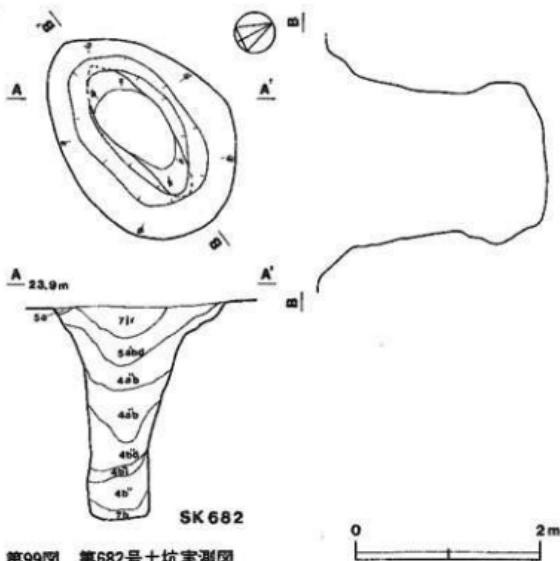


第98図 第593号土坑実測図

第682号土坑（第99図）

本跡は調査区の北西端C5h区に位置する。

平面形は、長径2.50m、短径1.70mの楕円形を呈し、長径方向はN-68°-Eを指している。遺構確認面から坑底までの深さは、2.45mを測る。縦断面は、壁下位でオーバーハングし、中位ではほぼ垂直に、上位で外傾しながら立ち上がっている。おおむね「U」状を呈する。横断面は、下位から中位にかけてほぼ垂直に、上位で外傾しながら立ち上がり、「V」状を呈する。坑底は、長径



第99図 第682号土坑実測図

1.75m、短径0.6mの楕円形を呈し、中央部がややくぼんでいる。

覆土は8層に区分され、下層から中層には褐色土、上層には暗褐色土・黒褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体にローム粒子やハードロームブロックを含み、上層には焼土粒子や炭化粒子が含まれている。

遺物は、出土していない。

(3) その他の土坑 (第100~107図)

性格不明の土坑、墓壇の可能性はあるものの、時期や性格を決定づける資料に乏しい土坑等、これまでに取り上げなかった土坑を一括した。

表4 その他の土坑一覧表

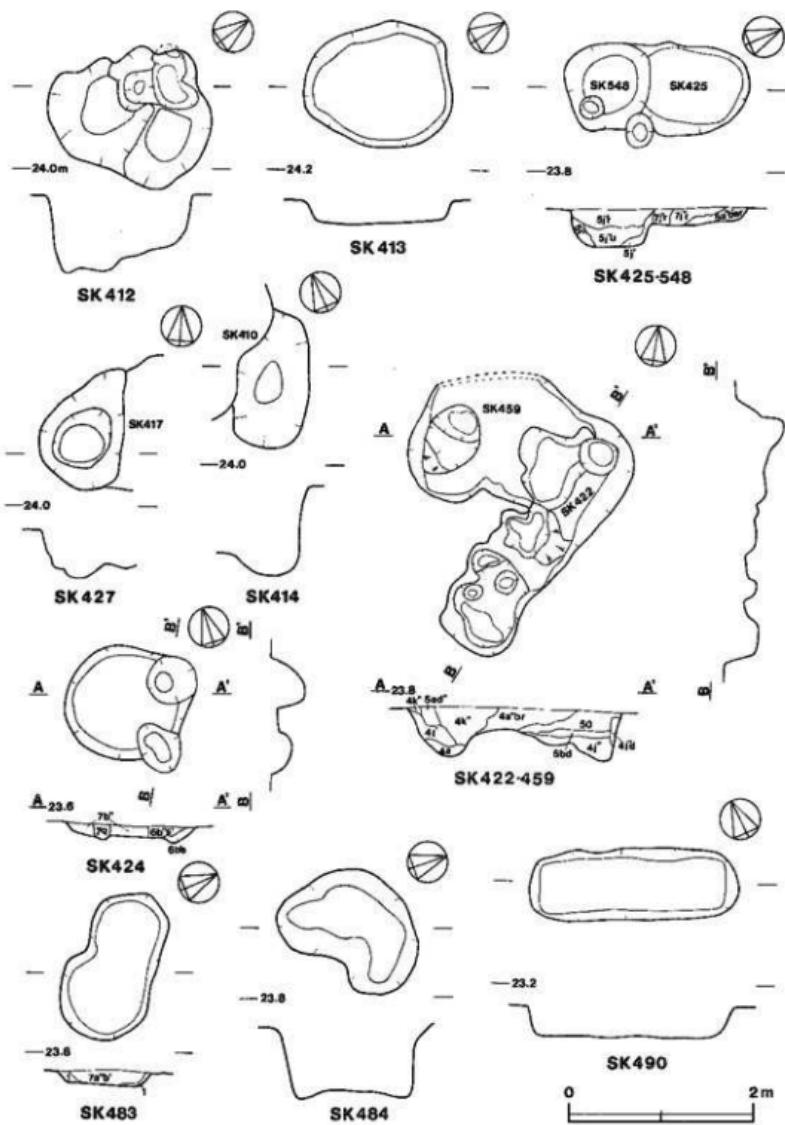
土坑番号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		登 出	近面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
412	E7f _e	—	不 定 形	—×—	90	II-V	3	A		SD37を切る。
413	E7d _s	N-35.5°-E	不整楕円形	1.60×1.34	26	II	1	N		
414	E7g _s	N-30°-E	(楕円形)	1.44×0.80	100	I	2	(A)		SK410を切る。
422	E7i _s	N-31°-E	不整長方形	2.87×0.90	44	II	4	N		SK459を切る。
424	F8a _s	—	不 整 円 形	1.30×1.22	14	III	1	A		南東壁下にピット2。
425	E8j _s	N-31°-E	(楕円形)	(1.35)×0.95	18	III	1	A		SK548が切る。
427	E7h _s	N-23°-E	不整楕円形	1.35×0.85	56	II	3	(A)		SK417が切る。
445	E8i _s	N-88°-W	不整楕円形	1.66×0.76	49	III	2	A		
457	E8j _s	—	—	—×—	35	II	2	A		SK450が切る。 形状不明。

土 坑 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		發面	底面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
459	E7j ₃	(N-81°-W)	(不整橢円形)	(2.08)×(1.40)	(47)	II	3	A	土師3片 磁3点	SK422が切る。
462	E8i ₁	——	不 定 形	——×——	42	III	2	N		底面にピット。
468	E8j ₃	——	(隅丸方形)	——×1.35	35	III	1	A	陶器1片 石製品1点	重複激しい。 實際にピット。
469	E8i ₄	——	——	——×——	(25)	III	6	A		重複激しく形状不明。
478	E8i ₁	——	(不整方形)	1.18×(1.05)	15	II	1	(A)		SK457・450が切る。 南東壁底面にピット。
480	E8i ₄	——	不 整 凸 形	(1.35)×1.22	(57)	III	2	(A)		SK446を切る。
481	F8i ₃	——	——	——×——	(34)	II	1	(A)	土師質1片	重複激しく形状不明。
483	F7a ₂	N-49°-W	不整橢円形	1.68×0.95	18	III	1	A		
484	F7b ₃	N-57°-E	不整橢円形	1.51×1.13	79	II	1	A		SD41を切る。
487	J7a ₁	——	(不整円形)	(1.23)×1.18	40	II	2	A		SK564が切る。
488	J7a ₂	(N-0°)	(橢 凸 形)	(1.17)×(0.76)	30	III	1	N		SK563が切る。
490	I6e ₅	N-63°-W	隅丸長方形	2.28×0.78	34	II	1	A		
491	I6j ₇	(N-32°-E)	(格 円 形)	——×0.80	30	I	2	N		SK556・558が切る。
495	J7a ₁	N-41°-W	(不整長方形)	(1.77)×1.50	63	II	1	A		SK560・561・563を切る。 壁際にピット。
500	E7i ₄	N-61°-E	不整橢円形	1.18×0.95	53	II	1	(A)		SK640を切る。
503	I6d ₈	N-28.5°-W	隅丸 方形	2.26×2.05	10	III	1	A		SK511が切る。
504	I6d ₈	——	円 形	1.78×1.59	43	II	1	A		
505	I6e ₇	——	不 定 形	——×——	34	II	2	N		底面にピット。
506	I6f ₇	N-18.5°-E	橢 円 形	0.84×0.62	22	II	2	A		
507	I6h ₃	N-19.5°-E	隅丸長方形	3.18×2.35	13	III	1	(N)		
509	I6e ₈	——	円 形	0.97×0.90	13	II	1	(N)		
510	I6d ₈	——	(円 形)	1.43×(1.25)	30	III	1	(A)		SD45が切る。
511	I6d ₂	N-65°-W	(隅丸長方形)	(2.11)×1.28	28	II	1	(A)		SK503を切る。
530	G7c ₇	——	不 整 円 形	0.84×0.81	20	III	1	A		
540	F7j ₇	N-37.5°-E	不整橢円形	1.18×0.94	18	II	1	(A)		北東・南東壁際にピット。
541	F7j ₇	N-37°-E	橢 円 形	1.04×0.67	15	III	1	(A)		北東壁際にピット。
542	F7j ₇	N-2°-E	不整橢円形	1.68×0.74	42	II	3	A		
543	F7a ₃	N-0°	不整橢円形	1.17×0.62	25	III	3	A		北東壁際にピット。
547	F6g ₆	N-55.5°-W	不整橢円形	0.85×0.48	23	II	1	A		
548	E8j ₁	——	不 整 円 形	0.93×0.90	42	III	2	A		SK425を切る。

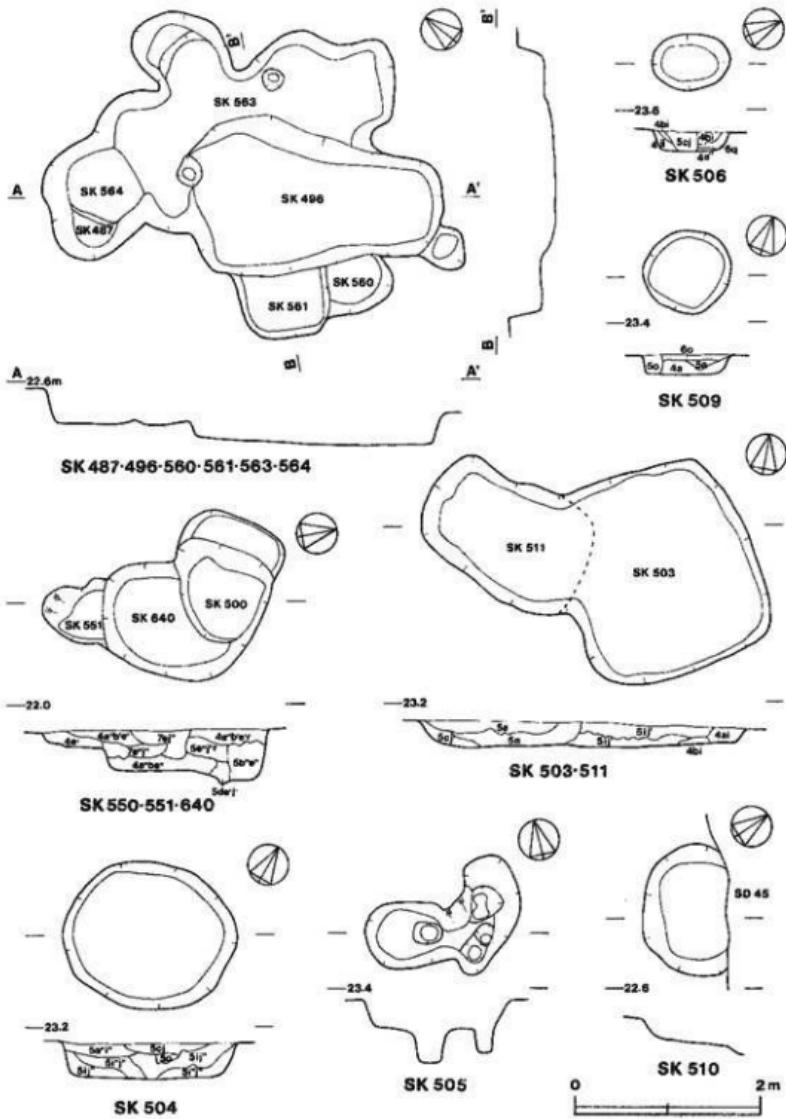
七 塔 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	高さ(m)					
550	G7e ₄	N - 30° - E	格 円 形	0.86 × 0.52	16	II	I	A		
551	C7e ₄	(N - 20.5° - E)	(不整格円形)	— × 0.70	40	III	6	A		南西側に張り出し部。
560	J7b ₁	—	—	— × —	20	II	1	(A)		SK496 - 561を切る。 東側激しく形状不明。
561	J7b ₁	(N - 43° - E)	(長 方 形)	— × 0.97	29	I	1	(A)		SK496が切る。 SK560を切る。
562	F6g ₄	N - 55° - W	不整格円形	1.04 × 0.65	—	—	—	(A)		
563	J7a ₂	—	不 定 形	— × —	38	(II)	1	(A)		SK564 - 496が切る。 SK487 - 488を切る。
564	J7a ₂	—	(円 形)	(0.78) × (0.77)	38	I	1	(A)	上師質1片	
569	F7j ₄	N - 68° - W	不整格円形	1.20 × 0.81	36	II	6	A		
570	G7a ₄	—	円 形	0.88 × 0.79	32	II	2	A		
572	G7b ₄	N - 59° - W	不整格円形	0.90 × 0.78	38	II	6	A		
573	G7d ₂	—	不 整 円 形	1.11 × 0.98	37	I	5	A		
577	G7b ₄	—	不 整 円 形	0.84 × 0.81	38	II	3	N		
578	F7h ₄	N - 39° - E	不整長方形	1.27 × 0.98	40	II	5	N		
579	F7h ₅	N - 60° - W	不整格円形	1.92 × 0.78	(30)	II	5	(N)		
580	F7h ₅	N - 41° - E	不整格円形	2.23 × 1.30	(31)	III	3	(N)		
581	F7h ₅	—	不 定 形	— × —	13	II	1	(N)		
582	F7j ₂	N - 33° - E	不整格円形	1.18 × 0.88	35	II	6	N	陶器2片 磁1点	北東壁下にピット。
583	F7j ₄	N - 45° - W	格 円 形	1.23 × 0.81	50	II	6	A		
585	F7j ₄	—	不 整 円 形	0.85 × 0.84	35	II	1	A		
586	F7j ₂	—	円 形	0.97 × 0.86	48	II	2	N		
588	F7i ₂	N - 45° - W	不整格円形	1.33 × 0.81	64	II-N	2	A		
594	F6a ₂	N - 27° - E	不整長方形	1.52 × 1.00	35	III	2	A		
604A	F7g ₂	—	円 形	1.55 × 1.52	36	II	1	A		
604B	F7k ₂	N - 46° - W	不整格円形	1.08 × 0.79	30	(II)	1	A		
604C	F7g ₃	N - 46.5° - W	(椭 圆 形)	1.55 × (0.78)	—	(II)	(I)	A		SD47を切る。
607	G7b ₄	N - 45° - W	不整格円形	0.82 × 0.46	36	II-5	3	A		
608	G7c ₄	—	円 形	1.10 × 1.05	48	II	6	A		北西壁下にピット。
609	F7i ₄	N - 27° - E	不整格円形	1.43 × 0.72	22	II	3	A		
610	F7i ₄	N - 55° - W	格 円 形	1.00 × 0.65	20	II	2	N		
611	F7j ₄	—	不 整 円 形	1.27 × 1.08	32	II	6	A		

土 坡 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆 土	出 上 通 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
613	F7e _s	N - 62° - W	(長 方 形)	—×—	68	II	I	(A)		SD48が切る。
614	F7e _s	(N - 62° - W)	(不整長方形)	—×0.82	28	I	I	(A)		長軸線上にピット2。
618	F7h _s	—	不整梢円形	1.45×1.27	28	II	I	A		
619	F7e _s	N - 65° - W	隅丸長方形	3.90×0.75	40	II	I	A		長軸線上にピット2。
620	F7g _s	—	(不整梢円形)	1.30×(1.15)	39	I	2	(N)		
621	F7f _s	—	不 整 円 形	1.45×1.37	35	II	2	(A)		SK631を切る。
623	F6d _s	N - 63° - W	(隅丸長方形)	(3.58)×3.23	15	III	1	(N)		
626	F7e _s	N - 3° - E	梢 円 形	0.82×0.45	25	II	I	A		SK598を切る。
630A	F6f _s	—	—	—×—	27	III	2	(A)	土師4片 土師 質1片 内耳2片	
630B	F6f _s	—	不整梢円形	5.08×3.82	50	III	2	(A)	寛永通質1点	
631	F7b _s	N - 13° - E	不整梢円形	1.19×0.55	28	III	1	(A)		SK443を切る。
632	F6b _s	N - 32° - E	不整梢円形	1.38×1.00	87	III	5	(A)		
634	F7f _s	(N - 26° - E)	(梢 円 形)	(1.80)×(1.50)	(41)	II	1	(A)		
637	F6f _s	N - 51° - W	梢 円 形	1.54×1.27	86	II	2	A		
638	F7a _s	N - 63° - W	不整梢円形	2.03×1.05	30	II	2	A		
639A	F7i _s	N - 0°	梢 円 形	1.56×1.01	27	I	1	A		
639B	F7i _s	—	不 定 形	—×—	10	III	5	A		
640	G7e _s	—	不 定 形	—×—	62	II	6	A		SK500が切る。
642	F7i _s	N - 11° - E	不整梢円形	0.87×0.55	18	I	1	A		
643	F7i _s	N - 32.5° - W	不整梢円形	1.01×0.62	26	III	5	(N)		SK644が切る。
644	F7j _s	—	不 整 円 形	0.81×0.77	40	I	2	(N)		SK643を切る。
645	F7j _s	—	不 定 形	—×—	13	II	1	A		
646	F7j _s	(N - 50° - W)	(不整梢円形)	(1.80)×0.82	23	I	3	A		SK517が切る。 南壁際にピット。
647	G7a _s	N - 21° - E	梢 円 形	1.15×0.79	17	II	1	A		
649	F6b _s	N - 44° - W	梢 円 形	1.41×0.83	35	II	2	A		北西壁際にピット。
651	F6i _s	—	不 整 円 形	1.02×0.94	71	II	2	N		
652	F6i _s	—	円 形	0.82×0.70	26	II	2	N		
655	F7g _s	N - 61° - W	隅丸長方形	1.62×0.91	80	II	1	A		
656	F7g _s	N - 3° - W	不整梢円形	(1.50)×0.93	89	II	1	A		SD49と重複。
659	F7i _s	—	円 形	1.70×1.04	32	II	1	A		中央部にピット。

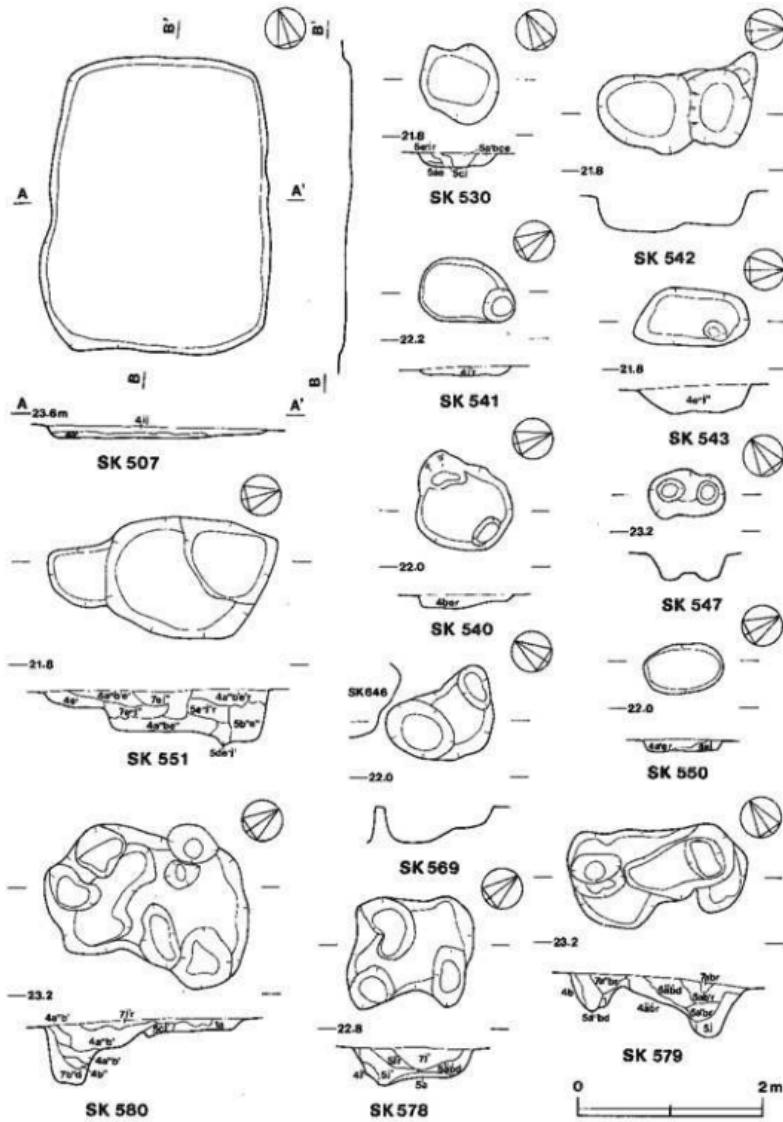
土 坑 番 号	位 置	方 向	平 面 形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
660	F7i ₂	N - 43° - W	椭 圆 形	1.08 × 0.55	28	I	I	A		
661	F7h ₄	N - 45° - W	椭 圆 形	0.85 × 0.67	28	II	6	(N)		
663	G7b ₃	——	不整椭圆形	—— × 1.30	48	II	2	A		SK664を切る。
664	G7a ₂	N - 61.5° - W	(椭 圆 形)	2.23 × (1.65)	33	II	1	A		SK663を切る。
665	F7f ₃	——	不 定 形	—— × ——	(45)	III	2	A		SK654を切る。 SK666を切る。
666	F7g ₃	N - 71° - W	椭 圆 形	1.10 × 0.85	77	II	6	A		SK665を切る。
668	G7d ₃	——	不 定 形	—— × ——	—	III	6	N	寄生 8片 上縫 4片 地縫 1片	SD46と重複。
669	D6i ₂	N - 14° - E	長 方 形	1.86 × 1.50	80	III	6	N		SI29の床面を掘り込む。
670	E6c ₃	——	隅 丸 方 形	1.15 × 1.07	65	I	I	A		SK668 - SI27を切る。
671	E6f ₃	N - 35.5° - E	隅 丸 長 方 形	2.08 × 1.22	25	II	1	A		SK675 - SI27を切る。
672A	D6h ₃	N - 31° - E	椭 圆 形	1.15 × 0.80	45	III	2	A		SI30を切る。
672B	D6h ₄	N - 58° - W	(椭 圆 形)	—— × 0.80	95	II	3	A		SI30を切る。
673	D6h ₅	N - 32° - E	隅 丸 長 方 形	1.17 × 0.81	31	II	1	A		SI30を切る。
674	D6f ₃	——	隅 丸 方 形	2.12 × 1.97	83	II	1	A		SI30を切る。
676	D6g ₃	N - 35.5° - E	隅 丸 長 方 形	0.82 × 0.70	85	II	1	A		SI30を切る。
677	D6e ₂	N - 59° - E	椭 圆 形	1.07 × 0.96	57	I	6	N		SI31を切る。
683	C5f ₄	N - 65° - E	不整椭圆形	1.55 × 1.20	43	I	6	A		
684	E6a ₃	N - 28.5° - E	(椭 圆 形)	—— × 0.76	48	II	1	A		SI34を切る。



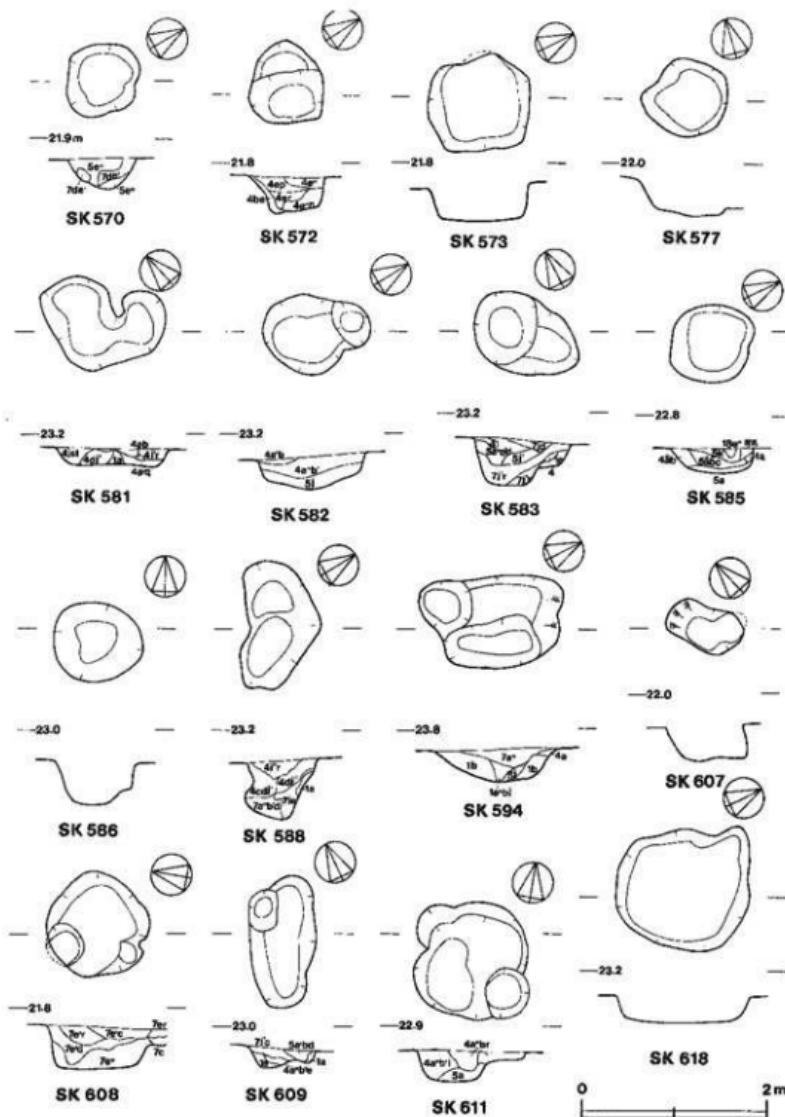
第100図 土坑実測図（その他ー1）



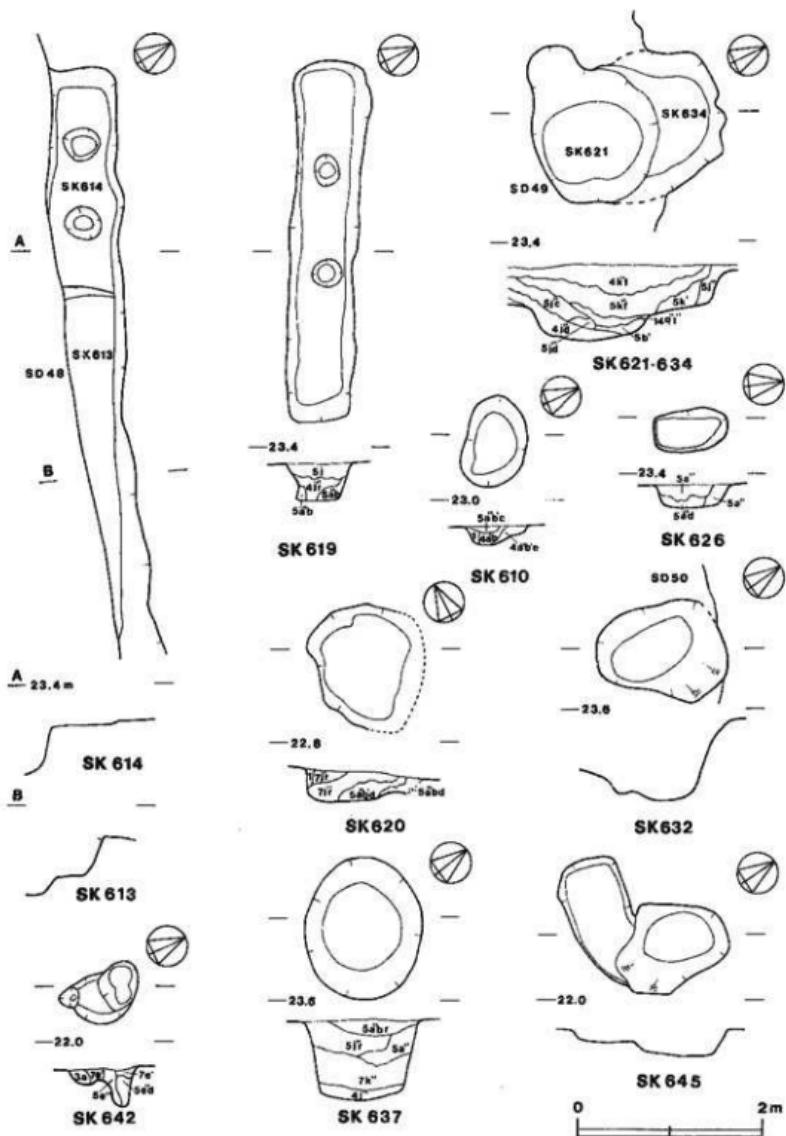
第101図 土坑実測図（その他－2）



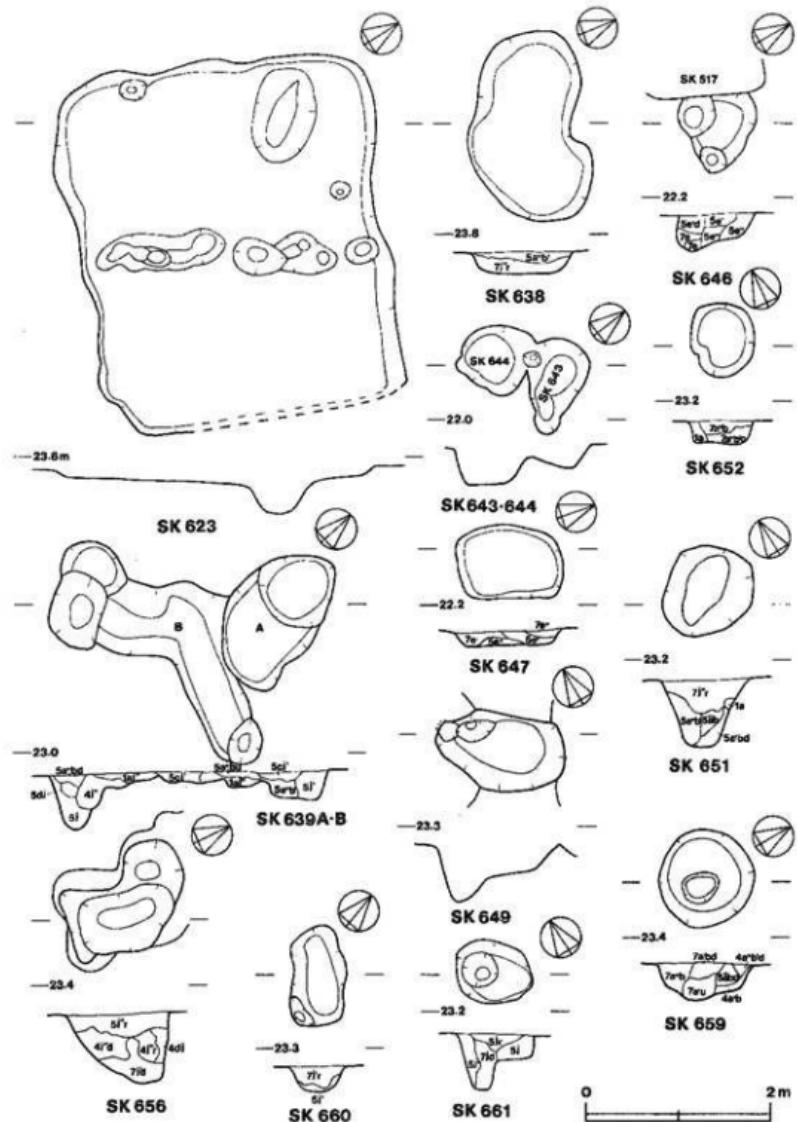
第102図 土坑実測図（その他-3）



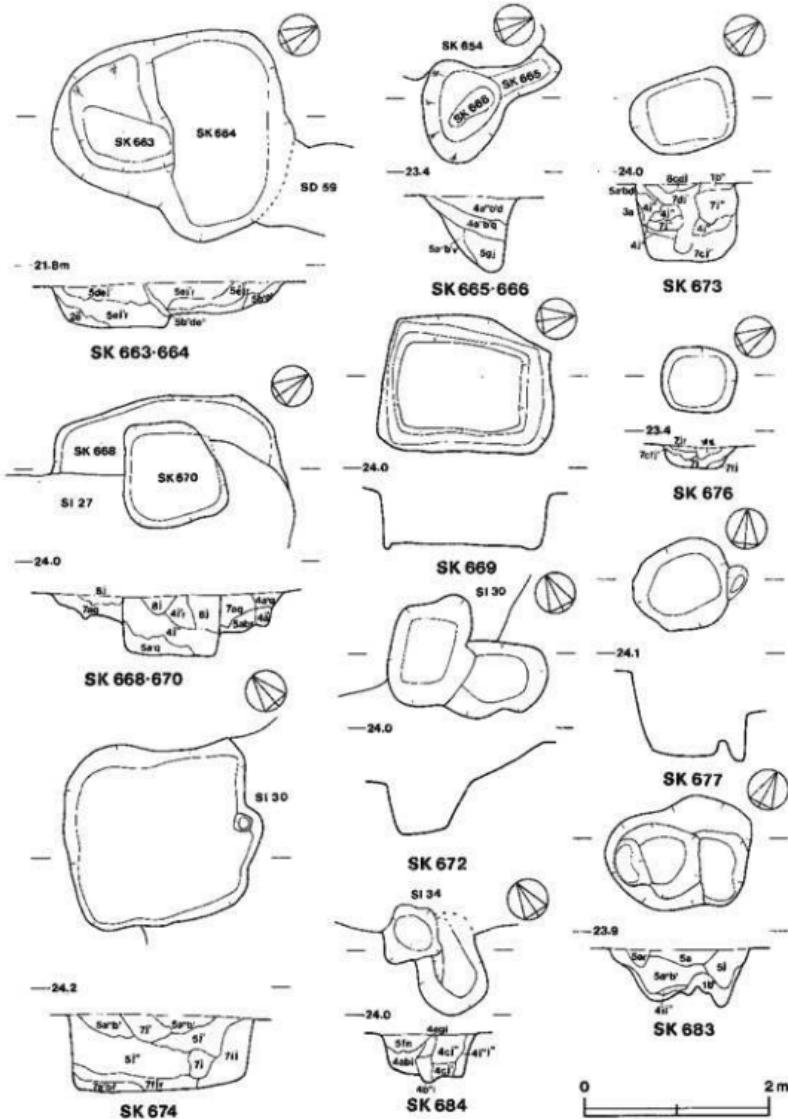
第103図 土坑実測図（その他-4）



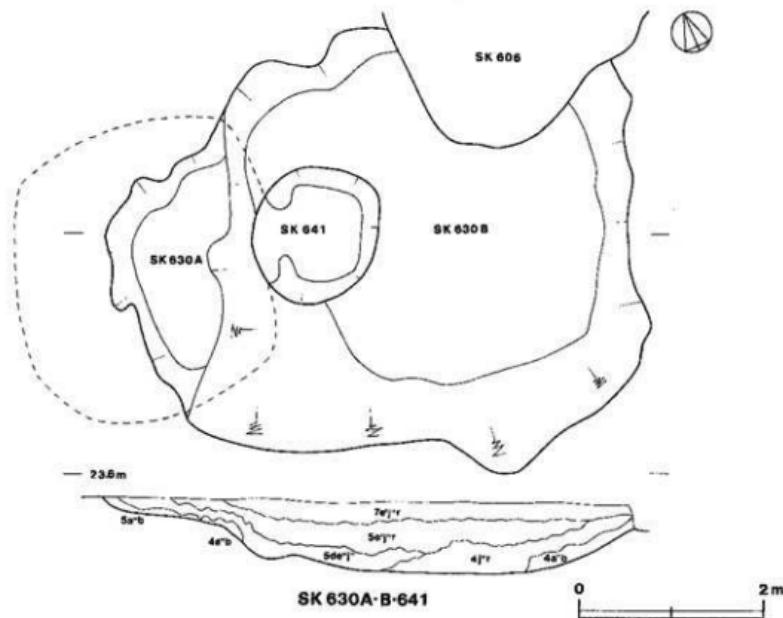
第104図 土坑実測図（その他-5）



第105図 土坑実測図（その他－6）



第106図 土坑実測図（その他－7）



第107図 土坑実測図（その他一 8）

2 地下式壙

本年度調査区内から検出された地下式壙は、4基である。これらの地下式壙は、昭和59年度の調査と同様に、墓壙と思われる土坑、または墓壙の可能性のある土坑が数多く存在する地区や、その近辺に位置しており、地下式壙の性格を考える上で注目すべき傾向と言える。また、出土遺物や覆土の状況等から見ても、周辺の墓壙等と大きな時期差は認められず、近接した時期と考えられる。

調査に際しては、一般的な土坑と同一記号（SK）を用いた。記載に当たって遺構番号の取扱いは、昭和59年度に検出された5基（第1号～第5号地下式壙）に継続し、第6号地下式壙（SK426）・第7号地下式壙（SK575）・第8号地下式壙（SK606）・第9号地下式壙（SK641）として扱った。第9号地下式壙については、重複が激しく、また、調査中壁の崩落の危険性があり形状を明確にとらえることが困難であったため、本項では説明を省いた。

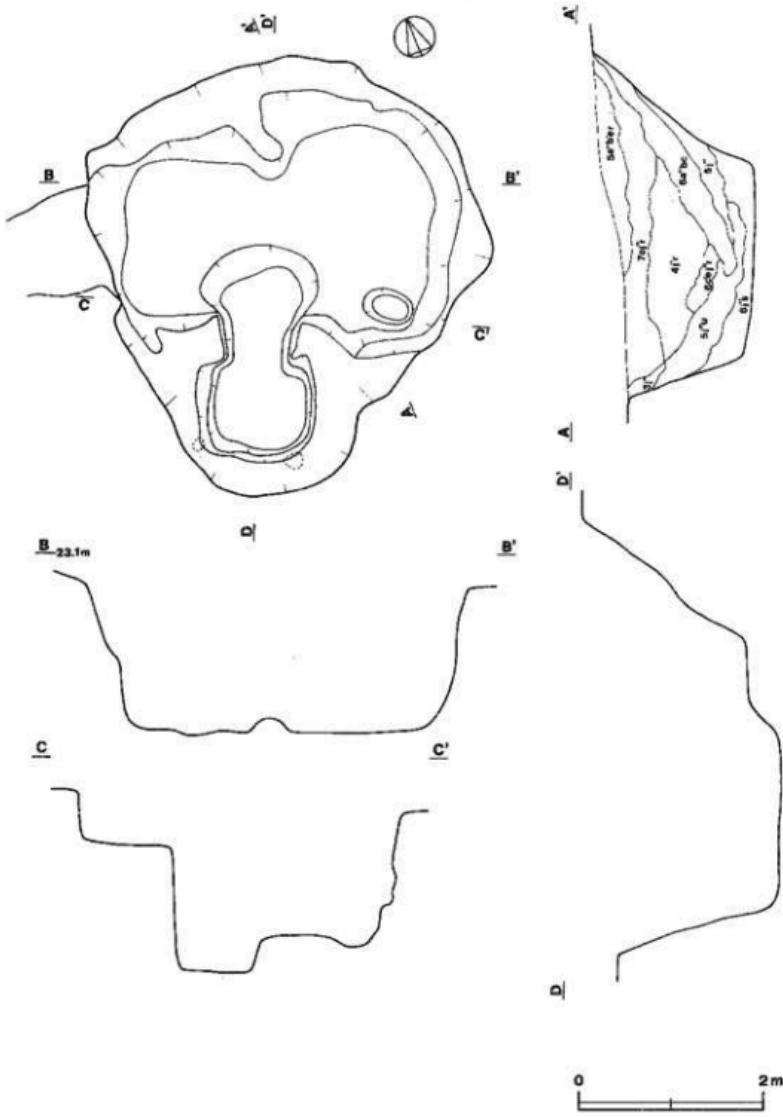
第6号地下式壙（SK426 第108図）

本跡は、調査区の中央部（F6・7区）に検出された墓壙群内の東側、F7f₄区を中心に位置する。北西壁の上部を第50号溝に掘り込まれている。主軸方向はN-24°-Eを指し、全長は約4.7mである。

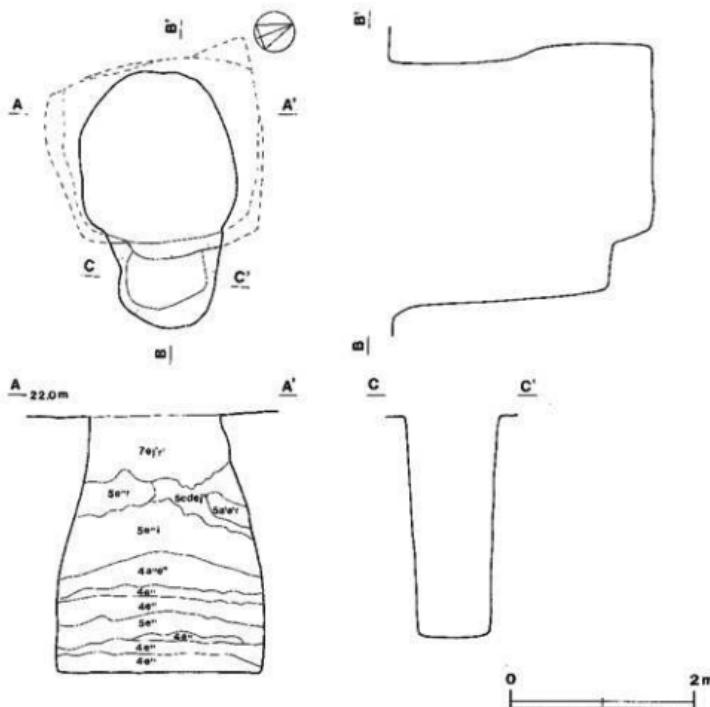
豊坑は確認面から約1.7mの深さまで掘り込まれており、豊坑底面は、主室の底面よりも0.3mほど深く、長径2.35m、短径1.25mで中央部が¹⁰幅²²で中央部が掘れている。瓢形状を呈し主軸方向に長い。豊坑の南西側の壁の下部には、壁面に横に掘り込まれた小ピットが2か所検出されている。底面の瓢形状の掘り込みは、主室の底面を掘り込んでおり、覆土の状況からも後に構築された可能性が強い。主室は、中央部の壁が張り出しており、二室に区分されている。北西側の主室は、奥行1.65m、幅1.4mほどの方形状を呈し、南東側の主室は、奥行2.35m、幅1.6mほどの不整長方形を呈している。豊坑・主室とも、床は粘土層に形成されている。南東側の主室のコーナー部（南東）には、長径0.55m、短径0.43mの梢円形を呈し、0.12mほどの深さを有するピットが検出されている。

壁は、豊坑が70度前後の傾斜で立ち上がり、主室ではほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は、自然堆積である。覆土の下層から中層にかけては、豊坑から主室に流れ込んだと思われる暗褐色土が堆積し、主室ではその上に天井部の崩落によって堆積した、ローム粒子やハードロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。その後、周囲から暗褐色土や黒褐色土が流れ込んでいる。



第108図 第6号地下式礎実測図



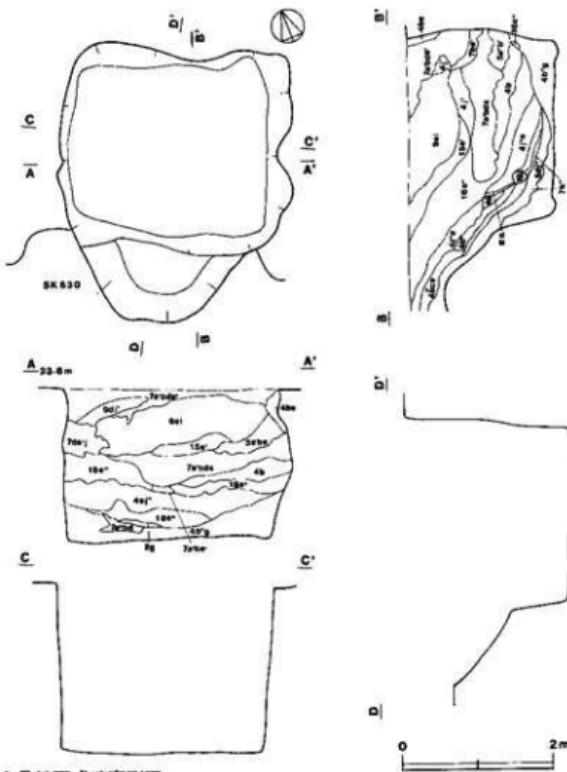
第109図 第7号地下式壙実測図

遺物は、内耳形土器片175点、陶磁器片51点、砥石5点のほか、弥生式土器片3点、土師器片17点、須恵器片3点等が出土している。

第7号地下式壙（SK575 第109図）

本跡は、調査区の中央部と南東側に検出された墓域群のほぼ中間に当たる、F7i₆区を中心に位置する。北東側34mほどに、第6号地下式壙が存在する。主軸方向はN-68°-Wを指し、全長は2.9mである。

豊坑は、確認面から円筒状に2.4mの深さに掘り込まれている。底面は、主室方向にわずかに傾斜している。平面形は、長軸1.05m、短軸0.75mの長方形状を呈している。主室は、豊坑の底面からさらに0.45mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は、奥行1.9m、幅2.1mのやや鈍い張った方形状を呈している。豊坑・主室とも、底面は粘土層に形成されている。



第110図 第8号地下式塚実測図

壁は、豎坑が86度の傾斜で立ち上がっている。主室では、底面から2mの高さまでオーバーハングし、その上位は垂直に立ち上がっている。主室の横断面は、フラスコ状を呈している。

覆土は、自然堆積である。豎坑からの土の流入はほとんど見られず、壁及び犬井部の崩落によって大部分が埋っている。その後、周囲から暗褐色土や黒褐色土が流入している。

遺物は出土していない。

第8号地下式塚 (SK 606 第110図)

本跡は、調査区の中央部に検出された墓壙群内の北西側F7e₁区に位置する。南西側で第630号土坑を掘り込んでいる。南西側約1.5mには、第9号地下式塚が存在する。主軸方向は、N-28°Eを指し、全長は3.5mである。

豎坑は、上部が第630号土坑と重複しているため、明確にとらえることはできなかったが、確認

面からの深さは1.5m前後と思われる。底面は主室方向に傾斜している。平面形は、長径1.8m、短径1mの半円形状を呈している。主室は、豊坑の底面からさらに0.7mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は、奥行2.25m、幅2.65mの長方形形状を呈し、主軸方向が短くなっている。豊坑・主室とも、底面はハードローム面に形成されている。

壁は、豊坑が36度の傾斜で立ち上っている。主室では、奥壁に当る北東壁が中位から上位にかけて、ややオーバーハングしているが、全体的に垂直に立ち上っている。

覆土は、自然堆積である。下層には、豊坑から流れ込んだと思われる黒褐色土が、その上には周囲の壁が崩れて堆積したと思われるハードロームブロックを多量に含む褐色土が見られる。主室では、中層から上層に、天井部が崩落したものと思われる多量の粘土が、V字状に堆積している。その後、周囲から黒褐色土が流入している。

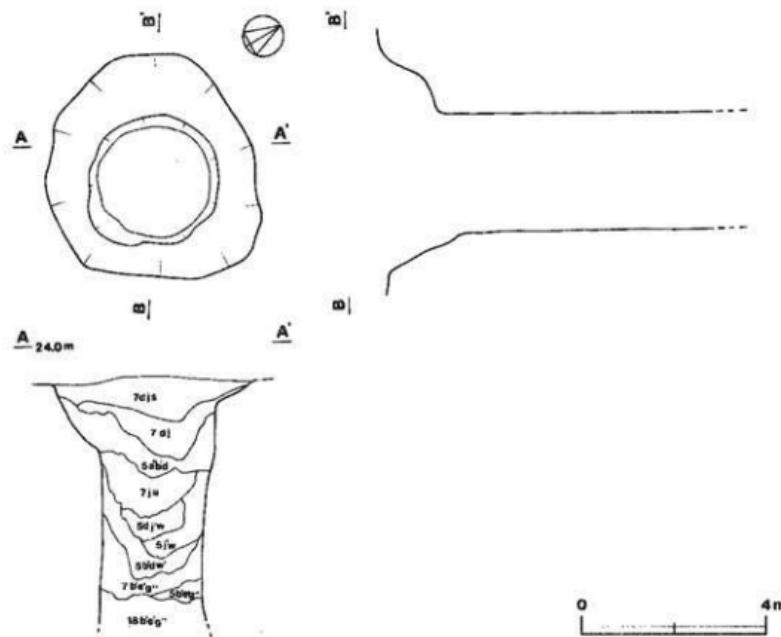
遺物は、主室の覆土中から内耳形土器片1点、土師質土器片2点、陶磁器片7点のほか、弥生式土器片1点、土師器片7点等が出土している。

3 井戸

井戸は、5基検出されている。第1号井戸は、調査区の北西側D4区から、第2号～第5号井戸は、調査区の東側F8・F9区を中心に確認された近世の岸敷跡近くから検出されている。第2号～第4号井戸は、調査時点においても、地表面からその掘り込みの状況が観察できた。しかし、第1号井戸を除きそのほかの4基については、現況が山林・竹林となっていたため、木根や竹根による擾乱が激しく、また、近世～現代にかけての廃棄物が投棄されており、形状や規模等を明確にすることは困難であったため、位置の確認にとどめた。第5号井戸は、虎口を規定して調査を進めたG9区の開削部から検出された井戸である。この井戸についても、第2号～第4号井戸と同様の状況であった。以上の理由から、この項では第1号井戸について詳述することとし、他の井戸については検出された位置等を一覧表に掲載した。

第1号井戸 (SE1 第111図)

本跡は、調査区の北西側D4a区に位置する。屋代城の外郭をなす第1号堀の内側に位置し、南偏6mほどには第10号堀が、南東側20mほどには第7号堀と第1号土塁が存在する。確認面における平面形は、長径2.4m、短径2.25mの不整円形を呈する。確認面から0.6～0.8mの深さまでは鰐底状に、それ以下は径1.2m前後の円筒状に掘り込まれている。掘り込みは、常緑粘土層下の砂層に達している。確認面下3.5mの深さまで調査したが、ボーリング調査の結果、底面まではさらに2m以上の深さがあるものと思われる。



第111図 第1号井戸実測図

覆土は、自然堆積である。下層にはにぶい黄褐色土、中層には暗褐色土、上層には黒褐色土が堆積している。覆土中層にはローム粒子・ハードロームブロック、下層には砂・粘土ブロック・ハードロームブロックが多量に含まれている。これらは、周開の壁が崩落し混入したものと思われる。

遺物は、覆土中から土師質土器片10点・内耳形土器片3点、陶磁器片（中・近世の瀬戸）6点のほか、繩文式土器片3点、土師器片6点、須恵器片1点が出土している。

表5 その他の井戸跡一覧表

遺構名	位置	規模(m)			平面形
		長径	短径	深さ	
第2号井戸(SE2)	G8a ₄	(2.5)	(2.3)	—	(円形状)
第3号井戸(SE3)	F9d ₁	(4.2)	(3.1)	—	(椭円形)
第4号井戸(SE4)	F9c ₃	(3.1)	(2.2)	—	(椭円形)
第5号井戸(SE5)	G9b ₁	2.4	2.2	—	円形状

4 溝

本年度調査区から確認され、番号を付して調査した溝の数は30条である。調査及び整理の過程で、近・現代の根切溝等と判断したSD51・62・63・66・67の5条を除外し、また、当初、SD46・47、SD55・58と別々の名称を付して調査した溝がそれれ一つになり、SD46、SD55として統一(SD47・58は欠番)してまとめたため、最終的な溝の数は23条となった。溝と同一記号を用いて調査した堀(SD34・35・36・64・68)については、本項から除外し、第3章5節の3に記載した。また、遺物については、特徴的なものを一括して掲載した。

注

- (1) 溝の略号は、堀と同様にSDを用いた。番号については、昭和60年度に整理された「屋代B遺跡I」の報告書中で使用した溝・堀の番号に継続する。本年度は、堀・溝をSD34から番号を付し、調査を進めた。

第37号溝（第118図）

本跡は、調査区の北側D7・E7・F7区に位置する。E7b₁区で第20号住居跡、E7i₁区で第39号溝を掘り込み、E7f₁区で第412号土坑、F7b₅区で第41号溝に掘り込まれている。

溝は、全長約61mで、D8h₁・i₁区の調査区外（昭和55年度に調査を実施した屋代A遺跡との境界）から、北西方向（N-81°-W）に4mほど延びた所で南西方向（N-22°-E）に屈曲し、42mほど直線的に延びてわずかに南方向（N-4°-W）に湾曲し、7mほどで再び南西方向（N-23°-E）に湾曲し、8mほど延びF7b₅区で第41号溝との重複部に達している。上幅0.5~2m、深さ28~60cmを測る。壁は、外傾もしくは緩やかな傾斜を示して立ち上がり、締まっている。底面は皿状、断面形は鍋底状を呈している。

覆土は4~6層からなり、黒褐色土・暗褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体にローム粒子が含まれている。

遺物は、覆土中から縄文式土器片3点、弥生式土器片135点、覆土下層から内耳形土器片30点、陶磁器片29点、刀子1点、礫37点が出土している。

本跡は、屋代A遺跡から検出された第8号溝と接続する。E8区を中心に検出された墓壙群を囲む様に掘り込まれており、墓域を区画する溝とも考えられる。また、第42号溝との位置関係や覆土の状況・規模等から、本跡と第42号溝は、本来同一の溝であった可能性も考えられる。

第38号溝（第112図）

本跡は、調査区の北側E7区に位置する。東側2mほどには第37号溝が存在する。

溝は、全長約12mで、主軸方向はN-9°-Eを指している。E7d₅区からE7g₅区にかけてほぼ直線的に延びている。上幅0.5~1.7m、深さ7~50cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がり、底面は皿状、断面形は鍋底状を呈している。

覆土は2層からなり、黒褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体にローム粒子・ロームブロックが含まれている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片3点、土師器片7点、内耳形土器片6点が出土している。

第39号溝（第118図）

本跡は、調査区の北側E7・F7区に位置する。E7区で北東から南東方向に約20mにわたって第40号溝を、E7e₅区付近で第22号住居跡を掘り込み、E7j₆区で第37号溝、E7i₅区で第500号土坑に掘り込まれている。

溝は、全長約33mで、E7d₅区から北西方向（N-72°-W）に4mほど延びた所で、南北方向（N-27°-E）に屈曲し、29mほど延びた所（E7j₆区）で第37号溝に切られている。上幅0.8~2.5m、深さ10~75cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は皿状、断面形は鍋底状を呈している。溝の中央部付近は、第40号溝や第22号住居跡、土坑等と重複し、また、耕作による擾乱が激しく、溝の底面近くの掘り込みがわずかに残存しているにすぎない。

覆土は2~3層からなり、黒褐色土・暗褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体にローム粒子を含んでいる。

遺物は、覆土中から弥生式土器片17点、土師器片24点、須恵器片2点、土師質土器片1点、内耳形土器片1点、陶磁器片1点、礫2点が出土している。

第40号溝（第118図）

本跡は、調査区の北側E7区に確認された、広範囲に亘る黒色の落ち込み内に位置する。性格不明の造構であるが、形状から溝として調査を進めた。E7f₅区からE7i₅区にかけて約20cmに亘り第39号溝に、E7i₅区では第499号土坑、E8i₅区では第419号土坑に掘り込まれている。

溝は、全長約30mで、F7e₅区から北西方向（N-22°-E）に15mほど延びた所でL字状に屈曲し、東方向（N-82°-W）に14mほど延びている。上幅7~13m、深さ60cm前後を測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面及び断面形は、皿状を呈している。E7i₅~i₉区にかけての底面からは、不定形状の落ち込みが検出されている。

覆土は4層からなり、暗褐色土・黒褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体に多量のローム粒子やハードロームブロックを含んでいる。

遺物は、出土していない。

第41号溝（第119・120図）

本跡は、調査区の北西部E6区、中央部のE7・F7区、東側E8・F8区にかけて位置する。F7es区で第37号溝、F7d₇～d₈区付近で第42号溝を掘り込み、E6h₄区で第1号堀に掘り込まれている。

本年度調査区内に確認された溝の全長は、約164mである。E6h₄区の第1号堀との重複部から南西方向（N-39°-W）に18mほど直線的に延び、F8f₄・f₅区付近でA・Bの二方向に分岐している。Aは、F7f₅区付近で北東方向（N-23°-E）にほぼ直角に屈曲し、70mほど直線的に延びて、昭和55年度に調査された屋代A遺跡の調査区（D9・E9区）に達している。溝は、屋代A遺跡で検出された第9号溝と接続する。Bは、F7f₄区付近で南西方向（N-20°-E）にほぼ直角に屈曲し、7mほど延びた所で北西方向（N-68°-W）にほぼ直角に屈曲し、5mほど延び、さらに南西方向（N-11°-E）に屈曲して15mほど延び、調査区外に達している。溝は、E6・F7区では規模が小さく、上幅1～2m、深さ40～80cmを測る。壁は、外傾もしくはほぼ垂直に立ち上がり締まっている。底面は皿状で、断面形はU字状または鍋底状を呈している。A・Bの二方向に分岐した溝は、E8・E9区やF8区で規模が大きくなり、上幅2.5～3m、深さ1～1.5mを測る。壁は外傾ぎみに立ち上がり、底面はU字状、断面形は薺研状を呈している。

覆土は、暗褐色土や黒褐色土が自然堆積している。A・Bの部分の覆土上層は、木根による擾乱を受けている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片43点、土師器片141点、須恵器片3点、土師質土器片11点、内耳形土器片259点、陶磁器片203点、砥石6点、鉄製品（不明）1点、煙管⁺⁺⁺1点、石臼2点が出土している。内耳形土器片や陶磁器片は、主にA・Bの覆土中層付近から出土している。陶磁器片は中世の瀬戸や常滑が主であり、近世の瀬戸や志野も少量出土している。また、明の青白磁片も1点出土している。

出土した遺物は、溝の内側（E8区）から多数検出された墓壙内出土遺物とほぼ同時期に比定され、溝と墓壙群との位置関係等からも、その性格については、墓壙群を区画する溝としての可能性が強い。しかし、屋代A遺跡からは、この溝の内側に土壙状のマウンドが検出されており、特にA・Bの部分については、規模や形状から、堀としての可能性も考えられる。

第42号溝（第119図）

本跡は、調査区の中央部F7区に位置する。第41号溝の南側に隣接し、F7d₇区で第41号溝に掘り込まれている。

溝は、全長約13.5mで、F7c₆区から北西方向（N-82°-W）に6.5mほど延びた所で渦曲し、さらに北西方向（N-60°-W）に7mほど延びた所で、第41号溝との重複部に達する。上幅0.7～1.3m、深さ14～22cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦、断面形は皿状を呈してい

る。

覆土は2～3層からなり、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土中から弥生式土器片5点、須恵器片1点、内耳形土器片5点、陶磁器片2点、鉄片1点、礫3点が出土している。

第43号溝（第96図）

本跡は、調査区の北東側E8区に位置する。E8gs・ge区付近で第24号住居跡の中央部を、北西から南東方向に掘り込んでいる。

溝は、全長約9mで、主軸方向はN-78°-Wを指している。E8ga区からE8hd区にかけてほぼ直線的に伸びている。E8fe区付近で一部とぎれている。上幅0.6～1m、深さ70cm前後を測る。壁は外傾して立ち上がっている。底面は凸凹しており、径30～50cm、深さ10～50cmほどの不定形を呈するビットが多数検出されている。断面形はU字状を呈している。

覆土は5層からなり、黒褐色土・極暗褐色土が自然堆積している。一部には、人為的に埋め戻された部分も見られる。

遺物は、覆土中から土師器片2点、礫2点が出土している。

第44号溝（第113図）

本跡は、調査区の南側I6・I7区に位置する。I7d₁区で第45号溝に掘り込まれている。

溝は、全長約6mで、主軸方向はN-35°-Eを指している。I6e₀区から北東方向に直線的に6mほど伸び、I7d₁区の第45号溝との重複部に達している。上幅1～1.4m、深さ25～60cmを測る。壁は、ほぼ垂直もしくは外傾して立ち上がっている。底面は皿状を呈するが、壁際や中央部に、円形や楕円形を呈する浅い掘り込みが検出されている。

覆土は人為的に埋め戻されており、下層に暗褐色土混じりの褐色土、中～上層にローム粒子・ハードロームブロック・炭化物を含む黒褐色土・暗褐色土が堆積している。

遺物は、覆土中から弥生式土器片1点、内耳形土器片18点、陶磁器片3点が出土している。

第45号溝（第113図）

本跡は、調査区の南側I6・I7区に位置する。I7d₁区で第44号溝、I6d₀区で第510号土坑を掘り込んでいる。

溝は、全長約8mで、I7d₁区から北西方向(N-67°-W)に直線的に伸びている。さらに北西方向に伸びていたものと思われるが、擾乱が激しく確認できなかった。上幅0.4～0.8m、深さ15～40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は皿状、断面形は「U」状を呈している。

覆土は人為的に埋め戻されており、下層に暗褐色土、中～上層に黒褐色土が堆積している。遺物は、出土していない。

第46号溝（第114図）

本跡は、調査区の南東側G8区を中心に検出された、墓塚群内の最も南東側に位置する。G7d₈区で第608号土坑、G7d₉区で第513号土坑、G7c₈区で第667号土坑に掘り込まれている。

溝は、全長約16mで、G7e₈区から北東方向(N-37°-E)に6mほど直線的に延びた所で、南東方向(N-61°-E)にはほぼ直角に屈曲し、6.5mほど延び、再び北東方向(N-28°-E)にはほぼ直角に屈曲し、直線的に8.5mほど延びている。溝の方向から、さらに北東方向に直線的に延びて第59号溝と接続することも考えられるが、本跡と第59号溝との間(G7b₉区)が、木の根により大きく擾乱されているため、その関係については明らかでない。上幅0.5～1.3m、深さ15～40cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、壁際には数か所に小ピットが検出されている。底面は皿状、断面形は鍋底状を呈している。

覆土は人為的に埋め戻されており、粘土ブロックを少量含む黒褐色土が堆積している。遺物は、底面から中～近世の陶磁器片（瀬戸）2点、覆土中から石鏡1点が出土している。

第48号溝（第121図）

本跡は、調査区の中央部F6・F7区に検出された墓塚群内に位置する。F7f₈区で第612号土坑、F7e₉区で第597・598号土坑、F7d₉区で第482号土坑、F7e₉区で第603号土坑を掘り込み、F7e₈・F7f₆区で第613・614号七坑に掘り込まれている。

溝は、全長約70mで、第50号溝とほぼ平行に走っており、F7f₇区付近から緩やかに湾曲しながら北西方向(N-72°-E)に70mほど延び、F7d₉区に達している。上幅1～1.5m、深さ50～60cmを測る。壁は外傾して立ち上がっている。底面は鍋底状、断面形は「U」状を呈している。

覆土は、褐色土・暗褐色土・黒褐色土が自然堆積しているが、部分的に人為的に埋め戻された箇所も認められる。覆土中には、全体に多量のローム粒子・ハードロームブロックが、一部には少量の焼土粒子・炭化物・粘土ブロックが含まれている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片9点、土師器片92点、内耳形土器片15点、陶磁器片29点、紡錘車1点、鉄片2点、礫18点が出土している。

第49号溝（第121図）

本跡は、調査区の中央部F6・F7区に検出された墓塚群内に位置する。F7e₉区で第598号土坑、F7f₁区で第605号土坑、F6g₉・g₈区で第627号土坑を掘り込み、F7g₈区で第615号土坑、F7f₄区で

第621・634号土坑、F7g₄区で第656号土坑、F7f₃区付近で第599号土坑、F7f₁区で第624号土坑、F6f₆区で第630号土坑、F6g₆区で第547号土坑、F6g₉区で第628号土坑に掘り込まれている。以上のように重複が激しく、形状を明確にとらえることは困難であった。

溝は、全長約23mで、F7g₇区から北西方向(N-70°-W)に20mほど延び、F7f₃区付近で南北方向(N-67°-E)に屈曲し、13mほど延びてF6g₉区に達している。上幅1~3m、深さ10~55cmを測る。壁は、南西側がなだらかに、北側が外傾して立ち上がりっている。底面は皿状で、断面形は「～」状を呈している。

覆土は、黒褐色土・暗褐色土が自然堆積しているが、一部に人为的に埋め戻された所も見られる。覆土中には、全体に多量のローム粒子・ハードロームブロックや、少量の木炭・焼土粒子が含まれている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片4点、土師器片50点、土師質土器片9点、内耳形土器片25点、陶磁器片18点、礫9点が出土している。

第50号溝（第121図）

本跡は、調査区の中央部F6・F7区を中心に検出された墓塚群内に位置する。F7f₆区で第6号地下式塚(SK426)を掘り込んでいる。

溝は、全長約23mで、第6号地下式塚との重複部から北西方向(N-67°-W)に直線的に23mほど延び、F7d₂区に達している。F7d₂区付近の掘り込みは不明瞭である。上幅0.5~1.5m、深さ15~35cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、底面は皿状、断面形は「～」状を呈している。

覆土は、極暗褐色土・暗褐色土が自然堆積しているが、一部に入込みに埋め戻された所も見られる。覆土中には、ローム粒子・ハードロームブロックが多量に含まれている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片45点、土師器片36点、陶磁器片14点、礫7点が出土している。

第52号溝（第112図）

本跡は、調査区の中央部F6・F7区に検出された墓塚群内に位置する。

溝は、全長約4mで、上輪方向はN-62°-Wを指している。F7j₄区から北西方向に4mほど直線的に延び、F7i₃区に達している。F7i₃区では、先端部を小ピットに掘り込まれている。上幅0.4m、深さ15cm前後を測る。壁は外傾して立ち上がり、底面は鍋底状、断面形は「～」状を呈している。

覆土は自然堆積で、ローム粒子を多量に含む黒褐色土が堆積している。

遺物は、出土していない。

第53号溝（第121図）

本跡は、調査区の中央部F6・F7区に位置する。F7c₁・c₂区で第456号土坑、F6b₇区で第1号堀を掘り込んでいる。

溝は、全長約25.5mで、主軸方向はN-70°-Wを指している。F7d₃区から北西方向に直線的に延び、F7b₇区の第1号堀との重複部に達している。上幅0.7~1.5m、深さ34~46cmを測る。壁は中央部付近でなだらかに立ち上がるが、他の部分は外傾しながら立ち上がっている。底面は、中央部が平坦、他は皿状で、断面形は「U」状を呈している。

覆土は人為的に埋め戻されており、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。覆土中には、多量のローム粒子、少量のハードロームブロックが含まれている。

遺物は、覆土中から縄文式土器片4点、弥生式土器片2点、土師器片1点、内耳形土器片1点、陶磁器片1点、礫1点が出土している。

第55号溝（第115図）

本跡は、調査区の中央部F6区に位置する。F6d₇区で第568号土坑、F6h₈区で第57号溝に掘り込まれている。

溝は、全長約37mで、F6d₇区から南東方向(N-55°-W)に11mほど延びたF6e₉区付近でほぼ直角に屈曲し、南西方向(N-35°-E)に11mほど延びたF6h₈区で再び南東方向(N-55°-W)に屈曲し、10mほど延びている。溝は、さらにF6h₈区付近でほぼ直角に屈曲し、南西方向(N-38°-E)に5mほど延びた所で、第8号堀と接続している。上幅0.7~1.5m、深さ30~35cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がっている。底面はやや凹状を呈しており、数か所に小ピットが検出されている。断面形は「U」状を呈している。

覆土は3~4層からなり、黒褐色土・暗褐色土が自然堆積している。覆土中には、全体にローム粒子・ハードロームブロックを含み、上層には灰・焼土粒子・炭化粒子を少量含んでいる。

遺物は、覆土中から土師器片3点、陶磁器片4点が出土している。

第56号溝（第112図）

本跡は、調査区の中央部F6区に位置する。

溝は、全長約12mで、F6c₇区から南東方向(N-72°-W)に直線的に延び、F6d₉区に達している。上幅0.4~0.6m、深さ10cm前後を測る。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、断面形は皿状を呈している。

覆土は2層からなり、黒褐色土・褐色土が自然堆積している。

遺物は、出土していない。

第57号溝（第115図）

本跡は、調査区の中央部F6区に位置する。F6h₉区で第55号溝、F6i₈区で第8号堀の壁の上部を掘り込んでいる。

溝は、全長約10mで、E6g₉区から南西方向（N-26°-E）に直線的に延び、F6i₈区で第8号堀に接続している。上幅1~1.2m、深さ40~60cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、良く締まっている。断面形は逆台形状を呈する。

覆土は、黒褐色土・暗褐色土・褐色土を4~5層に分けることができるが、人為的に埋め戻された状況を呈している。覆土中には、多量のローム粒子・ハードロームブロックが含まれている。

遺物は、覆土中から弥生式土器片1点、土師器片1点、内耳形土器片1点、陶磁器片1点、礫2点が出土している。

第59号溝（第116図）

本跡は、調査区の南東側F7・F8・G7区にかけて位置する。G7a₉区で第664号土坑に掘り込まれている。

溝は、全長約7mで、第644号土坑と重複するG7a₉区から北東方向（N-30°-E）に7mほど直線的に延びている。溝の南西側は、木根により大きく擾乱を受けているため未確認であるが、溝の方向や覆土の状況等から、第46号溝と接続していたものと考えられる。上幅1m、深さ15cm前後を測る。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がっている。底面は平坦で、断面形は皿状を呈している。

覆土は2~3層からなり、黒褐色土が自然堆積している。覆土中には、ローム粒子・粘土ブロックが含まれている。

遺物は、出土していない。

第60号溝（第116図）

本跡は、調査区の東側F7・G7区に位置する。

溝は、全長約8.5mで、G7a₉区から北東方向（N-28°-E）に直線的に延びている。溝の北東端は、第6分土壘下に延びており未確認である。上幅0.5~0.7m、深さ20~25cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がりながら立ち上がっている。底面は皿状、断面形は鍋底状を呈している。

覆土は2~3層からなり、暗褐色土・褐色土が自然堆積している。覆土中には、ローム粒子・ハードロームブロック・粘土ブロックが含まれている。

遺物は、覆土中から土師器片1点、内耳形土器片9点、陶磁器片3点が出土している。

第61号溝（第117図）

本跡は、調査区の南端I5・I6区に位置する。溝の南西側2～3mには、台地を開削して造られた農道が東西に走っている。I6j₇区で第557・559号土坑に掘り込まれている。また、溝の北西側は昭和61年度調査区へ延びている。

本年度調査区内から検出された溝の全長は、約33mで、昭和61年度調査区との境界I5g₈区から南東方向（N-60°-W）に直線的に延び、I6j₇区付近で農道に向かって落ち込んでいる。上幅は1～2.5mで、中央部（I6h₂区）付近が最も広く、南東側に延びるほど狭くなる。深さは25～70cmを測る。壁は外傾して立ち上がっている。I6h₂区では壁面に小ピットが、I6h₃・i₃・i₄区では、芋穴と思われる長方形状の上坑に掘り込まれている。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈している。

覆土は3～4層からなり、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。覆土は人為的な堆積状況を呈している。覆土中には、多量のローム粒子・ハードロームブロックが含まれている。

遺物は、弥生式土器片4点、土師器片2点、内耳形土器片10点、陶磁器片4点、礫2点が出土している。内耳形土器・陶磁器片は、底面近くから出土している。他の遺物は、混入したものと思われる。

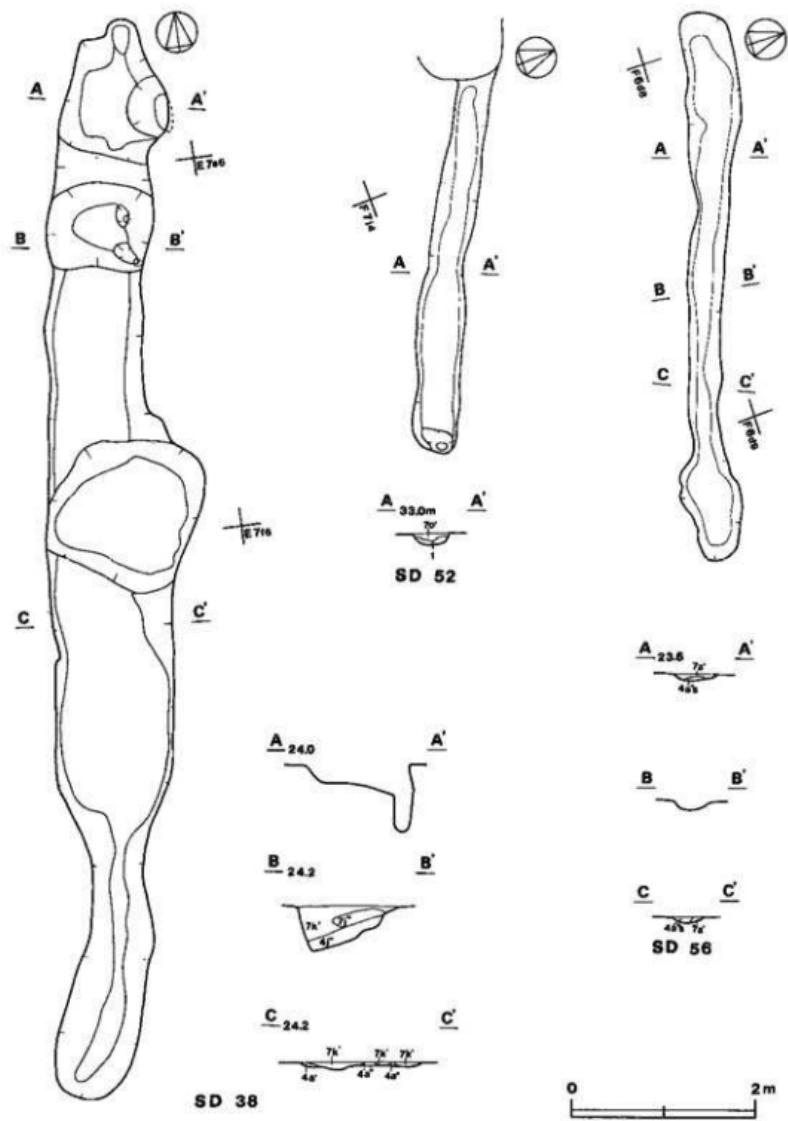
第65号溝（第122図）

本跡は、調査区の北側D7区に位置する。D7e₄区で第26号住居跡の壁を掘り込んでいる。

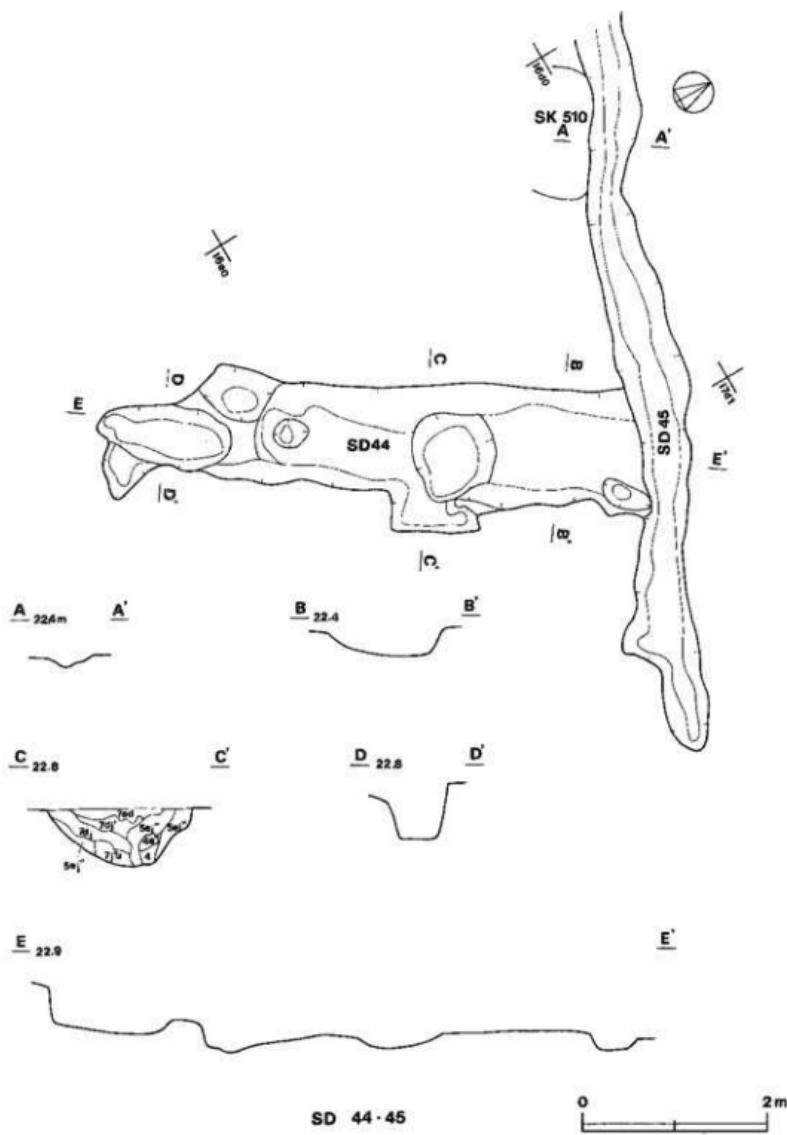
溝は、全長約8.5mで、第26号住居跡との重複部から南東方向（N-66°-W）に7.5mほど延びた所で、北東方向（N-66°-W）に屈曲しながら1mほど延びている。上幅0.5～1m、深さ35cm前後を測る。壁は、北西側がほぼ垂直、南西側はなだらかに立ち上がる。底面は凸凹し、畝状を呈している。断面形はW字状である。

覆土は暗褐色土が自然堆積しているが、部分的に擾乱を受けている。覆土中には、全体にローム粒子・ハードロームブロックが含まれている。

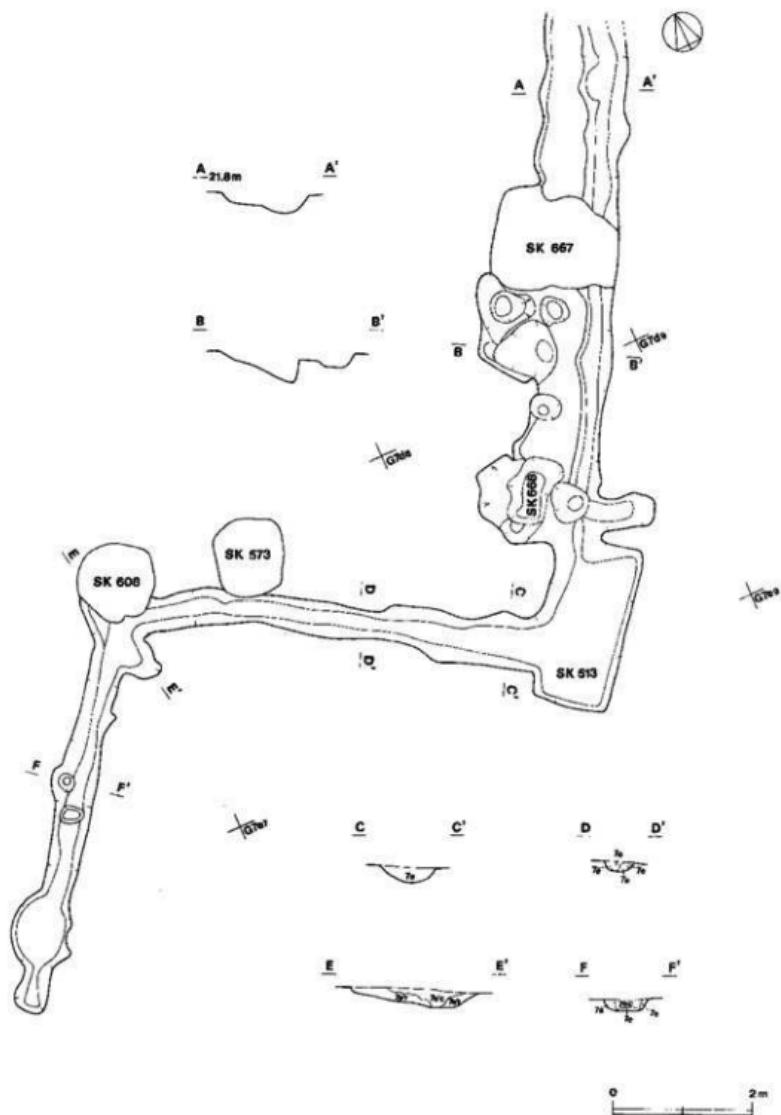
遺物は、出土していない。



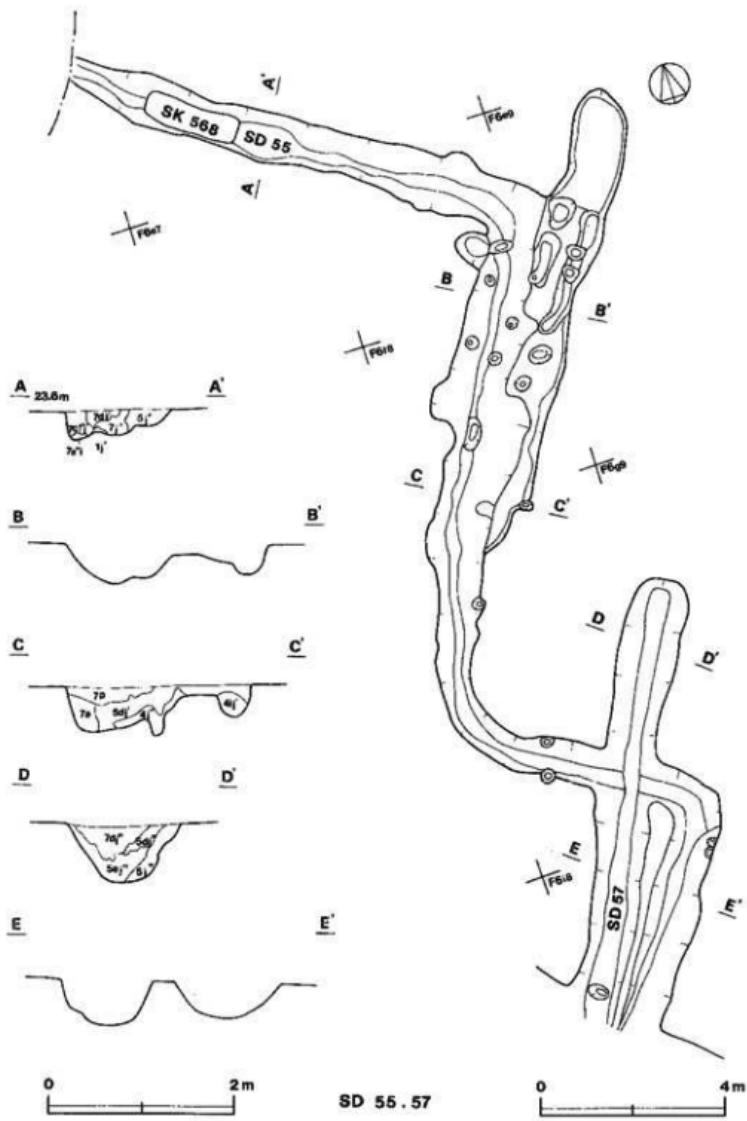
第112図 第38・52・56号測定図



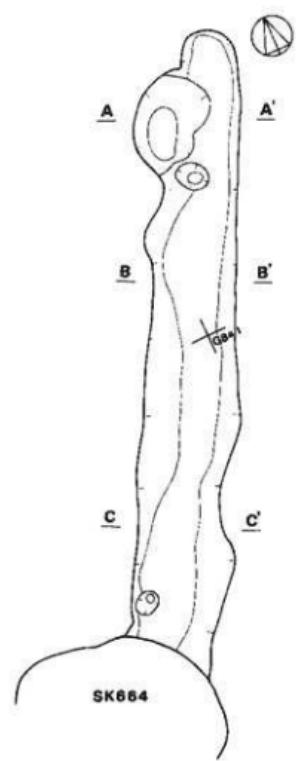
第113図 第44・45号溝実測図



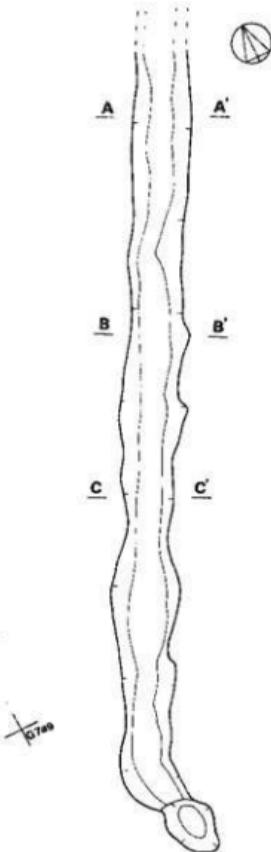
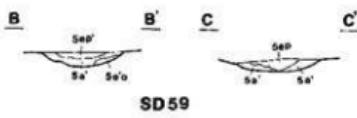
第114図 第46号溝実測図



第115図 第55・57号溝実測図



A 22.0m A'

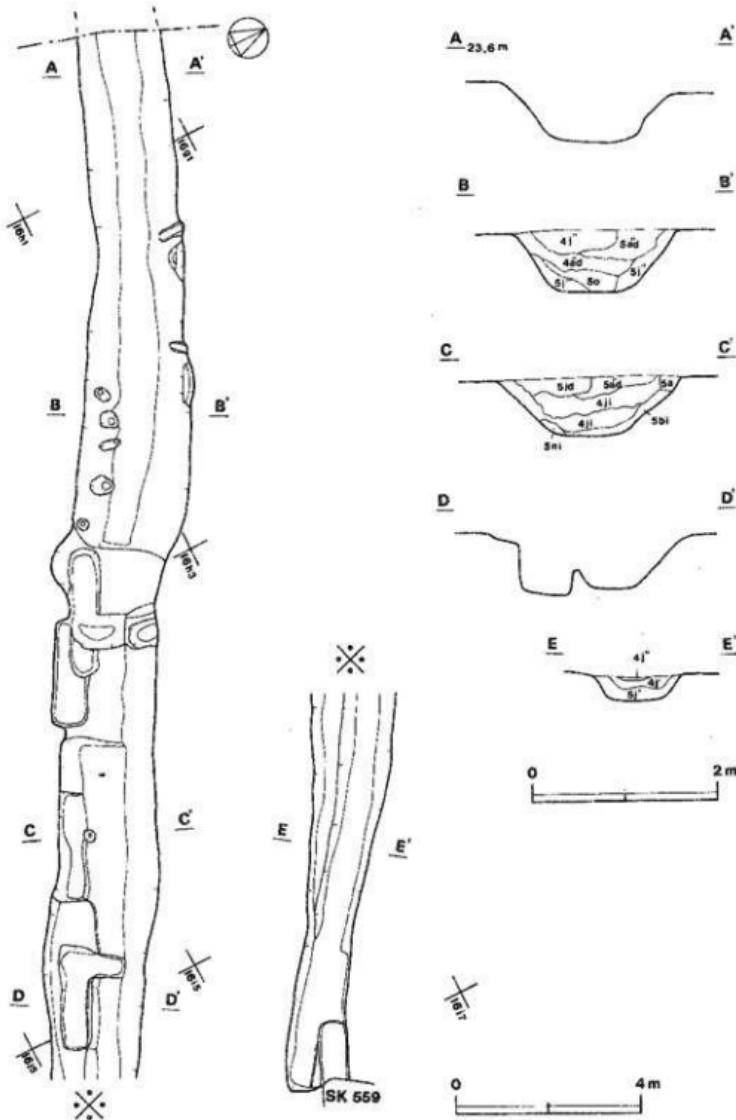


A 22.0m A'

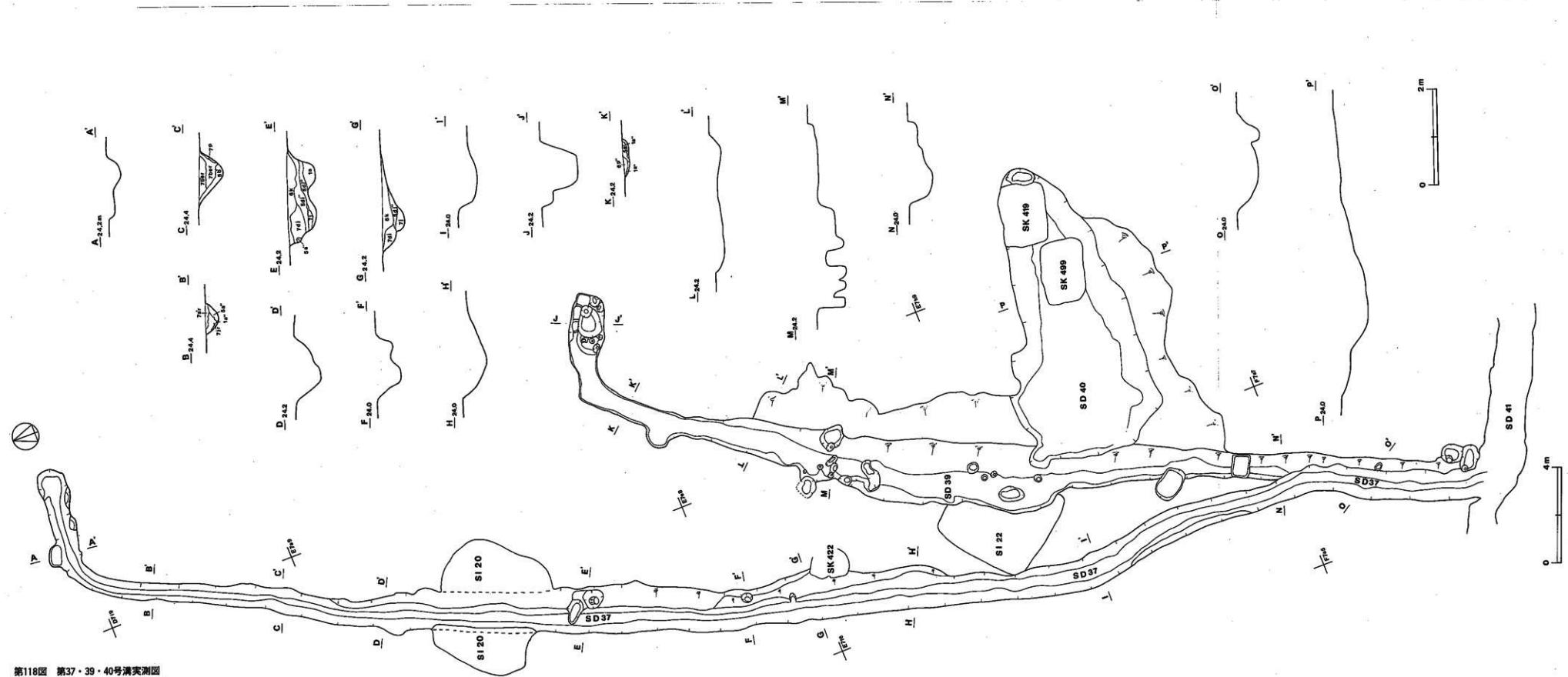


0 2m

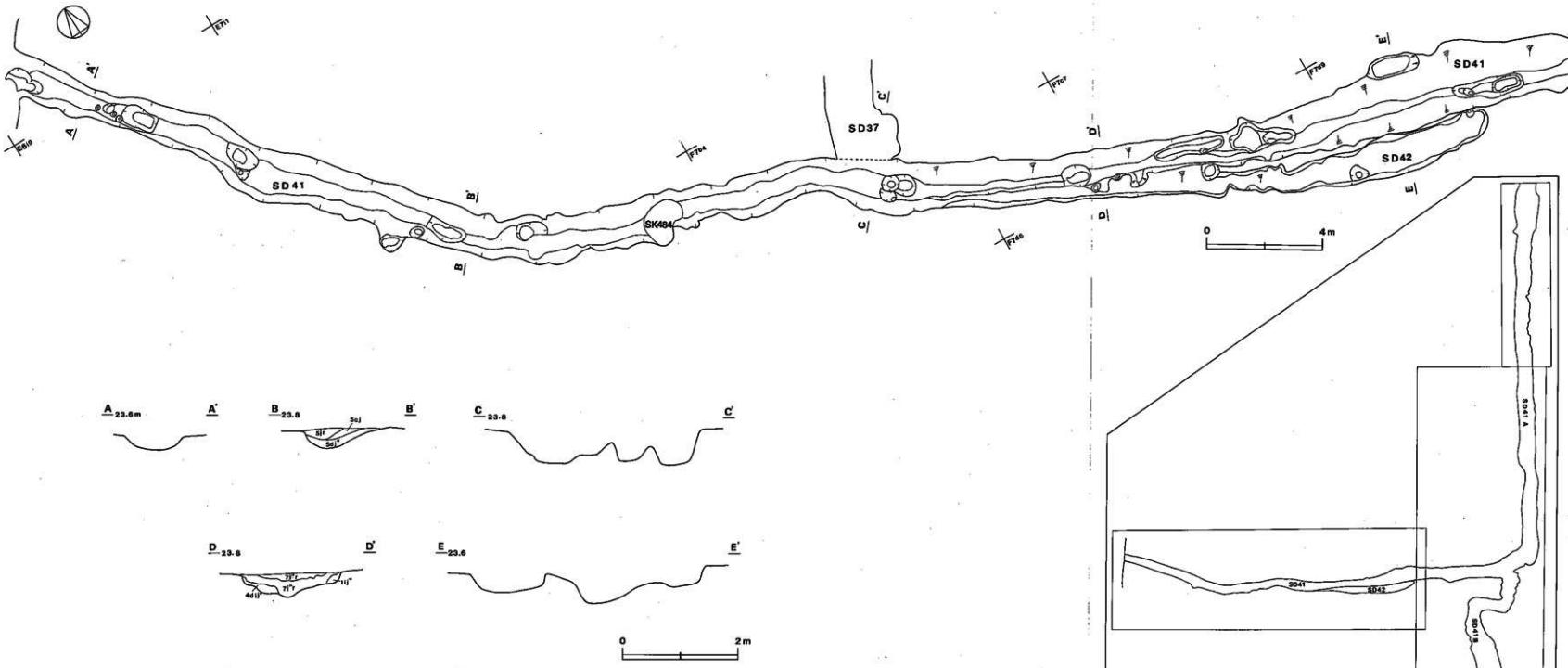
第116図 第59・60号溝実測図



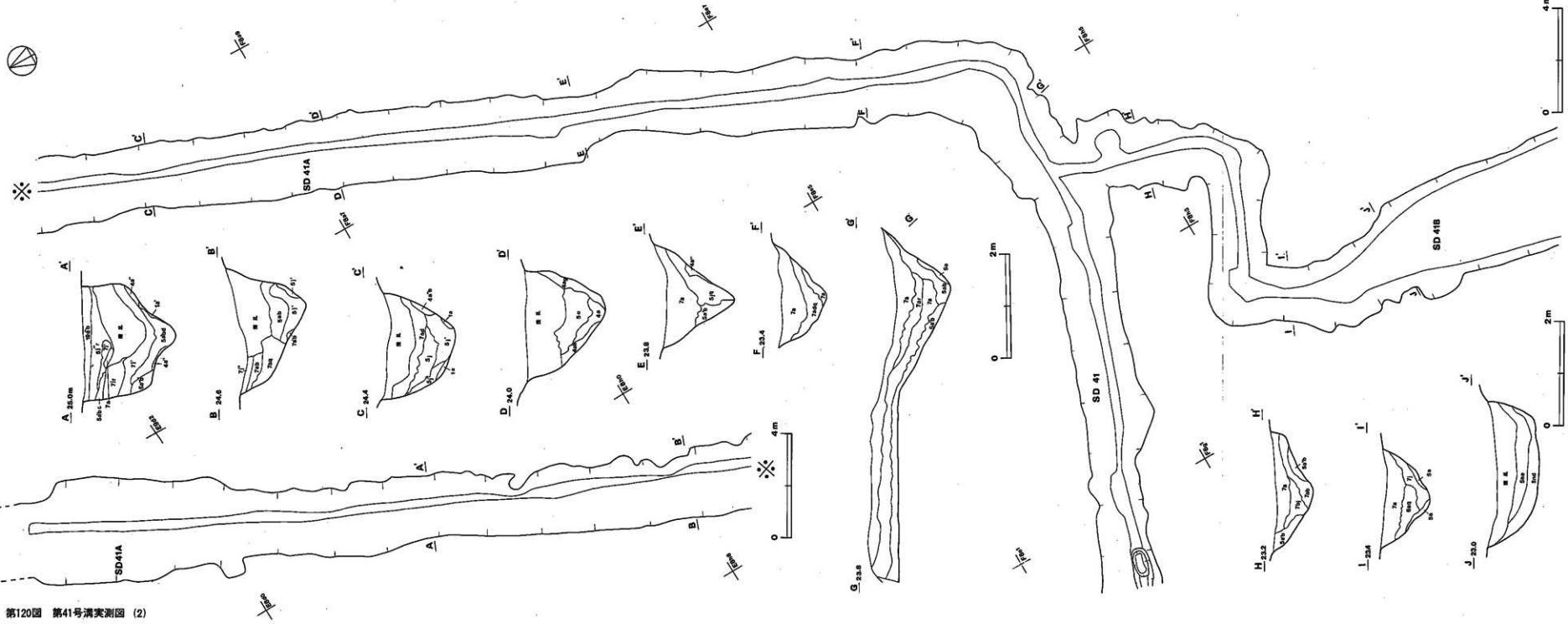
第117図 第61号溝実測図



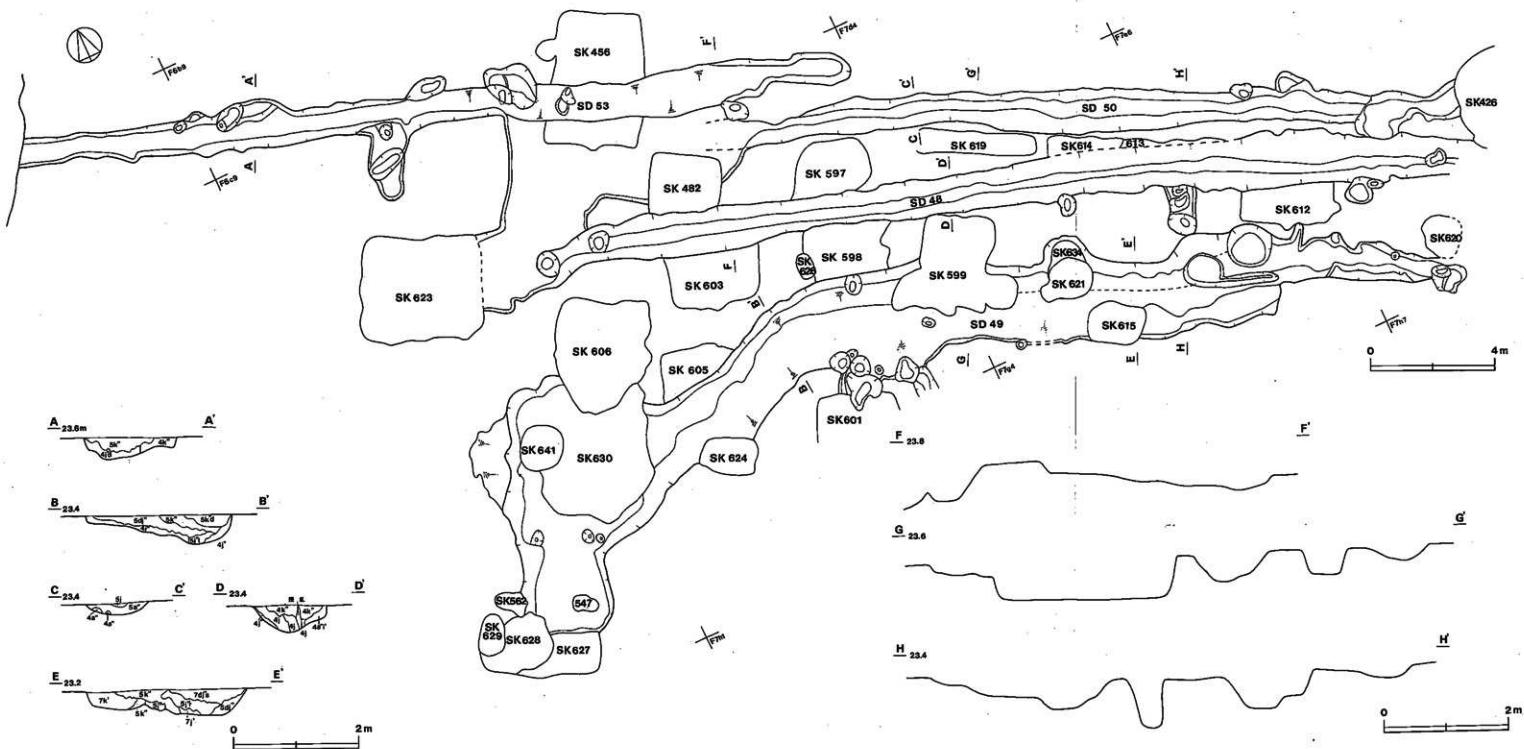
第118図 第37・39・40号溝実測図



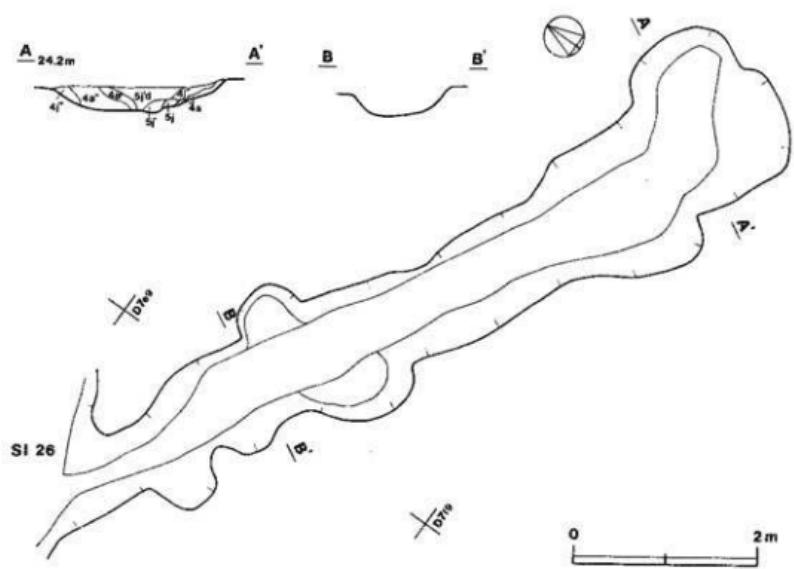
第119図第41号溝 (1)・第42号溝実測図



第120図 第41号溝実測図 (2)



第121図 第48・49・50・53号清査測図



第122図 第65号溝実測図

5 土壘 (第73・74図)

この項では、第6号土壘について解説する。第6号土壘は、その位置や規模・形状・構築状況・出土遺物等から、中世の屋代城とは無関係の土壘であり、桂昌寺側に面する東側台地から確認された近世の屋敷跡に作成したものと考えられる。土壘に直交するようにトレンチを10か所 (No1～No10) に設定し、調査を実施した。

(1) 位置

本土壘は、調査区の北東側から東側にかけてのE8・E9・F8区に位置する。北東側の一部 (D9・E9区) は、既に昭和55年度 (原代A遺跡) に調査されている。北西側には、土壘に沿って、北東から南西方向に第41号溝 (A・B) が延びている。

(2) 形状・規模

形状はL字状を呈し、E9d₄区付近から北西方向 (N-63°-W) に20mほどの所 (E9c₂区付近) でほぼ直角に屈曲し、南西方向 (N-28°-E) に85mほど直線的に続き、G8a₂区付近でとぎれている。G8a₂区から南東方向に30mほど離れたG8e₂区付近の調査区外にも、土壘の一部が確認されており、本来は、北西側を背にして「匁」状に近世の屋敷跡を囲んでいたものと考えられる。土壘の盛上下のロームの断面は、西側に第41号溝が掘られ、東側が東西約22m、南北40m、深さ約2mの長方形状に土取りされたことによって、全体的に断面形が「匁」・「匁」状となっている。土壘は、下幅4～8m、上幅2m前後で、盛土の厚さは、ローム面を基底面として1m前後となっている。西側や東側台地に残存する現地表面 (標高24m前後) と土壘の標高 (24～24.5m) との差は、50cm前後であり、屋敷跡との比高は2.5mほどである。

(3) 各トレンチの状況

No1～No2地点では、土壘の基底面となる地山のローム面から、上幅1.2～2m、深さ40cm前後のV字状の溝が検出されている。同様に、No3～No5、No7～No9地点からは上幅0.8～1.7m、深さ20～50cm前後のV字状、U字状、皿状を呈する溝、No6地点からは、鉢状に掘り込まれた4条の細い溝 (上幅0.6～1.5m、深さ20～40cm) が検出されている。これらの溝は、盛土される以前に掘り込まれたものである。性格については、雨水の排水溝とも考えられるが明確でない。「匁」状や「匁」状を呈するローム面の上には、黒褐色土や暗褐色土が1m前後の厚さに盛土されている。盛土中には、全体にローム粒子・ハードロームブロック・粘土ブロック・炭化物・焼土粒子が含まれている。黒褐色土や暗褐色土は、含有物や色相によって細分することも可能である。No9～No10地点では、黒褐色土や暗褐色土中に、帯状に堆積するロームの層が認められる。土壘の盛土は、全体に締まりがなく柔らかい。

(4) 遺物

遺物は、No1地点の土壙の下から検出された溝（G8a₃・b₃区付近）の覆土中から、寛永通寶15枚が出土している。また、No8トレンチからは陶磁器片4点、寛永通寶1点、礫3点、No10トレンチからは陶磁器片17点、内耳形土器片3点、砾石1点が出土している。

(5)まとめ

第6号土壙は、土壙下に検出された溝の覆土中出土の寛永通寶の時期等から、江戸時代及びそれ以降に構築されたものと考えられる。用途については、屋敷の風よけや雨水の浸水を防ぐ土手の役割り等が考えられるが、明らかではない。

第7節 中・近世の遺物

1 土器・陶磁器

(1) 土師質土器（第123～126図）

土師質土器は、中世から近世にかけての遺跡から普遍的に出土する遺物の1つで、当遺跡においても比較的出土量が多い。土師質土器を出土する遺構は、住居跡・土坑（墓壙）・堀・溝等多岐に及んでいる。

当遺跡出土の土師質土器は、口径値から大形のものと小形のものとに大別することが出来る。しかし、反面、大小の群の中にも口径値にはばらつきがあり、大小の区分についてはあくまで便宜的なものである。また、口径と器高の比率等から、これらの土師質土器を円形と皿形とに器形分類することも可能であるが、全て皿形とし、小形のもの（口径が9cm以下のもの）を皿A、大形のもの（口径が9cm以上のもの）を皿Bとした。

製作技法については、丸底の皿は器形が歪んでいるものが多く、口縁部を除く外面に無調整に近い粗いながが施されているにすぎず、器表面が全体的に凸凹している。口縁部外面および内面には横ながが施されているが、「型おこし」の可能性も考えられる。半底の皿は全てロクロ成形であり、底部は回転糸切りが多く、静止糸切りによるものも少量見られる。体部は水挽き成形され、横ながが施されている。底部には板目状の圧痕が見られるものもある。

器形については、以下の様にA～F類に分類することが可能である。

A 類 口径が9cm以下のもので、丸底を呈し、体部が内輪気味に開いて立ち上がるるもの。

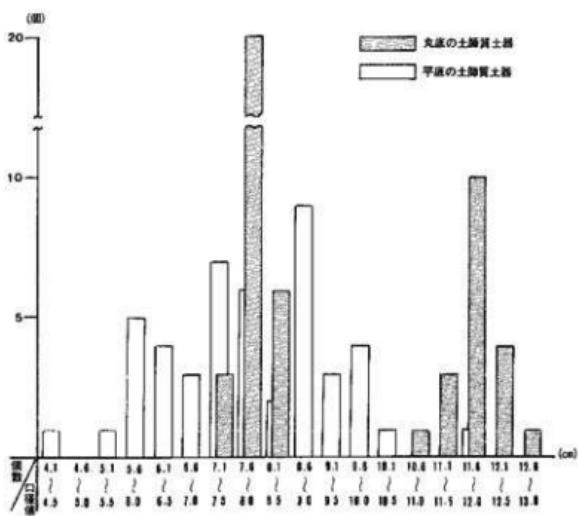
（第123図1～19等）

B 類 口径が9cm以上のもので、丸底を呈し、体部が内輪気味に開いて立ち上がるもの。

（第123図20～36等）

- C 類　　口径が9cm以下のもので、口径の割に底径の大きな平底を呈し、体部が直線的に開いて立ち上がるるもの。（第125図8～25等）
- D 類　　口径が9cm以下のもので、口径の割に底径の小さな平底を呈し、体部が直線的に開いて立ち上がるもの。（第125図32～34等）
- E 類　　口径が9cm以上のもので、口径の割に底径の大きな平底を呈し、体部が直線的に開いて立ち上がるもの。（第126図51・54等）
- F 類　　口径が9cm以上のもので、口径の割に底径の小さな平底を呈し、体部が直線的に開いて立ち上がるもの。（第126図48・49等）

本項では、前述した様に口径値から皿A・皿Bに大別し、表中に記載した。



第28号住居跡状遺構出土遺物（第123図）

土器観察表

両版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第123図 1	皿A 上部質土器	A(7.4) B 1.9	やや平坦な丸底で、体部下半は内擣気味に、上半は直線的に開く。内面は剥離が著しい。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率80% 覆土
2	+	A 8.0 B 2.0	やや平坦な丸底で、体部は内擣気味に開く。やや重んでいる。内面に煤と思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率95% 覆土

回収番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	粘土・焼成・色調	備考
3	皿 A 土師質土器	A 7.9 B 1.8	底部は、外面が凹レンズ状に覆む。体部は内骨氣味に開く。やや歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
4	タ タ	A 7.5 B 1.9	やや平坦な丸底で、体部は強く内脣しながら開く。やや歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 赤色	完存率100% 覆土下層
5	タ タ	A 8.1 B 2.0	丸底で、体部は器厚を減じながら内骨氣味に開く。歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
6	タ タ	A 7.8 B 2.0	丸底で、体部は器厚を減じながら内骨氣味に開く。歪んでいる。内面に煤と思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 赤色	完存率95% 覆土下層
7	タ タ	A 8.0 B 2.0	やや平坦な丸底で、体部は内脣しながら開く。歪んでいる。内面に煤と思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
8	タ タ	A 7.8 B 1.8	やや平坦な丸底で、体部は内骨氣味に開く。歪んでいる。内面に煤と思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
9	タ タ	A 8.2 B 2.2	丸底で、体部は強く内脣しながら開く。歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
10	タ タ	A (7.7) B (1.9)	底部は鉗離している。体部は強く内脣しながら開く。歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率50% 覆土
11	タ タ	A (7.6) B 1.9	やや平坦な丸底で、体部は強く内脣しながら開く。やや歪んでいる。全体的に器肉薄い。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 にぼい褐色	完存率90% 覆土
12	タ タ	A (8.0) B 1.9	丸底で、体部は内骨氣味に開く。歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率70% 覆土
13	タ タ	A (7.6) B 2.0	丸底で、体部は内脣しながら開く。やや歪んでいる。内面に煤と思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率95% 床面直上
14	タ タ	A (8.2) B 2.0	丸底で、体部は内骨氣味に開く。やや歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 赤橙色	完存率60% 覆土
15	タ タ	A (7.6) B 2.0	丸底で、体部は内脣しながら開く。やや歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率70% 覆土
16	タ タ	A (7.8) B 1.8	やや平坦な丸底で、体部は内脣しながら開く。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率40% 覆土
17	タ タ	A (8.2) B (2.0)	丸底で、体部は内骨氣味に開く。歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 にぼい褐色	完存率40% 覆土
18	タ タ	A (7.8) B 1.8	やや平坦な丸底で、体部は内骨氣味に開く。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 にぼい褐色	完存率50% 覆土

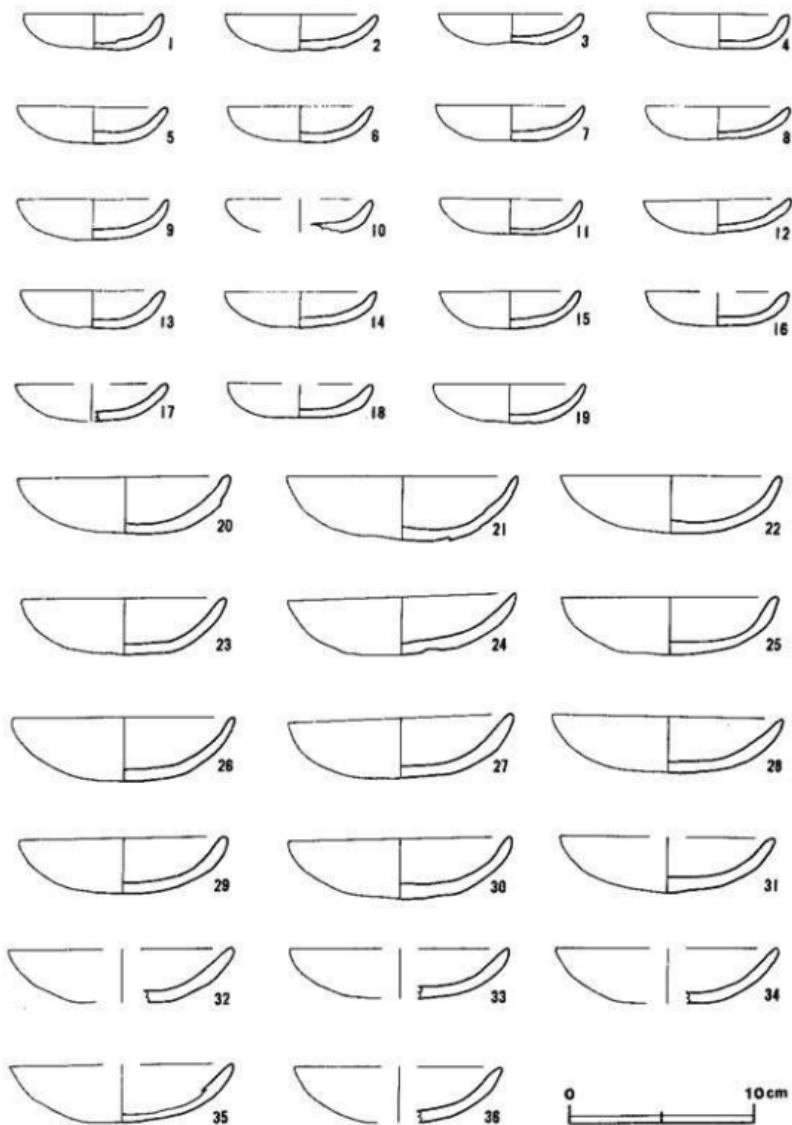
調査番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
19	丸底 A 土師質土器	A (8.1) B 2.1	丸底で、体部は内厚気味に聞く。内・外 面に埋付器。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率60% 覆土
20	皿 B 土師質土器	A 11.5 B 3.1	やや平坦な丸底で、体部は内厚気味に聞 く。歪んでいる。内面に煤と思われる黒 色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
21	* *	A 12.4 B 3.6	不安定な丸底で、体部は器厚を減じながら 内厚気味に聞く。歪んでいる。内面に 煤と思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
22	* *	A 12.0 B 3.1	やや平坦な丸底で、体部は内厚気味に聞 く。歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率100% 床面
23	* *	A 11.0 B 3.1	やや平坦な丸底で、体部はやや内厚気味 に聞く。	口縁部外面・内面 横なで	細砂・雲母 普通 橙色	完存率95% 床面直上
24	* *	A (12.4) B 3.4	不安定な丸底で、体部は内厚気味に聞く。 やや歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率80% 床面直上
25	* *	A (11.8) B 3.1	やや平坦な丸底で、体部は内厚しながら開く。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率60% 覆土
26	* *	A (11.9) B 3.5	丸底で、体部は器厚を減じながら内厚氣 味に聞く。内面に煤と思われる黒色の付 着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率50% 覆土
27	* *	A (12.2) B 3.5	丸底で、体部は内厚しながら開き、全体 的に肥厚する。歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率80% 覆土
28	* *	A (12.6) B 3.1	丸底で、体部は内厚気味に聞く。体部は 中ほどが肥厚する。内面に煤と思われる 黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率80% 覆土
29	* *	A (11.2) B 3.1	丸底で、体部は内厚しながら開き、上下 部が肥厚する。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 赤橙色	完存率70% 覆土
30	* *	A (11.9) B 3.4	丸底で、体部は内厚しながら開き、口縁 部は器厚を減じている。外面上に煤と思わ れる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率70% 覆土
31	* *	A (11.6) B 3.0	丸底で、体部は内厚気味に聞く。底部は やや器底が厚い。内面に煤と思われる黒 色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率30% 覆土
32	* *	A (12.2) B (2.9)	丸底で、体部は内厚気味に聞く。やや歪 んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率45% 覆土
33	* *	A (11.8) B (2.7)	丸底で、体部は内厚気味に聞く。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率45% 覆土

国版番号	器種	法規(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	粘土・焼成・色調	備考
34	皿 B 上部質土器	A (12.0) B (3.0)	やや平坦な丸底で、体部は内壁気味に開く。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率30% 覆土
35	+	A (12.0) B 3.1	丸底で、体部は内壁しながら開く。内面 は剥離が著しい。	口縁部外面・内面 横なで 底部外面 丁寧なで	細砂 良好 にほい橙色	完存率60% 覆土
36	+	A (11.2) B (3.0)	丸底で、体部は内壁気味に開く。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 橙色	完存率40% 覆土

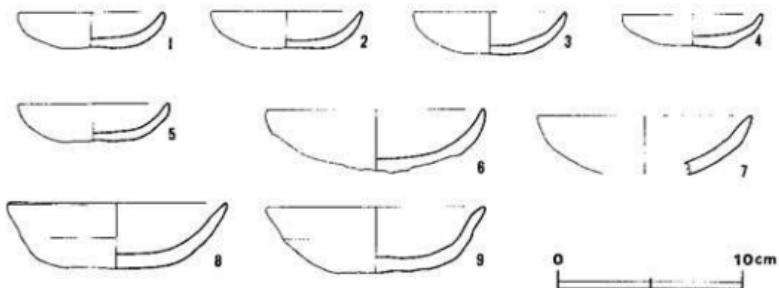
第38号住居跡状遺構出土遺物（第124回）

土器觀察表

国版番号	器種	法規(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	粘土・焼成・色調	備考
第124回 1	皿 A 上部質土器	A 7.8 B 2.0	やや重んだ丸底で、体部は内壁気味に立ち上がる。口縁部は直立する。全般的に歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで 底部なで	細砂 普通 赤色	完存率95% 覆土
2	+	A 8.0 B 2.0	底部はやや平坦な丸底で、体部は内壁気味に開いて立ち上がる。内面に煤と思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面 横なで 底部なで	細砂・粘土粒 普通 赤色	完存率60% 覆土下層
3	+	A 8.2 B 2.3	底部はやや平坦な丸底で、体部は内壁気味に開いて立ち上がる。全般的に歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで 底部なで	細砂 普通 灰褐色	完存率90% 覆土下層
4	+	A 7.6 B 1.8	底部はやや重んだ丸底で、体部は内壁気味に開いて立ち上がる。内面に煤と思われる黒色の付着物。全般的に歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで 底部なで	細砂・粘土粒 普通 赤色	完存率100% 床面
5	+	A 8.0 B 2.1	底部はやや平坦な丸底で、体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。やや重んでいる。	口縁部外面・内面 横なで 底部なで	細砂 普通 赤褐色	完存率80% 床面
6	皿 B 上部質土器	A 11.7 B 2.4	丸底で、体部は内壁気味に開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。体部下半から底部は剥離している。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 内・灰褐色 外・灰褐色	完存率90% 覆土下層
7	+	A (11.6) B (3.1)	底部は丸底を基とするものと思われ、体部は外壁気味に開き、口縁部はやや起き上がる。	口縁部外面・内面 横なで 底部なで	細砂 普通 灰色	完存率20% 床面
8	+	A (11.7) B 3.5	やや平坦な丸底で、底部外面はやや凸凹している。体部は内壁気味に、口縁部は直線的に開く。口縁部と体部との境にはわずかに棱が見られる。やや歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 灰褐色	完存率80% 床面・覆土 下層
9	+	A 11.7 B 3.6	やや平坦な丸底で、底部の内面中央が凸レンズ状を呈する。外面には板目状の压痕が見られる。体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部と体部との境には、わずかに棱が見られる。やや歪んでいる。	口縁部外面・内面 横なで	細砂 普通 にほい赤褐色	完存率70% 床面・覆土



第123図 第28号住居跡状遺構出土遺物実測図（土師質土器－1）



第124図 第38号住居跡状造構出土遺物実測図（土師質土器－2）

土坑・堀・溝・グリッド出土遺物（第125・126図）

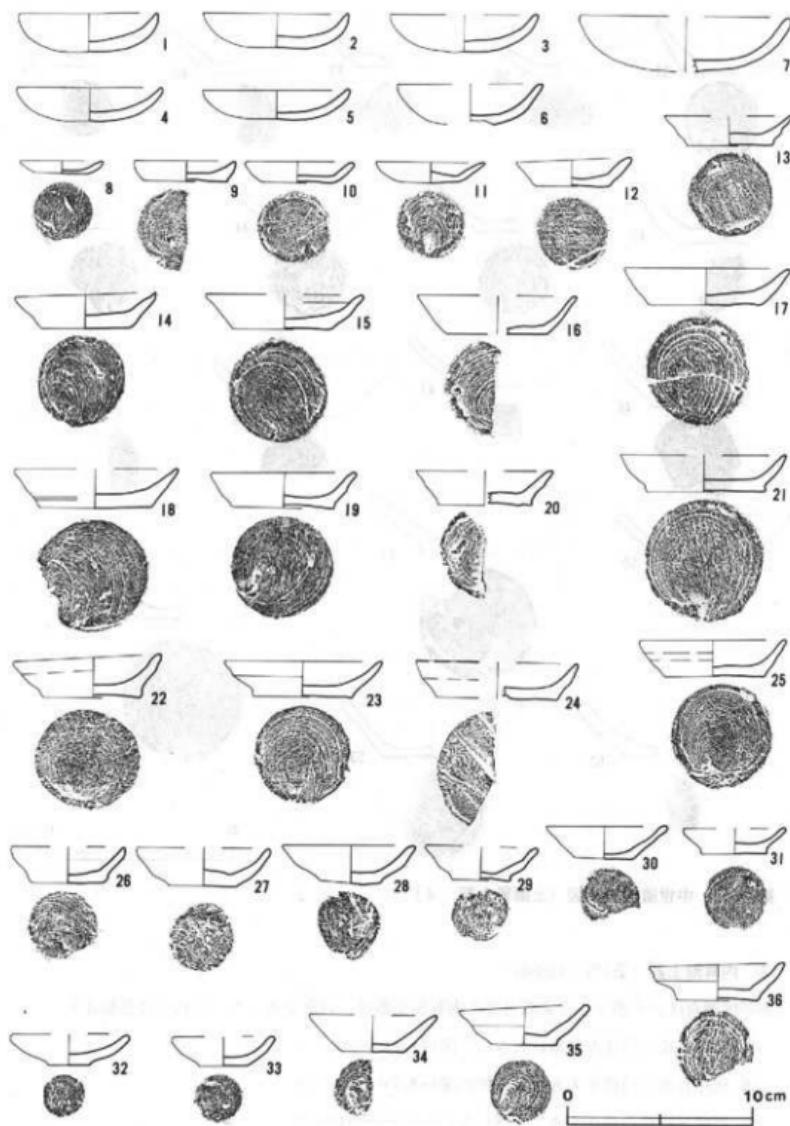
土器観察表

図版番号	器種	法華(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎上・焼成・色調	備考
第125図 1 土師質土器	皿 A	A 7.4 B 2.1	底部はやや平坦な丸底で、体部は内唇気味に開いて立ち上がる。底部外面及び唇部に焼付着。	口縁部外面・内面横なで 底部なで	細砂・芸母普通 橙色	完存率95% SK480覆土
2	+	A 7.9 B 1.9	底部外縁中央がやや陥る丸底で、体部は内唇気味に開いて立ち上がる。外面に焼とと思われる黒色の付着物。	口縁部外面・内面横なで 底部なで	細砂・普通 橙色	完存率95% SK678覆土
3	+	A 8.0 B 2.0	丸底で、体部は内唇気味に開いて立ち上がる。	口縁部外面・内面横なで 底部なで	細砂・普通 橙色	完存率40% SK678覆土
4	+	A 7.8 B 1.8	底部はほぼ平坦な丸底で、体部は内唇気味に開いて立ち上がる。歪んでいる。口唇部及び口縁部内・外面の一部に焼付着。	口縁部外面・内面横なで 底部なで	細砂・普通 赤色	完存率90% ST23覆土
5	+	A 8.0 B 1.6	底部はほぼ平坦な丸底で、体部はやや内唇気味に開いて立ち上がる。	口縁部外面・内面横なで 底部なで	細砂・普通 橙色	完存率90% ST140覆土
6	+	A (7.8) B (2.2)	底部は丸底で、体部はわずかに内唇しながら開いて立ち上がる。底部剥離。	口縁部外面・内面横なで	細砂・普通 淡褐色	完存率70% ST140覆土
7	皿 B 土師質土器	A (11.6) B (3.0)	丸底で、体部は内唇気味に開いて立ち上がる。	口縁部外面・内面横なで 底部なで	細砂・粘土粒普通 橙色	完存率40% 表探
8	皿 A 土師質土器	A (4.5) B 1.3 C 2.9	薄手で扁平な小形の皿。平面で、体部は直線的に開く。器高に比べて底径が大きい。	水挽き 横なで 底部凹軸系切り	細砂・普通 橙色	完存率90% G8aK
9	+	A (5.4) B 1.2 C (4.5)	扁平な小形の皿。平面で、底部は中央部がやや陥り、体部は器厚を減じながら直線的に開く。体部下半は器肉ない。底径が大きい。	水挽き 横なで 成部回転系切り	細砂・芸母普通 淡赤褐色	完存率60% E9K

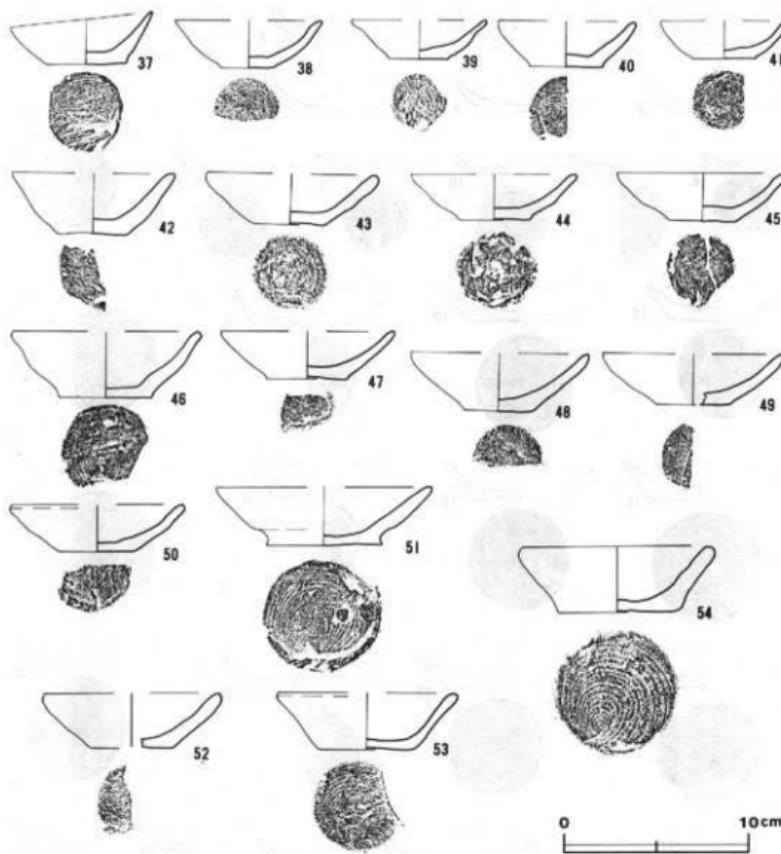
同版番号	器種	法蓋(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
10	皿 A 上印質土器	A 6.0 B 1.2 C 3.9	平底で、体部は直線的に開く。器高に比べ底径が大きく扁平である。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂・雲母 普通 にふい橙色	完存率95% G9d1区
11	* *	A (5.8) B 1.2 C 3.1	平底で、底部内面は器肉厚く、凸レンズ状を呈する。体部は直線的に大きく聞く。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 にふい橙色	完存率80% 表探
12	*	A 6.2 B 1.6 C 4.0	平底で、底部外縁はやや盛り、内面中央部は凸レンズ状を呈する。体部は直線的に聞く。蓋んでいる。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	砂粒 普通 にふい橙色	完存率95% SK455覆土
13	*	A (7.0) B 1.6 C 4.7	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に聞く。外面に強いクロ痕・煤と思われる黒色の付着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂・雲母 普通 橙色	完存率60% SK423覆土
14	*	A (7.6) B 2.0 C 4.8	平底で、底部は器肉が厚い。体部は器厚を減じながら直線的に聞き、口唇部はつまみ上げられ、ほぼ直立する。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 黒褐色	完存率80% E7j4区
15	*	A (8.4) B 1.9 C 5.3	平底で、体部はやや内壁気味に聞く。II 縁部内・外面に煤と思われる黒色の付着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 褐色	完存率70% E7j4区
16	*	A (8.6) B 2.1 C 5.4	平底で、底部の内面中央が盛む。体部は直線的に聞く。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂・雲母(鉛) 普通 橙色	完存率30% G9d1区
17	*	A (9.0) B 2.1 C 5.9	平底で、体部は器厚を減じながら、やや内壁気味に聞く。外面に強いクロ痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂・雲母 普通 淡赤橙色	完存率60% E8a1区
18	*	A (8.6) B 2.1 C 6.0	平底で、底部は器肉厚い。体部は器厚を減じながら直線的に聞く。体部下半に1 条の細い凹線が通る。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 黒褐色	完存率60% SK622覆土
19	*	A (7.7) B 2.0 C 5.5	平底で、底部外縁はやや盛り、内面が凸レンズ状を呈する。体部は中ほどにやや膨りをもつが、ほぼ直線的に聞く。外面にクロ痕。口唇部にタール状の付着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 にふい黄褐色	完存率80% 第8分岐覆土
20	*	A (7.4) B 1.9 C (5.0)	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に聞く。外面に強いクロ痕。II 縁部に煤と思われる黒色の付着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 淡褐色	完存率30% 表探
21	*	A (9.0) B 2.0 C 6.5	底部は平底で、体部下半から「ハ」の字 状に外方に突き出る。体部は器厚を減じながら内壁気味に聞く。外面にタール状の付着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 黑色	完存率60% SK433覆土
22	*	A 7.9 B 2.4 C 5.2	平底で、底部外縁がやや盛む。体部は中 ほどに膨りをもつが、器厚を減じながら内壁気味に聞く。外面にクロ痕。口唇部に煤と思われる黒色の付着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 淡黄褐色	完存率95% SK564覆土
23	*	A 8.4 B 2.0 C 5.3	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に聞く。外面にクロ痕。内面に煤と思われる黒色の付着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 橙色	完存率95% SK433覆土
24	*	A (8.8) B 2.0 C (6.6)	平底で、底部に板の圧痕。体部は中ほど に膨りをもつが、器厚を減じながら直線的に聞く。外面に強いクロ痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 淡小橙色	完存率40% SK434覆土

回収番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
25	鼎 A 土師質土器	A 7.8 B 2.0 C 5.4	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。外面にロクロ痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 橙色	完存率95% SK473覆土
26	* *	A (6.0) B 2.0 C (3.8)	平底で、体部は下半部が外反気味に開き、上半部は内脣気味に立ち上がる。底部内面に強いロクロ痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂・芸母 普通 淡褐色	完存率60% G9be区
27	*	A (7.2) B 2.1 C 3.5	平底で、底部内面が凸レンズ状を呈する。体部はやや内脣気味に開き、中ほどで内傾する。外面に強いロクロ痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 橙色	完存率60% SD41覆土
28	*	A 7.2 B 2.1 C 3.3	平底で、底部内面が凸レンズ状を呈する。体部はやや内脣気味に開き、中ほどで内傾する。外面にロクロ痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	砂粒 普通 灰褐色	完存率100% F8b区
29	*	A 6.1 B 1.9 C 3.1	平底で、底部外周がやや盛り、内面が凸レンズ状を呈する。体部は内脣気味に開き、中ほどで内反する。外面に赤色顔料付着。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	砂粒 普通 浅黃橙色	完存率60% G9be区
30	*	A 6.5 B 1.8 C 3.1	平底で、底部中央の器肉薄い。体部は直線的に開く。外面に強いロクロ痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 にぼい橙色	完存率60% G9be区
31	*	A (5.6) B 1.4 C 3.5	底部は平底で厚手。体部は器肉薄く、直線的に開く。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	砂粒 普通 にぼい橙色	完存率50% E9hn区
32	*	A (6.5) B 1.7 C (2.2)	平底で、底径が小さい。体部は内脣気味に開く。内面に赤色顔料付着。底部に板の圧痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 にぼい橙色	完存率20% G9be区
33	*	A (5.6) B 1.6 C (2.6)	平底で、体部は内脣気味に開く。全体的に磨滅している。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 浅黃橙色	完存率20% G9be区
34	*	A (6.8) B 2.0 C (4.3)	平底で、体部は器厚を減じながら、直線的に開く。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 にぼい橙色	完存率30% SD67覆土
35	*	A 7.1 B 2.2 C 3.5	平底で、底部内面が凸レンズ状を呈する。体部は中ほどにやや膨みを持つが、ほぼ直線的に開く。綻った丁寧なつくり。外面に弱いロクロ痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	砂粒 普通 橙色	完存率100% SK523覆土
36	*	A (7.3) B 2.0 C (4.3)	平底で、体部は直線的に開き、中ほどで内傾する。外面にロクロ痕。底部に板の圧痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 にぼい橙色	完存率70% SK512覆土
第126回 37	*	A 7.7 B 2.8 C 4.4	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。体部上半の内、外面に煤と思われる黒色の付着物。やや歪んでいる。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 にぼい橙色	完存率95% SK630覆土
38	*	A (8.0) B 2.6 C (3.0)	平底で、体部は内脣気味に開き、口縁端部はやや外反する。外面に強いロクロ痕。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 淡黃褐色	完存率40% G9be区
39	*	A (7.4) B 2.2 C 3.1	平底で、底部内面がやや盛り。体部は器厚を減じながらやや内脣気味に立ち上がり、口縁部は外反する。磨滅が著しい。	水挽き 横なび 底部回転糸切り	細砂 普通 淡黄色	完存率70% H6区

開拓番号	器種	法周(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
40	瓶 A 土師質土器	A(7.5) B 2.5 C(4.0)	平底で、底部内面が凸レンズ状を呈する。体部は器厚を減じながら、やや内壁気味に聞く。内・外面に螺付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 にぶい橙色	完存率30% F7dd区
41	* *	A(6.8) B 2.1 C(3.4)	平底で、底部内面はやや凸出している。体部は内壁気味に聞く。外面に弱いクロクロ痕。磨滅している。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂・雲母 普通 橙色	完存率20% G9ba区
42	* *	A(8.8) B 3.4 C(3.8)	平底で、体部は器厚を減しながら内壁気味に聞く。口縁部はやや外傾する。器内厚い。外面に弱いクロクロ痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 にぶい橙色	完存率30% 第1号焼成土
43	* *	A(9.0) B 2.8 C 4.0	平底で、体部は直線的に聞く。口縁部は分厚く丸味を帯びている。外面に弱いクロクロ痕。口縁部内面にカール状の附着物。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂・雲母 普通 橙色	完存率40% F8f区
44	* *	A(9.0) B 2.5 C(3.8)	平底で、体部は器厚を減しながら内壁気味に聞く。外面に強いクロクロ痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 浅黄褐色	完存率70% G9ba区
45	* *	A(8.9) B 2.7 C(3.6)	平底で、底部は器身單く、内面が凸レンズ状を呈する。体部は中ほどにやや膨らみをもつが、ほぼ直線的に聞いて立ち上がり。口縁部はやや内傾する。内面に付着物。底部に板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 にぶい橙色	完存率60% G9ba区
46	皿 B 土師質土器	A(10.2) B 3.6 C(5.0)	平底で、底部内面がやや窪む。体部は直線的に聞く。中径で内傾し、口縁部で外反する。内・外面にクロクロ痕。	水挽き 横なで 底部削減し不明	細砂 普通 浅黄褐色	完存率20% I7区
47	* *	A(9.4) B 2.6 C(4.4)	平底で、底部外縁がやや畳み、内面がやや凸レンズ状を呈する。体部は器厚を減じながら直線的に聞く。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 橙色	完存率15% G9ba区
48	* *	A(9.6) B 3.2 C(3.8)	平底で、体部は直線的に聞く。口縁部はやや内傾する。外面に弱いクロクロ痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	細砂 普通 にぶい橙色	完存率20% 第8分焼成土
49	* *	A(9.8) B 2.8 C(4.0)	平底で、体部は内壁気味に聞く。内・外面に赤褐色調がわずかに付着。弱いクロクロ痕。	水挽き 横なで 底部静止糸切り	細砂・雲母 普通 にぶい橙色	完存率45% 第8分焼成土
50	* *	A(9.2) B 2.6 C(4.0)	平底で、底部内面中央がわずかに窪む。体部は直線的に聞く。中ほどで内傾する。内・外面にクロクロ痕。	水挽き 窪なで 底部回転糸切り	細砂 普通 淡赤褐色	完存率30% G9da区
51	* *	A(11.6) B 3.2 C(6.2)	平底で、底部内面がやや窪む。体部は器厚ながら直線的に聞く。底部と体部との境は、強いクロクロなどでより括っている。内面に煤と思われる黒色の付着物。底部に板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	砂粒 普通 内 浅黄褐色 外 黑褐色	完存率60% G9区
52	* *	A(9.4) B 3.0 C(4.1)	平底で、底部薄手。体部は器身單く、直線的に聞く。口縁部はやや内傾する。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	砂粒・雲母・砂礫 普通 にぶい橙色	完存率15% G9ba区
53	* *	A(9.6) B 3.1 C(5.0)	底部外縁中央がわずかに窪む平底で、体部は外反気味に聞く。口縁部は器身單く、口縁部は丸味を持つ。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	砂粒 普通 にぶい赤褐色	完存率50%
54	* *	A(10.0) B 3.6 C 6.2	平底で、底部内面は凸レンズ状を呈する。体部は器身厚く、直線的に聞く。口縁部は丸味を持つ。重く量感がある。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	砂粒・砂礫 普通 赤褐色	完存率70% G9ba区



第125図 中世遺物実測図（土師質土器—3）



第126図 中世遺物実測図（土師質土器－4）

(2) 内耳形土器 (第127・128図)

本年度調査区から出土した実測可能な内耳形土器は、11点であった。これらは器形から

- ① 底径に比べ口径が非常に大きく、深いもの……1～3
- ② 底径に比べ口径が大きく、比較的深いもの……4～9
- ③ 底径と口径の差が小さく、浅いもの……10・11

の三種類に大別することが可能である。①の特徴をもつ内耳形土器を内耳A、同様に②を内耳B、③を内耳Cとし、表で解説した。

土器観察表

調査番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第127回 1	内耳形土器 (内耳A)	A (32.4) B 15.0 C (11.0)	平底で、体部はやや内側気味に開いて立ち上がる。頭部は内側の凹線により、外表面がやや膨らむ。口唇部は平坦。耳は1か所残存。外面に錐型付着。	口唇部、頭部～口 縁部内・外面横なで その他なで 耳接合	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率20% SK547覆土
2	* (+)	A (33.0) B 16.9 C (12.6)	平底で、体部は内側しながら開いて立ち上がる。体部中央が膨らむ。口唇部は平坦。頭部内面に凹線。耳は1か所残存。外面に錐型付着。	*	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率15% 第8分野覆土
3	* (+)	A (33.6) B 17.5 C (13.0)	平底で、体部はやや内側気味に開いて立ち上がる。頭部から口縁部にかけてやや外反する。口唇部平坦。頭部内面に軸の広い深い凹線が巡る。耳は2か所残存。外面に錐型付着。	*	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率40% H6g区
4	* (+)	A (34.6) B 12.8 C 18.6	平底で、体部は内側気味に開いて立ち上がる。口唇部は平坦。耳は2か所残存。外面に錐型付着。	内・外面なで 耳接合	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率40% 第8分野覆土
5	* (+)	A (39.2) B 12.9 C (20.4)	平底で、体部はやや内側気味に開いて立ち上がる。口唇部平坦。耳接合部の外表面はふくらむ。耳は2か所残存。外面に錐型付着。	口唇部横なで その他のなで 耳接合	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率20% 第8分野覆土
6	* (+)	A (32.8) B (9.0) C -----	体部はやや内側気味に開いて立ち上がる。耳接合部の外表面はふくらむ。口唇部は平坦。耳は2か所残存。外面に錐型付着。	口唇部・口縁部内 面横なで その他のなで 耳接合	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率30% G9b4区
7	内耳形土器 (内耳B)	A (31.0) B 11.6 C (17.6)	平底で、体部はやや内側気味に開き、頭部から口縁部にかけて内増する。口唇部は平坦。耳は1か所残存。外面に錐型付着。	*	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率10% 第1分野覆土
第128回 8	内耳形土器 (内耳C)	A (34.0) B 9.2 C (24.8)	平底で、器高が低い。体部はやや内側気味に開いて立ち上がる。口唇部平坦。耳接合部の外表面ふくらむ。耳は1か所残存。外面に錐型付着。	内・外面なで 耳接合	砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	完存率15% G9d4区
9	* (+)	A (40.4) B 14.9 C (24.3)	平底で、体部は下半部がやや内側気味に、上半部はほぼ直線的に開いて立ち上がる。体部下がややふくらむ。口唇部平坦。耳接合部の外表面はふくらむ。耳は2か所残存。外面に錐型付着。	口唇部横なで その他のなで 耳接合	砂粒・雲母(有) 普通 黒褐色	完存率10% D6f4区
10	* (+)	A (34.0) B 7.0 C (26.8)	平底で、器高が低い。体部はやや内側気味に開いて立ち上がる。口唇部はなで脛形により、中央部が凹線状に膨む。体部に補修孔が穿たれています。耳は1か所残存。外面に錐型付着。	口唇部及び体部内 ・外面横なで 底 部内面同心円のな で 耳接合	砂粒・雲母 普通 にぶい褐色	完存率10% SD41-A覆土
11	内耳形土器 (内耳B)	A (35.2) B 8.4 C (19.6)	平底で、器高が低い。体部は直線的に大きくなりて立ち上がる。口唇部は平坦。耳接合部の外表面がふくらむ。耳は1か所残存。外面に錐型付着。	内・外面横方向の なで 耳接合	砂粒・雲母 普通 黒褐色	完存率15% G9b4区

(3) 陶磁器

土坑・塙・溝・グリッド出土遺物 (第129・130図)

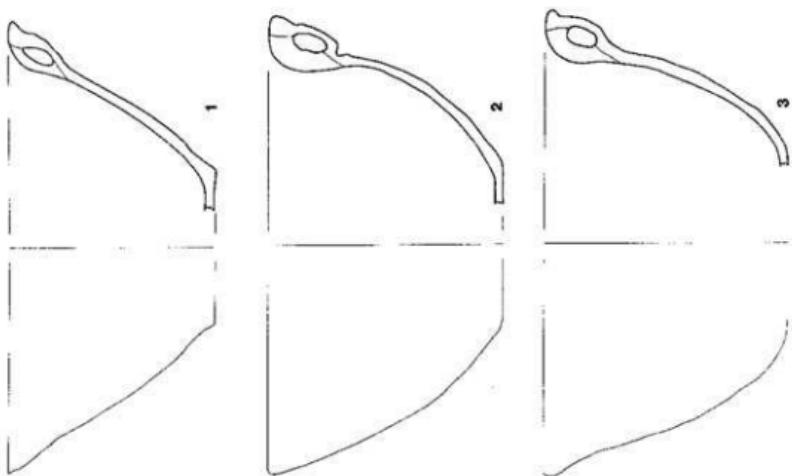
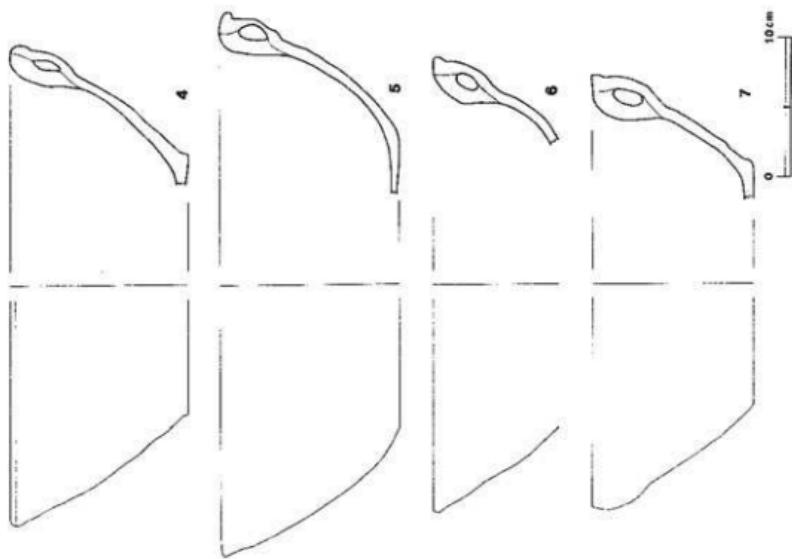
陶磁器観察表

図版番号	器種	法華(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
第128図 12	塙鉢 (陶器)	A (37.8) B (9.2) C ——	体部は直線的に斜上方に開いて立ち上がる。口縁部は明瞭な段を有している。内面には、14本1単位の櫛目が継ぎに施されている。器面は内外面ともやや凸凹している。施釉の陶器。	ロクロ成形	細砂・緻密 良好 焼成赤褐色	完存率10% E84dK 近世漸戻
13	* (*)	A (24.4) B (8.0) C ——	体部は直線的に斜上方に開き、口縁部はやや外反する。口縁部は平型で、内傾する。内面には、5本1単位の櫛目が継ぎに施されている。無釉の陶器。	なで 口縁部横なで	細砂・砂粒・ 苔母 良好 にぶい橙色	完存率10% F9区表採 近世漸戻
14	* (*)	A —— B (8.4) C (9.2)	平底で、底部は直線的に大きく開いて斜上方に立ち上がる。内面には、4本1単位の櫛目が継ぎに施されている。無釉の陶器。	なで 内面横なで	細砂・苔母 良好 赤黒色	完存率10% 第1号窯 中世漸戻
15	* (*)	A —— B (5.9) C (14.2)	平底で、体部は直線的に開いて立ち上がる。内面には、10本を1単位とする櫛目が施されている。	ロクロ成形 外面横なで 底部丸なで	細砂・長石 良好 灰赤色	完存率5% F9区表採 近世漸戻
16	* (*)	A —— B (8.3) C (16.4)	平底で、体部は直線的に開いて立ち上がる。内面には、18本1単位の櫛目が施されている。体部外表面施釉。	ロクロ成形 体部回転差削り 底部回転差削り	細砂・緻密 良好 内-にぶい褐色 外-暗赤色	完存率30% G94K 近世漸戻
第129図 17	* (*)	A —— B (6.0) C (9.8)	平底で、体部は直線的に斜上方に開いて立ち上がる。外面は、強いロクロ痕を残し凸凹している。内面には、7本以上を1単位とする櫛目が継ぎに施されている。無釉の陶器。	ロクロ成形 内面横なで 底部回転差削り	細砂・石英 良好 暗赤褐色	完存率5% G84dK 近世常滑か
18	* (*)	A —— B (6.6) C (10.8)	平底で、体部は直線的に斜上方に開いて立ち上がる。内面には、10本1単位の櫛目が継ぎに施されている。底部には同心円状に施されている。底部中央は指子目状となっている。施釉の陶器。	ロクロ成形 底部回転差削り	細砂・緻密 良好 赤黒色	完存率10% F9区表採 近世漸戻
19	* (*)	A —— B (4.9) C (14.2)	平底で、体部は直線的に開いて立ち上がる。内面には、体部に12本以上を1単位とする櫛目が継ぎに、底部には同心円状に施されている。底部中央は指子目状となっている。施釉の陶器。	ロクロ成形 底部回転差削り	細砂 良好 赤黒色	完存率5% F9区表採 近世漸戻
20	* (*)	A —— B (10.8) C (15.2)	底部外表面中央がやや隆む平底で、体部は直線的に斜上方に開いて立ち上がる。内面には、17本1単位の櫛目が継ぎに、底部には同心円状に施されている。施釉の陶器。	ロクロ成形 底部回転差削り	細砂・緻密 良好 暗赤褐色	完存率15% G84dK 近世常滑
21	* (*)	A —— B (6.5) C (4.8)	底部外表面中央がやや隆む平底で、体部は直線的に斜上方に開いて立ち上がる。内面には、19本1単位の櫛目が継ぎに、底部には伏状または直線的に施されている。	ロクロ成形 底部回転差削り	細砂・緻密 良好 にぶい赤褐色 淡黄褐色	完存率30% E84dK 近世漸戻

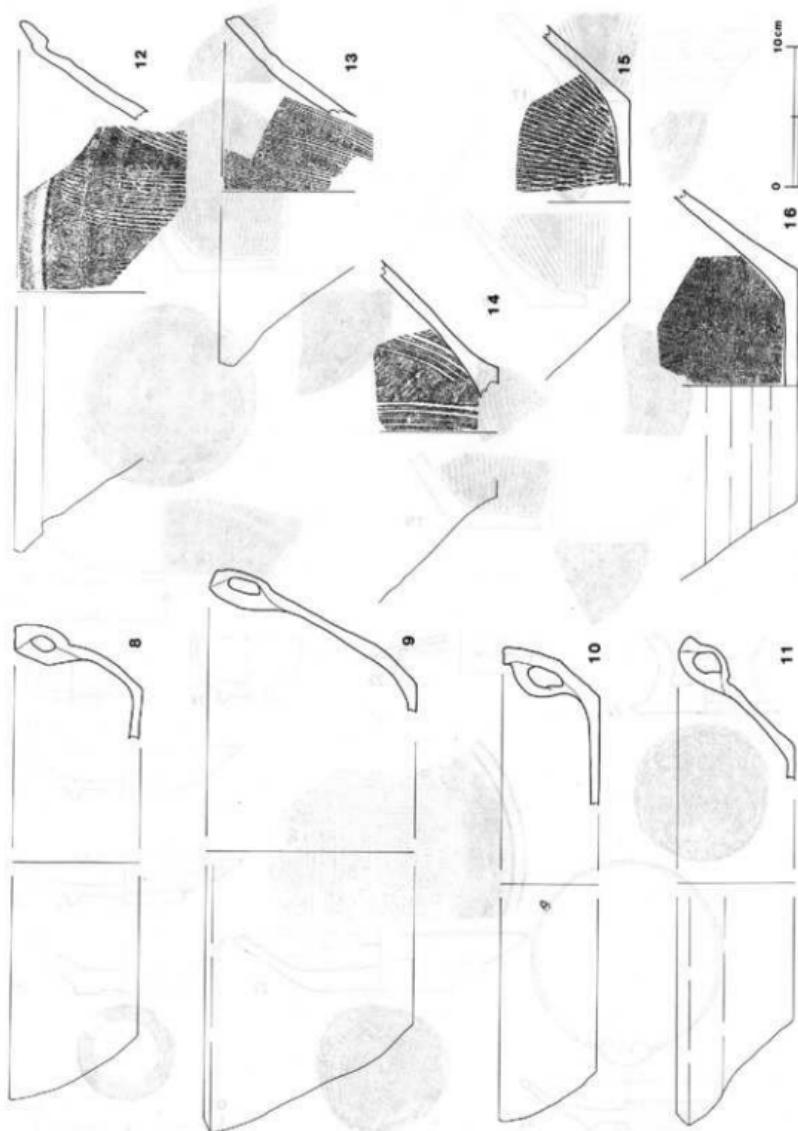
図版番号	器種	法寸(cm)	器形の特徴及び文様	装形技法	胎土・焼成・色調	備考
22	花生 (陶器)	A —— B [4.1] C 8.0	化生の台部破片。底面を除き外面に赤褐色の釉が掛けられている。基部は段階があり、体部は内壁しながら外上方に立ち上がる。やや歪んでいる。縁部は広がる。底部以下露胎。	水焼き 底部回転糸切り 台部接合	(胎土)灰白色 (釉)赤褐色 (焼成)普通	完存率5% 第8号窯 近世漸戻
23	蓋 (+)	A 9.4 B [2.2] C 7.4 D 1.0	つまみを欠損する急須の蓋と思われる。天井部は緩やかに膨らみ、口縁部は直立する。天井部には灰オーリーブ色の釉が掛けられ、縁には1条の細い沈線が施されている。薄手である。	水焼き 受部削り出し	(胎土)灰赤褐色 (釉)灰オーリーブ (焼成)普通	完存率30% G8a区 近世漸戻
24	碗 (+)	A 6.0 B 3.7 C 3.0	小形の横円形の碗。体部下部は外傾し、中位から口縁部にかけてほぼ直立する。高台は直立し、外面上には強い削り出し痕や釉垂れが見られる。灰白色の釉が掛けられ、内面には細かい粗入が見られる。体部下部以下露胎。	水焼き 外面部回転糸切り 削り出し高台	(胎土)淡黄色 (釉)灰白色 (焼成)良好	完存率100% G8b区 近世漸戻
25	碗 (+)	A 5.3 B 2.6 C 3.0 D 4.5	小形の碗。体部下部は外傾し、中位から口縁部にかけて内壁気味に立ち上がる。体部中位は膨らみ、明瞭な釉割り痕が見られる。見込みの一端釉切れ。体部下部以下露胎。	水焼き 体部下部回転糸切り 削り出し高台	(胎土)淡黄色 (釉)灰白色 (焼成)良好	完存率100% SD41 近世漸戻
26	皿 (+)	A 11.0 B 2.3 C 4.3 D 0.4	注ぎ口の付く延形の皿。低い削り出し高台で、体部は緩やかに内壁しながら外上方に開く。口縁部に半月状に粘土紐を貼り付け、注口をしている。外面上には釉垂れがある、内面には釉切れや細かい粗入が見られる。体部下部以下露胎。	水焼き 外面部回転糸切り 削り出し高台	(胎土)にぶい 黄褐色 (釉)オーリーブ 褐色 (焼成)良好	完存率100% F8d区 近世漸戻
27	* (+)	A 16.0 B 3.1 C 7.4	おろし目皿。平底で、体部は内壁気味に大きく開いて外上方に立ち上がる。口縁部内面に細い垂れが盛り、口縁部は段状となっている。底部には回転糸切り痕と状の圧痕が見られる。底部上半の内・外面上には釉が掛けられ、見込みには窓により格子状のおろし目が刻まれている。見込みには1か所に目跡が残る。	水焼き 外面部回転糸切り 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉)青灰色 (焼成)良好	完存率50% SK446 近世漸戻
28	* (+)	A (12.4) B 2.8 C (5.4) D 0.6	延形の皿。体部は内壁しながら大きく外上方に開く。高台は下方ですぼまり、断面三角形を呈する。外面上には強い剥離痕、体部と高台との境には縫が見られる。見込みに円形の重ね焼き痕が残る。体部下部以下露胎。	水焼き 外面部回転糸切り 削り出し高台	(胎土)淡黄色 (釉)浅黄色 (焼成)良好	完存率40% SD41 近世漸戻
29	* (+)	A (12.7) B 2.9 C 6.0 D 0.6	延形の皿。体部はわずかに内壁しながら大きく外上方に開く。高台は下方でややすぼまり、断面三角形を呈する。外面上には強い剥離痕。体部と高台との境には縫が見られる。見込みに円形の重ね焼き痕が残る。体部下部以下露胎。	水焼き 外面部回転糸切り 削り出し高台	(胎土)淡黄色 (釉)浅黄色 (焼成)良好	完存率80% SD41 中世漸戻

出典番号	器種	法華(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
30	瓶 (陶器)	A —— B (2.9) C 5.4 D 2.9	体部下半の破片。体部は直線的に外上方に向く。高台は低い削り出し高台で、下方向でやすぼまる。蓋付に回転糸切り痕が見られる。体部下半以下露胎。削れ口の縁を欠いて注ぎ口を作り、再利用したもので、内面や注ぎ口には漆と思われる付着物が見られる。	水焼き 外面回転糸切り 底部回転糸切り 削り出し高台	(胎土)灰赤色 (釉)浅黄色 (焼成)良好	完存率30% SK668 近世漸戸
第130回 31	盞 (*)	A —— B (7.6) C 7.9 D 0.8	低い削り出し高台で、体部はわずかに内輪するがほぼ直立する。高台と体部との境は、わずかに段状を呈する。内面に強いクロロ痕が残り、体部下半や高台に輪垂れが見られる。内面及び体部下半以下露胎。	水焼き 削り出し高台	(胎土)淡褐色 (釉)灰白色 (焼成)良好	完存率30% E814K 近世漸戸
32	上 瓶 (*)	A (20.9) B 11.7 C (8.0)	底部中央がやや直円底。体部は内唇しながら外上方に開き、上半で直立し、口縁部は大きく外反する。口縁部には縫合状となり、中央に孔の穿たれた山形状の把手が付けられている。(把手は1対と思われるが、片方は欠損)山縁部内面に受部を有する。体部下半の2か所(本来は3か所)に2つの小さな脚が付けられている。体部下半以下露胎。	水焼き 底部糸切り後、回転灑なで	(胎土)にじい 赤褐色 (釉)暗赤褐色 (焼成)良好	完存率40% SD41 近世漸戸
33	盞 (*)	A —— B [12.9] C 9.6	平底で、体部は内唇しながら立ち上がる。内・外面に強いクロロ痕が残る。底部は露胎。	水焼き 底部糸切り後、回転灑なで	(胎土)褐灰色 (釉)極暗赤褐色 (焼成)良好	完存率30% SD41 近世漸戸
34	平 瓶 (*)	B 15.0 C (11.5) D 1.1	低い削り出し高台で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、天井部は緩やかに膨らむ。体部と天井部との境は段をなす。天井部には深い凹線が巡り、その中央部に「つ」の字状の把手が附設されている。天井部の縁には、短い凹縁部(高さ2cm、直径約6.5mm)がつけられている。内面及び体部下半以下露胎。	水焼き 削り出し高台 天井部接合	(胎土)にじい 黄褐色 (釉)灰オリーブ色 (焼成)良好	完存率60% SD41 近世漸戸
35	鉢 (*)	A (16.4) B 6.0 C 6.2 D 0.5	低い削り出し高台で、蓋付は平坦。体部は内唇しながら外上方に立ち上がる。山縁部は玉縁で、見込みには2か所に目痕が残る。体部下半以下露胎。	水焼き 削り出し高台	(胎土)にじい 赤褐色 (釉)暗オリーブ灰色 (焼成)良好	完存率40% G8a区 近世漸戸
36	瓶 子 (磁器)	A 3.9 B 5.0	瓶子の山縁部。体部上半は内傾し、口縁部は直立する。口縁部は首もとに凸凹が巡り、段を有する。内面には、口縁部と体部との境にしづり痕が残る。外面には捺刻(菊花文・意匠文)が施され、細かい貫入が見られる。	水焼き	(胎土)灰白色 (釉)灰オリーブ色 (焼成)良好	完存率5% SK597 漸戸
37	碗 (*)	A (9.6) B 4.9 C 3.8 D 0.8	染付の碗形茶碗。高台は低く直立し、体部は内唇しながら外上方に立ち上がる。外面上には花唐文が描かれている。蓋付は露胎。	水焼き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率45% E8a区 伊万里
38	* (*)	A 9.7 B 5.2 C 3.5 D 0.7	染付の碗形茶碗。高台は低く直立し、体部は内唇しながら外上方に立ち上がる。外面上には花唐文が描かれている。蓋付は露胎。	水焼き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率90% E8a区 伊万里

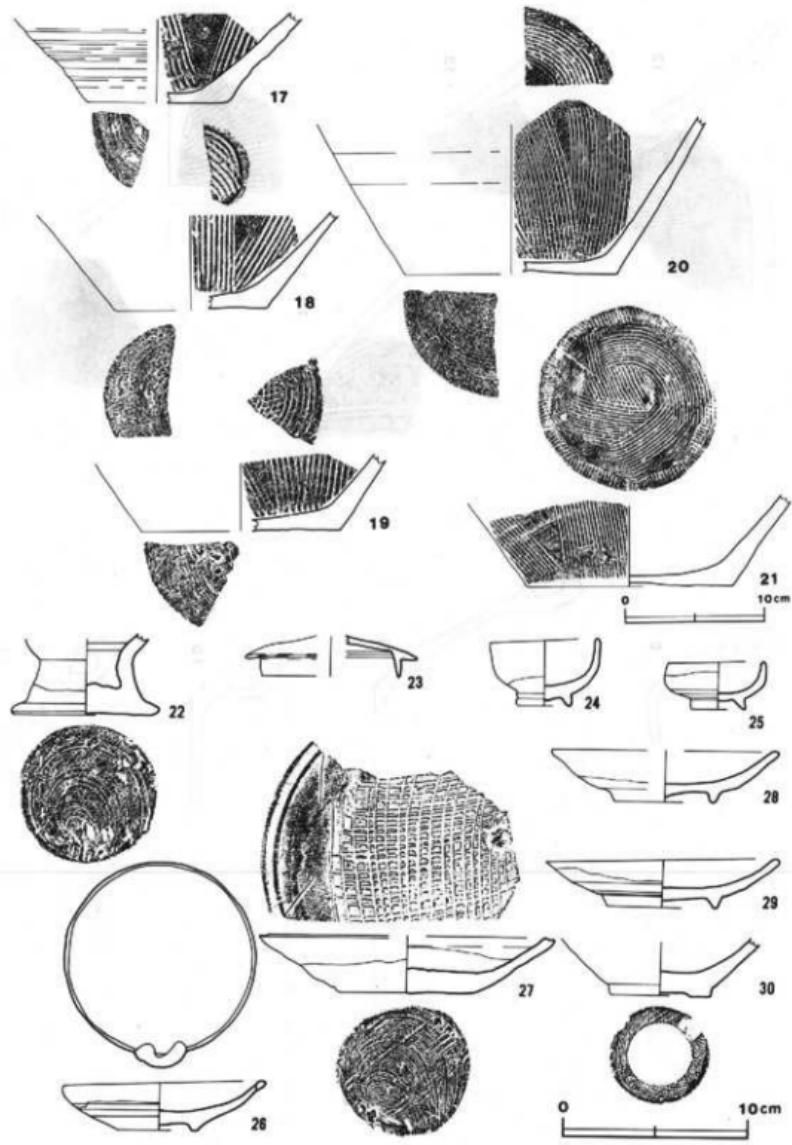
同版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・焼成・色調	備考
39	碗 (縁付)	A(9.3) B 5.1 C(3.8) D 0.9	染付の筒形茶碗。高台は直立し、体部は緩く内側しながら外上方に立ち上がる。外面には草花文が描かれている。高台外面には二重の墨線、内側には「○」と「川」の字の様なものが見える。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率40% E81d区 伊万里
40	* (*)	A(10.0) B 5.0 C(4.0) D 0.9	染付の筒形皿。高台は直立し。体部は内側しながら外上方に立ち上がる。外面には梅花文や草花が描かれている。縁付は露胎。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率50% G9区 伊万里
41	皿 (*)	A(13.0) B 3.8 C(7.6) D 0.5	染付の延形皿。高台は低く直立し、断面三角形を呈する。体部は緩く内側しながら外上方に開く。外面には枝が、内面には二重の墨線と、その上方に花文・草文が描かれている。縁付は露胎。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明綠灰色 (焼成)良好	完存率25% F81d区 伊万里
42	* (*)	A 12.0 B 3.8 C(3.8) D 0.7	染付の延形皿。高台は低く下方ですぼまる。体部は緩く内側しながら大きくて上方に向く。内面には、体部と見込みの境に二重の墨線、その上方には松葉が格子状に描かれている。外面上方に獨いクロ板が見られる。縁付は露胎。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明綠灰色 (焼成)良好	完存率40% F81d区 伊万里
43	* (*)	A(13.0) B 3.7 C(7.4) D 0.5	染付の延形皿。高台は低く下方ですぼまり、断面三角形を呈する。体部は緩く内側しながら外上方に開く。外面には梅花文、内面には体部と見込みとの境に二重の墨線、その上方に花文が描かれている。縁付は露胎。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率40% G4ax区 伊万里
44	碗 (*)	A 6.5 B 4.3 C 3.0 D 0.6	染付の縁反り小碗。高台は低く直立し、体部は下手部に丸味をもつが、ほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。外面上方に花文が描かれている。縁付は露胎。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率95% G9da区 伊万里
45	* (*)	A(7.2) B 5.3 C 3.8 D 0.4	染付の筒形茶碗。高台は直立し、体部下半は直線的に外上方に大きく開いた後、直立する。外面上は6単位に割り付けられ、花卉文・意匠文が交互に描かれている。内面には墨線が見られる。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率45% G9dd区 伊万里
46	* (*)	A(6.6) B 5.2 C(3.4) D 0.5	染付の筒形茶碗。高台は低く直立する。体部下半は直線的に大きくて上方に開いた後、直立する。外面上は4単位に割り付けられ、花文と意匠文が交互に描かれている。内面には格子文や墨線が見られる。	水挽き 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉)明青灰色 (焼成)良好	完存率40% G8ad区 伊万里



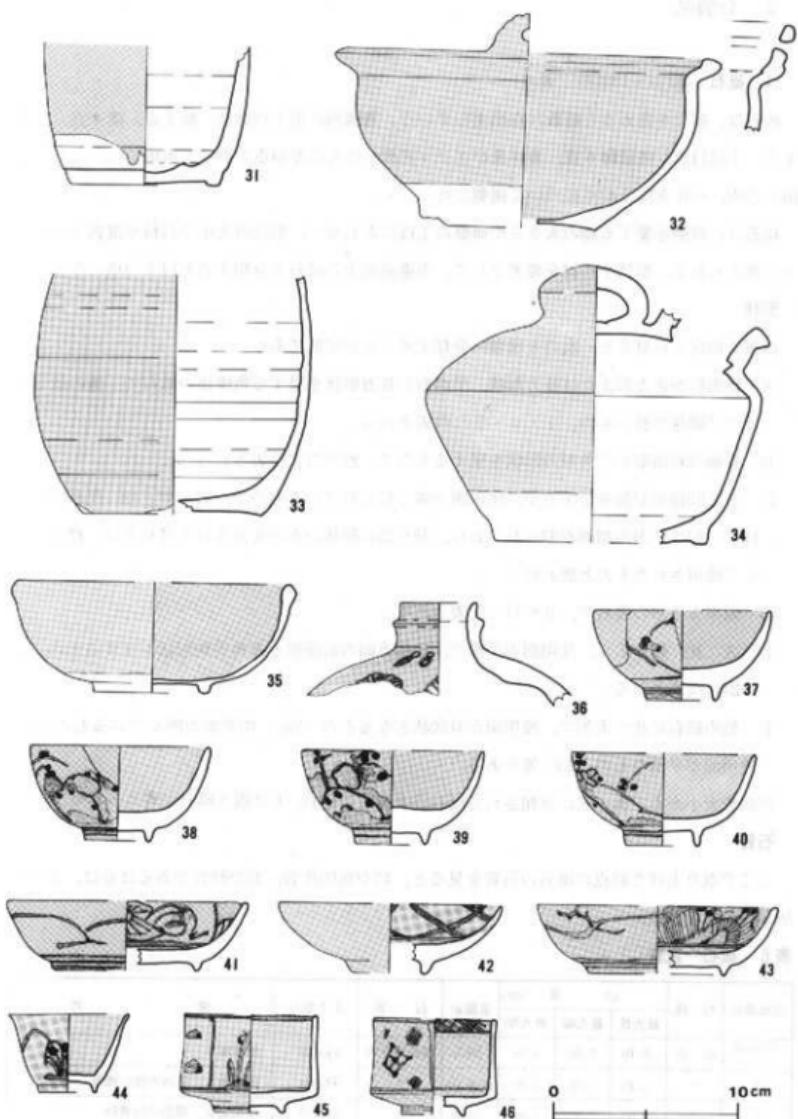
第127図 中世遺物実測図（内耳-1）



第128図 中世遺物実測図（内耳-2・播鉢-1）



第129図 中世遺物実測図 (播鉢-2・陶磁器-1) (地圖-3-129) 宮城美和子著
中世の日本 地図と図版 第12章



第130図 中世遺物実測図（陶磁器-2）

2 石製品

(1) 砥石 (第131~133回) (表 6)

砥石は、破片を含めると総数70点出土している。遺構別の出土点数は、堀4点、溝4点、土塁1点、土坑11点、住居跡6点、表探及びグリッド出土のものが44点である。本項では、これらの砥石の内、小片を除く43点について掲載した。

砥石は、研磨を要する物の大きさや研磨の工程にあわせて、形状の大小や石材が選択されたことが考えられる。形状や石材を要素として、当遺跡出土の砥石を分類すると以下の様になる。

形状

砥石を形状から見ると、次の6種類に分類することが可能である。

A 断面形が正方形または長方形、平面形が長方形状を呈する角棒状の砥石で、他の砥石に比べて細身で長いもの。1・3・7に代表される。

B 長軸の断面形が三角形の形状を呈するもので、27や31に代表される。

C Bと同様の形態を呈するが、使用面が強くねじれているもので、35・37・42に代表される。特に、42は一方の端部が抉られており、抉り部に紐状のものをからげて吊り下げ、携帯用として使用されたものと思われる。

D 扁平な小形の砥石で、9や11に代表される。

E Aに比べ幅が広く、使用面が平滑で、長軸方向の断面形が直角三角形状を呈するもの。12や24に代表される。

F 他の砥石に比べ大形で、使用面が舟底状となるもの(26)、中央部が凹んでいるもの(23)、使用面が平滑なもの(43)等がある。

形状や大小から、A~Eに分類される砥石は手持ちの砥石、Fは置き砥石と考えられる。

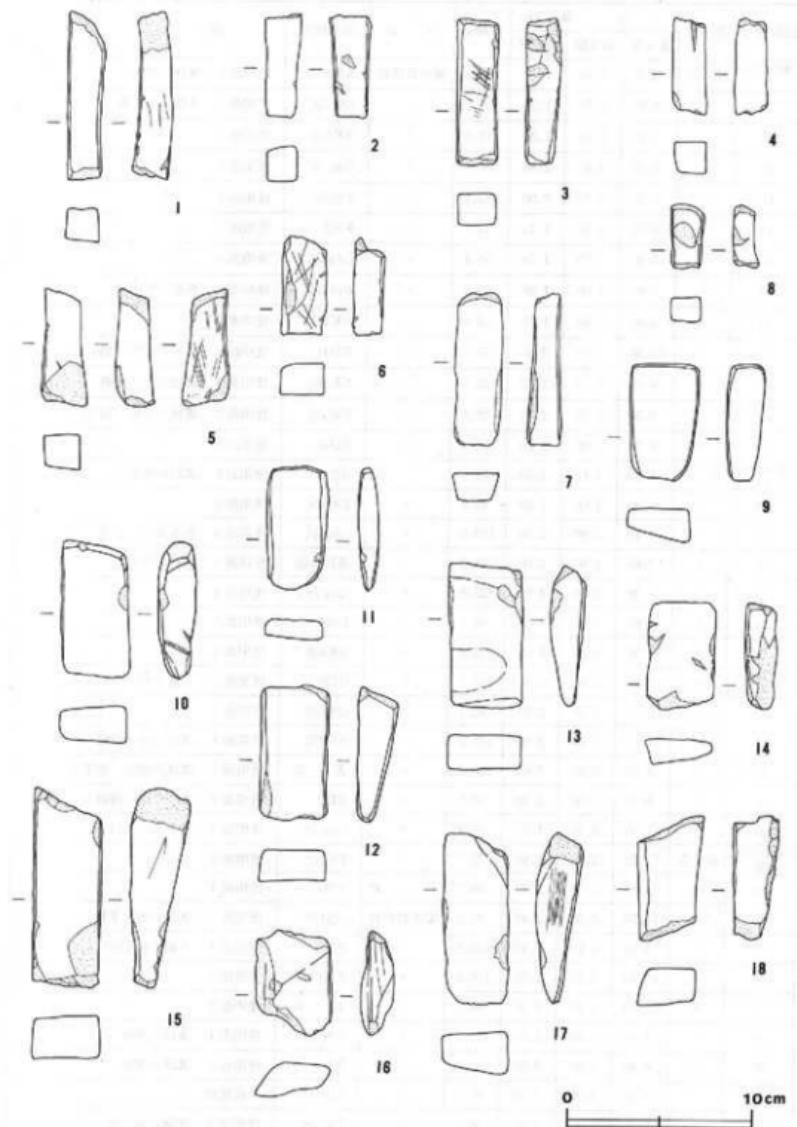
石質

ここで取り上げた43点の砥石の石質を見ると、43が角閃片岩、33が砂岩であるほかは、全て凝灰質の砂岩である。

表 6 砥石一覧表

器物番号	器種	寸 厘 (cm)			重 量 (g)	石 質	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第131回 1	砥 石	9.10	2.00	1.90	56.5	凝灰質砂岩	SK433	使用面4
2	*	5.70	2.00	1.90	38.0	*	SK448	使用面4 溝状の強い擦痕
3	*	8.00	2.20	1.80	54.8	*	SK569	使用面3 黒色の付着物
4	*	5.20	1.90	1.70	27.6	*	SK476	使用面4 溝状の強い擦痕
5	*	6.40	2.50	1.90	45.5	*	第1分堀	使用面4 強い溝状の擦痕多数

固版番号	品種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第131回 6	砾 石	2.50	5.40	1.70	38.0	凝灰質砂岩	S121	使用面4 溝状の擦痕
7	*	8.30	2.50	1.50	59.5	*	G9a区	使用面1 3面に加工痕
8	*	3.45	1.80	1.30	12.3	*	SK622	使用面1
9	*	6.30	3.80	1.80	70.1	*	GRa3区	使用面5
10	*	7.50	3.70	2.00	85.1	*	F8f区	使用面1
11	*	6.70	3.40	1.10	34.7	*	F9区	使用面4
12	*	7.30	3.70	1.70	85.4	*	G8a区	使用面3
13	*	7.80	4.00	1.90	85.9	*	F8f区	使用面2 表面に加工痕
14	*	5.80	3.60	1.70	53.6	*	SK421	使用面1
15	*	10.80	3.70	2.30	155.2	*	SD41	使用面1 溝状の擦痕 加工痕
16	*	4.10	5.75	1.70	43.8	*	SK486	使用面3 溝状の強い擦痕
17	*	9.30	3.50	2.30	86.8	*	F8f区	使用面2 溝状の擦痕 加工痕
18	*	6.70	3.60	2.10	71.4	*	SD41	使用面4
第132回 19	砾 石	6.20	4.10	1.60	52.0	*	SD41	使用面1 溝状の擦痕
20	*	5.90	3.60	1.60	42.8	*	F8f区	使用面2
21	*	7.10	3.90	2.50	102.5	*	G9d区	使用面3 热を受けている
22	*	7.80	4.00	3.00	164.3	*	第10号塚	使用面4 溝状の擦痕
23	*	7.30	4.50	4.90	235.8	*	G8a区	使用面4
24	*	6.80	4.60	1.50	95.4	*	F9区	使用面3
25	*	6.00	4.20	4.00	133.6	*	SK426	使用面3
26	*	7.50	5.00	3.50	167.7	*	S132	使用面2 部欠損
27	*	10.10	3.50	2.60	92.1	*	G9b区	使用面1
28	*	11.00	3.30	2.30	102.3	*	SK430	使用面4 溝状の強い擦痕
29	*	8.20	4.00	2.60	120.3	*	表 採	使用面5 溝状の擦痕 加工痕
30	*	9.75	3.00	2.30	76.5	*	S132	使用面2 溝状の強い擦痕
31	*	7.50	3.20	1.50	53.4	*	G8a区	使用面3 热を受けている
第133回 32	砾 石	11.20	3.70	1.40	72.5	*	F8f区	使用面3
33	*	9.20	3.30	2.40	99.2	砂 岩	F9区	使用面4
34	*	11.50	2.50	2.40	93.2	凝灰質砂岩	G9d区	使用面3 溝状の擦痕 多数
35	*	13.60	3.10	2.40	132.5	*	F9区	使用面1 3面に加工痕
36	*	10.50	3.20	2.50	115.8	*	F9区	使用面2
37	*	9.10	3.10	2.30	38.2	*	表 採	使用面2
38	*	7.40	5.00	2.80	111.5	*	G9b区	使用面4 溝状の擦痕
39	*	6.40	4.00	3.00	82.9	*	I6区	使用面3 溝状の擦痕
40	*	4.50	3.90	3.20	65.0	*	SD41	全面使用
41	*	5.20	3.40	3.60	96.7	*	F8f区	使用面3 側面に加工痕
42	*	11.70	2.90	2.40	85.3	*	SK448	使用面4 強い擦痕 一方に陥り有り(西側)印有
43	*	10.10	5.80	4.30	390.4	角 開 片 岩	第8号塚	使用面1 細い溝状の擦痕多数

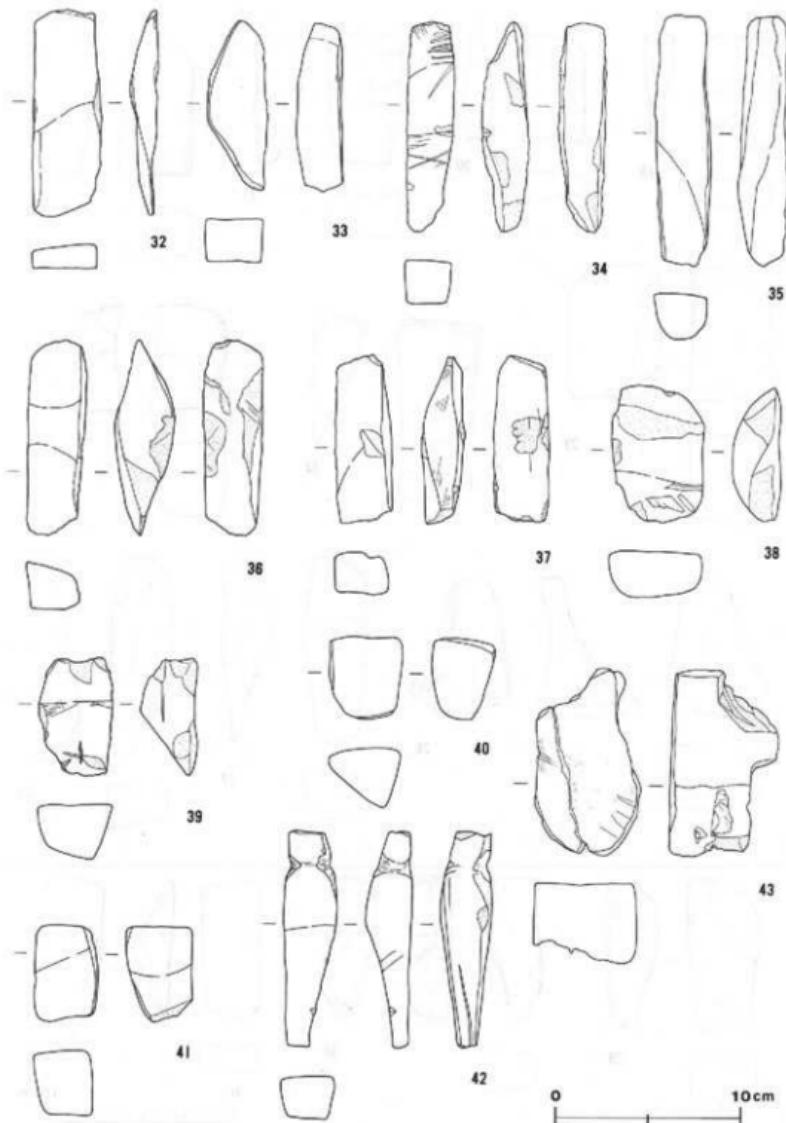


第131図 石製品実測図（砥石-1）



第132図 石製品実測図（砥石-2）

— 132 — 石製品実測図（砥石-2）



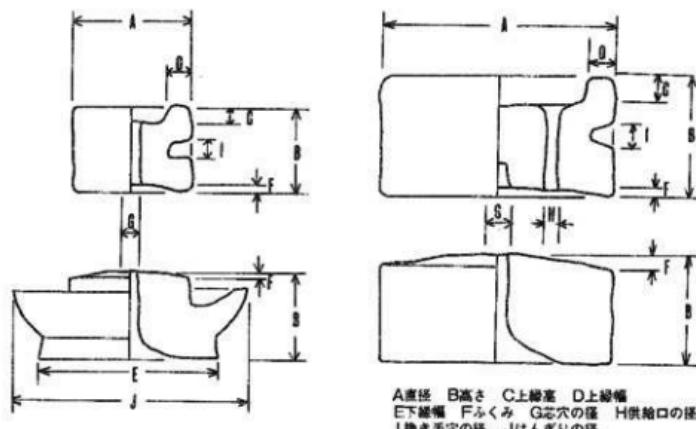
第133図 石製品実測図（砥石-3）

（左）石器実測図（右）石器実測図

(2) 石臼・皿状石製品 (第134図～136図)

石臼は14点、皿状石製品は1点出土しており、いずれも破片である。本項では、その中から実測可能な9点を選び掲載した。

石臼模式図



第134図1は、東側台地部のF9区から出土した上臼の破片で、現存率は約20%である。直径約21cm、高さ9.6cm、上縁高2.5cm、上縁幅約3.2cm、重量約1.7kgを測る。石質は安山岩である。挽き手穴は方形状(2.3×2.2cm)を呈し、横方向に4.1cmの深さに穿たれている。挽き手穴の周囲には、幅2mmの溝が方形状(一番外側の溝は、約7.5cmの方形状を呈する)に三重に刻まれている。磨り合わせ面には黒色の付着物が見られ、1分画には13の溝が刻まれている。分画数は不明である。2は、第8号掘の覆土から出土した下臼の破片で、現存率は5%未満である。上縁幅2cm、現存高8.9cm、重量482gを測る。石質は砂岩である。側面には、ノミ状の工具による加工痕が見られる。3は、第37号溝の覆土から出土した皿状石製品の破片で、現存率は約10%である。石質は砂岩で、現存高約11.5cm、現存幅12.0cm、厚さ3.9cm、重量582gを測る。側面にノミ状工具による加工痕、内面の磨り合わせ面に溝が見られる。第135図の4は、第520号土坑の覆土から出土した上臼の破片で、現存率は5%未満である。直径は不明で、高さ10.4cm、上縁高約2.1cm、上縁幅約3.4cm、重量718gを測る。石質は砂岩である。挽き手穴の径は約2.2cmで、挽き手穴の周囲には、一段高くなる方形状の飾りが見られる。磨り合わせ面には数条の溝が残るが、磨滅が著しく、分画数は不明である。5は、東側台地部のG9b₅区から出土した下臼の破片で、現存率は約30%である。はんぎりの径約29cm、高さ7.7cm、下縁幅1.5cm、芯穴の径約3.2cm、重量1.3kgを測る。石質

は安山岩である。磨り合わせ面の溝には、再加工の痕跡が認められる。分画数は不明である。底面には、ノミ状の工具による加工痕が見られる。6は5と同じ地区から出土した上臼の破片で、現存率は20%である。直径約19.2cm、高さ8.8cm、上縁高約2.7cm、上縁幅3.5cm、芯穴の径2.8cm、重量1.06kgを測る。石質は安山岩である。磨り合わせ面には黒色の付着物が認められ、幅4~5mmの溝が刻まれている。分画数は不明である。第136図の7は、東側台地部表様の下臼の破片で、現存率は40%である。はんぎりの径約33.6cm、高さ6.4cm、芯穴の径4.8cm、ふくみ0.6cm、重量3.21kgを測る。1分画に8本の溝が刻まれており、溝の幅は5~9mmである。分画数は不明である。8は、南側台地部のI7gs区から出土した下臼の破片で、現存率は20%である。はんぎりの径約21.3cm、高さ10.5cm、下縁幅約2.5cm、下縁高4.5cm、重量3.05kgを測る。石質は砂岩である。磨り合わせ面は磨滅が著しく、側面及び底面に、ノミ状の工具による加工痕が見られる。9は、第8号壙の覆土から出土した上臼の破片で、現存率は約80%である。現存高約16.5cm、現存幅17.8cm、厚さ14.3cm、重量4.70kgを測る。石質は砂岩である。上臼の上面には、斜方向に挽き手穴が造られている。磨り合わせ面は磨滅しており、数条の深い溝が残る。

(2) 五輪塔 (第136図10)

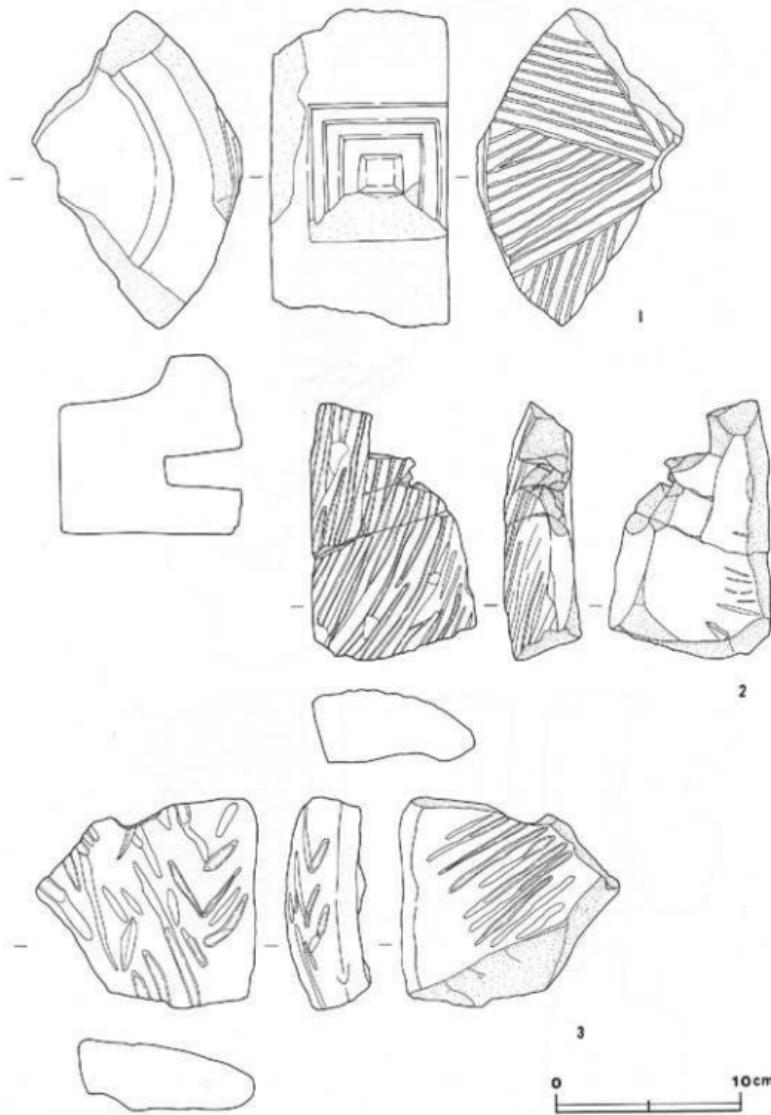


五輪塔は空・風・火・水・地輪からなる石造塔婆である。10は、第7号壙の覆土から出土した角錐状を呈する五輪塔の火輪で、上面が 13.6×9.4 cmの長方形、底面が 27.9×25.0 cmの方形状を呈し、厚さ13.7cm、重さ14.6kgを測る。石質は花崗岩である。屋根反り、軒反りはあまり強くなく、反りも上・下両端がほぼ平行である。軒端はやや斜めに、内傾気味に切られている。各角は磨滅している。

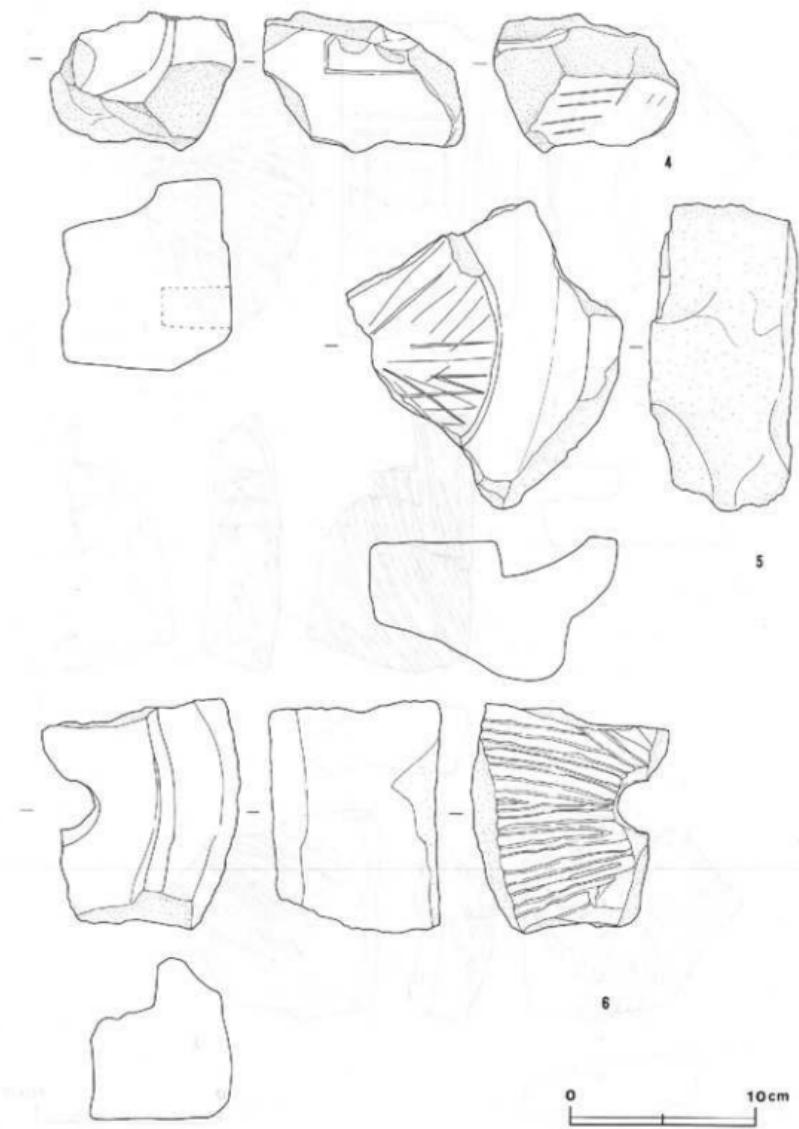
五輪塔模式図

注

石臼模式図・五輪塔模式図については、報告書「浜町屋敷内遺跡C地点」(財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団)より転載し、一部加筆した。

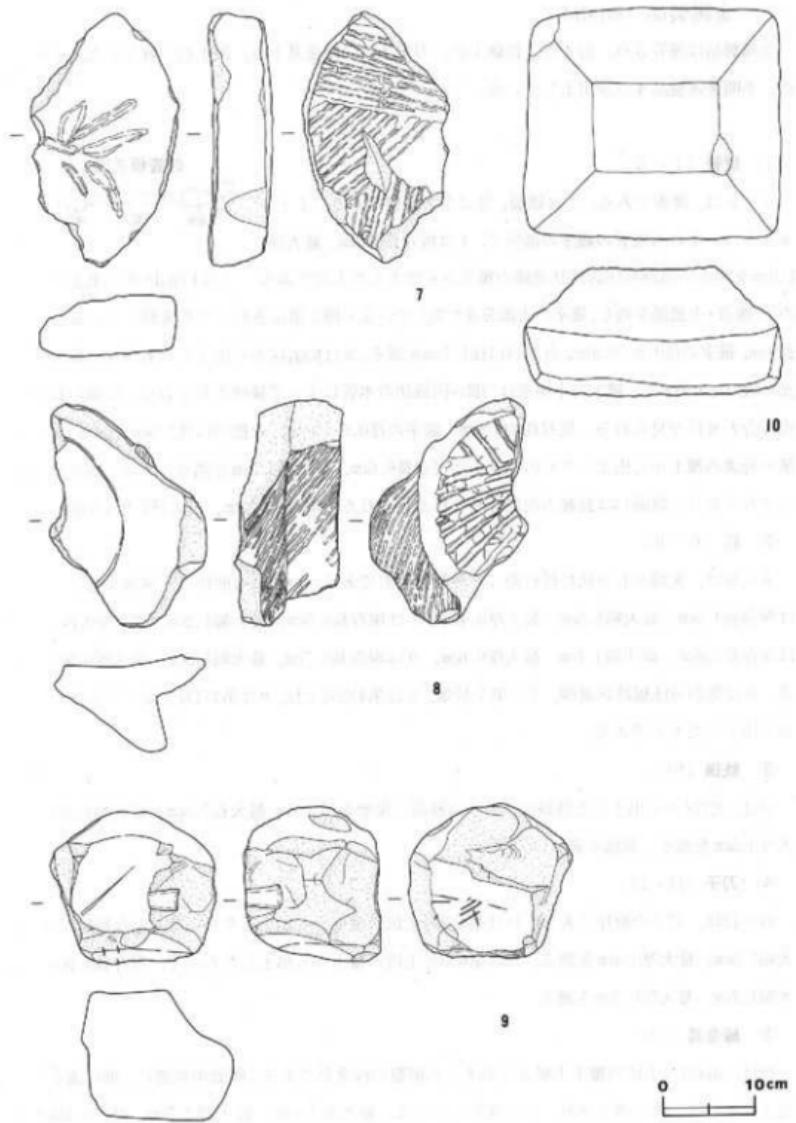


第134図 石製品実測図（石臼-1）



第135図 石製品実測図（石臼-2）

（千曲谷）旧承安品賀遺 80枚1度

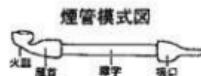


第136図 石製品実測図 (石臼-3・五輪塔)

3 金属製品（第137図）

金属製品は煙管5点、釘4点、鉄鎌1点、刀子2点、縁金具1点、鍵1点、鍛金1点、小札1点、不明金属製品4点が出土している。

(1) 煙管（1～5）



1～5は、煙管である。1は鉄製、他は全て銅製である。1・4・5はいずれも煙管の羅字の部分で、1は現存長3.3cm、最大径1.2cmを測る。第28号住居跡状遺構の覆土から出土したものである。2はF8h区から出土したもので、雁首・火皿部を残し、羅字の大部分を欠失している。押し潰され、やや変形している。現存長4cm、羅字の径0.8～0.9cm、火皿の口径1.7cmを測る。3はF8f区から出土したもので、羅字の一部と吸口を欠失する。羅字の中央部は、細い円筒状の木管によって接続されており、側面の長軸方向に合わせ目が見られる。現存長約8.8cm、羅字の径0.9～1cm、火皿の口径1.5cmを測る。4・5は第55号溝の覆土から出土したもので、4は現存長6.6cm、最大径1.2cmを測る。5は一部が押し潰されおり、側面には長軸方向に合わせ目が見られる。現存長6.6cm、最大径1.2cmを測る。

(2) 釘（6～9）

6～9は、先端がL字状に折れ曲った鉄製の角釘である。いずれも断片で、腐蝕が著しい。6は現存長4.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.4cm、7は現存長6.0cm、最大幅1.2cm、最大厚0.8cm、8は現存長2.6cm、最大幅1.1cm、最大厚0.6cm、9は現存長5.7cm、最大幅1.3cm、最大厚0.8cmを測る。6は第28号住居跡状遺構、7は第7号壙、8は第432号土坑、9は第471号土坑のそれぞれ覆土から出土したものである。

(3) 鉄鎌（10）

10は、E7区から出土した鉄鎌で、刃部は断面三角形を呈する。最大長7.6cm、最大幅1.2cm、最大厚0.5cmを測る。腐蝕が著しい。

(4) 刀子（11・12）

11・12は、刀子の断片である。11は第452号土坑の覆土から出土したもので、現存長11.5cm、最大幅1.8cm、最大厚0.4cmを測る。12は第633号土坑の覆土から出土したもので、現存長4.9cm、最大幅1.7cm、最大厚0.3cmを測る。

(5) 縁金具（13）

13は、第421号土坑の覆土上層から出土した銅製の縁金具である。側面中央部に、細い溝が彫り込まれている。押し潰され、やや変形している。最大長4.0cm、最大幅2.2cm、厚さ0.1cmを測る。

(6) 錘 (14)

14は、F8hs区から出土した鎌の断片である。上縁は三日月形を呈し、刀の部分はほぼ直線的になっている。先端部付近が折れ曲っており、腐蝕が著しい。現存長9.7cm、最大幅2.8cm、最大厚0.4cmを測る。

(7) 鏡金 (15)

15は、第41号溝の覆土から出土した鉄製の鏡金である。三角形状を呈し、最大長5.7cm、最大幅2.8cm、最大厚0.1cmを測る。

(8) 小札 (16)

16は、第28号住居跡状遺構の覆土から出土した鉄製の小札である。最大長4.8cm、最大幅2.8cm、最大厚0.1cmを測る。

(9) 不明金属製品 (17~21)

17は、第675号土坑の覆土から出土した釘状の鉄製品である。最大長5.3cm、最大幅1.1cm、厚さ0.5cmを測る。18は、G9di区から出土したコップ形の銅製品である。六角柱状を呈し、外面上方に小さなつまみが付けられている。内面には付着物が見られる。口径の最大幅5.8cm、最大高6.5cm、最大厚0.6cmを測る。19は、第446号土坑の覆土から出土した釘状の鉄製品である。先端はL字状に折れ曲って尖っており、工具と思われる。最大長8.3cm、最大幅1.4cm、最大厚0.7cmを測る。20は、F8fa区から出土した小札状のもので、銀製品と思われる。9ヶ所に大小の孔が穿たれており、周縁はL字状に折れ曲っている。断面形は「山」状を呈する。最大長7.0cm、最大幅1.5cm、最大厚0.1cmを測る。21は、E8i区から出土した銅製品である。上面に、5か所に小さな瘤をもつ半円形状の飾りが付けられている。最大長5.2cm、最大幅2.4cm、最大厚0.2cmを測る。

4 古銭 (第138~141図)

本年度の調査区からは、総数41枚の貨幣が出土している。出土貨幣を铸造地によって分類すると、渡米銭と国内銭とに大きく分けられる。渡米銭は計10枚出土しており、中でも北宋銭が最も多く9枚で、明銭は1枚出土したにすぎない。北宋銭の内訳は、「景德元寶」1枚、「皇宋通寶」2枚、「熙寧元寶」、「元豐通寶」が各々3枚となっている。明銭は「洪武通寶」が1枚出土している。国内銭は計29枚出土しており、いずれも江戸時代に鑄造されたものである。内訳は、「寛永通寶」23枚(古寛永8、新寛永15)、「天保通寶」6枚となっている。他に、判読困難な不明銭2枚が出土している。

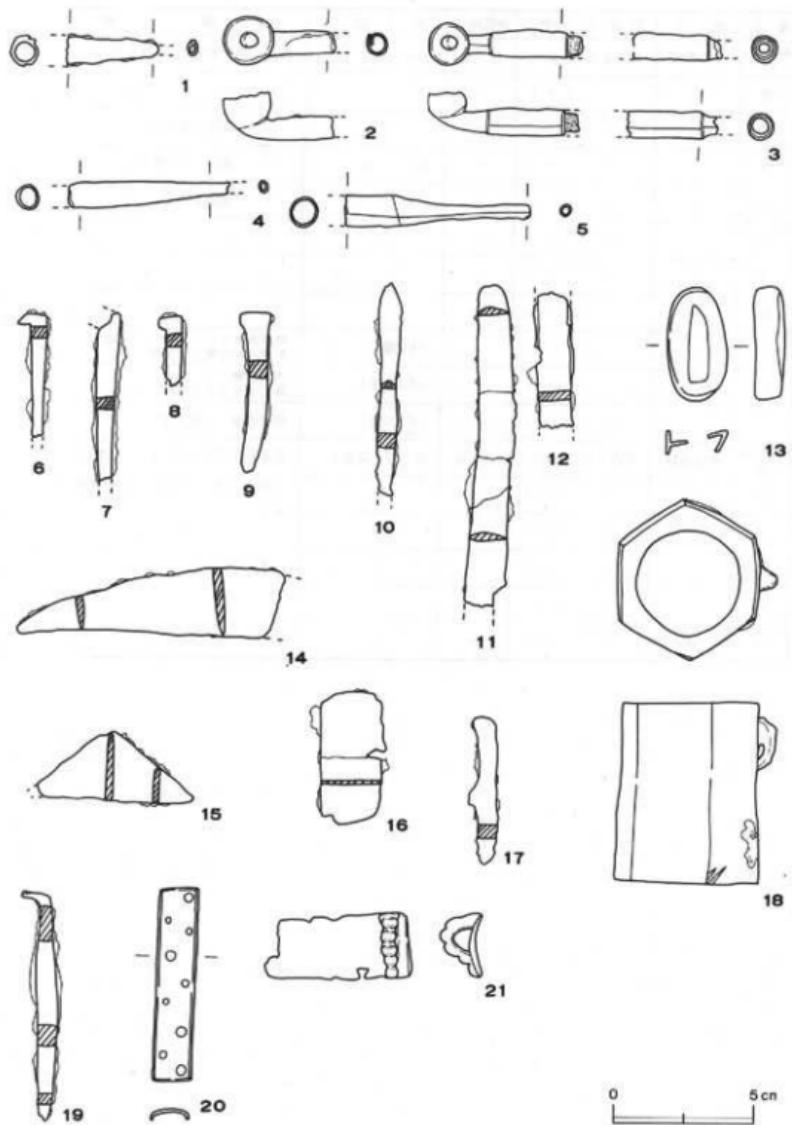
2・4・10は、いずれもE8・F8区を中心に検出された中世の墓壙や墓壙群の検出された地区から、1・3・5・7・11・35は、F7区を中心に検出された同時代の墓壙や墓壙群の検出された地区から出土したものである。8は第10号壙の覆土、9は第10号壙付近のグリッドから出土している。13~32は、東側台地(F9区を中心とする)に確認された江戸時代の屋敷跡の西側を囲む第6

片土塁下の溝の覆土から一括出土したものである。出土状況や銭の鋳造年代から、第6号土塁は中世の尾代城に伴うものではなく、近世の前半頃に構築された土塁であることが裏付けられる。³⁶~⁴¹は、第1号土塁上に祀られていた祠（稻荷様一室永5年建立）付近の表土から出土したものである。これらの天保通寶は、稻荷様に参詣した際に賽銭として上げられたものと考えるのが妥当であろう。

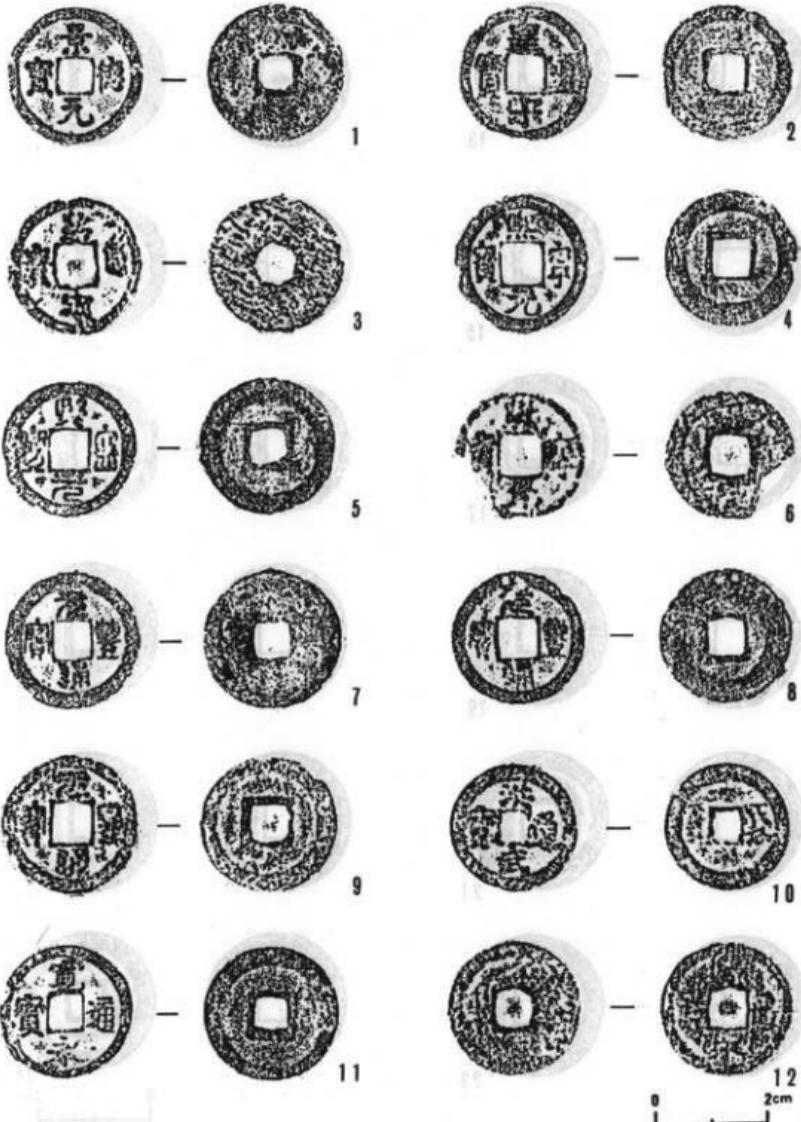
表7 古銭一覧表

番号	銭名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	出土地点	備考
第138回 1	景徳元貨	景德元年(1004)	北宋	SK501覆土	裏面に付着物
2	寛宋口貨	宝元2年(1039)	*	SK447覆土	□は通か 周縁一部欠損
3	皇宋通寶	*(*)	*	F6b1区	腐蝕 磨滅 付着物
4	熙寧元貨	熙寧元年(1068)	*	SK429覆土	腐蝕が著しい 一部欠損
5	*	*(*)	*	SK591覆土	
6	*	*(*)	*	第8号トレンチ	
7	元豐通寶	元豐元年(1078)	*	SK591覆土	裏面に付着物
8	*	*(*)	*	第10号郷腰上	疎(元の文字の上方)ニ、2か所小孔が穿たれている
9	*	*(*)	*	F6f1区	腐蝕 磨滅
10	洪武通寶	洪武元年(1368)	明	F8n1区	裏面に一文字有り(判読困難)
11	寛永通寶	寛永3年(1626)	日本	SK630覆土	古寛永
12	*	*(*)	*	SD48-B(F8j区)	古寛永か? 磨滅し不明瞭
第139回 13	*	*(*)	*	G8a1・b1区	古寛永
14	*	*(*)	*	*	*
15	*	*(*)	*	*	*
16	*	*(*)	*	*	*
17	*	*(*)	*	*	*
18	*	寛文8年(1668)	*	*	新寛永 寶と永の間に小孔
19	*	*(*)	*	*	* 正字文
20	*	*(*)	*	*	* *
21	*	*(*)	*	*	* *
22	*	*(*)	*	*	* *
23	*	*(*)	*	*	* *
24	*	*(*)	*	*	* *

番号	銘名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	著者
第1400回 26	寛永通寶	寛文8年(1668)	日本	G8as・bJX	新寛永 正字文
26	*	* (*)	*	*	*
27	*	* (*)	*	*	* 同様一部欠損
28	*	* (*)	*	表株	* 斧跡 やや磨滅
29	*	* (*)	*	*	* 磨滅が著しい
30	*	* (*)	*	*	*
31	*	* (*)	*	*	*
32	*	* (*)	*	*	*
33	*	— (—)	*	S132覆土	磨滅が著しい 同様一部欠損 新寛永か古寛永か不明
34	—	— (—)	—	SK437覆土	判読困難 縫に小孔が1ヶ所確認されている
35	—	— (—)	—	SK587覆土	判読困難 * 部欠損
第1410回 26	天保通寶	天保6年(1835)	日本	第1号土裏表土	第1号土裏土に残されていた模荷様(宝永5年 1708)に参考した際の真鍮と考えられる。
37	*	* (*)	*	*	
38	*	* (*)	*	*	
39	*	* (*)	*	*	
40	*	* (*)	*	*	
41	*	* (*)	*	*	



第137図 金属製品実測図



第138圖 古錢拓影圖（1）



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



第139圖 古錢拓影圖 (2)



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



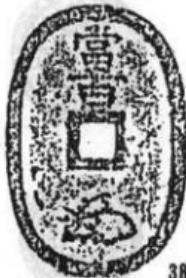
第140図 古銭拓影図 (3)



36



37



38



39



40



41



第141図 古銭拓影図 (4)

第4章 まとめ

I 中世城郭遺構について

中世に竜ヶ峰地域に存在していた屋代氏については、「集古文書」・「円覚寺文書」・「真壁文書」等、わずかな資料の中に断片的ではあるが散見することができる。屋代氏の居城と考えられる屋代城については、稲敷郡志等に位置や規模について記載されているが、概観にすぎず、いずれにしても築城年代や存続期間、文献に見られる屋代彦七郎信経、屋代越中守師国ら城主と目される人々の関係、城の構造や縄張り等については不明な点が多い。往時を偲ぶ遺構としては、3基の土壘がその名残りを留めているにすぎない。

屋代城の調査は昭和58年度から継続的に進められており、昭和61年度の調査をもって全て終了の予定である。昭和58・59年度の調査によって、城郭に伴う堀の一部（第1～6号堀）が調査され、南北方向にやや長い方200m前後の外部を成す堀（第1号堀）の存在や、これらの堀の重複（新旧）関係から、数度に及ぶ改修が行われている事実や、城域に墓域の存在することが明らかになった。本年度（昭和60年度）は、城郭遺構としては、調査区域に存在する第1号堀の延長部や新たに確認された第7～11号堀の調査、虎口や土塁（第1～4号）の調査を実施し、さらにいくつかの事実が明らかとなった。本項では、昭和58・59年度の調査結果をふまえながら、新たに確認された事実や問題点について整理し、以下に記載する。

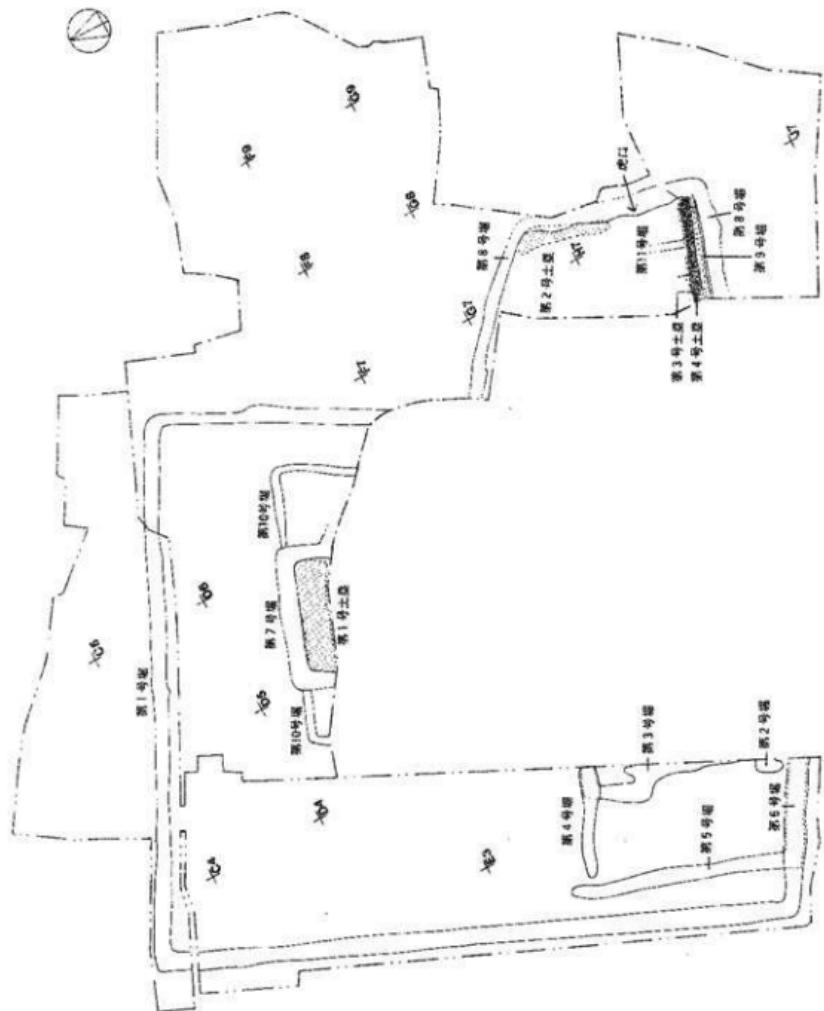
虎口・堀・土塁（第142図）

虎口については、第3章第5節の1で述べた様に、南東側傾斜地（H7区）に位置する第2号土塁と第3号土塁との開口部が考えられる。虎口は自然地形を巧みに利用して構築されており、虎口から内郭方向に向かってやや緩やかな登り坂となっており、虎口に向って左側は台地となっている。虎口を形成する土塁や堀は、調査の結果、第3号土塁・第8号堀と第4号土塁・第9号堀との重複関係等から、改修が行われていることが明らかとなった。第3号土塁の調査中、（H6hs区からI6as区にかけて）北西から南西方向に延びる土塁の下から、新たにやや小規模な土塁（第4号）と堀（第9号）が確認され、その状況から、当初は第4号土塁（土塁高2.5～2.6m、外短高2.65～3.05m、内短高2.6～2.7m、内高1.7～2.1m）とその外側に巡らされた第9号堀（上幅1.5～2.3m、下幅0.7～1.1m、深さ0.7～1.3mの箱蓋研堀）が虎口を形成していたものと考えられる。その後改修が行われ、第9号堀の外側に第8号堀（上幅4～5.5m、下幅0.2～1m、深さ2～2.5mの蓋研堀）を掘り、その掘り上げ土を第9号堀や第4号土塁の上に盛土し、より規模の大きな第3号土塁（土塁高3.8m、外短高4.8m、内短高3.8m、内高2.7m前後）を構築している。H7i z～j z区付近に見られる第8号堀の底面には、最初に構築された第9号堀の掘り込みの一

部が残存しており、この部分における堀の堆積状況は、第8号・第9号堀がほぼ同時期に埋まった状況を示している。このことは、堀の改修時に、第8号堀の底面よりも約20cmほど深く掘り込まれていた第9号堀の一部を埋め戻さずに生かし、再利用していたことを裏付けている。次に、第3号土塁と直交する第11号堀は、虎口から進入した敵の直進を妨げる防禦上の効果をねらったものと考えられ、覆土の中～上層に多量の粘土が混入している状況から、その内側には上塁が構築されていたことが考えられる。また、虎口を形成する土塁は、第2・3号土塁の2か所が現存しているだけであるが、その外側に枠形に掘り込まれている第8号堀の状況から、当然その内側には土塁の存在が推定される。また、第3号土塁は踏査の結果、北西端部が北東方向に「」状に屈曲して約2～3m伸びていることが確認されている。「」状に屈曲して伸びる第3号土塁は平行するように、その内側（内郭側）には、本年度の調査結果やボーリング調査、地図による地割の検討結果等から、外郭をなす第1号堀が北東から南東方向に直線的に伸びていることが確実視される。内郭への通路としては、第1号堀のいずれかに、堀を渡るための土橋または木橋状の施設の存在が考えられる。虎口を開む西側の土塁は、第1号堀の内側（内郭側）に構築されていたことも考えられるが、地割から見ると、第3号土塁と直交する形で、第1号堀の外側に堀と平行して存在していた可能性が高い。いずれにしても、今後の調査によって城郭の構造については明らかにされるであろう。

さらに、もう1か所の虎口としては、第1号土塁の北西側に確認された第10号堀と第43号住居跡との重複部（D4c₇・c₈区、D4d₇・d₈区に位置する）が上げられる。この地区からは、第10号堀を跨ぐ様に橋脚の柱穴痕と思われる規則的に配列されたビット群が検出されていることから、木橋状のものが架けられ、ある時期において通路として使用されていたものと考えられる。第10号堀の内側には、覆土の中層に多量のロームやハードロームブロックが含まれる状況から、当然土塁の存在が考えられる。第10号堀は、最終段階に構築されたと考えられる第7号堀によって掘り込まれ、中央部で寸断されている。本来は枠形状に掘り込まれていたものと考えられる。第7号堀と第1号土塁の構築をもって、第10号堀の防禦上の機能は失なわれたものと考えられるが、先にも述べた様に、第7号堀と第1号土塁の構築時に不用となった第10号堀は全てを埋め戻さず、第7号堀との重複部（D4d₉・d₁₀区、D6h₁・h₂区の2か所）に限って部分的（長さ2m前後）に粘土（第7号堀の底面近くの層に堆積する）で埋め戻している。この部分は、新たな通路として使用する目的で、意図的に埋め戻された可能性が高い。したがって、改修後も第7号堀と第10号堀は、ある時期において同時存在していたことも考えられる。

星代城の外郭をなす第1号堀は、本年度もC6・D7・E6・E7の各区にまたがる約110mについての部分的な調査に留まった。第1号堀は最終段階に構築された堀と考えていたが、調査の結果、第1号堀そのものについても改修の行なわれていることが明らかとなった。先にも述べた様に、



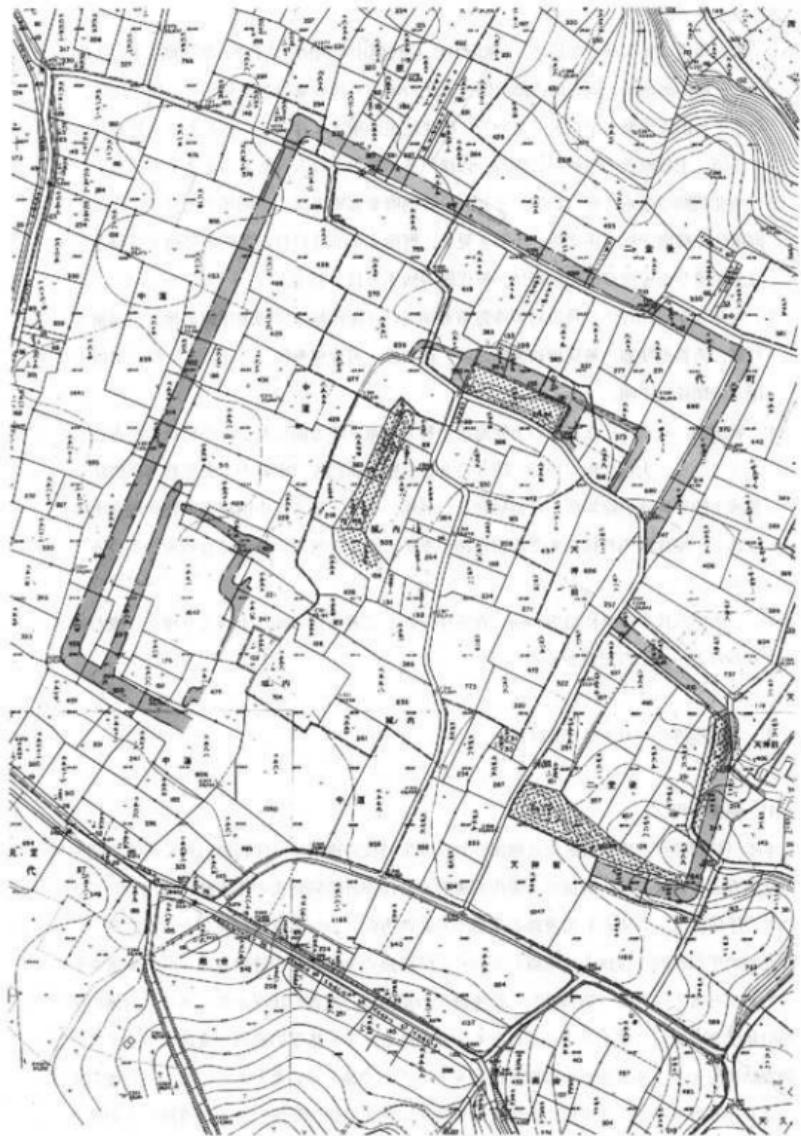
第142図 中世城郭遺構（堀・土塁・虎口）

D7d₅区のコーナー部からE7a₂区に亘る約34mの間（上幅3.5～3.7m、下幅0.5～0.8m、深さ1.7～1.8mの箱型研磨）が、他の部分（上幅5～5.4m、下幅1.5～1.8m、深さ2.3～2.5m）に比べて規模が小さく、E7a₂区付近では上幅で約1.7m、下幅で約1m前後の差があり、底面が約20cm前後浅くなっている。D7d₅区からE7a₂区に亘る約34mの部分は、拡張以前の第1号堀の形態を留めている。堀の拡張は、内郭側の堀の長軸を基本として外側に向かって行われたものと考えられる。何故一部だけ拡張されなかったのかという事については、拡張途中における政治情勢の変化や機能上の理由等が考えられるが、定かでない。重複関係や堀の規模、形態等から見ると、第10号堀や虎口部に見られる第9号堀及びそれに伴う第4号土塁、第1号堀の旧態を留める部分については、最終段階の改修以前に位置づけられる。また、第1号堀の拡張部や第7号堀、第8号堀、第11号堀、第1号土塁、第2号土塁、第3号土塁は最終段階の改修によるものと考えられる。

現存する土塁や調査の状況から、屋代城は本来、方形の「館」的なものであり、数度の改修によって「回字型」に近い城郭へと発展していったものと考えられる。また、これまでの調査によつて、屋代城の城郭遺構は最低3期（繩張りの変更2回）に分かれることが明らかとなっており、改修時期については、屋代氏が大永3年の戦い以後、¹⁴⁾土岐原氏の勢力下に入った（第4号堀からは五輪塔・宝篋印塔などが投棄された状態で出土していることから、屋代氏の敗戦であった事が裏付けられる）ものと考えられることから、この時期に土岐原氏指導による改修が行われたことが推定される。また、最終的な改修時期は、大永3年以降も屋代城が土岐原氏の勢力下にあったと仮定すると、土岐原氏が佐竹氏や多賀谷氏と対峙した天正年間頃が考えられる。しかし、屋代城は昭和61年度も継続調査中であり、造営期や改修時期、城郭の形態の変遷については推論の域を出ず、全貌が明らかになった時点で再検討する必要があろう。

地割と城郭遺構（第143回）

次に、屋代B遺跡¹⁵⁾の報告書の中でも検討されているが、地割と城郭遺構の関連について述べてみたい。地割と城郭遺構とが直接な関連をもつことは良く指摘されることであるが、屋代城の城郭遺構についても例外ではない。昭和58～60年度の調査によって検出された堀跡を、開発以前の地籍図に重ね合わせると、第143回の様になる。廃城後のある時期に、地域は山林や耕地として転用され、土塁の一部は削平され、堀は埋められたりしながらもかなり後までその名残りを留めていたものと思われ、その結果として、土塁や堀のあった部分は耕地の境界として名残りを留めている。城域に存在する農道についても不自然に屈曲している様子が見られ、半ば埋まっていた堀跡に沿って堀の横を通り、ある場所で横断し、再び堀跡に沿って歩くという行為の繰り返しによって、長い年月の間に屈曲した農道ができる、それが今日に至ったものと判断される。当遺跡における地割は、中世屋代城の城郭の構造や繩張りと直接な関連をもつものと考えられ、現在調査中の内部部についても、今後の調査によってその関連が明らかにされるものと思われる。



第143図 地割と城郭遺構

注

- (1) 康永年中に屋代彦七郎信経、永和年中に屋代越中守師國、空門約120年間を経、文亀年中に屋代三郎四郎治時、同五郎四郎政國、大正の頃に八代右京の名が見える。屋代氏は、大永3年まで小出氏の勢力下に入っており、屋代城主は確実に存在していたものと思われる。大永3年頃、土岐原氏との戦いに敗れ、以後、その勢力下に入ったものと考えられる。
- (2) 南北朝期の康永3年(1334)2月1日の別府幸実軍忠状に、「同年十七日、屋代彦七郎信経河道仕て馳向千住太庄之處、…」と見え、歴応4年9月17日の北朝方の信太莊侵人に大きな役割を果した屋代彦七郎信経は、屋代城の城主と目される。
- (3) 永和3年(1377)5月21日の沙弥希善請文に、「屋代越中守師國押領之地、当國東条庄内社村事、希善為使節、被成御教書候之間、遂其節、可令禮參候」と見える。屋代信経と屋代師国との関係は不明。
- (4) 戦国期になると、江戸崎の上岐原氏の勢力が竜ヶ崎方面に及び、小出氏の勢力と対抗するようになる。大永3年(1523)閏3月9日真壁右衛門佐(宗幹か)充足利基頼書状に、「屋代要害上岐原賣落引除候所へ政治融合遂一戦候、…」と見え、小田氏方の屋代城を土岐原氏が攻撃し、屋代城の救援に来た小田政治の軍勢ともその付近において合戦をしていることがわかる。
- (5) 「大字八代の中央桂昌寺の傍に在る小丘にして其面積大約三千坪なり現今、概ね耕佃となりたれど…」との記載がある。

2 住居跡について(第144図)

(1) 弥生時代

本年(昭和60年)度調査区から検出された弥生時代の遺構は、住居跡11軒である。昭和58・59年度調査区からは5軒、隣接する屋代A遺跡からは28軒の同時代の住居跡が検出されている。これららの住居跡は、いずれも当遺跡の南東から北西方向にのびる支谷に面した、標高23~25m前後の比較的平坦な同一台地上に位置しており、住居跡の分布状況や時期等から同一集落を形成していたものと考えられる(第147図)。弥生時代の集落は、調査の状況から、さらに台地の南側(昭和61年度調査区)に広がっていることも十分予想される。集落の範囲や変遷については、今後の調査結果をまち、多方面から詳細な検討を加えた上で論ずる必要がある。また、台地の東側に入り込む小支谷を離れた北東側の台地上に位置する弥生時代の集落(外八代遺跡)との関連についても、今後検討を加える必要がある。本項では、同一集落と考えられることから、当遺跡の昭和58・59年度調査区や屋代A遺跡から検出された弥生時代の住居跡との関連をふまえながら、本年



第144図 住居跡配置図

度調査区から検出された11軒の住居跡について検討を加えて行くことにする。

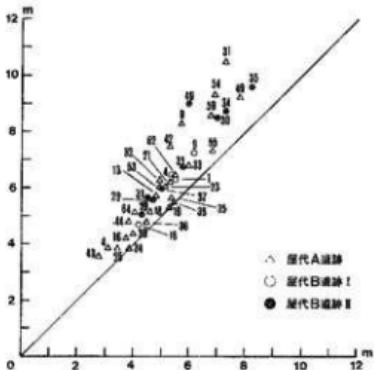
住居跡の規模と形状

弥生時代の住居跡11軒（第20・24・26・29・30・31・33・34・35・37・40号住居跡）のうち、重複により規模・形状等が不明な第24号住居跡、約2分の1が調査区外となっているため不明瞭な第26号住居跡を除く9軒の住居跡について見ると、第35号住居跡が最大、第20号住居跡が最小規模の住居跡と言える。第35号住居跡は長軸9.6m・短軸8.2m・床面積約60m²、第20号住居跡は長軸5.02m・短軸4.28mの規模を有している。

先に述べた同一台地上から検出された他の弥生時代の住居跡（規模・形状等の不明なものは除く）を、長軸・短軸の相関図に表わすと第145図の様になる。便宜上、長軸の長さから次の様に分類した。

- A類 長軸の長さが4m以下のもの
- B類 長軸の長さが4m以上6m未満のもの
- C類 長軸の長さが6m以上8m未満のもの
- D類 長軸の長さが8m以上のもの

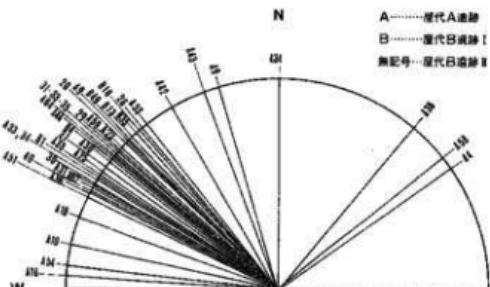
当遺跡の昭和58・59年度調査区や、屋代A造



第145図 住居跡の規模

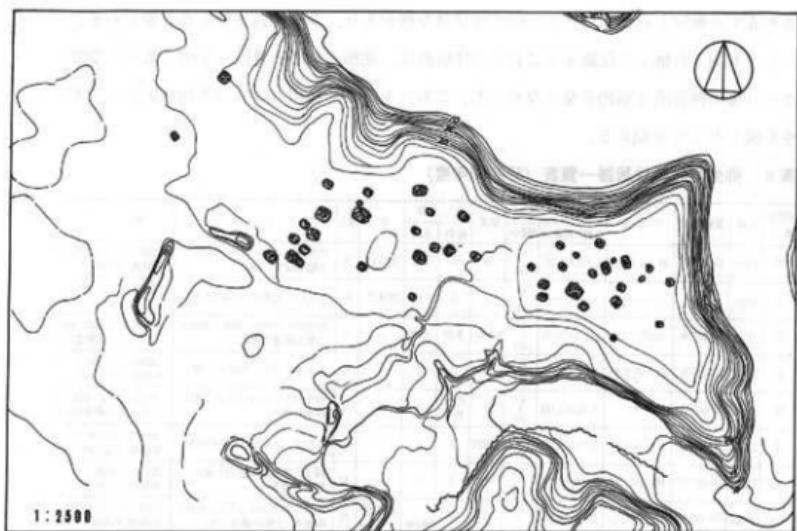
跡から検出された弥生時代の住居跡を含めた計44軒の住居跡のうち（推定を含む）、A類に属する住居跡は4軒、B類に属する住居跡は16軒、C類に属する住居跡は12軒、D類に属する住居跡は10軒、規模不明の住居跡は2軒となっている。B類・C類に属する住居跡が多く、D類に属する大形の住居跡も10軒ほど見られる。最も集中して見られる規模の住居跡は、長軸5~7m、短軸4~6m前後の住居跡である。

次に平面形については、本年度調査区から検出された11軒のうち、先に述べた第24号住居跡、



第146図 住居跡の長軸方向

第26号住居跡を除く9軒について見ると、隅丸長方形（状）を呈するもの7軒（第20・29・30・31・35・37・40号住居跡）、梢円形（状）を呈するもの2軒（第33・34号住居跡）となっている。規模と同様に平面形について、当



第147図 弥生時代（後期）の住居跡分布図

遺跡の昭和58・59年度調査区や屋代A遺跡から検出された住居跡を含めた44軒について見ると、隅丸長方形を呈するもの32軒、楕円形を呈するもの8軒、円形を呈するもの2軒、平面形が不明なもの2軒となっている。平面形については、隅丸長方形（全体の約73%を占める）を呈するものが一般的と言える。

主柱穴については、44軒のうち3本主柱のもの2軒、4本主柱のもの31軒（当遺跡の住居跡は大半が4本主柱と思われる）、5本主柱のもの1軒、6本主柱のもの3軒、不明及び明確でないもの7軒となっている。

炉は44軒の住居跡のうち、約84%に当る37軒が地床炉（1か所に地床炉をもつもの29軒、2か所に地床炉をもつもの7軒、3か所に地床炉をもつものの1軒）を備えており、その他不明なもののが7軒見られる。炉は、中央部よりやや北西側の偏った位置に検出される例が多い。

壁溝の検出された住居跡は、本年度調査区から検出された11軒のうち3軒（第26・31・35号住居跡）、昭和58・59年度調査区においては5軒のうち1軒（第2号住居跡）、屋代A遺跡では28軒のうち1軒（第58号住居跡）の合わせて5例である。

長軸方向については第146図に見られるごとく、非常に興味深い結果が得られた。屋代A遺跡も含め、大半の住居跡はN-65°-WからN-38°-W方向に集中している。これまでに台地上から検出された弥生時代の住居跡の分布状況を見ると、第147図に見られる様に、大形の住居跡を中心として2~3のグループに分けることも可能である。先にも述べた様に、全体の住居跡を一集落

を形成する単位とみなすことについては早急な感があり、今後検討を加える必要がある。いずれにしても同一台地上に位置するこれらの住居跡は、地形や自然的要因、生活（集落）空間とのかかわり等の複合的な制約を受けながらも、これらをうまく利用し一つの方向性をもちらがら集落を形成したことが窺える。

表8 弥生時代の住居跡一覧表（昭和60年度）

登録 番号	位置	長軸方向	平面形	施 設 長軸X短軸 mm	面積 m ²	壁 厚 mm	ビット数 記数	柱 数	柱 径 mm	柱 材 種 類	地 質	備 考	
												内 外	柱 材 種 類
20	E7br	N-46°-W	南北長方形	5.02×4.28	32.26	無	9	不明	地床跡	N	弥生145 土師3 磁器1 開石3 土製焼却土 塵瓦	SD37に切られている 山面積 約18m ²	
24	E8gr	—	—	— × —	10.26	*	2	(4)	地床跡	N	弥生130 上耕10 土器質1 墓21	SK43E-43B, 46T, SD43Eに切 られている	
26	D7er	N-45°-W	(椭円形)	(12.0×11.0)	1.7 40	(全周)	多數	不明	*	N	弥生177 土師22 砂質1 開石3 土製焼却土 塵2	第1分地 SD45-66に切られ ている 分は調査除外	
29	D6js	N-45°-W	南北長方形	5.75×4.65	26.25	無	15	(4)	*	N	弥生108 土師7 磁器1 墓5	SK46Hに切られている 山面積 約22.4m ²	
30	D5gr	N-60°-W	*	R.50×7.00	43.50	*	内6 外4	4	*	N	弥生54 土師3 磁器2 土製焼 却土 墓2	SK67E-67L, 67Gに切られて いる 山面積 約6.9m ²	
31	D6es	N-50°-W	*	5.60×4.50	15.57	部分的	3	4	*	N	弥生403 上耕47 土製焼却土1	SK67Eに切られている 山面積 約10.2m ²	
33	D6hs	N-50°-W	椭 圆 形	6.73×5.74	15.50	無	9	4	*	N	陶文1 弥生53 土耕1 磁石2 砾石1 鳞片1	第2による堆疊 山面積 約29.3m ²	
34	E6gr	(N-50°-W)	(椭円形)	8.80×7.35	18.30	*	7	1	地床跡 他不明	Z	弥生2 寺宇3-2 土師54 磁器2 陶瓶2 土製焼却土1個	SD2 寺宇10分野に切られている 山面積 約75.4m ²	
35	D7br	N-50°-W	南北長方形	9.60×8.20	30.47	(全周)	10	無	不 墓	N	弥生432 磁石1 磁器1 石斧1 土製焼却土2	S13Eに切られている 山面積 約90m ²	
37	E6ur	N-55°-W	(椭円形)	16.00×5.00	30.42	無	6	(4)	不 明	N	弥生115 上耕1 磁器1 土質質 12 磁器5	第10分野に切られている SD34 を統計込 山面積 約23.5m ²	
40	E6as	N-62°-W	(+)	19.00×6.00	2.28	*	8	4	地床跡	N	弥生23 土師38 磁器1 磁器2 上耕1粘土1	山面積 普段8.5m ²	

(2) 古墳時代

本年度調査区から検出された古墳時代の住居跡は10軒であり、そのうち第41・42号住居跡の2軒が五傾期、第21・22・23・27・32・36・39・43号住居跡の8軒が鬼高期に比定される。

五傾期の住居跡は、昭和58・59年度調査区から1軒、隣接する屋代A遺跡から5軒検出されている。また、鬼高期の住居跡については同調査区から6軒、屋代A遺跡から14軒検出されている。弥生時代の住居跡の分布状況と同様に、いずれも遺跡の南東から北東方向に入り込む谷筋に面した台地上に位置しており、前述のように、住居跡が立地するための共通の制約が存在していたものと推定される。集落の変遷については今後検討の余地を残すが、いずれも大きな意味での同一集落と考えられることから、弥生時代の住居跡と同様、昭和58・59年度調査区や屋代A遺跡の該期の住居跡を含め、検討して行くこととする。

五傾期

本年度調査区から検出された五傾期の住居跡は（表9），いずれも調査区の北西側（D4・D5区）から検出されている。2軒の住居跡は直線距離で約35m程離れており、昭和58・59年度調査区や屋代A遺跡から検出された該期の住居跡を含め、五傾期の住居跡は台地上に散在する傾向が見ら

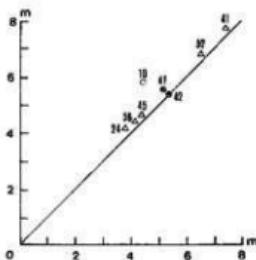
れる（第152図）。

住居跡の規模と形状

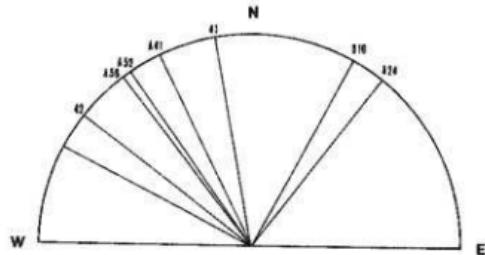
台地上から検出された8軒の住居跡の規模を見ると（第148図），最大規模を有するのは屋代A遺跡から検出された第41号住居跡で， $7.82 \times 7.40\text{m}$ ，最小規模を有するものは同遺跡の第24号住居跡で， $4.17 \times 3.75\text{m}$ を測る。本年度調査区から検出された住居跡は，第41号住居跡が $5.60 \times 5.15\text{m}$ ，第42号住居跡が一辺 5.4m 前後である。平面形は，8軒の住居跡のうち方形または方形状を呈するもの2軒，隅丸方形を呈するもの3軒，長方形状を呈するもの1軒，隅丸長方形を呈するもの2軒となつてゐる。號溝を有する住居跡は，8軒のうち4軒である。がは，屋代A遺跡の第24号住居跡を除く7軒が地床が有している。地床がは，いずれも長軸線上の中央よりもやや北西，または南西側の片寄った位置に設けられているものが多い。主柱穴は，8軒のうち6軒が4本主柱である。残る2軒のうち，屋代A遺跡から検出された第56号住居跡は，ピットが多数検出されているものの主柱穴が不明瞭であり，当遺跡の昭和58・59年度調査区から検出された第10号住居跡からはピットが検出されていない。主軸方向については，北西方向に主軸をもつもの6軒，北東方向に主軸をもつものが2軒となっている（第149図）。

表9 五領期の住居跡一覧表（昭和60年度）

序番 年月	位裏	長軸方向	平面形	規 模 面積 \times 周長	壁 厚 cm	ピット数 個数 ±註	炉 火	廐 室	出 土 遺 物	備 考
41	昭和59年12月	N-11°W	方 形	5.60×5.15 20 40	全周	5 1	地床炉	N	鐵文41 骨生14 土師27 鐵4	東南隅 約21.3m ² 燒失率高 北東コーナー部に許藏穴
42	昭和60年1月	N-53°W	（方 形 状） +底 面翻	37 50	無	10 (4)	+	N	鐵文5 骨生16 土師32 鐵13	第10号軒に近づいている 地床 鐵文32# 燒失率高



第148図 住居跡の規模



第149図 住居跡の主軸方向

鬼高期

本年度調査区から検出された鬼高期の住居跡は8軒であり（表10），調査区の北西側から第36・43号住居跡，北側から第21・27・32・39号住居跡，北東側から第22・23号住居跡が検出されている。第32・36・39・43号住居跡は屋代B遺跡の昭和58・59年度調査区，第21・23号住居跡は屋代

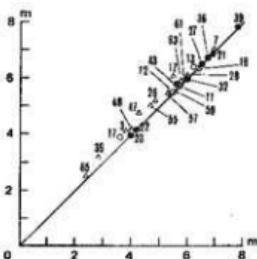
A遺跡から検出された該期の住居跡と近接している。当遺跡の昭和58・59年度調査区や屋代A遺跡を含めると、該期の住居跡は、当台地上から現在（昭和60年度）までに28軒検出されている。

住居跡の規模と形状

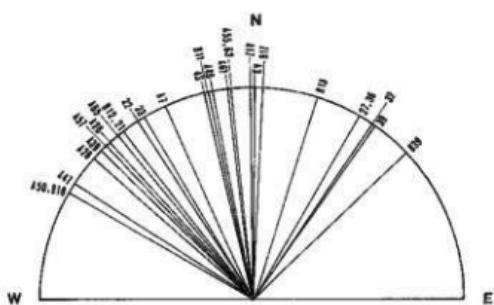
本年度調査区から検出された住居跡の中で最大規模を有するのは第39号住居跡で、一辺が7.8m、床面積約51.2m²、最小規模を有する住居跡は第23号住居跡で、一辺が4.1m前後、床面積は約13.9m²を測る。形状は、方形または方形状を呈するものが6軒、隅丸方形を呈するものが2軒となっている。主柱穴については4本主柱のものが4軒、4~5本主柱のものが1軒、他の遺構との重複により不明な住居跡が3軒見られる。柱穴の不明瞭な住居跡も、残存する柱穴の配列から4本主柱と考えられる。主軸方向（第151図）

については、北東方向に主軸方向を有するものが第27・32・36・39号住居跡の4軒、北西方向に主軸をもつものが第21・22・23・43号住居跡の4軒となっている。

規模や形状について昭和58・59年度調査区、屋代A遺跡から検出された住居跡を含めると、第150図に見られるように、規模についてはばらつきがあり、台地上から検出された28軒の鬼高期の住居跡のうち最大規模の住居跡は、前述のように昭和60年度調査区から検出された第39号住居跡（一辺7.8m）、最小規模の住居跡は屋代A遺跡から検出された第65号住居跡（2.5×2.4m）である。最も多く見られる住居跡は、一辺の長さが5~7m前後のものである。28軒の住居跡の平面形について見ると、形状が明瞭または推定可能な住居跡26軒のうち、方形や方形状を呈するもの20軒、隅丸方形を呈するもの5軒、隅丸長方形を呈するもの1軒となっている。主柱穴は4本主柱を有するものが18軒であり、4本主柱と考えられる住居跡を含めると全体の約78%を占める。



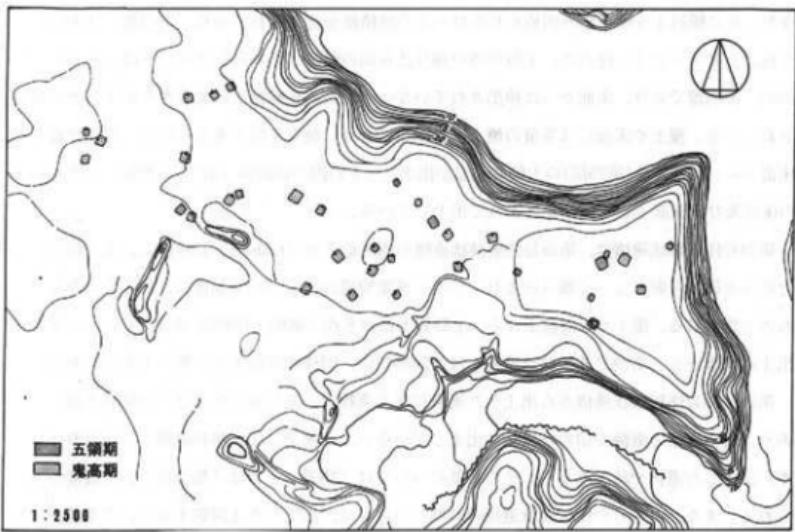
第150図 住居跡の規模



第151図 住居跡の主軸方向

屋代A遺跡に見られる第3号・第39号住居跡のような3本主柱の住居跡や、同遺跡の第7号住居跡のように6本主柱を有する住居跡は例外と言える。

いずれにしても、屋代B遺跡や屋代A遺跡から検出された鬼高期の住居跡は、一辺の長さが5~7m前後の方形を呈する4本主柱の住居跡で、北または北



第152図 古墳時代の住居跡分布図

西側にカマドを有する住居跡が支配的と言える。この時期の集落は(第152図), 先に述べた様な制約を受けながらも, 自然や地形に適合しながら一つの規則性をもって形成されていた様子が窺える。

表10 鬼高时期的住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	長方形方向	平面形	規格		壁溝 (全幅×短軸)	ピット数 (起柱・主柱)	カマド 壁上	出土遺物	備考
				長軸	短軸					
21	E7a	N=38°W	隅丸方形	6.40	5.40	50 74	5 (4~5)	カマド + N	縄文50 仰生419 土師556 須恵5 陶器18 石製粘土車1 支脚1 他	床面積 約31.8m ²
22	E7b	N=33°W	(方形状) (-沿1.3m削離)	18 26	18 (全幅)	8 (4)	+ N	井生8 土師140 須恵2 陶器1 陶器4	SD37+39+40に切られている 床面積 約13.9m ²	
23	E8g	(N=31°W)	(方形状) (-沿1.3m削離)	33 40	33 (全幅)	4 1 後不明	+ N	井生1 土師73 土師51 陶器12 鐵石1 壁5	SK428+429+434+439+440に切 られている 床面積 約16.8m ²	
27	E6e	(N=30°E)	(方形状) (-沿6.5m削離)	40 60	40 (全幅)	6 2 後不明	+ N	縄文2 井生178 土師167 陶器 2 鐵石1 壁6	第1号窓 SK66+67+68+69+70+71+72+73+74+75に 切られている 床面積 約46.7m ²	
32	D7h	N=34°E	方 形	6.00	6.00	55 69	7 4 後不明	+ N	縄文25 土師1038 紙石4 上玉 1 他に井生・陶器・壁	S135を切っている 床面積 約30.2m ²
36	D6a	N=30°E	隅丸方形	6.70	6.70	60 68	+ 5 4 後不明	+ N	縄文71 井生4 土師212 須恵2 土器片株(縄文)1 壁4	床面積 約31.6m ²
39	D6e	N=35°E	方 形 状	7.80	7.80	19 1 36	+ 4 4 後不明	+ N	縄文14 井生95 土師455 陶器 3 支脚1 他	中央部窓による複数 床面積 約51.2m ²
43	D1e	(N=10.5°W)	(方形状)	5.70	5.55	41 58	3 2 後不明	+ N	縄文3 井生15 土師48 須恵1 壁1	第7・10号窓に切られている 床面積 約34.4m ²

(3) 中世の住居跡状構造

中世の住居跡状構造は、調査区の北西側に当たるE6区から2軒(第28・38号)検出されている。第28号住居跡状構造は、第10号窓と第1号窓に挟まれたE6ca区に位置し、8.34×5.82mの二段堀り込み状(ベット状)を呈する隅丸長方形の竪穴である。南西壁中央部から竪穴の中心方向に、

なだらかに傾斜する硬く踏み固められたロームの堆積部が認められており、この部分は入口に伴う施設と考えられる。柱穴は、上段の浅い掘り込み面の壁際にそれらしきピットは認められるものの、不明瞭であり、床面からは検出されていない。がは、長軸線上の北東寄りの床面から検出されている。覆土や床面には多量の焼土が堆積しており、焼失家屋と考えられる。遺物は覆土や床面から、36個体分(第79図)の土師質土器が出土し、その内の16個体(第79・123図)は北東壁下の床面及び床面上からほぼまとまって出土している。

第38号住居跡状遺構は、第28号住居跡状遺構の西側約3m(上6b区)に位置し、南東側の約2分の1を第10号堀によって掘り込まれている。推定規模は7.5×4.5m前後で、長方形状を呈するものと思われる。覆土や床面上から、土師質土器が8点(第80・124図)出土している。形状や出土遺物等から、第28号住居跡状遺構とほぼ同時期の、同様の性格をもつ豈穴と考えられる。

第28・38号住居跡状遺構から出土した遺構に伴う遺物は、先に述べたように土師質土器だけであり、日常生活の痕跡を留める遺物は出土していない。本書では住居跡状遺構として取り上げたが、出土した遺物や状況等から、その機能については「物置」または「集会所」的な機能が考えられる。また、これらの住居跡状遺構の時期については、出土した土師質土器が、門毛追跡や日向廃寺出土のものと類似することから、ほぼ12世紀後半(鎌倉時代初期)~13世紀前半に位置づけられるものと思われる。機能を含め、土師質土器の編年については、今後さらに検討する必要がある。

表11 中世の住居跡状遺構一覧表

区分 番号	位置	長軸方向	平面形	堤 壁 厚	壁 材 質	壁 材 質	ピット数	灰	蓋土	地 下 遺 物	備 考
28	E6c (N-30.5'E)	南北	南北長方形	8.34×5.82	0.2 0.2 0.2	無 有 有	不詳 なし なし	N	上断面36 埋管1 小丸1 鉢1	二段盛り込み状を呈する 表面積 約32.1m ² 焼失家屋	
38	E8b (N-23°E)	(長方形状)	(7.50×4.50)	0.15 0.15	*	*	外2 内2	不明	N	水生1 土師質32	SK37-SK678を帶っている

注

- (1) 阿久津久「門毛経塚遺物と中世陶器」茨城県立歴史館報12 茨城県立歴史館 1985
- (2)a 岩崎卓也「日向遺跡 昭和54・55年度発掘調査概報」筑波町教育委員会 1981
b 高崎光司「日向廃寺」『筑波古代地域史の研究』筑波大学 1981

3 土坑について

昭和60年度に調査した土坑の数は計278基で、内訳は以下の通りである。

墓塚及び墓壙と思われる土坑……88基(第410・423・428・429・433・442・466・591・603号及
び表2 掘載土坑)

墓壙の可能性のある土坑………60基(表3 掘載土坑)

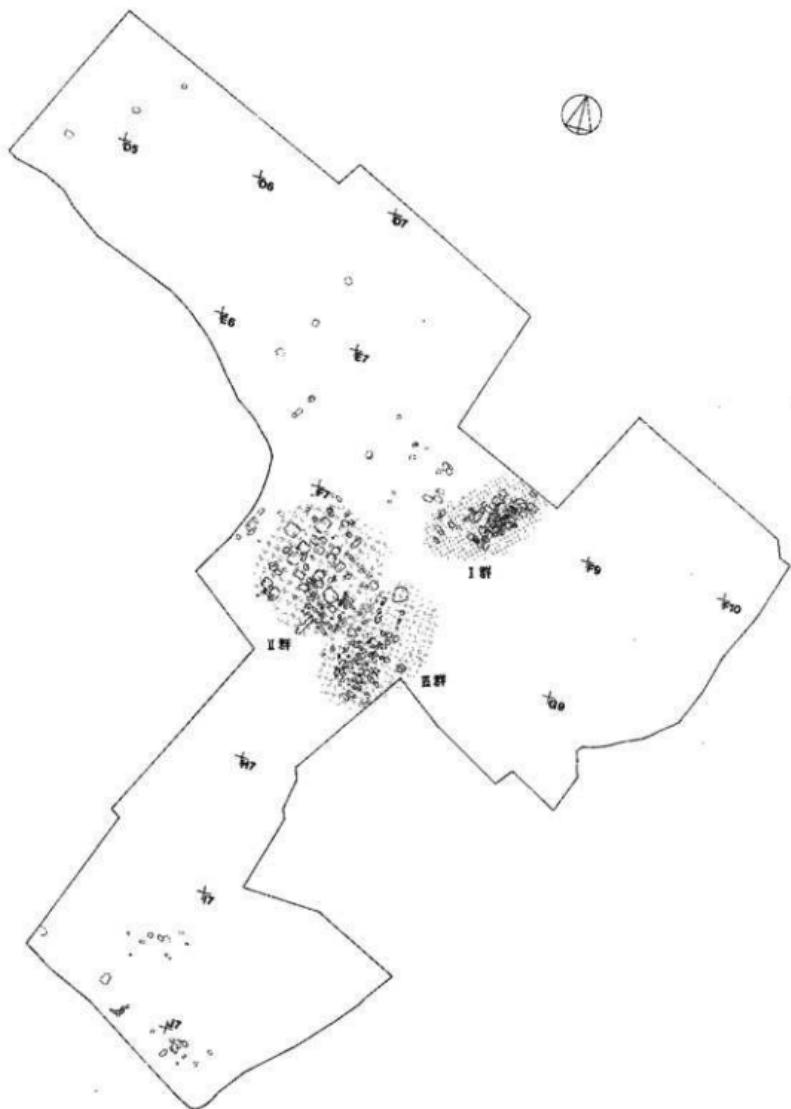
粘土貼りの土坑	1基 (第555号)
地下式壙	4基 (第6～9号)
Tピット	2基 (第593・682号)
不明土坑	117基 (表4掲載土坑)
近・現代の芋穴	6基 (第426・575・593・606・641・682号)

本項では、墓壙群（墓域）及び地下式壙について検討する。

(1) 墓壙群（墓域）

第3章第5節で述べたように、墓壙群（「墓壙及び墓壙と思われる土壤」、「墓壙の可能性のある土坑」の総称）は、調査区の北東側（E8・F8区—I群）、中央部（F7区—II群）、南東側（G7区—I群）の3か所から検出されており。これらI～III群の墓壙群（第153図）は、いずれも屋代城の外郭をなす第1号堀の外側に位置している。墓壙群を形成する各々の墓壙は、限定された墓域に長期間に亘って墓が造られたためか、互いに激しく重複し合っており、遺構に伴う遺物は少ない傾向が見られる。従って、形状や規模及び時期等を明確に把握できたものは少ない。比較的良好な遺存状態を示す墓壙を見ると、先にも述べた様に、「平面形が方形または長方形」を呈し、「出入口部と考えられる張り出し部」や「向い合う各々の壁下にピットを有する」もの、「壙底または覆土中に多量の焼土・炭化材・灰が堆積」するものが多い。墓域内に位置し、重複が激しく形状・規模等の不明瞭な土坑についても、残存する壁やピットの検出状況、覆土の堆積状況等を見ると、上記墓壙と共通するいくつかの要素が見い出せる。第153図に示すI～III群の墓域については、分布状況や形状・規模等によっておおまかに分類したものであり。各々の墓壙の時期差、ほぼ同時期に存在したと思われる墓壙の数、墓域の範囲等については正確に把握することが困難であり、今後さらに検討を加える必要がある。

墓壙の形成された時期については、墓壙内や墓域から主として出土する銭（第138図1・2・4・5・7）の初鋳年や土師質土器（第125図2・3・13・18・21・23・24・25・35・36）等から、その中心時期は12～15世紀前後と想定され、屋代城の存続時期と重複する。また、昭和58・59年度調査区から検出された墓壙（F2区・G2区）と昭和60年度調査区から検出された墓域を比較すると、墓壙の形状や規模・覆土の状態等についてはほとんど差異は認められなかったが、前者は屋代城の外郭をなす第1号堀の内側（城内）、後者はその外側（城外）に位置するという違いが見られ、出土遺物についても前者はその周辺の堀から五輪塔等の墓石が投棄された状態で検出されているが、後者についてはその周辺も含めそのような状況は認められず、身分の違いにより墓域についてもなんらかの制約があったのではないかと考えられる。



第153図 土坑・基壠配置図

(2) 地下式壙

本年度調査区から検出された地下式壙は、第6～9号の4基である。これら4基の地下式壙は、いずれも調査区の中央部や南東側に検出された中世の墓壙群（墓域）内に位置している。第7号を除き、その覆土中からは内耳形土器や土師質土器・陶磁器等の破片が出土している。これらの遺物は、いずれも覆土中から出土したもので、明確にこれら地下式壙の時期を決定づけることはできないが、いずれも墓域内の比較的限られた地区（F7区を中心とする地区）から検出されたことや、墓壙との重複関係・出土遺物等から、屋代城の存続した中世に大枠として位置づけられる。

地下式壙は、昭和58・59年度調査区から5基、隣接する屋代A遺跡（大枠では、屋代城の繩張りになる）から4基検出されている。昭和58・59年度調査区から検出された5基は、いずれも墓壙と思われる土坑の近辺に位置しており、土師質土器や内耳形土器、陶磁器（擂鉢等）片や、石臼、砥石等の石製品、六器や石塔等が出土している。また、屋代A遺跡の4基からは土師質土器、内耳形土器、砥石等が出土しており、いずれも中世に位置づけられている。

（2）
地下式壙の造営された時期については、現在、諸説があり「平安時代末から江戸時代まで」と広範囲である。また、用途については「墓壙」とする説と「貯蔵庫」とする説がある。時期や用途については、現時点において限定することは早急と思われる。当遺跡や屋代A遺跡から検出された地下式壙についても、時期や用途について限定しうるだけの資料は得られなかつたが、状況から推論するなら、中世の墓壙としての可能性が最も有力と考えられる。

注

地下式壙について中田英氏は、「13世紀より18世紀に及ぶものであり、その機能としては貯蔵庫として利用されたもの」と論考された（中田 1977）。これに対して半田繁三氏は、「明確に貯蔵庫として考えられるのは江戸時代に下るもののみであり、更に主体をなす中世の所産にかかるものは形態も異にしており…」、実際に調査された人骨出土例などを検討した上で、「…13世紀より16世紀に展開した中世墓」として位置づけられている（半田 1979）。池上悟氏は、半田氏により確認された中世墓としての位置づけをもとに、「13世紀の後半を初源期とし、14・15世紀を最盛期として16世紀代いっぱいに展開した特異な葬法」と論考されている（池上 1986）。

4 遺物について

本年度調査区からは、繩文式土器（中期の阿玉台Ib式・加曾利EⅢ～Ⅳ式、後期の称名寺式・堀之内式）、弥生式土器（後期前葉の長岡式・東中根式併行）、土師器（前期の五領式、後期の鬼高式）、須恵器、土師質土器（中・近世）、陶磁器（中・近世）や、土製品（土器片錐・紡錘車・土

玉・土鍤), 石器及び石製品(石鍤・磨製石斧・凹石・敲石・紡錘車・勾玉・石臼・砥石・五輪塔), 銅製品(煙管等), 鉄製品(刀子・鎌・釘・鍍金具等), 古銭等縄文時代から中・近世に及ぶ多種多様な遺物が出土している。

それぞれの遺物の詳細については、各項で解説した通りであるので、本項では、特に昭和60年度調査区から出土した弥生式土器について、検討を加えて行くことにする。

屋代B遺跡出土の弥生式土器について

当遺跡(昭和60年度調査区)から出土した弥生式土器は、弥生時代後期前葉に比定される長岡式や東中根式土器に類似したものが多い。器種としては壺形土器・壺形土器・鉢形土器・手捏ね土器のほか、壺形土器や壺形土器のどちらの器種にもとれる土器等が出土している。これらは主に、弥生時代の住居跡の覆土から出土したものであるが、完形品や器形の窺える土器は少ない。

各部文様帶の特徴

有文土器における各部の文様は、時期や地域によってそれぞれ固有の特徴を有しており、文様帶は、口縁部(I文様帶)・頸部(II文様帶)・胴部(III文様帶)の三文様帶に大きく分かれるのが普通である。各部の文様帶は、それぞれの時期や型式によって独自の展開を見せており、なおかつ、隣接地域の影響を少なからず受けている。屋代B遺跡の弥生式土器について、まず各部の文様帶別にその特徴を見て行くことにする。

I文様帶(口唇部～口縁部)

口縁部は作出手法から、複合口縁(折返し口縁)と素縁とに分けられる。複合口縁には、1段作出のものと2段作出のものとが見られ、前者は第17図1(第30号住)に見られる様に、当遺跡から出土した弥生式土器(壺形土器・壺形土器)の中では最も多い作出手法と言える。後者は例が少なく、第20図7(第31号住)や第35図12(第64号溝)の2例が確認されたにすぎない。2段作出の複合口縁を有する土器は、昭和58・59年度調査区(第26図365)や屋代A遺跡(第22図6・第41図1)からも出土しているが、全体的に量が少ない。

口縁部の文様帶を見ると、素縁には無文のもの(第20図1・第34図14等)と櫛描文(第21図11・第35図1等)や繩文(第29図16)等を施す有文のものとがあり、これらはI・II・III部が一つの文様帶を構成する。複合口縁には無文のもの(第31図4等)以外に、単節(第17図1等)や付加条の繩文を施すもの(第33図1等)、1~2列の刺突が加えられたもの(第8図3・第12図6)等があり、複合口縁の下端(折返し下端)に、棒状工具による刺突や押圧を加えたもの(第33図1等)とそうでないもの(第29図10等)とがある。また、口唇部には無文のもの(第12図1等)と繩文原体による押圧(第17図1等)や回転押圧(第23図2等)の施されたもの、棒状工具による刺突や押圧(第20図1・第28図6等)の加えられたもの等がある。繩文原体については、III文様帶で述べることにする。

II 文様帶（頸部）

頸部文様帶には、口頸部を無文とする以外に、櫛齒状工具や瓦状工具による鋸齒文・波状文・弧線文・山形文・格子目文・懸垂文等を施すものや、縄文（単節・付加条・撚糸等）を施すものがある。

III 文様帶（胴部）

胴部には、単節や付加条1種の縄文を施すもの、撚糸文を施すもの等が見られる。また、頸部との境界には縄文のみの他に、櫛描波状文による横帯、結節文、結束文で画するもの等も見られる。口唇部や口縁部を含め、胴部に付された縄文を原体から分類すると、概ね次の様になる。

I 類 単節縄文

- a 種 単節LRの縄文を施すもの
- b 種 単節RLの縄文を施すもの

II 類 付加条1種

軸繩の撚りと同方向に付加する縄を結びたもので、付加する縄が1本（付加1条）のものと、2本（付加2条）のものとが見られる。

a 種 付加1条

単節LRの軸繩の条間に、Rの縄を1本巻き込んだもの（ $L | \frac{R}{R} + R$ ）で、付加した縄が深い条となり、条間に2条の $L | \frac{R}{R}$ が見える。

b 種 付加2条

単節LRの軸繩の条間に、Rの縄を2本巻き込んだもの（ $L | \frac{R}{R} + \frac{R}{R}$ ）で、付加した縄が深い条となり、条間に1条の $L | \frac{R}{R}$ が見える。

III 類 直前段反撚

IV 類 単軸絡条体（撚糸）

- a 種 軸棒に、Rの縄を1本右巻きにしたもの
- b 種 軸棒に、Lの縄を1本右巻きにしたもの
- c 種 軸棒に、Rの縄を2本右巻きにしたもの

I類の中ではa種が多く、b種は少ない。I類a種の土器としては、第8図2（第20号住）、第17図1（第30号住）、第23図1（第33号住）、第28図3（第35号住）等があり、I類b種の土器としては、第17図2（第30号住）等がある。第23図3の様に、縄の開端部を無節の縄で結束した例も見られる。

II類の中ではa種は少なく、b種が多い。単節RLの軸繩に、Lの縄を付加（1条・2条）した原体（ $R | \frac{L}{L} + L$ 、 $R | \frac{L}{L} + \frac{L}{L}$ ）を施す土器は確認できなかった。II類a種の土器としては、第12図1（第26号住）や第23図19（第33号住）、第29図16・22（第35号住）等があり、第12図19の様

に末端を無節の縄で結束したものも見られる。II類a種の土器は、量が少ない。II類b種の土器としては、第17図2、第18図4（第30号住）や第20図1～5（第31号住）、第23図2・5（第33号住）、第28図5（第35号住）等の例がある。また、第12図20（第26号住）や第15図8（第29号住）のように、原体の末端を結節した例も見られる。当遺跡から出土した弥生式土器は、II類b種の縄文を施すものが多い。

III類の縄文を施す例としては、第8図15・27・30（第20号住）、第35図22（遺構外）等がある。燃りが不完全なため、縄文が並行せずに流れるものである。原体は明瞭でない。

IV類の土器は、II類b種の土器と共に出土例が多い。IV類の中ではa種やb種が多く、c種は希である。IV類a種の土器としては、第12図19（第26号住）に第28図4（第35号住）等がある。第23図19の様に、燃糸の木端を無節の縄で結束したものも見られる。IV類b種の例としては、第28図1・4（第35号住）、IV類c種の例としては第35図23（遺構外）等がある。

以上、屋代B遺跡（昭和60年度調査区）出土の弥生式土器を、I～IIIの各文様帶に分けてその特徴を述べてきた。これらの特徴をふまえ、屋代B遺跡出土弥生式土器の位置づけについて検討を加えて行くことにする。

屋代B遺跡出土弥生式土器の位置づけ

当遺跡から出土した弥生式土器の特徴を概略的に述べると、1～5の様になる。

- 1 器形は甕形と壺形土器の分離が比較的明らかなものと、分離がむづかしいものがある。
- 2 口縁部は複合口縁のものと素縁のものがあり、縄文（付加条1種付加2条のものが中心）の施されるものが多く、無文のものも存在する。口唇部には縄文原体の回転押圧（捺）が施されたものが多く、縄文原体の押圧や棒状工具による押圧、刺突の加えられたもの等が見られる。また、複合口縁（折返し）下端に刺突の加えられたものが多い。
- 3 頬部は無文帯とするもの、4～8本櫛描きによる懸垂文・横走波状文を施すものが多く、锯歯文、山形文、格子目文等を施すもの等も見られる。
- 4 胎部には縄文が施されるが、羽状構成のものはあまり見られない。縄文原体は付加条1種（付加2条）が多く、また付加条1種（付加1条）、単節縄文、燃糸文等が見られる。
- 5 底部には木葉痕の見られるものが圧倒的に多い。

当遺跡の土器は、県中央部の主として潤沼川以南や以西の地域に分布し、栃木・千葉・埼玉の各県や、東京都の一部にも同種およびその系統をひく土器の分布することが知られている長岡式土器や、県北の久慈川や那珂川下流域地方に主として分布する東中根式土器と多くの共通性をもっている。しかし、特徴的な点では

- 1 長岡式土器は全て複合口縁であるのに対し、素縁の土器が見られる。
- 2 東中根式土器は複合口縁を呈するものは多いが、縄文の施されるものが少なく、無文のも

のが多いという特徴が見られるが、当遺跡の土器は複合口縁に縄文の施される例が多い。等の差異が認められる。

次に、県南部に位置する当遺跡とは、利根川を挟んで10~15kmの位置に近接し、千葉県北部地域を中心に分布する、所謂「印手式」・「臼井南式」土器と比較すると、長岡式・東中根式土器と同様に多くの共通点は認められるが、当遺跡から出土した土器の中には、その特徴の1つである無文帶の頸部に輪積成形痕をもつ土器は確認されておらず、製作手法の点で大きく異なっていることが指摘できる。また、南関東の影響を受けたと思われる土器も若干見られるが、組成として南関東系の土器は含まれていないと言える。

当遺跡出土の弥生式土器は、地域的ないくつかの特徴は見られるが、全て弥生時代後期前葉の土器と考えられ、長岡式・東中根式に併行する時期の、県南部地域に特徴的な「在地の土器」との位置づけが可能かと思われる。また、当遺跡と同一集落を形成していた（若干の時期差は考えられるが）と考えられる屋代A遺跡や昭和58・59年度調査区出土の土器の中には、器形や文様構成、製作手法等に南関東系土器の影響を受けたものもわずかではあるが確認されていることを考えると、県南地域は、隣接する同辺地域の影響を少なからず受けながら、かつまた相互に関連し合い一つ、地方色豊かな文化を形成していたことが窺える。

参考文献

- (1) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6」 成沢遺跡 屋代A遺跡 茨城県教育財団 昭和57年3月
- (2) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13」 屋代B遺跡Ⅰ 茨城県教育財団 昭和61年3月
- (3) 小高春雄『北関東系土器』の様相 研究紀要10 千葉県文化財センター 昭和61年3月
- (4) 海老沢稔 「茨城県南部における長岡式・長岡式以後の展開と問題点(上)」 婆良岐考古 第2号 昭和55年10月
- (5) 佐藤次男 「弥生式土器—関東・東関東2—」 考古学ジャーナルNo147 昭和53年4月

終章 むすび

屋代B遺跡の昭和60年度調査区から検出された遺構は、縄文時代～古墳時代、中・近世の各期に及んでいる。遺物についても同様であり、当遺跡が所在する台地上に残された幾多の先人達の生活の足跡や、脈々と流れる文化の息吹きを肌で感じ取ることが出来る。

縄文時代については、少量出土した遺物等からわざかにその生活の一端を垣間見るにすぎない。弥生時代（後期前葉頃）になると、当遺跡の所在する台地上には集落が営まれる様になり、中期前半頃から東北地方南部や関東地方一円に広がり始めた稻作農耕が、この地にも着実に根を下ろす様になる。このことは、第34号住居跡から出土した炭化米が裏付けている。人々の生活は、稻作農耕の普及によって安定・定着し、新たな文化が創造されていったに違いない。しかし一方では、土器等に見られる如く縄文時代の文化を色濃く残し、漁撈・採集の形態は変化しながらも継続していたものと思われる。弥生時代に引き続き、古墳時代～奈良・平安時代にかけても、台地上には集落が形成されており、この地が生活に適した良好な居住環境を備える場所であったことが窺える。中世（鎌倉時代）になると、この地には屋代氏が出現し、城郭が造営される。城郭は、南側が広大な沖積低地に面し、北及び東側が谷津及び支谷に囲まれた舌状台地の先端部付近に位置しており、自然地形を巧みに利用して縄張りを形成している。屋代氏については先にも述べた様に、「集古文書」等のわずかな資料に散見されるにすぎず、実体についてはいまひとつ不明と言わざるを得ない。文献で見る限り、承永3年（1334）から大永3年（1523）までの約90年間、屋代氏は確実に存在していた事が窺えるが、その前後の時期については不明である。屋代城の城郭遺構は、これまでの調査によって検出された堀や土塁・虎口等の重複関係から、最低3期（縄張りの変更が2回）に分かれることが明らかになっている。屋代城は、方形の「館」的なものから數度の改修を経て、「回字型」に近い城郭に発展して行ったものと思われるが、昭和61年度も調査が継続して行われており、全貌が明らかになった時点で、造営期や改修時期及び城郭の変遷等については、再検討を加えて行く必要があろう。

若干の私見を交えながら検討を加えて来たが、その内容は十分と言えず、また内容の妥当性についても一抹の不安が残されている。先学諸氏の御指導と御批判をいただき、機会をとらえより充実したものにして行きたい。

なお、本書をまとめるに際しては、関係各機関・関係各位から御指導と御助言を賜った。文末を借りて、心から謝意を表する次第である。

別編

竜ヶ崎屋代B遺跡第34号住居跡より出土した炭化米の同定について

農林水産省農業生物資源研究所

江川 宜伸 中川原捷洋



昭和 62 年 3 月

財團法人 茨城県教育財團

竜ヶ崎の屋代B遺跡第34号住居跡から多量の船炭化種子が出土した。遺物出土層から土壌を採取し、注意深く水洗いし、植物炭化遺物のみを選び分け、川上ら（1980）により開発されたソニックディジタイザーを用いて長さ、幅、長幅比を多点数測定することにより、形状について詳しい調査を行った。ここでは、その結果について以下に概要を述べる。なお、稲以外の作物種は、調査した範囲内では、見出すことができなかった。

1 炭化米の保存状況

船炭化種子は、多量に認められ、保存状態がよいため、容易に稲と判断できた。穀殻の付着は認められず、それは調整のために水洗した折に脱落したとは考えにくいので、もともと脱ぶされた状態で存在していたと推定される。また、粒の表面にたて溝が顕著に認められることから、まだ精白されていない状態すなわち玄米で貯蔵されていたと思われる（写真）。また、本遺物には他の作物種やきよう雑物が、認められなかった。

2 炭化米の大きさ

これらの炭化種子のうち509粒について、外観の形態調査を行った。それによると、長さの平均は4.7mmで77.8%のものが4.3～5.2mmの範囲にあり（図1）、幅は平均2.5mmで82.3%のものが2.3～2.8mmの範囲に入っていた（図2）。現在我が国で栽培されている代表的品種コシヒカリの種子について同様の測定を実施したところ、平均で長さ5.0mm、幅2.8mmであったので、本遺跡から出土した炭化米は、やや小粒であるといえる。無作為に抽出した52粒の炭化種子について、長さと幅について相関図を調べたところ、幅広い変異が認められた（図3）。これをコシヒカリの変異と比較すると、炭化種子の変異幅は、有意に大きく、かつやや小型のほうに偏っていた。従って、図3に示すような幅広い変異を持つ集団は現在の農業技術の水準から判断すれば、ただひとつの品種から構成されているとは、考えにくい。現在の栽培品種のもつ変異幅から判断すると、いくつかの品種が混在していると考えたほうがよい結果であった。しかし、日本各地から出土するいわゆる古代米の炭化物と比較するならば、むしろ変異幅はさほど大きくなりといった方が妥当である。調査した炭化種子には、若干のくずれがあるものもあったので、測定値が眞の値とは、少し異なるおそれがあるが、これらは、大きさとしては、日本型の稲の種類のなかでもやや小粒に属するものである。

3 炭化米の形

種子の長幅比は、平均が1.9であり、83.9%のものが1.7～2.1の範囲にあり、現在栽培されている日本産品種に近い形状をしている（図4）。

また、玄米の粒張り（厚み）から判断すると、これらの種子は陸稻ではなく、現在の水稻に近いと考えられる。さらに、粒先端の肩部分が十分に充実しているところから、うるち種であったと思われる。

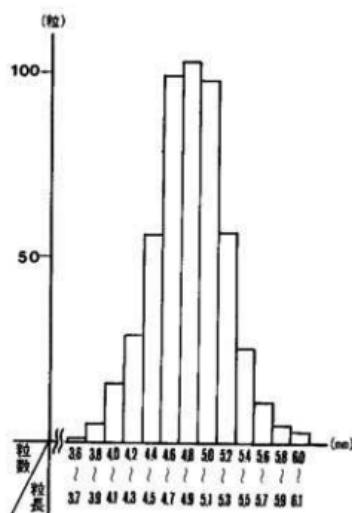


図1 炭化米の粒長の変異

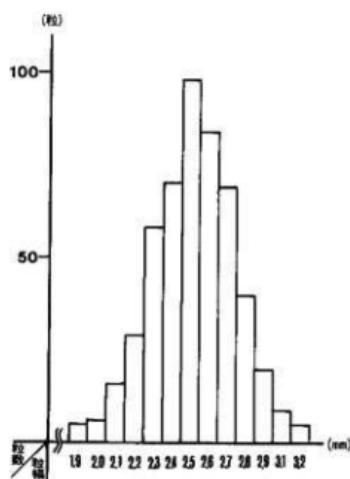


図2 炭化米の粒幅変異

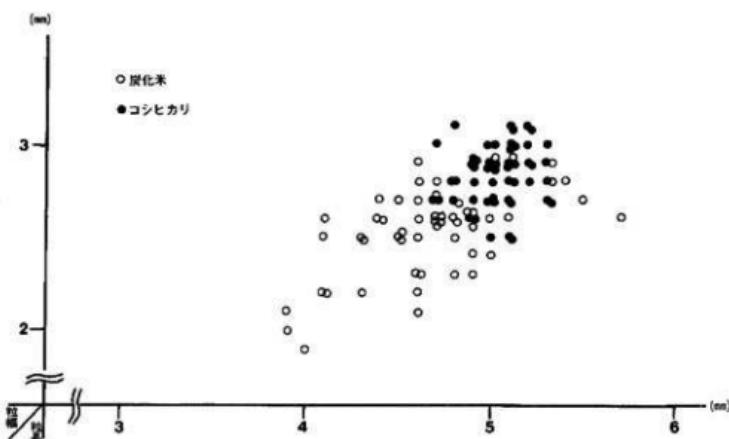


図3 炭化米及びコシヒカリの粒長と粒幅の相関図

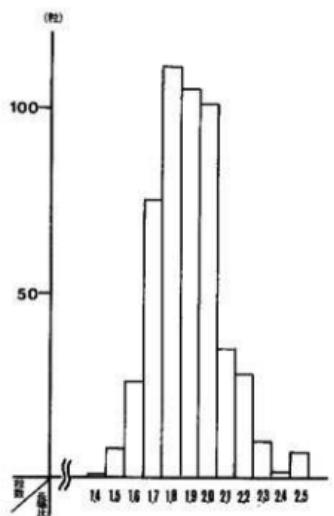


図4 炭化米の形の変異

いに栽培されていたものと思われる。稲栽培以前は、アワ、キビ、ヒエ等が主穀として重要な役割を演じていたが、当時すでに、生産性の高い稲が主に低地の平坦部でこれらの雑穀にとって代って重要な作物となっていたと想像される。

出土した炭化物は、絶じて現在我が国で栽培されている種類よりも小型（小粒）であった。一般に種子を炭化させると実物よりも小さくなる事が知られている（安田1927）が、本遺物の粒大はある程度の炭化による縮小を考慮したとしても、今日の種類と比較してやや小型の品種が栽培されていたということになる。これまで遺跡から出土された炭化米は、多くが小粒であった。例えば、九州の立岩遺跡から出土した古代炭化米は、全体に小粒であるが（永松1977）。これと比較すると竜ヶ崎稻種子は粒大はその変異のなかに入るものの、粒形はやや長粒に属するものであった。このような事実は、当時の農業が栽培地域の環境と関係して同一品種群として扱われていながら、やや幅広い変異をもっており、地域的に稲の形態に差を生じたのか、あるいは何か他の人為的要因でこの地特有の種類が発達していたのか、興味のある問題である。

参考文献

- (1) 川上潤一郎・宮崎尚時・中川原捷洋 (1980) 超音波計測機利用による形質の長幅および面積の迅速測定とデータの処理装置の開発 育種30別冊2
- (2) 永松土一 (1977) 植物性遺物 立岩遺跡 P 325-334
- (3) 安田貞雄 (1927) 日本書古の米 農業及び園芸 P 2-9

以上の結果から、本遺物は、今日広く栽培される日本産改良水稻と比較するとやや小粒に属する水稻うるち種で、日本型稻であると推定される。

4 考察

出土した植物遺物は、当時の集落で栽培されていた作物を代表するものであると考えるならば、当時の人々の生活水準、農業の発達の程度について考察するのに、貴重な資料を提供してくれる。

稲は、少なくとも縄文末期には九州に伝播し、弥生時代中期には、関東地方にも伝来したと昔われている。本遺跡から稲が大量に出土し、その粒形、粒大がかなりの均質性を有していたことから判断して、当時すでに今の茨城県で稲が人々の主食として、つまりデンプン源として大

写 真 図 版



遺跡全景 (W→E)



遺跡全景 (N→S)



昭和60年度調査終了時全景



第1号土堆・第7号堀



第1号土堆、第7・10号堀 (SE→NW)

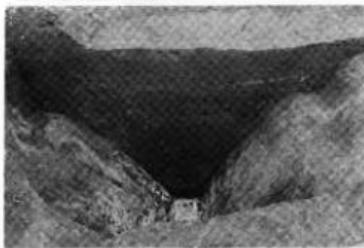
同 (NW→SE)



第10号堀粘土堆積部



第10号堀断面



第7号堀断面



五輪塔出土状況 (第7号堀)



虎口部周辺調査前風景(1)



同(2)



同(3)



同(4)



同(5)

虎口部、第2・3号土壠全景



第2号土壠全景



第2号土壠断面



虎口部，第8·9·11号
堀 (E→W)



同 (W→E)



第8号堀



虎口部，第8号堀



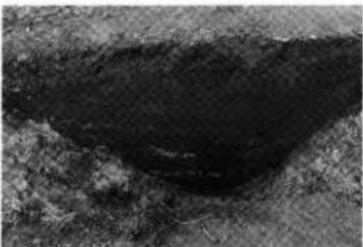
第11号堆断面



第3·4号土层断面·第
9号堆(1)



同(2)



第8号堆断面



第1号堆



第1号堆出土人骨



東側台地部（屋敷跡）全景(1)



同(2)一屋敷跡入口



第6号土塁・第41号溝（調査前）



同（調査後）



東側台地部、第6号土塁



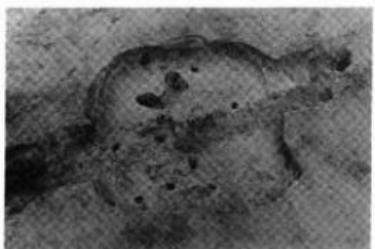
第6号土塁



屋敷跡入口(1)



同(2)



第20号住居跡



第26号住居跡



第29号住居跡



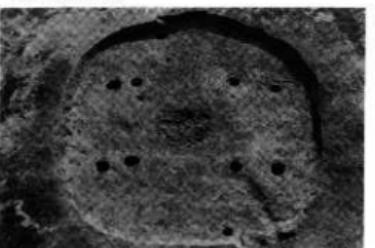
第32・35号住居跡



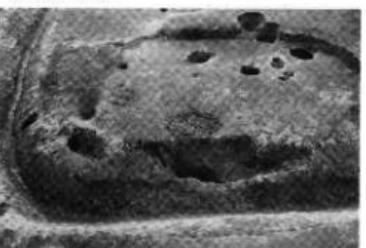
第30号住居跡



第31号住居跡



第33号住居跡



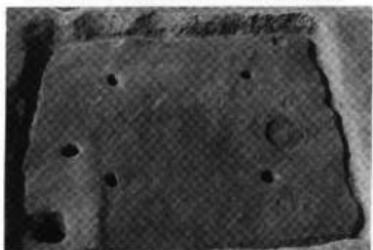
第34号住居跡・第10号堀



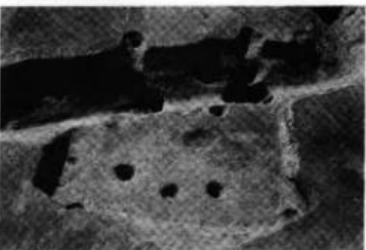
第34・37号住居跡、第38号住居跡状遺構



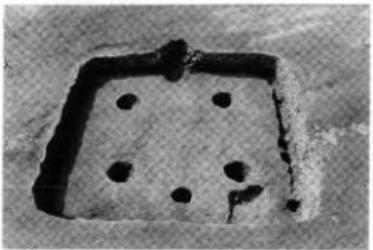
第40号住居跡



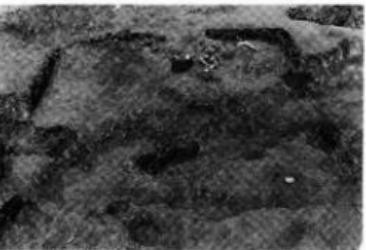
第41号住居跡



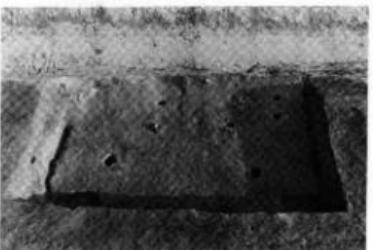
第42号住居跡・第10号堀（横脚痕）



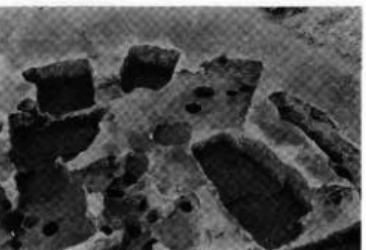
第21号住居跡



第22号住居跡



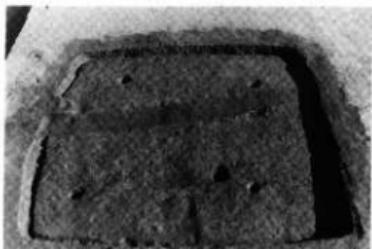
第27号住居跡、第1号堀



第23号住居跡・基壙群（I）



第36号住居跡



第39号住居跡



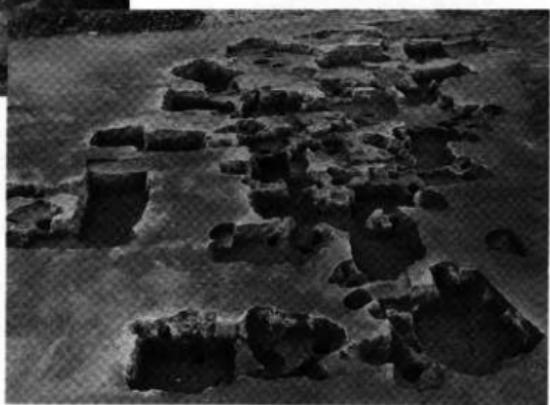
第43号住居跡



第28号住居跡状遺構



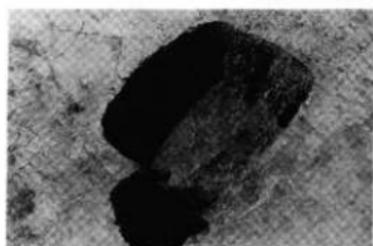
墓壙群（Ⅲ）



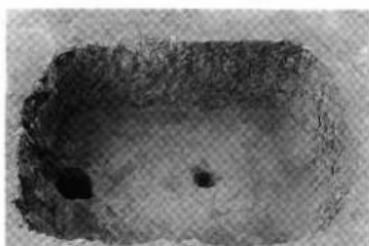
墓壙群（Ⅰ）



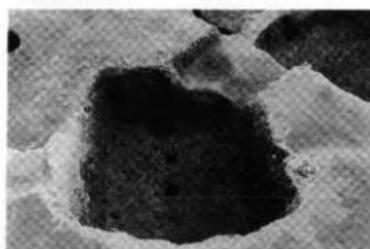
墓塚群(II)と溝



第410号土坑



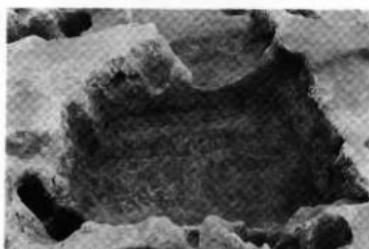
第423号土坑



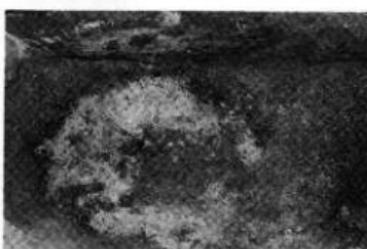
第428・440号土坑



第429号土坑



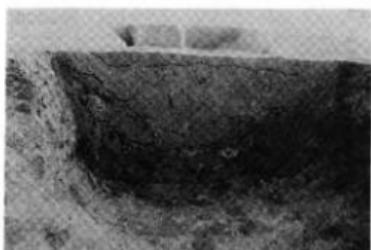
第431号土坑(1)



同(2)-灰・焼土堆積状況



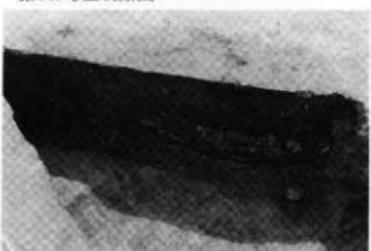
第442号土坑



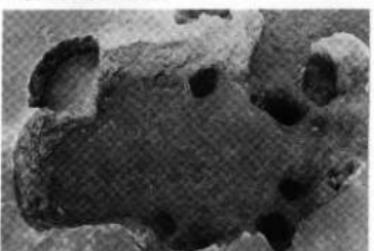
第443号土坑断面



第446·480号土坑



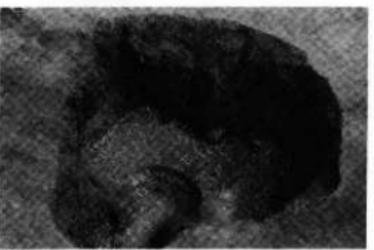
第446号土坑断面



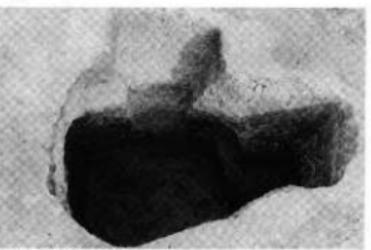
第475号土坑



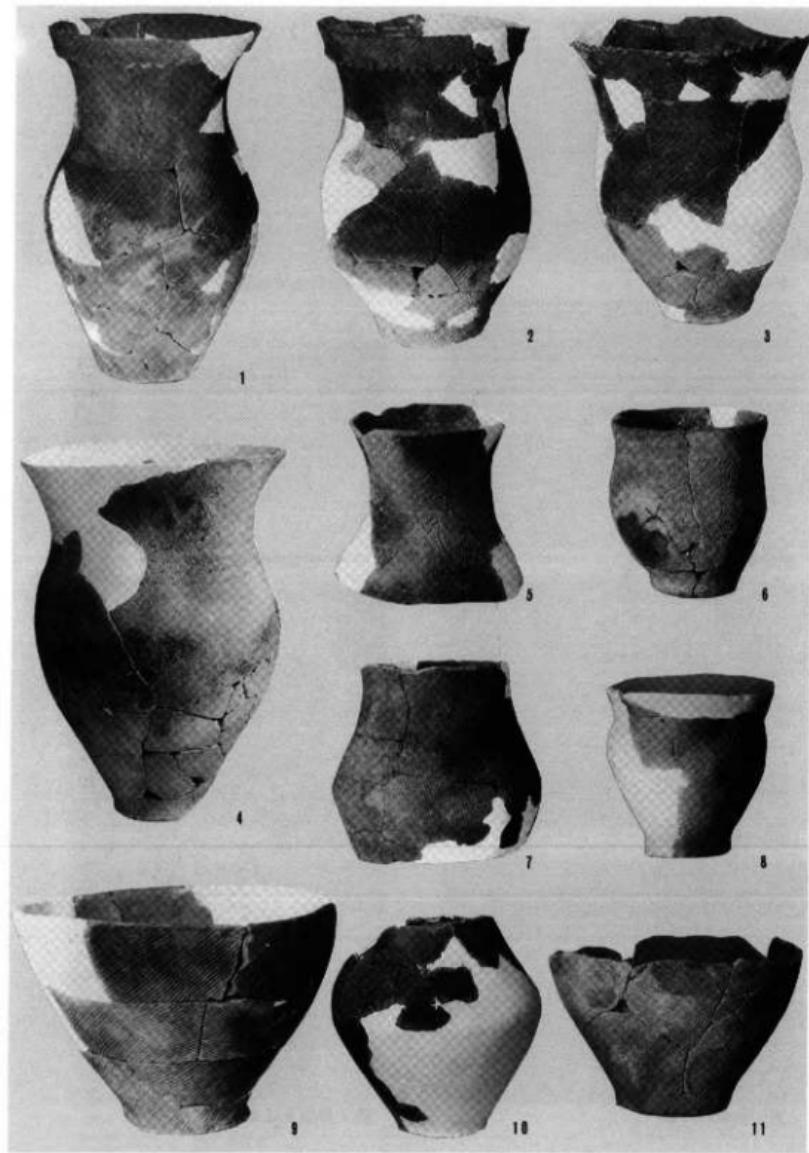
第528号土坑



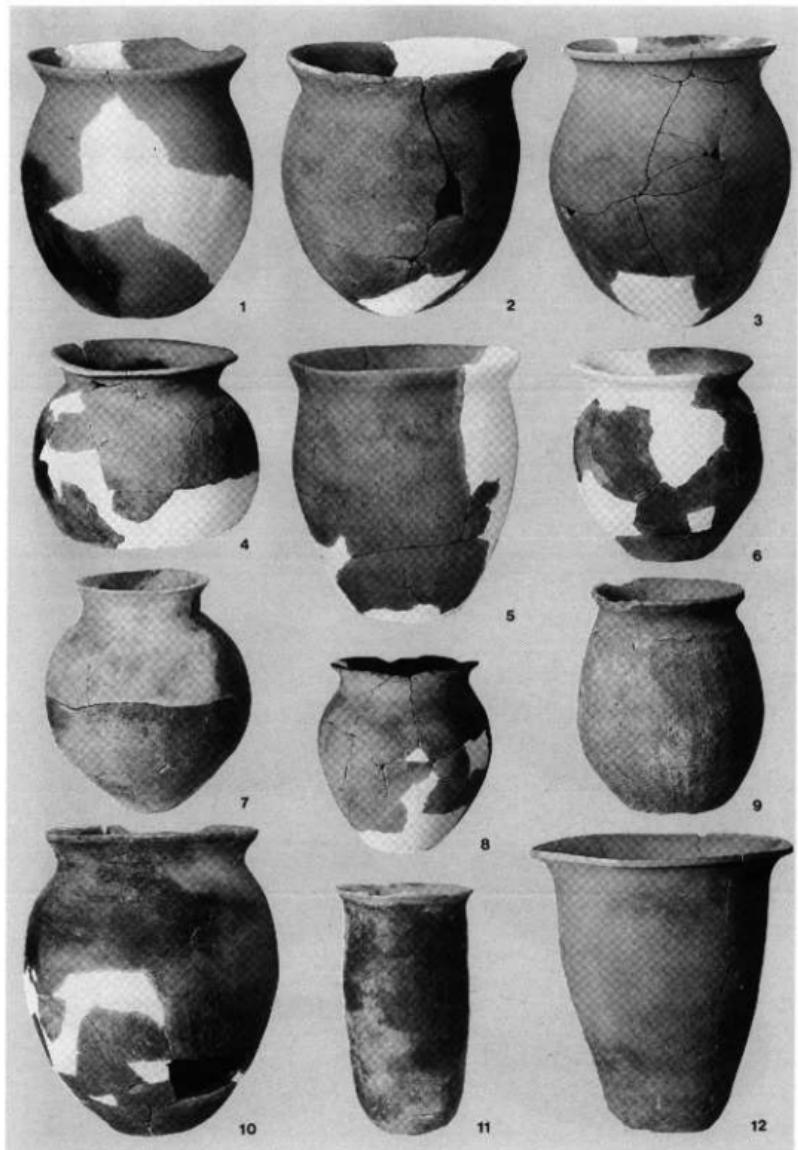
第6号地下式罐



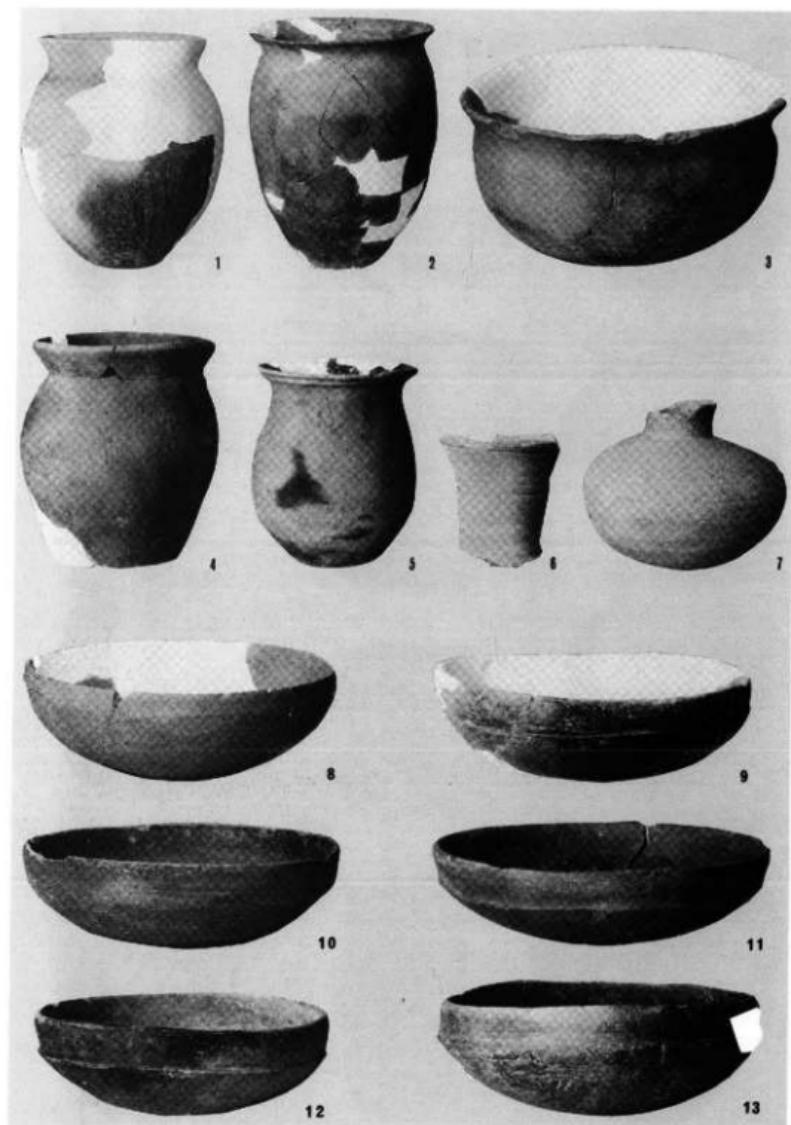
第7号地下式罐



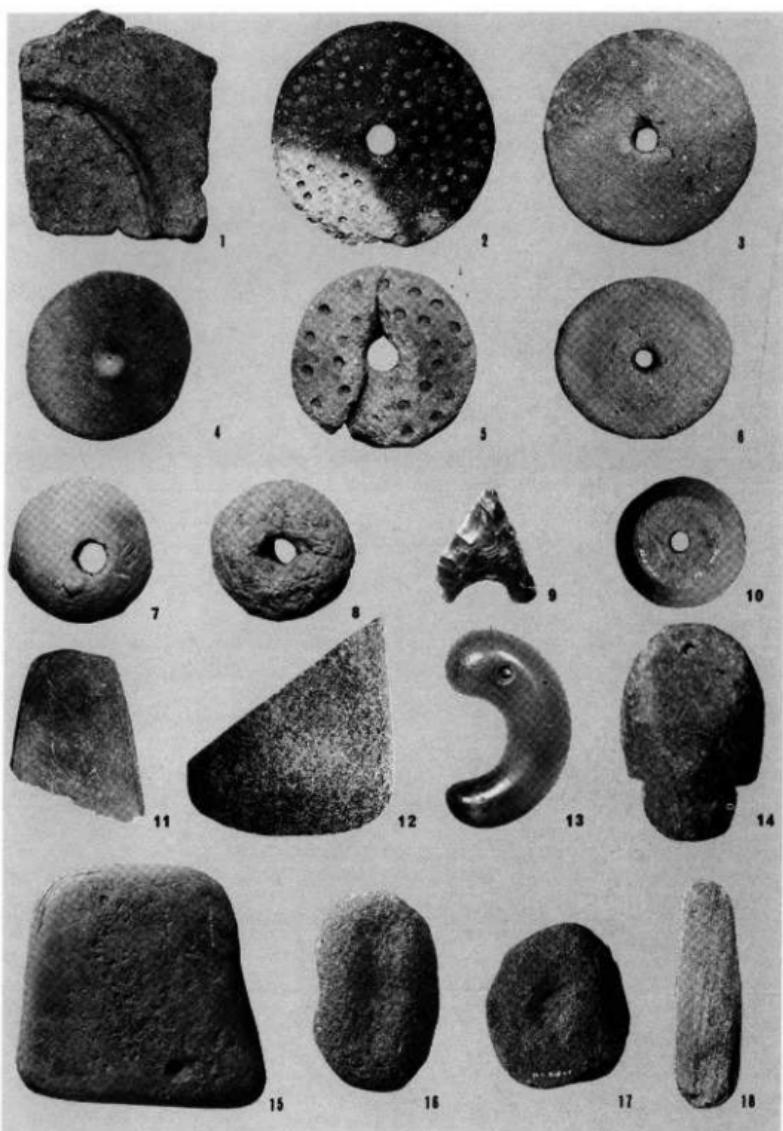
出土遺物(1)－弥生式土器



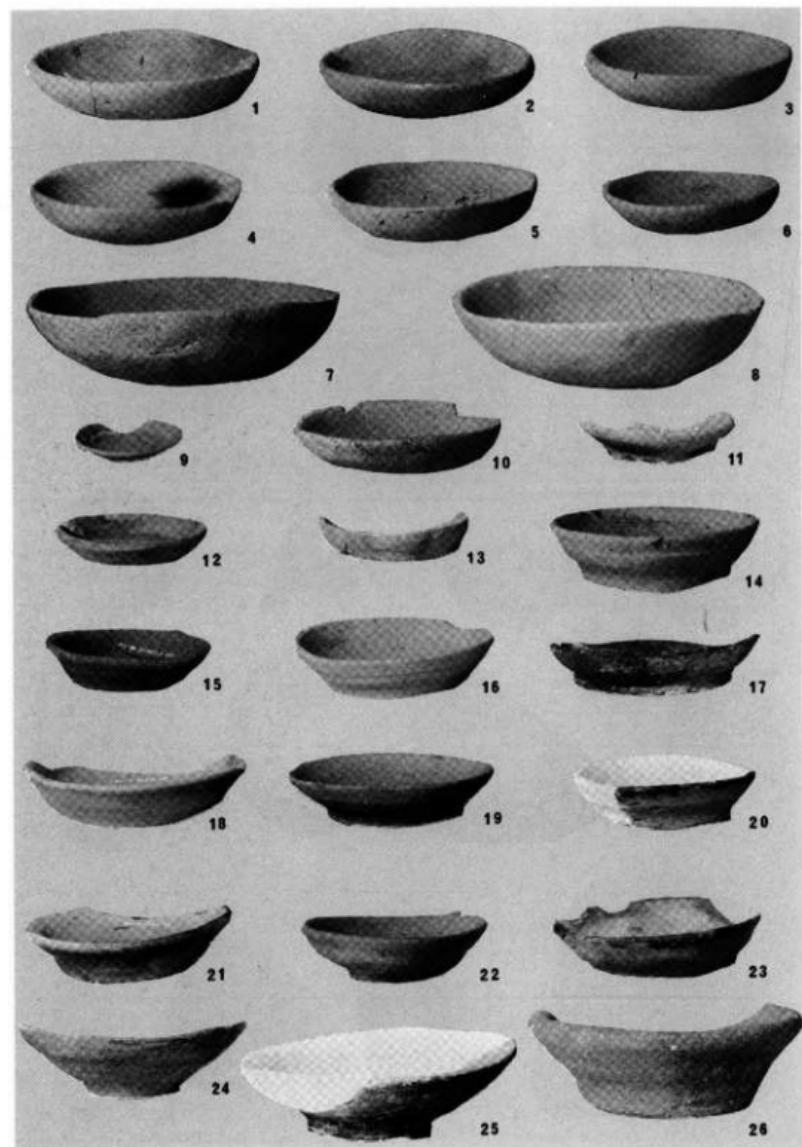
出土遺物(2)-土師器



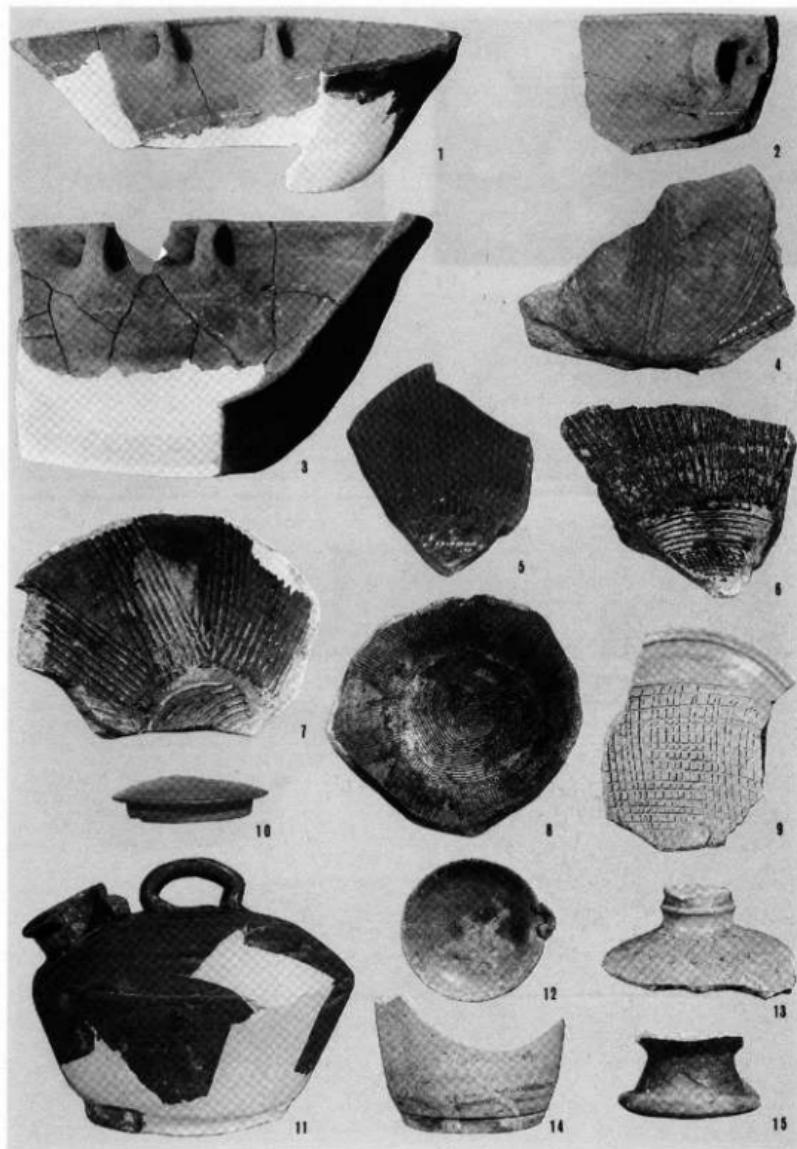
出土遺物(3)——土師器・須恵器



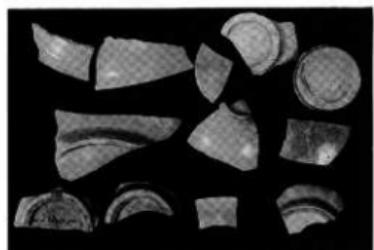
出土遺物(4)——土製品・石器・石製品



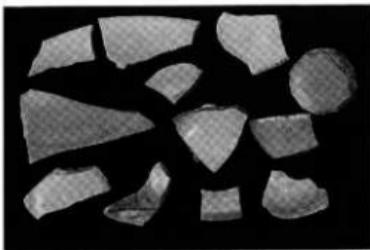
出土遺物(5)—土師質土器



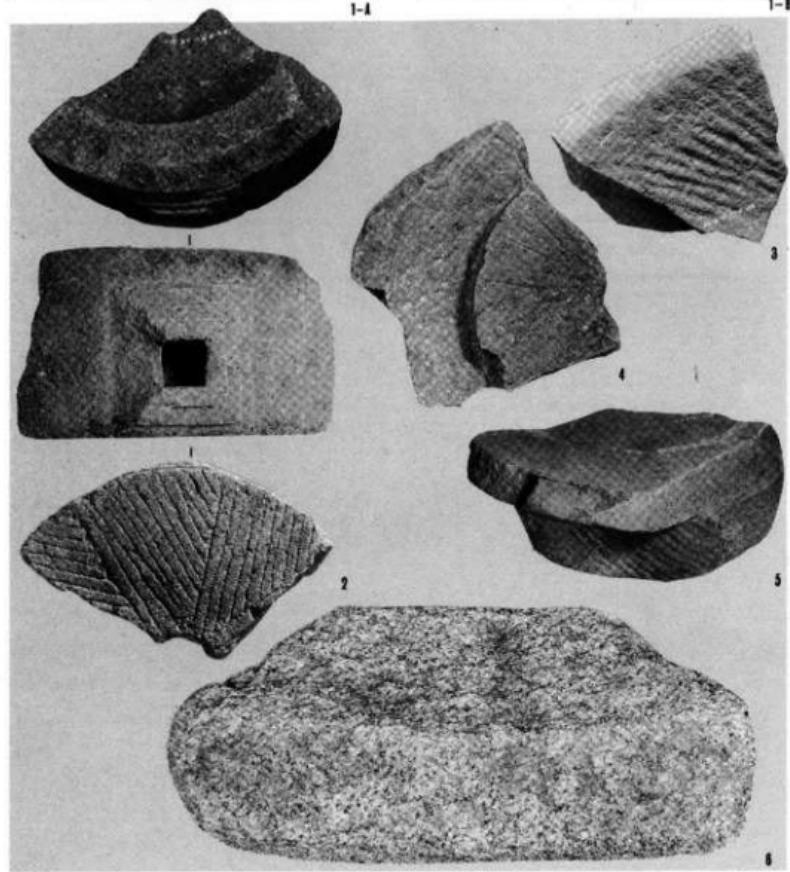
出土遺物(6)——內耳·搗鉢·陶磁器



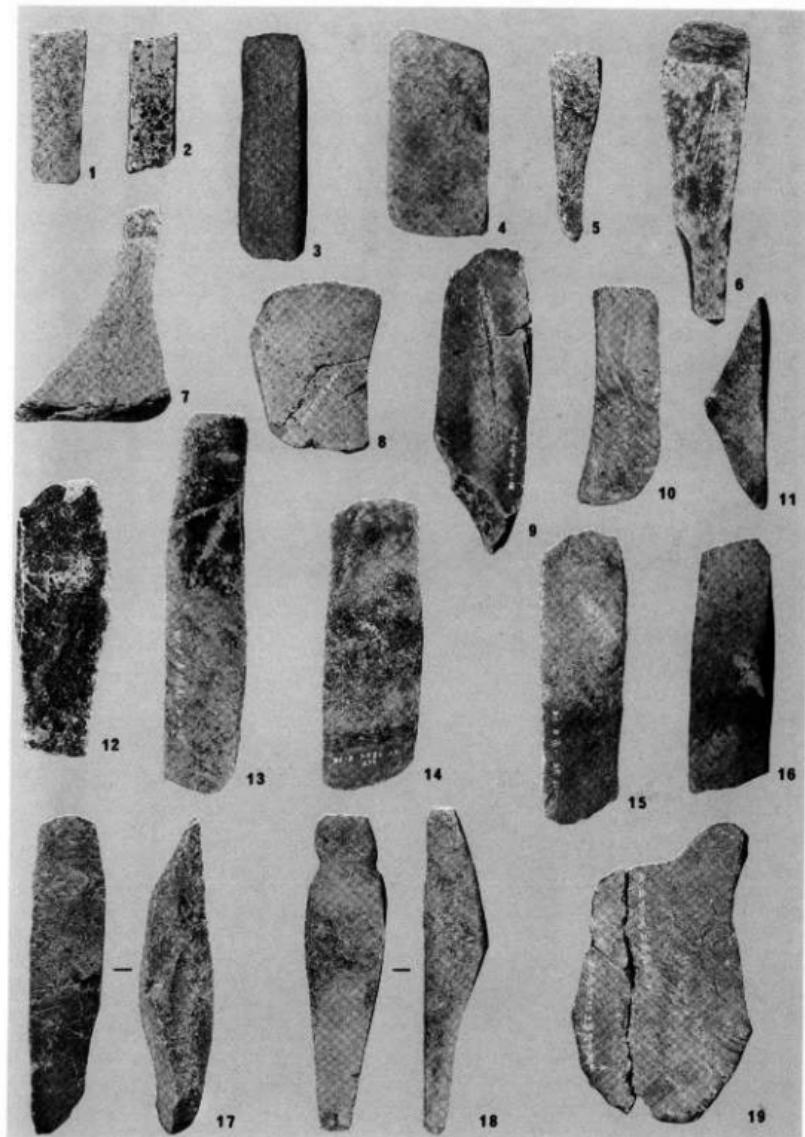
1-4



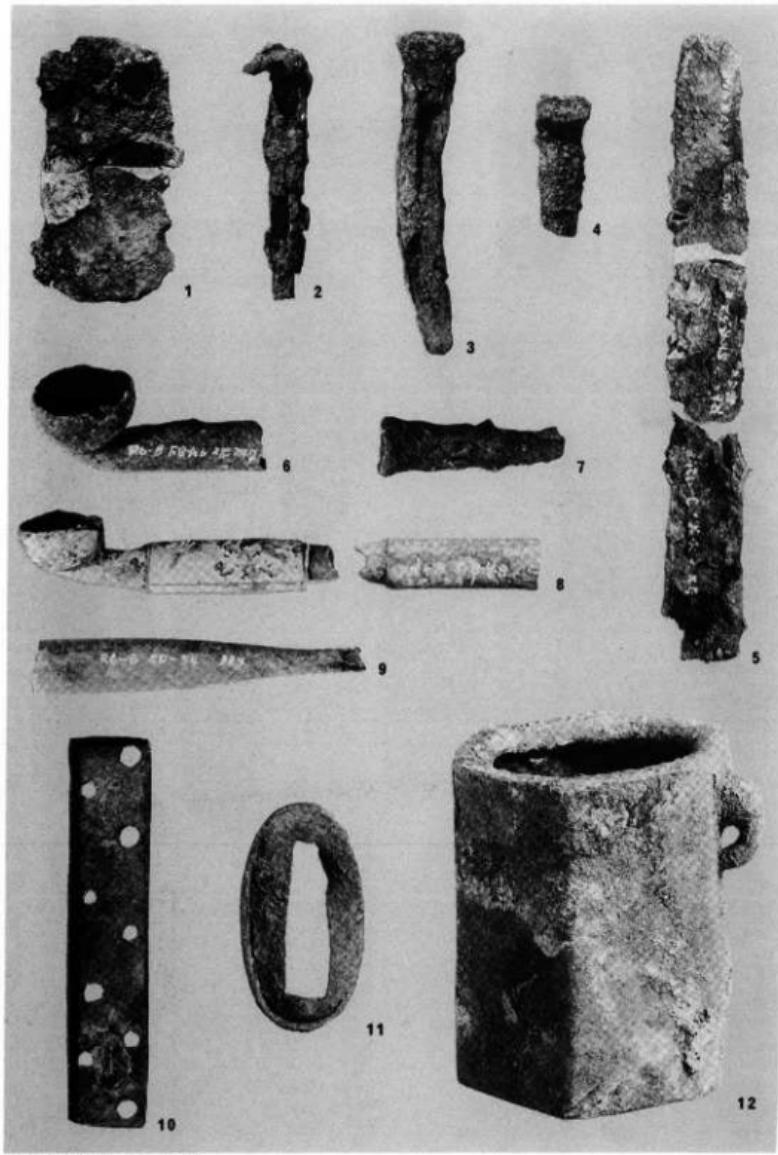
1-5



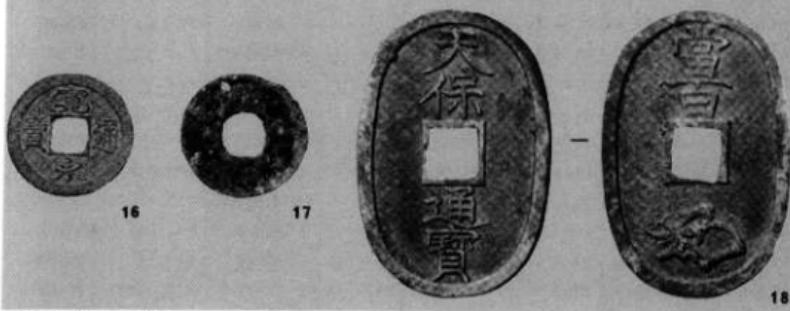
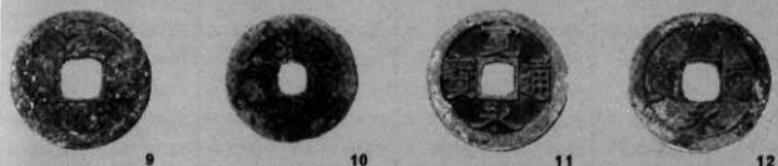
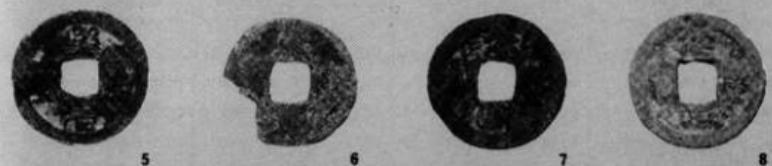
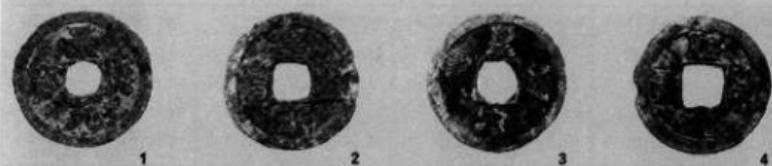
出土遺物(7)一青磁・石製品



出土遺物(8)一石製品（砥石）



出土遺物(9)——金屬製品



出土遺物II—古錢

写真図版掲載遺物対照表

写真図版番号	縮尺	掲載図版番号	写真図版番号	縮尺	掲載図版番号	写真図版番号	縮尺	掲載図版番号
PL12-1	1/4	第17図-1	PL15-3	1/4	第13図-32	PL16-23	1/4	第126図-46
PL12-2	1/4	第17図-2	PL15-4	1/4	第36図-2	PL16-24	1/4	第126図-48
PL12-3	1/4	第20図-1	PL15-5	1/4	第8図-19	PL16-25	1/4	第126図-51
PL12-4	1/4	第28図-1	PL15-6	1/4	第29図-29	PL16-26	1/4	第126図-54
PL12-5	1/4	第23図-1	PL15-7	1/4	第61図-27	PL17-1	1/4	第127図-6
PL12-6	1/4	第28図-3	PL15-8	1/4	第72図-3	PL17-2	1/4	第128図-10
PL12-7	1/4	第8図-1	PL15-9	1/4	第6図-3	PL17-3	1/4	第127図-3
PL12-8	1/4	第12図-1	PL15-10	1/4	第45図-15	PL17-4	1/4	第128図-14
PL12-9	1/4	第8図-2	PL15-11	1/4	第6図-4	PL17-5	1/4	第128図-15
PL12-10	1/4	第23図-3	PL15-12	1/4	第6図-5	PL17-6	1/4	第129図-19
PL12-11	1/4	第18図-3	PL15-13	1/4	第36図-3	PL17-7	1/4	第129図-18
PL13-1	1/4	第44図-1	PL15-14	1/4	第72図-4	PL17-8	1/4	第129図-7
PL13-2	1/4	第48図-3	PL15-15	1/4	第29図-27	PL17-9	1/4	第129図-27
PL13-3	1/4	第59図-3	PL15-16	1/4	第29図-26	PL17-10	1/4	第129図-23
PL13-4	1/4	第44図-2	PL15-17	1/4	第6図-6	PL17-11	1/4	第130図-34
PL13-5	1/4	第60図-10	PL15-18	1/4	第23図-22	PL17-12	1/4	第129図-26
PL13-6	1/4	第52図-1	PL16-1	1/4	第123図-2	PL17-13	1/4	第130図-36
PL13-7	1/4	第38図-1	PL16-2	1/4	第123図-3	PL17-14	1/4	第130図-31
PL13-8	1/4	第71図-1	PL16-3	1/4	第123図-4	PL17-15	1/4	第129図-22
PL13-9	1/4	第71図-3	PL16-4	1/4	第123図-5	PL18-1A	—	PL21-1
PL13-10	1/4	第67図-2	PL16-5	1/4	第123図-6	PL18-1B	—	PL21-2
PL13-11	1/4	第67図-5	PL16-6	1/4	第123図-8	PL18-2	1/4	第134図-1
PL13-12	1/4	第48図-4	PL16-7	1/4	第123図-20	PL18-3	1/4	第134図-3
PL14-1	1/4	第60図-8	PL16-8	1/4	第123図-21	PL18-4	1/4	第135図-5
PL14-2	1/4	第60図-9	PL16-9	1/4	第125図-8	PL18-5	1/4	第136図-8
PL14-3	1/4	第61図-23	PL16-10	1/4	第125図-4	PL18-6	1/4	第136図-10
PL14-4	1/4	第70図-1	PL16-11	1/4	第125図-31	PL19-1	1/4	第131図-2
PL14-5	1/4	第71図-2	PL16-12	1/4	第125図-10	PL19-2	1/4	第131図-4
PL14-6	1/4	第48図-2	PL16-13	1/4	第125図-9	PL19-3	1/4	第131図-7
PL14-7	1/4	第71図-6	PL16-14	1/4	第125図-22	PL19-4	1/4	第131図-10
PL14-8	1/4	第44図-5	PL16-15	1/4	第125図-12	PL19-5	1/4	第132図-19
PL14-9	1/4	第44図-9	PL16-16	1/4	第125図-25	PL19-6	1/4	第131図-17
PL14-10	1/4	第49図-7	PL16-17	1/4	第125図-21	PL19-7	1/4	第132図-26
PL14-11	1/4	第49図-8	PL16-18	1/4	第125図-15	PL19-8	1/4	第132図-25
PL14-12	1/4	第49図-10	PL16-19	1/4	第125図-23	PL19-9	1/4	第132図-28
PL14-13	1/4	第49図-12	PL16-20	1/4	第125図-20	PL19-10	1/4	第132図-30
PL15-1	1/4	第6図-1	PL16-21	1/4	第125図-14	PL19-11	1/4	第132図-31
PL15-2	1/4	第29図-28	PL16-22	1/4	第125図-28	PL19-12	1/4	第132図-27

茨城県教育財団文化財調査報告第40集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15

屋代B遺跡Ⅱ

昭和62年3月25日印刷

昭和62年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印刷 石崎印刷株式会社

茨城県教育財団文化財調査報告第40集

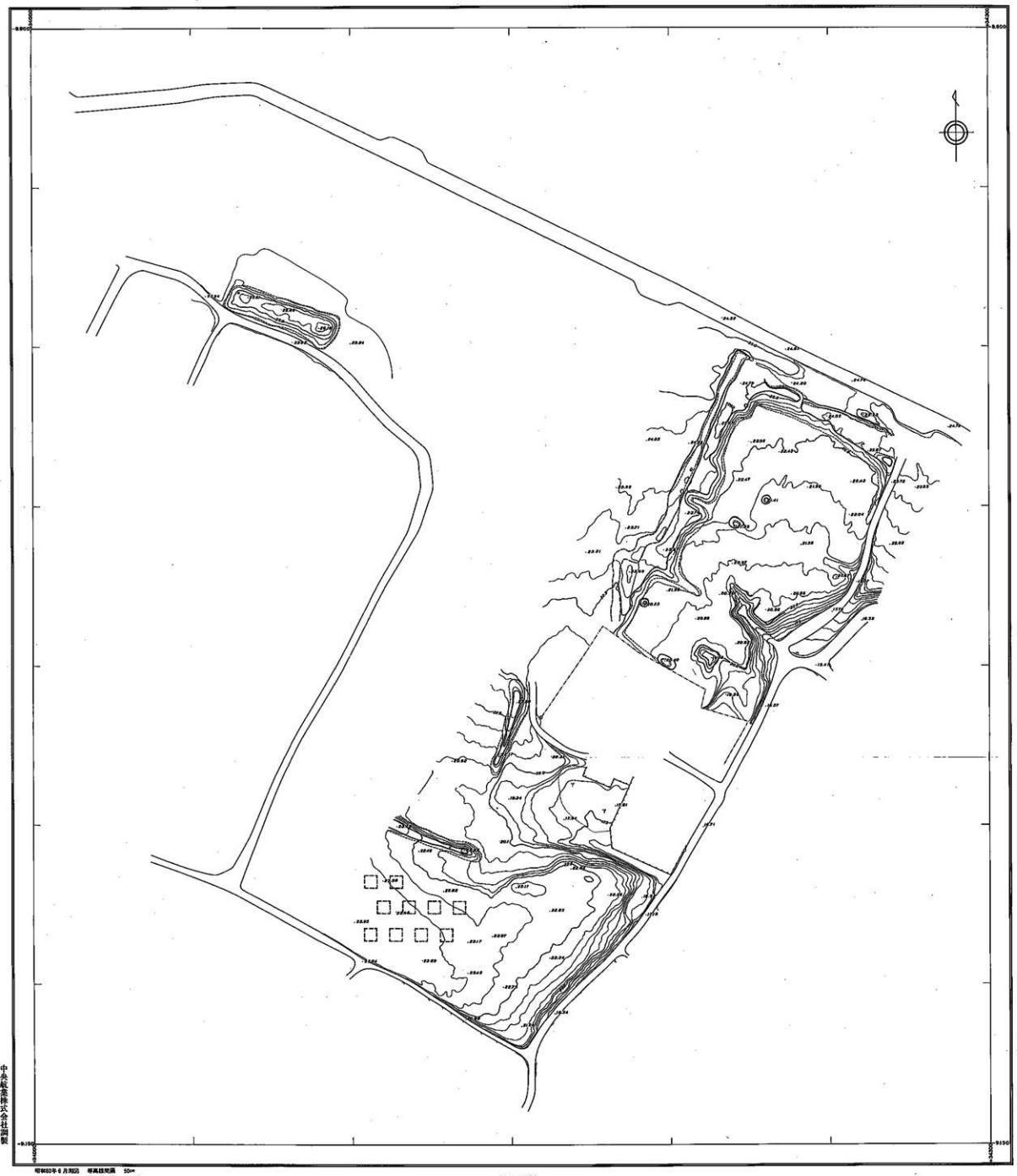
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15

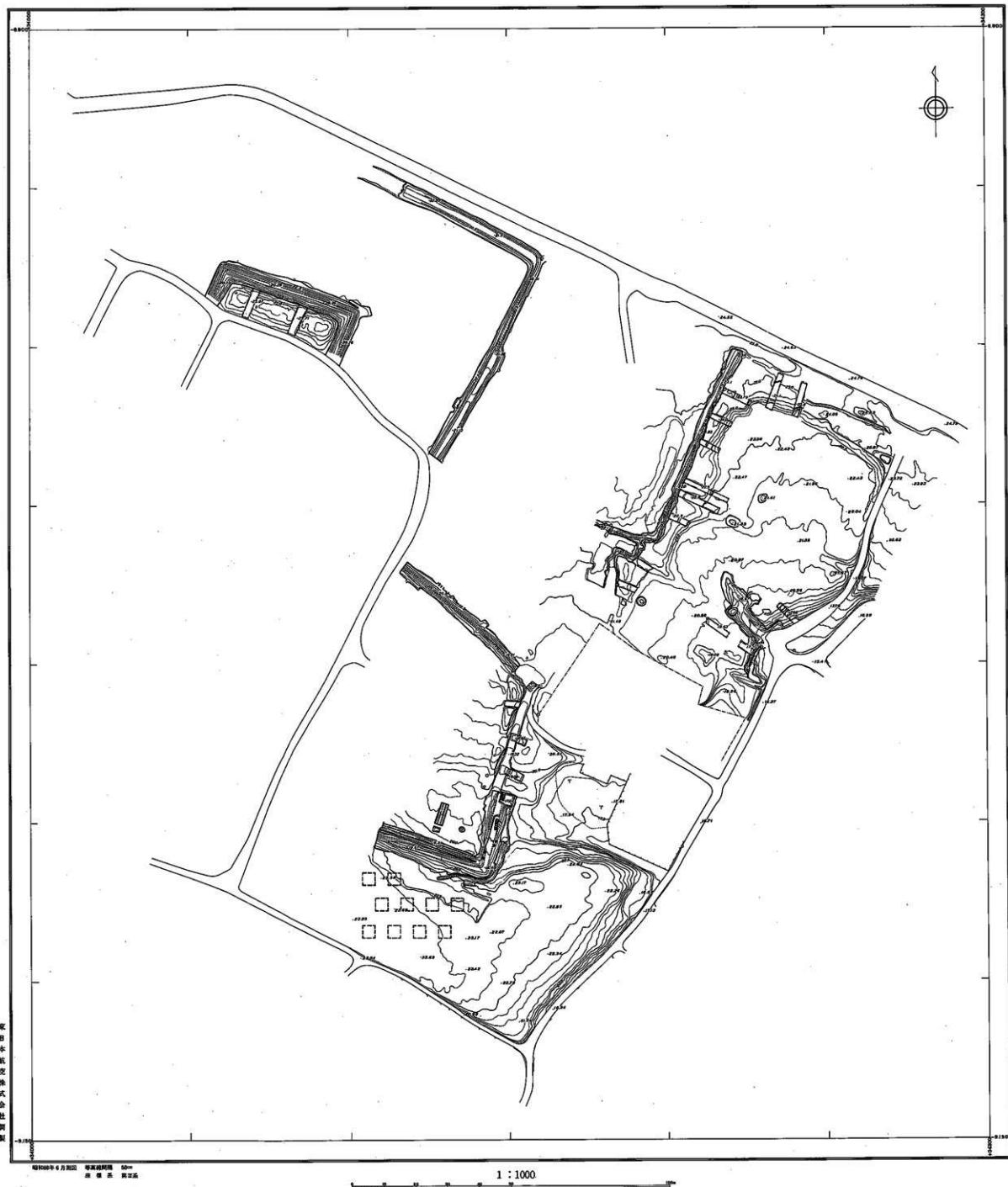
屋代B遺跡Ⅱ（付図）

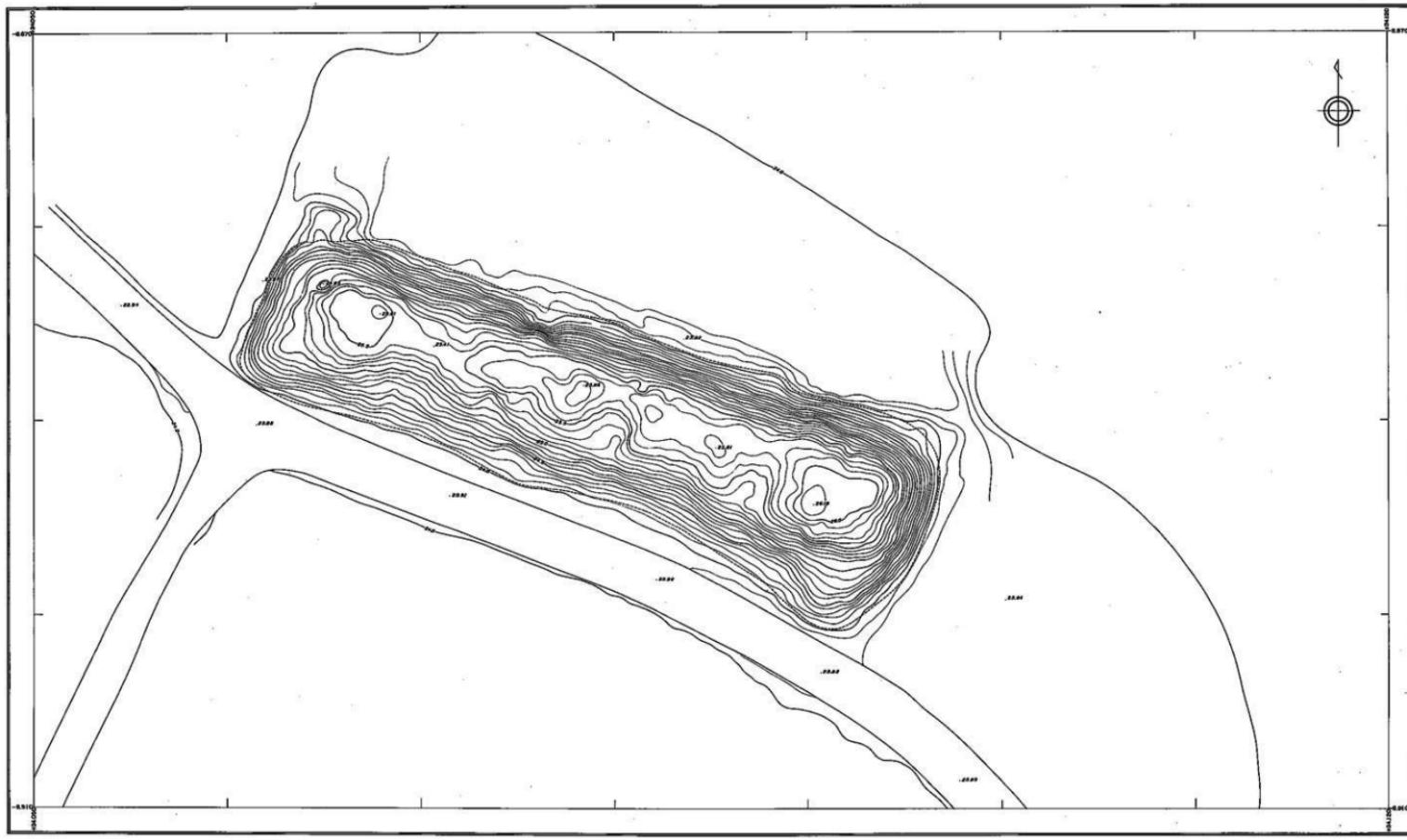
- | | |
|------------------------------|--|
| 付図1 屋代B遺跡航空写真測量図（城郭遺構全体図-1） | 付図7 屋代B遺跡航空写真測量図（虎口・第8・9・11号塗） |
| 付図2 屋代B遺跡航空写真測量図（城郭遺構全体図-2） | 付図8 屋代B遺跡航空写真測量図（第8号塗） |
| 付図3 屋代B遺跡航空写真測量図（第1号土塁） | 付図9 屋代B遺跡航空写真測量図（東側台地部屋敷跡・第6号土塁・第41号溝） |
| 付図4 屋代B遺跡航空写真測量図（第1号土塁・第7号塗） | 付図10 屋代B遺跡（塹・土塁・溝）断面図-（1） |
| 付図5 屋代B遺跡航空写真測量図（第1号塗） | 付図11 屋代B遺跡（塹・土塁・溝）断面図-（2） |
| 付図6 屋代B遺跡航空写真測量図（第2・3号土塁） | 付図12 屋代B遺跡（塹・土塁・溝）断面図-（3） |

昭和62年3月

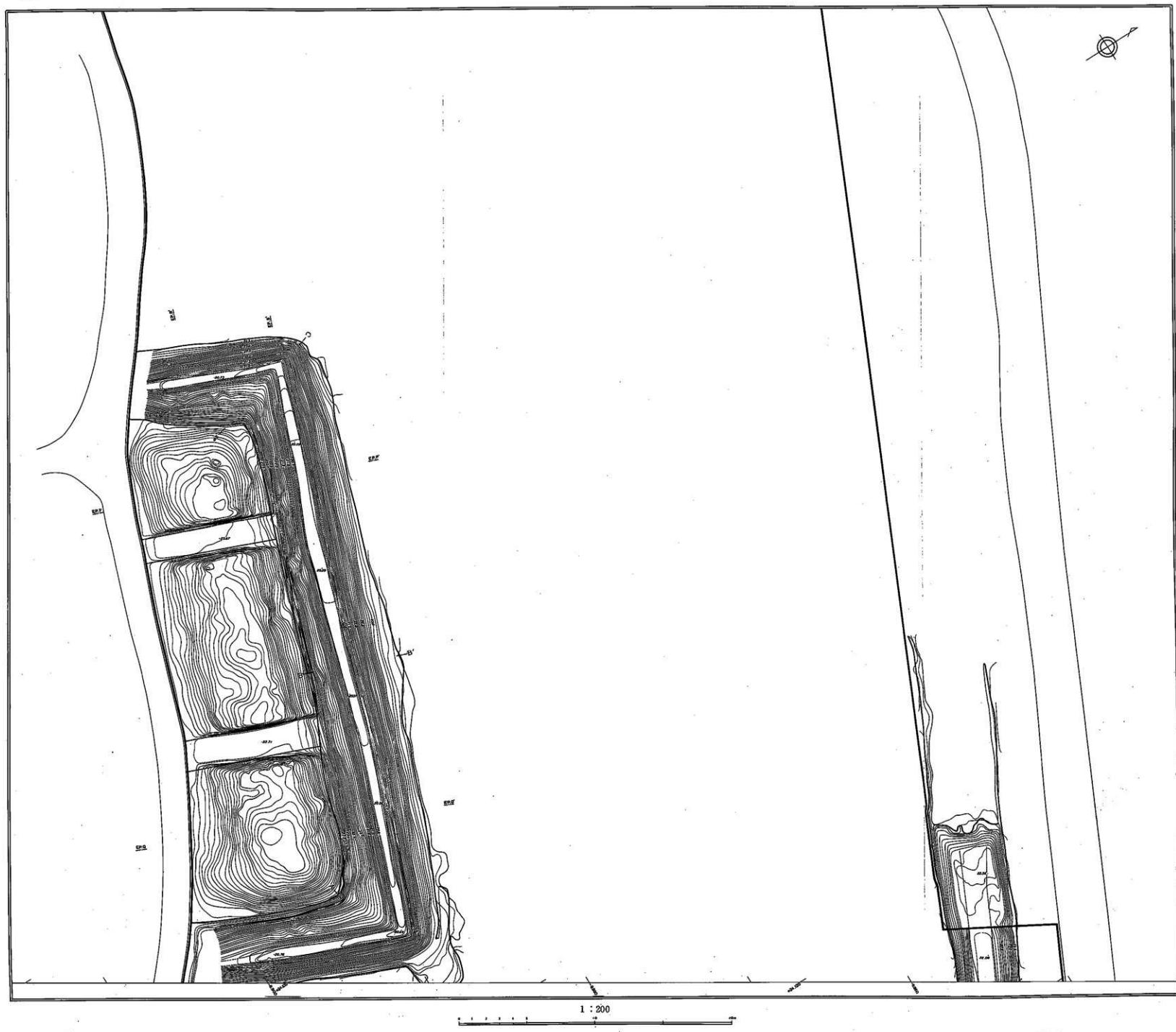
住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

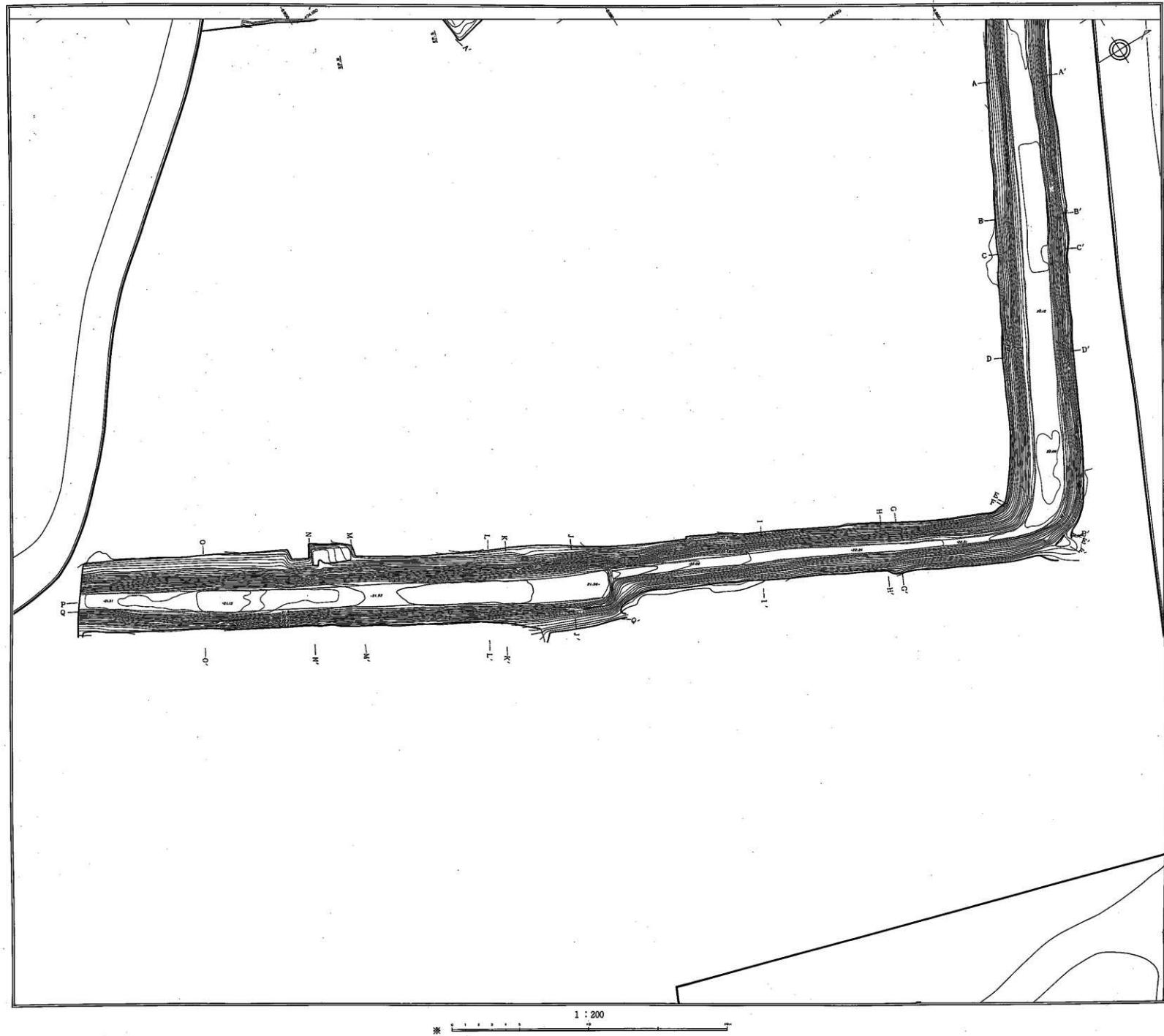




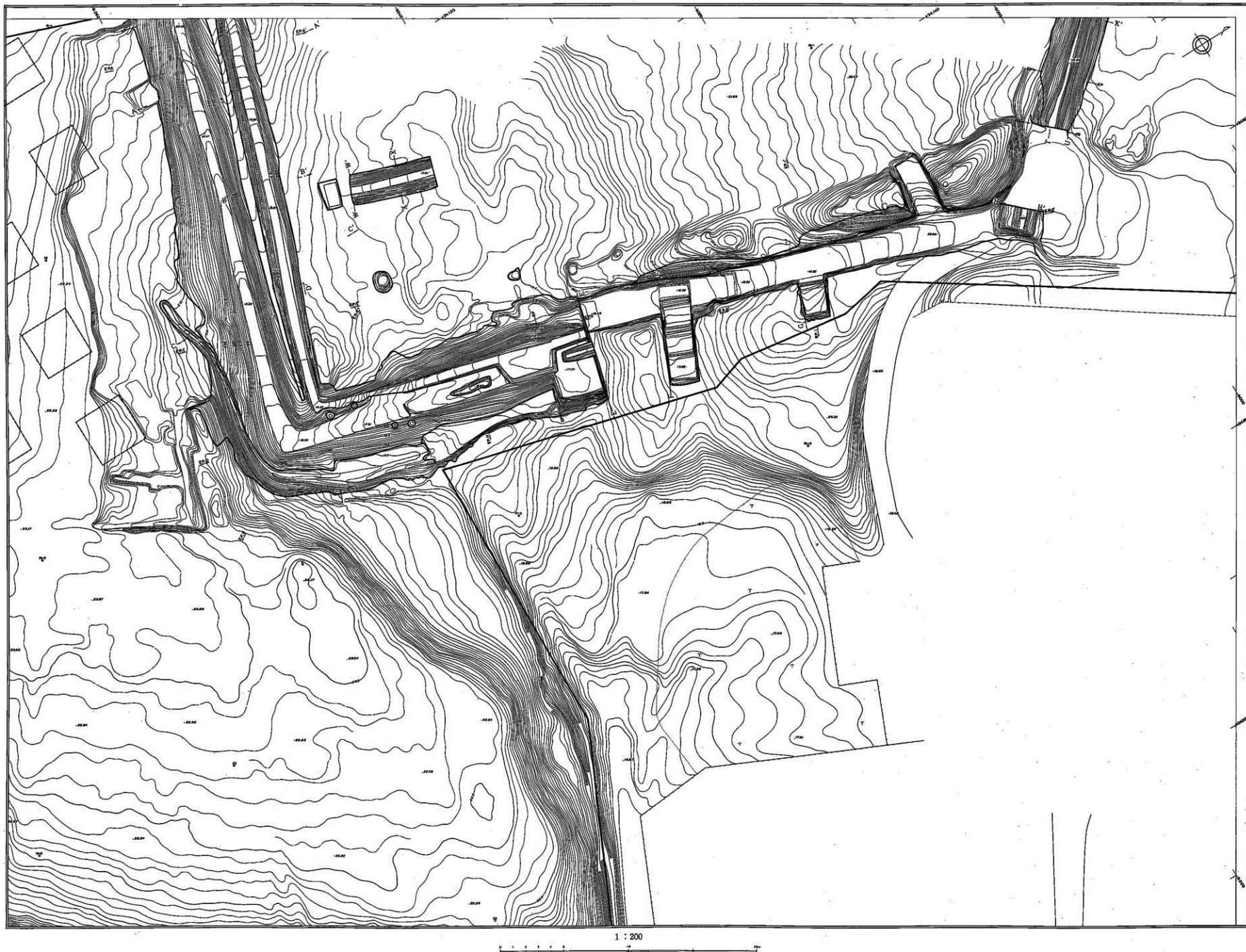


墨代B遺跡航空写真測量図（第1号土器・第7号標）

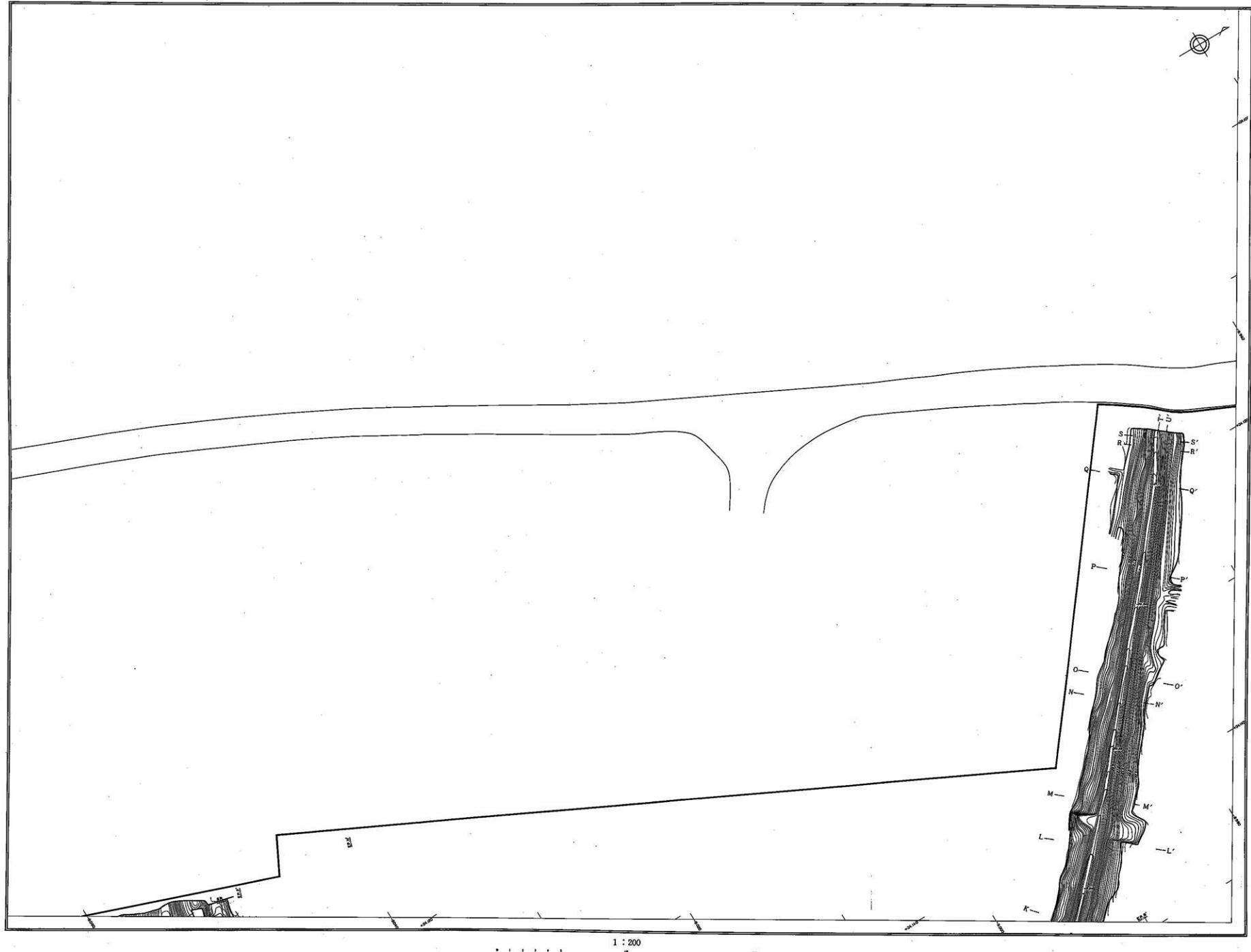




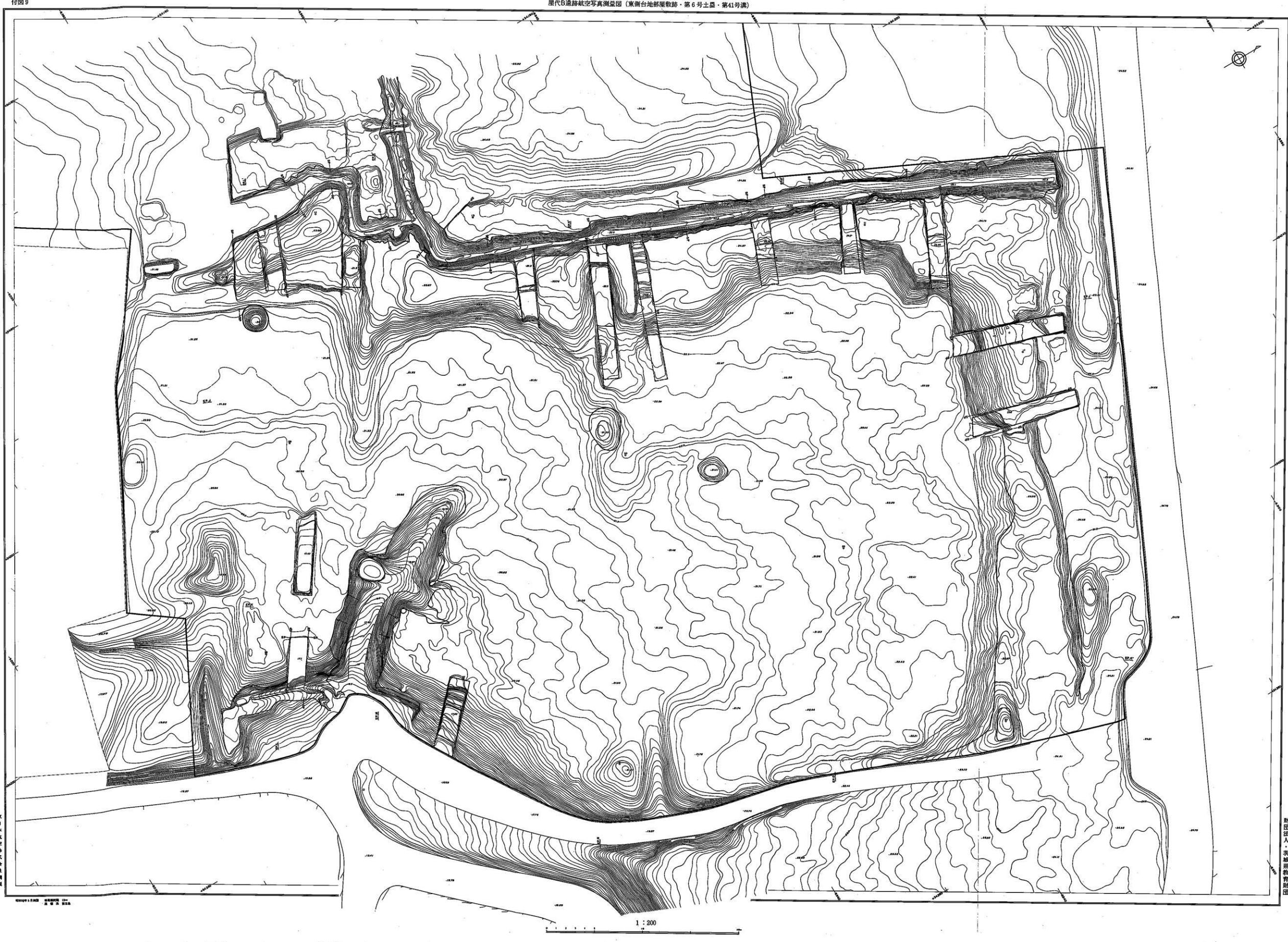




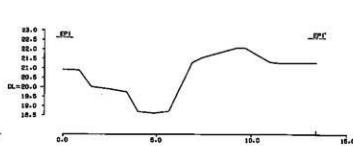
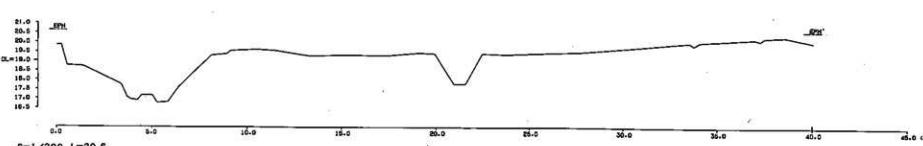
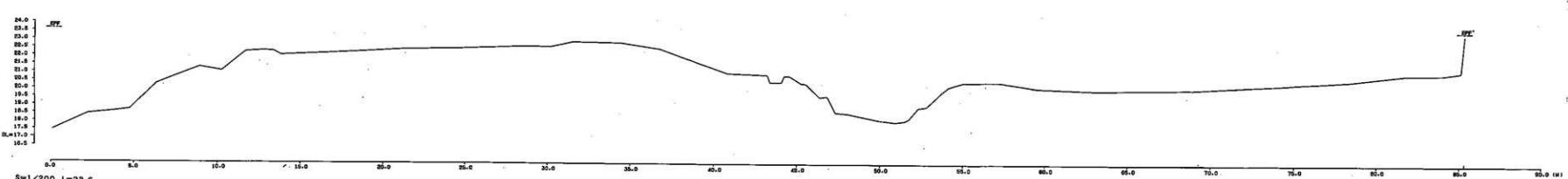
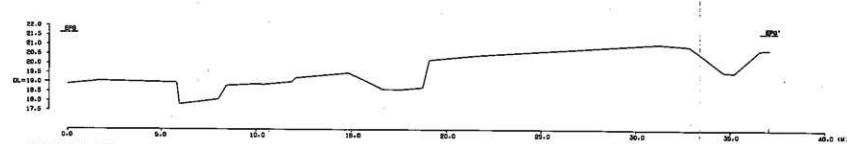
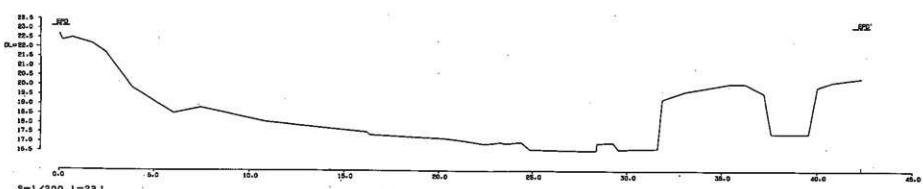
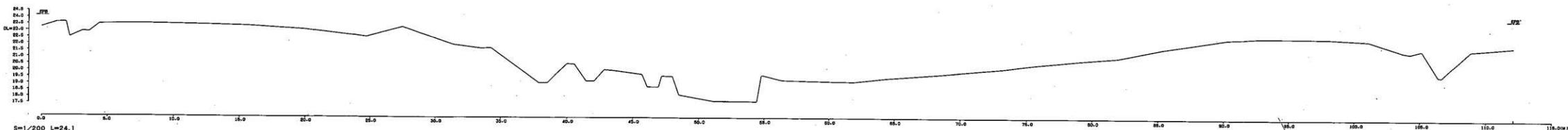
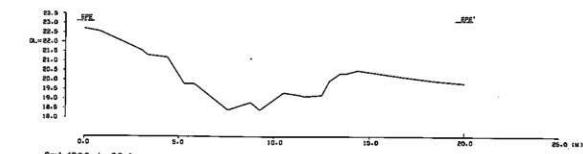
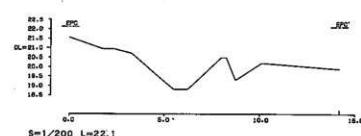
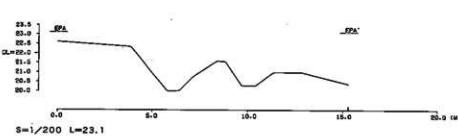
星代B道路航空写真測量図(第8号塊)

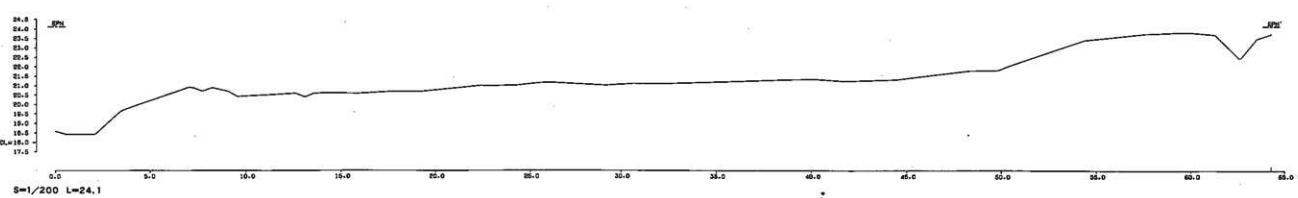
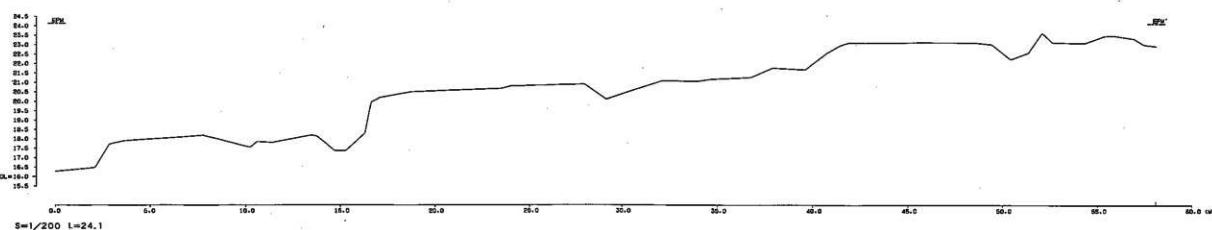
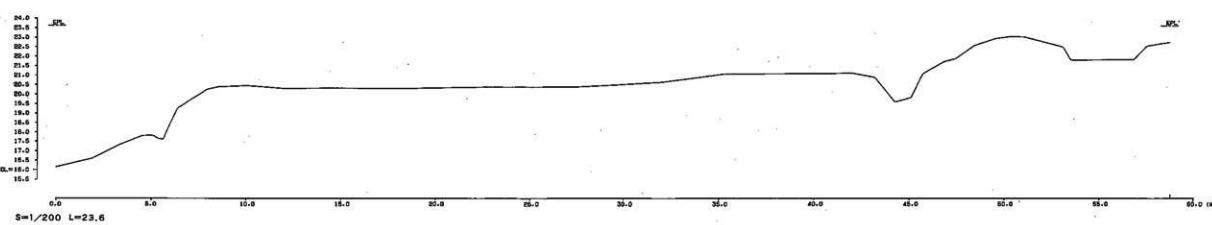
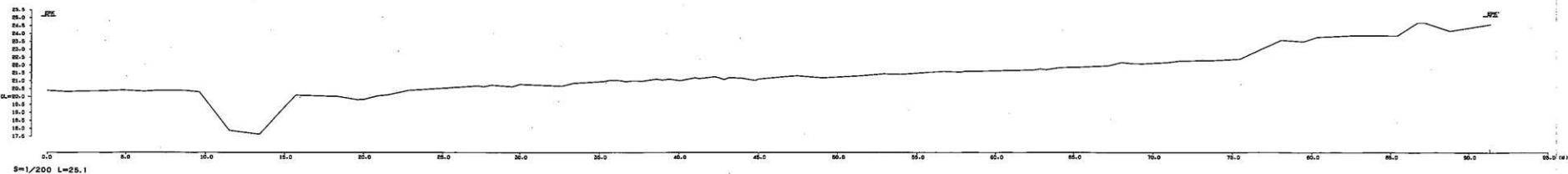
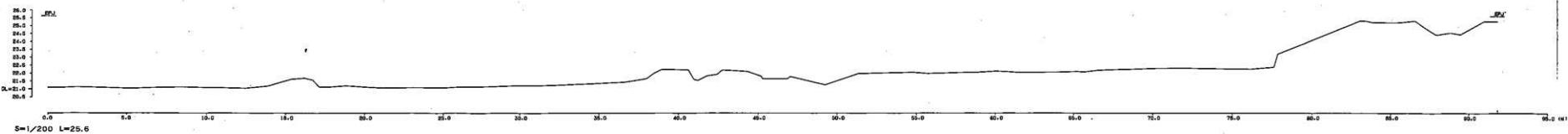


星代B道路航空写真測量図（東側台地部屋敷跡・第6号土壠、第41号溝）



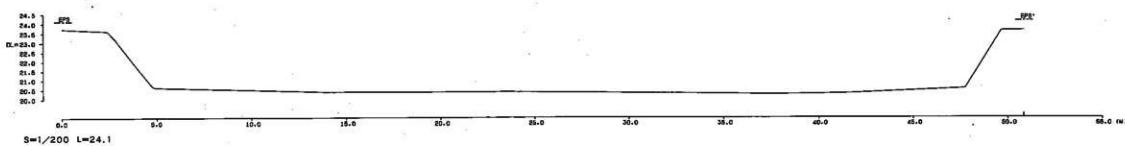
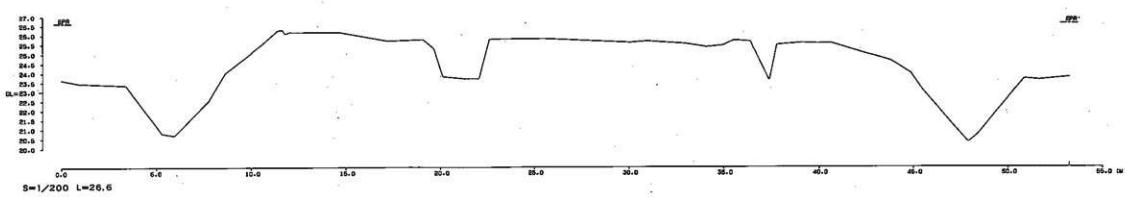
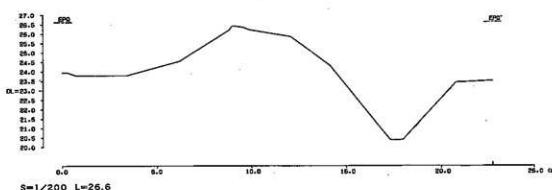
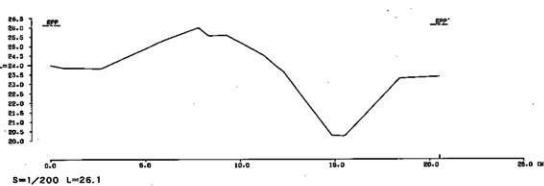
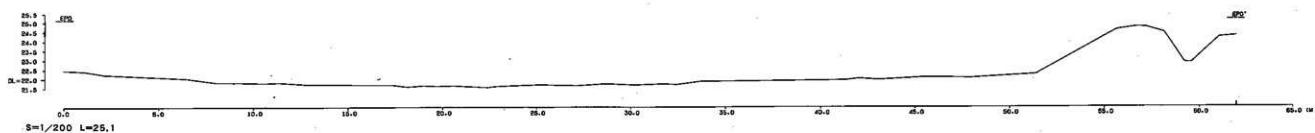
屋代B造跡（掘・土堀・溝）断面図-(1)





付図12

屋代B遺跡（堀・土塁・溝）断面図-(3)



1 : 200
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65